
魔法少女リリカルなのはstrikers ~笑顔を失った青年

スペード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは strikeress 真顔を失った青年

【NZコード】

N40180

【作者名】

スペード

【あらすじ】

過去、幾度となく挫折を味わい、笑顔を失った青年、トール・シユライト。

それでも戦友と愛した者との約束のため、今日も彼は空を翔け、戦い続ける。

そんな彼が機動六課に異動を決めた理由は…?

番外編

救いの道は… 前編（前書き）

構想はずつと前からあったのに…
なかなか作成出来なかつた… もしもシリーズファイト編です。

番外編 救いの道は… 前編

sideトール

J・S事件も一段落し、俺の怪我の治療ももうほぼ完治した。
けれど、今までの無茶も祟つてか、魔法の行使にはより慎重にならなければならなくなってしまった。

気をつければ通常の魔法行使は問題はない。

けれど、どれほど気をつけようと、俺の‘時間停止’はもひ使ってはならない、というのがシャマルさんの見解だった。
そして、俺が一線で活躍できるのも歳べて10年だろう、とも言わ
れた。

それに関しては仕方がない。

そうしなければ到底皆を守ることができなかつたんだから。
そして、生きて皆のところに戻つてくこともできなかつただろう。

とにかく、今は六課の解散まで、フォワード陣に俺の技術を伝授す
ること。

それがあの事件を解決し、過去とも決別した俺に与えられた使命だ
から。

シャマルさんにお願いして、部隊長以外の人には秘密でしてもらいたいから

ことをお願いした。

皆には、更に高みを目指してもらいたいから…。

明日からよひやへ退院して、出勤の許可をシャマルさんから貰つてほだきた。

「でも、無茶だけはしないでくださいね」

怪しげな薬品を持ったままのその顔に、俺はただうなづくしかなかつた。

やつらえれば見舞いにはよくフロイトさんが来てくれてたな。
執務官の仕事が忙しいのに、大丈夫なのかな？

sideフロイト

「…もう勘弁ならんわ。今からアイツしばき倒してくれる」「ちよ、ちよっと落ち着いてよほやでー」

ああ…こんなことなら相談しなきゃよかつた。

J・S事件の最中、絶体絶命のピンチに陥った私を..
颯爽と救いに来てくれたトールさん。

その時勢に余つてジェイル・スカリエッティを再起不能にするまで
ボコボコにしたのはやりすぎだったと思うけど…（非殺傷設定なは
ずなのにどうやつたんだろう…）

J・S事件によってトールさんは全治4ヶ月の重傷になり、
その間の強制入院を余儀なくされたのだ。

その間私は暇さえあれば毎回見舞いに行つた。
だつてトールさんの怪我は私のせいでもあるから。

最初は、ただ、私のせいだから、ということを見舞いに行つた。
けど、途中からだんだんと変わつていった。

話していると、本当に年相応に大人な人なんだけど、時折子供じみ
た発言もするの。

それはやっぱりレイミさんとの過去…それが原因なのかなって思つ
てる。

そして、私は…だんだんとトールさんのことが好きになってきたのだと思つ。

そこで途中からはやてにも相談した。

なのはは、今、気になる彼のこともあってかちょっと相談しづらい。

なのはが今付き合っている彼は、普段は優しいのだが…ちょっといや、かなり不器用だ。

普段はいい人なんだけど…バトルに入ると容赦がない。

あと、訓練中はフォワード陣に結構厳しい。

「はああ…そういうえば明日がアイツとの初顔合わせになるんやなあ

…」

「あ、そういえば…」

だ、大丈夫だよね？

いろいろなんでもいきなり模擬戦とかに、ならないよね？

「どうやらうなー?シグナムやフェイントちゃんと同じくバトルマニアやからなー」

「う、うひ…」

あ…なんか心配になつてきた…。

ト、トールさん…無茶だけはしないでくださいね…

sideトール

「おはようござこます」

六課の隊舎に入ると見慣れない受付の人が挨拶してきた。
何ヶ月かいないとやはり人事も少し変つてゐるな。

「あ、トールさん！」

「よう、ヒリオ…少し背伸びたな」

久しぶりに見るヒリオは少し背が伸びていた。
うん、成長期まつしぐらだな。

「どうだ、訓練の方は？」

「えへつと…元気にやつてます?」

いや、何故に疑問形?

「どうした？」

「いや…新しく来た人のことなんですが…」

ああ、俺が入院中に代理の人気が来てたんだっけ…。

昨日フェイトさんからもらつた資料を見る。
名前はつと…雨宮相馬さん…、地球出身?

階級は一等空尉、俺と同じだな。

ランクは空戦ランク、魔導術式はミッドチルダ式か。
なのはさん達といい、この人といい、地球つてホント不思議だな。
19歳か…、才能つてす”いなあ…。

「おっ！あんたがトールさんかい？」

資料を仕舞つている時、後ろから声を掛けられた。
振り返るとそこには…

一目で美形に分類される顔。

前髪に赤いメッシュの入つた黒髪を肩甲骨まで伸ばし、首の後ろのあたりで縛つている…（あのリボンは誰かの贈り物だろうか）
服は黒のスーツだった。

そんな感じの男の人人がいた。

「ふむふむ……なるほど……」

「…？」

男の人はしばし俺を上から下まで観察し…。

「さて、模擬戦しようか」

「はい！？」

そんなことを言つてきた。

「ちよ、ちよちよちよちよソーマせん…–––テールさんは今日退院し

てきたばかりで…」

「いいじゃねえかそんなことは…なあ？」

そんなことを問い合わせてきた。

本当のことと言えば…俺もこの人とは戦つてみたい。

これからも…自分の力を伸ばしていくために…。

なのはさん達エースと言われる人たちに、負けないよう…。

「やうだな…」

軽く手の骨を軽く鳴らす。

「なら、決まりだ…」

一度は隊舎に入つたが、すぐにまた外に出ることになつた。

訓練場に入ると、随分と景色が変わっているような気がした。

「ちょっと模様替えしたのか？」

「ああ…いろいろな状況に対応できるよう、バリエーションを加えてみた」

「なるほど」

たしかに色々な状況への対応というのは重要だ。
その場に合つた戦い方が出来れば有利になるからな。

「それがあんたのデバイスかい？」

「…ああ。やはり珍しいか」

「…そうだな。剣はいくらでもあるが刀、ところのまな」

これもよく言われることだった、が、もう慣れた。
別に剣士の延長と思えばいくらでもいいのだが。

「まあ始める……」

そしてお互にデバイスを開け、始めようと黙ったその時……

「……何をやつてこらのかな……？」

ソーマさんの後ろから低い声が聞こえてきた。
俺からは見えてくるのだが。

そこには修羅がいた。

あふれ出る魔力のせいかサイドポニーが少し逆立つてこむよつた気がする。

デバイスを開けていないはずなのに、今のなほせとてほ勝てる
気がしなかつた。

「あ、あせせ… ねむりじしたトレーニングを…」

ソーマさんが言い訳めいたことを口づがむつ遅い。

「これから退院してくる人はまだ全快じやないんだから無茶させないでねって……言ったよね？」

ソーマさんは後ろから掛けられる声に振りかえられずにいる。俺も同じ状況だったら同じだつただろう。

なのかな? うひへこソーマさんと並び、首輪つこを胸む。

「ぐえつ」

「……ちよつと……あひねでお話しうりか……」

そのまま引きあがれていくソーマさん。

俺はその姿を目で追い、訓練場を出ていくところだ、

(ナゼル、スマセラ…)

手を合わせて祈つた。

とはいえせつかくデバイスまで展開したのだ。

何もしないで部隊長室に直行といつのはもったいない。

幸いにしてまだ時間もあるし少し慣らしていいつか。

イメージするのは3体の敵。

最初に突っ込んでくる敵を抜刀し、斬り払う。

返す刀でもう一体を斬り、そして

「疾風！！」

魔力を込めた一閃で最後の一體を吹き飛ばす。

「うへん……」

大体イメージ通りに動けているはずなんだけど……。
これでソーマさんに勝てる気は……しないんだよな。
そう簡単に負ける気もしないが。

「あ、いたいた。トールさん」

あ、フェイトさんだ。

いつもお見舞いに来てくれたし、ちゃんとお礼、言わないと。

「た、退院おめでとうございます…」

「おかげさまですっかりよくなつたよ。いつもお見舞いに来てくれてありがとうございます」

「い、いえいえ、私のせいなんですからー！」

そう。

フェイエトさんがよくお見舞いに来る理由も、退院する直前に聞いてみた。

そしたらやっぱりずっとあの時のことを気にしていたみたいだ。

あの時……

スカリエッティに捕えられ、後少し遅ければ本当にあいつの手に落ちていたかもしれない。

けれど、そんなことはさせなかつた。

俺の前に立ちふさがつていた戦闘機人も、スカリエッティやクアットロによって大幅に戦闘能力を上げられていたのだが、あの時は本当に無我夢中だった。

また、自分の目の前で大切な仲間を失つてしまつ。

そんなことは、もうたくさんだつた。

だから、ブラスター・システムもフルに活用した。

その反動からか、全てが終わった直後に倒れこんでしまったのだ。
そして気が付けば病院のベッドの上だった。

そしてその直後にフェイトさんに泣きつかれたんだっけ……。
私のためにもうこんな無茶は一度としないで、って

思い出すとなんか恥ずかしいな……。

「そ、それよりもうすぐ時間だよ」
「あ、もうこんな時間だったのか……」

フェイトさんがそのまま振り返つて訓練場から出て行こうとする。
が、

「ふざゅ……」

「こけた。
しかも盛大に。」

「だ、大丈夫！？」

「そういえば……意外とドジなところもあるんだつたな。
そつ思いながら手を差し出す。

「あ、ありがとうございます。」

相当恥ずかしかったのか目を逸らしながら差し出した手を掴んでくる。

「…………こりゃ先行き不安だな」

「…………うわー……何も言い返せない」

部隊長室のドアを開けると何故かものすごい形相でこちらを見込んでくるはやてさんがいた。

俺、何かした？

「久しぶりやなあ　トールさん……」

楽しそうな声なのに何故か迫力がある。
当然心当たりはない。

「こやあ、長じりく間を開けてしまつてすいません」
「別にそ・れ・は氣にしてへんよ。それはな…」

それは?

他に何があるのか?

フロイドの方を見ると何故か申し訳なれやうな顔をしてくる。

「はやてぢやん、やの辺にしつとこたりへ。」

俺が対応に困つてこるのを悟つてか、なのはさんガ助け舟を出してくれた。

…それほいいのだが後ろのソーマさんは大丈夫なんだひつか?

ヒカル君の煤けてこるんだが。

まさか、あの、お詫、を喰らつてその程度のダメージなのか?
だとしたら、すいこな…。

「…まあ…やつやな…」の鋭感は時間がかかりやうや…

「?」

sideffHイト

「もう一つたあーーー..」

「甘いーーー！」

今、私の田の前では、スバルとシグナムの訓練風景が繰り広げられている。

こうして見ると、フォワード陣の成長は「・S事件を経てさらにも著しいものとなつた思ひ。

六課が設立したばかりのころは、皆どこか危なつかしい雰囲気があって、目を離すことが出来なかつた。

でも、今は違う。

皆、将来一線で十分にストライカーとして活躍出来ると思う。

それは、本当に喜ばしいことだ。

そこへティアナに幻術の指導をしてきたトールさんが戻ってきた。

「暫く見ない間に随分成長したもんだな

「うん……」

何故だらうか。

喜ぶべきことのはずなのに、どうしてか、トールさんは前にすると
どこか空虚なものに感じてしまつたのだ。

「そのうちシグナムから一本取れるんじゃないか？ありや…」

「解散までに一本取るのがスバルの目標みたいだよ」

「なるほど、入ったばかりのころからは考えられないほどの成長だ
な」

トールさんは本当にうれしそうだ。

「ティアナに幻術の指導をしていてもアイツはすぐに実践してくれる
し」

「へえ……」

「老兵は死なず、ただ去るのみ…って奴かな」

「老兵って…トールさんまだ23じゃない」

「ま、そななんだけだ」

その時、トールさんの笑顔がどこかさびしそうな表情になつたのを、
私は見逃さなかつた。

それは、私を言いようのない不安をもたらすのに十分だつた。

「さて、それじゃあ今度はエリオに接近戦の指導でもして貰おかな
「あ……」

さつきの表情はなんだったのか。

もしかしたら、何か、抱え込んでいないのか。

それを聞くタイミングを、逸してしまった。

「気のせい、だといいんだけど……

本当、気のせいだったからかっこたのこ……

「リリ最近執筆ペースがいいね?」

「最近、作者の余暇の過ごし方が執筆メインに変わってきたみたいやで」

「え、それまでばいじうしたの?」

「ああ、真、三〇無双6にハマつてたみたいや」

「え、もしかして…」

「そり、かなえボイスのシンデレラがえらべ氣に行つたりじくてな」

「さて、フロイトちやんばいじゅつやつヒートルを救うのか?」

「このままやとそのまま静かにフロードアウトしちゅしな」

「う……／＼なんか恥ずかしい…」

「なんや、恥ずかしいことでもするんか? そつなんか?」

「そ、そんな」としないよ…／＼／＼

番外 救いの道は… 後編（前書き）

一日2本で…もう一度とないだろうか…

番外 救いの道は… 後編

s.i.d.e トール

「よつ…元気にしてたか？」

「あ…トール…」

俺は今、局の中にある特別な更正施設の中にはいる。
といつのも…。

「もうしばらくの辛抱だからな、我慢してくれ」

「うん…」

先のJ・S事件で保護した、レイミのクローンである戦闘機人、レインの様子を見るためだ。

「怪我は…もう平氣なの？」

「ああ…お前にボコボコにされた分はな」

「う……「ごめんなさい…」

「別にいいって」

そう、俺の怪我のほとんどはコイツによるものだ。
まあ、あの二人に色々されていたから仕方ないんだが。
しかし、よく上手くいったもんだな。

「今日は…どうしたの…？」

「ん？ お前の顔を見に来た……じゃ駄目か？」

「ううと……うれしい……」

「ひ、一度保護したからにはけやんと面倒見なきやな。
心のケアは大事だ、うん。

「ホール……」

「えへした？」

「……寂しい…… の……？」

「！」

驚いた……。

「トの本質を見切るのは本物にすゝこな。

そつこいつといふは、レイミの遺伝子を抜け継いだのかなと感づ。

「……そうかな」

「……何か……あつた……？」

「まあ……そうだな」

「ひ、魔導師として長くないしな。

過去との決着も、全て終わつた。

そして……六課の解散も……すぐそこには迫つてこる。

「わうなつてしまつたら……俺はわうなつてしまつのかな」

「……それでも……トールはトール……」

「……！」

「本当に……」「イツは……」。

俺がアレコレ考えているのがバカらしいじゃ ないか……。

「…………それに…………」

「…………？」

「…………絆は…………消えない…………」

「…………そうか、…………そうだな…………」。

「…………お前との絆は…………これからも続くし…………。」
「…………アイツらとの絆もな…………。」

「…………行つて…………」

「…………いきなりビュウした？』

「…………きっと…………トールを待つてる人がいる。その人は…………私よりも…………今のトールに必要な人』

「…………それは…………」

「…………そろそろ…………知らないフリは、おしまい…………か。」

「…………こんな…………終わりかけの人間のことなど、そのうちに来るだらつむじさの中で、忘れてしまった方がいいのに…………。」

「…………でも、気が付けば…………ずっと氣になる存在になつっていた。」

フヨイトセ。

少し前から……なんとなく気付いていました。
でも、敢えて知らないフリをしていました。
その方が……更なる高みへ行こうとするあなたのためだから。

まあ、やかましい義兄の「」もあるかもしませんが。

でも、すこません。

レインのせいで、気が付いたやうでした。

俺も……意外と我儘なんだって。

だから……今……会いに行きます。

「……それから……」

「？」

「おみやげはチラ「」ケーキで……」

ホ、ホントにわかつてゐるのかヨイツ……？

アーティストの世界

「ねえ……やっぱり変だよ……」

「うん……確かに……」

「トールさん……何か抱え込んでいいかな……」

「あー……気になるのは……あの、寂しそうな表情。
どうして、そんな表情をするの？」

事件も終わって、怪我も治って、全て解決したはずじゃないの？

「はやてちやんなら、何か知っているのかな……」

「はやてな？」「……」

何か知っているかもしない。

だって……六課の全てを統括する、部隊長だから。

なのだと共に部隊長室へ急ぐ。

やはり……“えいが、神妙な表情のはやとと、シャマルさんがいた。

「なのはちゃん…フロイトひちゃん…」

やはり……何か知つてこる。

「はやて……聞きたい」とがあるの……」

「……それは……トールさんのことやうか?..」

「……うん……」

知つているなら教えてほしー。
彼が、何を抱えてしているのか。
何を考へているのか。

「……ホントはな……の」とせ……誰にも言つなかつて言われていたん
や。特に、フロイトひちゃんにはな

「はやてちゃん……」

「ええんよシャマル。もう、この一人は止まらへん。私が黙つてい
たといひで無理やり口を開ひたれるだけや」

私には……どうしても言えない?
それは……どうして?

「まあせ……これを見てもらおか

「……これは……トールさんの健康診断表?」

「……やつや……」

トールさんの健康診断表は、2通ある。

一通目は、トールさんが六課に来て間もないころ受けたもの。そして、もう一通は、先日、退院する前に受けたものようだ。

その中身は……。

「……これは……！」

私は、医学知識はないけれど、健康診断表の結果からある程度のことはわかる。

そして、それは……。

「……トールさんの結果が……格段に悪くなっている……」

「……そうや。あの事件の前と後では全然違う。この一年弱で格段に悪くなってしまったんや」

この結果がもたらす」と。

それは……トールさんの魔導師としての寿命が格段に縮まつた、といふ」とだ。

「トール君は……あとどれくらい……魔導師を続けられるの……？」

「……そこから先は……聞きたくなかった……。
だって……知れば……知つてしまえば……。」

「よくて、10年。早ければ5年もたん。それも、あの力、なしで
これや。使えばさらりと短くなる」

「…………そんな…………」

「なんて……バカだ……！」

トールさんの気も知らないで……事件が解決したのを喜んで……！
私って……最っ低……だ……！！

「私は……」

「なあ……フュイトちゃん……ただ、知るだけで終わらせるつもりはな
かつたやろ？」

「…………そうだ……。」

「ただ、聞くだけじゃない……。」

そして……彼の悩みを解決するのが……私の……。

「……どうやら……もう……決めたんか？」

「…………うん……」

「… もか…」

行く…。

何となくだけ…トールさんも私を探してこぬ氣がする。

「ノーメンね、はやへ、なのは、シャマルさん…私、行つてへる…！」

そのまま部隊長室を後にする。
だから…私は気付かなかつた。

「……ふう…すまんな、なのまちやん」
「ううん。これもフロイトちゃんど、トール君のためだもんね」
「せやな。トール君にほ悪いけど、こんな面白そつな展開…見逃せ
んわ…」
「ふつふつふ…はやてちゃん…お主も悪いの？…？」
「いやいや…なのはちやんには敵わんじゃ…？」
「い、いこのかしら…」

「…、悪魔達の笑み…」。

s.i.d.e.Tアール

「……どうだ……？」

仕事はもうひと回り終わってこぬけど……いつもなら書類の残りがあるの」。

「はあ……はあ……」

少し……疲れたな……。

休憩室のベンチに腰掛ける。

やつぱり……まだ全快じゃないつてことか。
それに……ここからは下がる一方……かな。

なんて……無様……。
……ははは。

わざわざ我儘言つて決めたばかりじゃねーか。

「…………隣…………いいかな…………？」

「FH、FHイトさん…………？」

びっくりした……！

いきなり探し人が現れるもんだからどうかと思つた……。

「…………あの…………ね…………？」

「…………うん…………」

「うん……じゃ、ないつてのーー！
何やつてるんだ俺ーー！？」

「トールさんが……隠してること…………知つちやつたんだ……」

「…………それは…………」

まったく……内緒にしてくれつて言つたのに……。
特にフュイトさんには……。

だつて……この人は……

「…………「めんなれこ…………」

優しすぎるんだよ。」

人の痛みを、自分のことのよう」感じてしまつ。
だから……知つてもういたくなかった。

「私は……何も知らないで……事件の解決を喜んでた。トールさんに助
けてもらつて……嬉しがつてた……」

「……それは……」

「その裏で……トールさんがどれだけ苦しんでいるのか知らないで……」

それは違うつ。

それは違うよ。

「フュイトさん……」

「……グスツ……はい……」

俺は……確かに苦しいこともあつた。

でも……それは……。

。

「俺はね……後悔なんか、してないんだ

「……それは……どうして……?」

だつて……」

「だつて……」元氣を、守ることができたんだから……。それに

……」「……？」

フヨイトさんを真っ直ぐ見つめる。

「自分の好きな人も……な……」
「……それって……」

「あ～、少し回りくどかっただかな？」

「……それくらい……少しば察してくれるか……？／＼／＼」
「……あつーー！／＼／＼」

「よつやくわかつてくれたみたいだ。
でも、大事なのはこれからだ。」

「今から言つ」とは……俺にとつては凄い我儘だ
「…………うん…………」

「そうだよな……。」

聞いてくれるかどうかはともかく……言わなきゃいけない。

「残り……そんなんに長くない魔導師人生だけぞ……」

「…………」

「フロイトさん……あなたを支えていきたいんだ」

言った。

ついに……言つてしまつた。

「だから……」

「…………はい…………お願いします…………」

え、あれ……？

まだ最後まで言つてないんだけど……？

「…………から……お願いしようと思つていたんですけど…………」

佐

「あ……そつなの……」

俺がレイミの執務官補佐的仕事をやつてたのも当然知つてたのね……。

「そ、それじゃあ…………」

「はい…………」

お互ひの手を取り、そして……

「 もう、じれったいわあああ～……」
「 「へ？」

フュイトさんの後ろから部隊長が勢いよくタックルをかましてきた。
それをまともに受けたまつフュイトさん……。

だから……ちよびど俺の顔とフュイトさんの顔がぶつかる形になってしまこ……。

「…………！」
「な、な、ななな……！」

あ、慌てて顔を離し、部隊長に抗議しようとする。
だが、部隊長はぶつかった勢いそのままに休憩室から逃走していた。
と、こうかあなた見てたんですか……？
よくよく見ればなのはさんまで……！

「 ！」
「これはまさか……」

カンのここフュイトさんは気付いたようだ。

俺たちはあの一人におもちゃにされていたらしー。

「……さて……俺の執務官補佐としての初めての仕事は、決まつたな」

「……ええ……」

「「まずはあの一人をとつ捕まえる……」」

だから……覚悟しや。。

フェイトさんの手を取り、立たせる。
そして、そのまま……

「「待て——————」」

悪の権化を追いかけ始めた……。

番外 救いの道は… 後編（後書き）

「何があつた！？作者？」

「いや、ホントにどうしたの？」

いや、ペンがかなり進みまして…。

「こつもこのペースだと助かるんだけどね？」

それは無理です。

「アレ…？フヒトイトちゃん…？」

「……／＼」

「アカン…オーバーヒートや」

プロローグ（前書き）

いつも、スペースードリームであります。
なんとか続けてこきますのでよろしくお願いします。 m(—_-)m

プロローグ

「… むう… ノーノ」

「あれ？ 1ヶ用ぶりだね」

「… そうだな」

「」は時空管理局内にある無限書庫。

俺ことトール・シュライトー等空尉は本田の業務をさしつけと終わらせ、

今では趣味となってしまっている古代神話の本を読みに来たのだが

…。

「最近は首都もかなり不穏な出来事が多くなつてな… なかなか休みが取れないんだ」

「ガジェットの出現も頻繁になつてきたしね。なのはともなかなか会えなくなつちやつて…」

「噂のエースオブエースか…まあ、頑張れ」

「ありがとう… つてのはひとせんなんじやないつてばー！」

そんなに慌てなくていいこんじやね？

メガネずれてるわ。

「まつたく… そういう君にどうなんだい？」 「あいにく、そんな気分にはなれそうもないな…」

「…まだ… ふつきれないのかな…？」

「ふつきるとかそういう問題じゃねえよ…」

あこつのことはな…

(せりー！今度はこれ読んでみてー…)

(んー？…またこれは分かりづらこものを…)

(いいからいいから)

(つたく…)

(ふふふ…)

(何笑つてんだよ…)

(なーんでもなーいよー)

(はあ…)

(君たち…)

((ん？どしたのゴーー)君)

(頼むから僕の仕事場でイチャイチャするのやめてくれるー…?)

「…ール…トールつてば…」

あ…また思い出に漫つてたみたいだな…。

「ん、ああ悪いな」

「疲れてるなら今日はもう帰つたら?」

「ん、そうするかな…」

ま、明日も早いしな。

そういうや明日隊長が俺に用があるって言つてたな。
何があるんだか…

「やつぱつ…僕達だけじゃ助けてあげられないのかな…?クロノ」
『やはり彼女達に託すしかないだろうな…』

「どうするの？」

『なに、彼の部隊に少し手を回しただけだよ』

「大丈夫なの…？そういう裏工作…彼一番嫌つてゐるのに」

『アフターサービスまでバツチリだ…心配いらないよ』

「そういうことを言つてゐんじゃ…ないんだけどなあ…」

プロローグ（後書き）

今日は多分ここまでです。次回は異動と機動六課との運命の出会いまでいければなあ…

第1話 約束（前書き）

明日は投稿出来ないのでとりあえず今日更新しました！

第1話 約束

「おはようございます…」

「おう。まあ座れよ

翌朝、出勤とともに隊長室へ挨拶へ行った。

中には40前後の白髪の混じった、いかにも俺、苦労してようやつ

とこの中間管理職なんだぜ、

みたいな雰囲気の男がソファーにもたれかかっていたんだが…

《マスター、ボケツとしてないで座ったらいりますか?》

今喋ったのはフリーズライト。

今は俺のデバイスだ。

昔は…そのうち話すぞ。俺のになつた経緯も含めて、な。

「それで…昨日言つていた要件とこいつのは何ですか?」

「まあそう急ぐなよ。

お前がもうここへきて5年になるんだよな

「ええ。当時あの事があつて自棄になつていた俺を止めてくれた

のも、上層部に睨まれていたにもかかわらず俺をここにさせてくれたのも、全て隊長のおかげです」

「まあ…正確には俺だけじゃないんだが

「?」

「何、上の連中にもお前の味方はいるつことだ。お前が思つていい以上にはな

嘘だろ……？上層部の味方なんてせいぜいリンクティさんかクロノ位しかいないと思うんだが…

「ま、前置きはこんぐらにして先に言ひや。…お前、明日から異動しろ」

「はつー!?」

《マスター、口調》

「あ、まづ…」

いや、普通明日異動なんて言われたら素になるだろ。
にしても…

「「」のタイミングで異動ですか？」

「ああ。実は最近のガジェットの大量出現、これに対応してあるロストロギアが関連しているんじゃないかと大分騒いでいるんでな。
新しく部隊を作るんだそうだ」

「はあ…」

新部隊を…？この時期に？既存の部隊を当てるのではなく？

…これは何があるな…

「新部隊に俺を、ですか…」

「ああ。部隊長がまだ19の娘っ子でな。若いんで戦闘経験、実力共にあるやつが一人でも多く欲しいんだそうだ。これがその部隊のデータな」

どれどれ…。…何この最強部隊。エースオブエースに金色の死神、
さらに部隊長は最後の夜天の主つて…。

「隊長…」

「なんだ？」

「俺、いらないですよね？」

「いや、だからよ……」

「こりないですよね？」

「おこ……」

「い・ら・な・い・で・す・よ・ね？？」

「……つだあああああ……いるつたらいるの……隊長命令……」

「んな！？」

汚い！こんなのがりかよー

勘弁してくださいよーつて……

あれ……こいつは……

「おこ、じつ……隊長……た？」

「俺、行きませー。」

「へつ？」

「明日からですよね！？じゃあ荷物まとめて異動する準備するんであとでその部隊の場所と集合時間教えてください！それじゃあ失礼します！」

「お、おこ待てって

まさかあいつが……ね。

これも縁つてやつなんかな。

なあ戦友……お前との約束、果たせるといいんだがな。

「……ふう。こんなもんでいいですか？クロノ提督」

『ありがとうございます。これでいつも……前に進めるかもしません』

「……結局俺は、あいつを止める」とそれでも、救つてやる」とはできなかつたんだよな…」

『そんなことはありません。あいつが腐りず管理団で仕事をしていくのはあなたのおかげなんですか』

「そうですか…。しかしあいつはなにで黙にせらばになつたんですかね？』

『まあ…戦友の死骸が見つっちゃつですよ』

第1話 約束（後書き）

更新終了。結構不定期なので気長にお待ちください…。

主人公設定だよ

トール・シュライト

年齢 23歳

身長177cm

体重 72kg

顔 中の中

髪 短め

階級 一等空尉

魔力 リミッター時AA+ 全開時S-

魔力変換資質 氷

デバイス名 フリーズライト メインは刀

過去、とある事件により管理局上層部にとつて邪魔な存在となり、出世の道から外され、

それでも現場で頑張っていたのであるが、また別の事件により戦友を失い、

そしてさらに別の事件により恋人、家族を失うこととなり、事が公になることを恐れた上層部の裏工作により、これらの事件にトールが関わっていることは全て非公式となっている。

そのため本人は笑顔を失つたが、かつて交わした約束を胸に、管理局の闇と戦い続けている。

第2話 機動六課（前書き）

夜中になってしまった！

第2話 機動六課

s.p.i.eはやて

「ハハ、じょいよ...いよいよ私の部隊がスタートするんやー。」

あかん、緊張でなんか泣きやつや...。今までホント長かったわ
。::。

ほらっ、見てみい！シグナムだつてあんなに震えて...

「フフフ...楽しみだな。トール・ショーライトか...」

つてそつちかーい！緊張やのーて武者震いかい！
ま、確かに自分と同じ魔力ランクでデバイスは刀つてゆーてたから
戦つてみたってのは分かるけど...

「ハ、シグナムへお願いやから初日くらには血量してな？」

初日から訓練場破壊されて修理費で大出費なんていややで？

「分かつてこますよ主.....くわー。」

嘘つけえーー早く戦りたくてめつむかやウズウズしつむやーー！

「あはは、相変わらずだねシグナムは」

フヨイトむかやん...笑つとらんとなんとかしてくれん？

「それは無理だよ。だつて私も楽しみだし」

バトルマニア共自重しろーってか心の声読まんといて！

「んー、でもどんな人なんだろうね？ランカーなの？」「一つ名も何も聞いたことないし」

「ランクだけ見れば間違いなくエース級なんやけどなあ…」

問題はスターーズとライトニングどちらに入れるかなんやナビ…その辺は一度実力を確かめてからの方がええかな。
将来が楽しみな新人達に謎の一等空尉か…。
これから忙しくなりそうやな…

s.i.d.eトール

「I.I.Iが機動六課…」

『いやあ…大きい建物ですねえ…マスター、迷子にならないでください
わざよ』

お前は俺の母親か？いくらなんでもこんなところで迷つわけ…

「…迷つた」

『…言わんこいつちやない。だから受付の人には案内してもいいんばよか
つたんですよ』

おかしいな……」さつきも来たよな……。グルグル回つてんのかな……。

『マスター！前！』

「へっ？うわっと！」

「きやあ！」

いたた……あれこれ考えてたらぶつかってしまった。ってこいつは……！つてそんなこと考へてる場合じゃないか。

「すまない……。大丈夫か？」

sideティアナ

ついにここまできたわね……。

機動六課。

私の新しい職場。

八神部隊長を中心とした紛れもないエース部隊。

高町なのは一等空尉をはじめ隊長陣はオーバーSランク、副隊長もニアSランクと部隊としての戦力は間違いなく管理局内でトップだらう……。

八神部隊長は私たちをスカウトしてくれたのだけど……

「才能の塊のスバルと違つて私は……凡人だから」

それでも私は……もう大切な人を……兄さんみたいな犠牲者を出したくないから……！

つと今日は機動六課発足の挨拶があるんだっけ。

その前に一度部隊長のところに挨拶に行かなきや……あつ！

「うわつとー」

「きやあー！」

あたた…。曲がり角だから避けられなかつた…。

「すまない…。大丈夫か？」

あれ…？この声どこかで…？

見上げると管理局の制服を着た、特段整つた…というわけではないけれど、かといって悪くもない、そんな感じの男の人が少し申し訳なさそうに謝つてきた。

いつまでも倒れたままじゃいひちがちょっと申し訳なくなつちやうな…。

「…ええ。大丈夫です」

立ち上がりつて制服についた汚れを払う。

「いや、申し訳ない。初めて来たところだつたから迷つてしまつて」

「そ、うなんですか…？失礼ですが。お名前を伺つてもよろしいですか？」

「…トール・シユライト一等空尉だ」

…！一等空尉！？つてことは今後私達の指導もするんだらうか…？

「し、失礼しました！ティアナ・ランスター一等陸士です！」

あわてて敬礼したんだけど…。ちょっと不味かつたかな？ちょっと怖そудだし…。

「そんなに畏まなくていい。それよりすまないが部隊長へ案内してもらえないだろうか？」

「はい！」

ふう…よかつた…。これからお世話になる人だし、失礼があつたら大変よ。ま、バカスバルはあんまり気にしないだらうけどね…。
…トール・シユライト一等空尉か…どこかで見たような気がするんだけど…。

結局思い出せないまま部隊長室に着いてしまつた…。

第2話 機動六課（後書き）

機動六課つて書いておきながらまだなのは達に会っていない…。次回
こそ間違いなく…

第3話 発足（前書き）

第3話)
戦闘能力（ＰＶ）がどんどん上がっていく……だと……？

第3話 発足

ふう…どうにか間に合った…。

あの後ティアナー等陸士に案内してもらい、なんとか遅刻せずに済んだのだが…

『後でちゃんとお礼を言ひんですよ?』

だからお前は俺の母親か?

わかってるつての。

「…ここだな」

「ええ…」

コンコン

ティアナー等陸士がドアをノックすると

「はい。どうぞー」

中から若い女性の声が聞こえてきた。

「失礼します」

「失礼します」

ティアナー等陸士に続いて入室する。

中は思った以上に広く、そしてでかいデスクやソファーなどが揃えられている。

「金かかってるな。

デスクの周りにはピンク色の髪をポニー・テールに纏めている人

…俺の人になんかしたのかな…ものすごい見られてるんだが…

金髪のきれいな人

…うわ、綺麗な人だな…

栗色の髪をサイドポニーに纏めている人

…「Jの人も綺麗な人だなー…ってか女性ばっかりだな…

そしてデスクには茶色のショートカットの少し背の低い女性がいた。

「…なんか失礼なこと考えとらん?」

「…そんなことないですよ…」

「ま、ええか。とりあえず…よつJモー機動六課へ。君がトール・

シユライト一等空尉でええんやな?」

「…はい。トール・シユライト一等空尉。機動六課へ赴任いたしました」

「私が機動六課部隊長、八神はやてや。そんで…JJJJは」

「高町なのはです」

「フェイト・T・ハラウォンです」

ハラウォン? それじゃこの人がクロノの義妹なのか…どうりでシスコンなはずだ…。

こないだも義妹が全然休み取つてない…とか言つて泣きついてたもんな。

「シグナムだ」

「よろしくお願ひします…」

「なんか威圧感があるんだが…」

「ところでシユライト一等空尉は…」

「トール、で構いませんよ」

「ん、トールは剣術使いという話だが…」

「ん…まあデバイスが刀なんで剣術使いといつのは間違つてないんですが…」

「ならこれから模擬戦を…」

へ?…俺今日来たばつかなんだけど…もう模擬戦?

何これいやがらせ？

俺つてもしかして歓迎されてない？

「もうー！シグナムつたらーいきなり模擬戦はダメだつて言つたでしょーっ！トールさん今日来たばかりなんだよ？」

ああ…フェイトさん…あなたが天使に見えるよ…

「やるんなら明日にしよ？それに私も戦つてみたいし…」

ああ…天使の顔をした死神だつたんですね…

「ならテスタロッサ。お前と今日模擬戦をして勝つたほうがトールと模擬戦ができるといふことでどうだ？」

「うん。いいよ」

あの…やらないといふ選択肢は俺にはないんですか？

「トール一等空尉…」

あれ？ティアナ一等陸士？

「「」愁傷様です…」

「…」

ですよね…。

「あはは…」めんね。あの一人、トールさんが近接戦闘のスペシャリストって聞いてからものすごい楽しみにしてたんだ」

「はあ…」

別に近接戦闘しかできないわけじゃないんだけど…まあ、いいか。

s i d e なのは

トールさん、か。

礼儀正しい人だなあって感じなんだけど…
気になるのはあまり表情が変わってないってところかな?
うーん…初対面だから緊張しているのかな?

「なのははちゃん…トール君もそろそろ時間やで

「あ、はい」

「はい…」

おっといけない。そろそろ挨拶の時間だ。

「一人とも、そろそろ行かないと、だよ? 模擬戦の話はあとあと…」

盛り上がっている一人に注意する。

何気にフェイントちゃんもバトルマニアだよね…

「おっとすまん」

「あ、ごめん」「めん」

「ふつ…助かつた

トールさん、ごめんなさい。明日以降連日模擬戦だと思つ。
私はフォワード陣の訓練があるから助けてあげられないや…
とりあえず挨拶挨拶つと

sideトール

挨拶も終わり、もう新人達は訓練か。
しかしここ海だよな？こんなどこで訓練するのか？

「おはよひ〜」ぞこま〜す」

ん？え〜とたしか…

「おはよひ、スバル・ナカジマでいいんだっけ？」

「はい！トール一等空尉！」

元気いいな。

うん、若いうちば」「うでなくつちや。

俺もまだ23なんだけどな…。

色々ありすぎて元気どころか表情なくしちまった…。

…レイ//…お前に会いたいよ…

「…あの〜、どうかされたんですか？」

「…いや、なんでもない…」

「ちよつとスバル早すぎ…！私たちのことも考えなさこよ…」

「「」「」めんティア～」

「「はあ…、はあ…」」

どんだけ元気なんだ？

後ろのちびっこたちもう息切れしてんじゃないか…

ん？高町一等空尉と…あと、あの女の人はデバイスの技師かな？

「さて、早速だけど訓練始めよつが！」

「それはいいんですけど…」

ん？どうしたスバル？

「後ろでなんか金色と赤色の閃光が飛び交っているのはなんですか？」

見るなよ…

なるべく視界に入れないようにしてんだから…

第3話 発足（後書き）

3話終了！次回、おそらくどちらかと模擬戦予定！

第4話 模擬戦前篇（前書き）

思つたよりペンが進んだので予約投稿始めました。トルと戦うのは果たしてどう！？

第4話 模擬戦前篇

s.i.d.eフロイト

「悪く思わないでね、シグナム…」

「うう…まさかプラズマランサー・ファランクスシフトまで使って
くるとは…」

ふう…なんとか勝ったけどギリギリだったなあ…。

10年来の勝負、これでイーブン位かな?

久しぶりに本気で戦つたから気分がいい。

そして明日はトールさんとの模擬戦だ。

正直勝てるかどうかわからない。

ランクだけで見れば確かに私が優勢のようだけど…

私もトールさんもリミッターが掛かった状態だ。

はやての話によればデバイスは刀で、氷の魔力変換資質を持つているってことなんだけど…

氷の魔力変換資質持ちは正直珍しい。

私のような電気や、シグナムのような炎の魔力変換資質ならば少な
いけれど確かにいる。

けれど氷は別だ。

魔力で作った氷というのは少なくとも物質としてそのまま在り続け
なければならず、つまり一度作ったものをそのまま維持し、意のま
まに操るということだ。

はつきり言って維持し続けるというのなら効率が悪い。

けれどそれを可能にするというなら…相手としてこれほど厄介なこ
とはない。

明日が楽しみだな…

sideトール

どうやらフロイトさんが勝つたようだな。

勝てるかな…どうだろうな…

明日の模擬戦は恐らく俺の実力を測る目的なんだろうし…

「ほひ、足が止まってるよ。どうすれば倒せるのか、動きながら考
える」と…

「…」

新人達はガジェット相手に苦戦しているな。

まあ、無理もないか。

ガジェットが出現したのは近年、結局具体的な打開策は個人の技量
頼みときたもんだしな…

お偉いさんがあんだけ雁首そろえて情けないつたらありやしないな…
AMFに対抗するには一つは範囲外に出ること。

そしてもう一つは力技つか…

ままならねえな…

「でやあああああああ…」

お、やるじゃないか。

エリオだっけ？ああ、後ろの嬢ちゃんの補助魔法だな。

それに

「…大丈夫。これならいい。」

ティアナもやるな…あの射撃は△△ランクの連中がやるもんだが…。

才能のなせる技、だな。
アイツの妹だけあるわ。

狙撃手ってのはとかく地味に見えがちだけど後衛の要で、チームリーダーとして引っ張つていく必要があるところだ。
バカにはできない。

「はい。お疲れ様」

「「「お疲れ様でした…」「」「」」

あんだけ動きまわればそりゃ疲れるな…

「トールさん、どうでした?」

ま、普通の部隊ならこんだけできればルーキーとして活躍できるん
だけど…

ここは少し言つことは言つとくかな。

「まず前衛一人」

「「「はい！」」

「後衛との距離を取りすぎ。くつつかとは言わないけども少し連携の取り易い位置にいること。

まあ後半はティアナの指示がよかつたからチームとして形になつてたがな」

「「はい」」

「次、キヤロ」

「は、はい」

「おつかなびつくりしそぎ。遠慮が強いな。周りと打ちとければもう少しなんとかなるかもしけんがもう少し我を通すこと」

「はい……」

「最後、ティアナ」

「はい」

「射撃に関しては俺からは問題ないよつに見える。けど指揮に関しては意思疎通の部分がまだまだだな。前衛が突つ込みやすいタイプだから大変とは思つが相手を考えた戦略を考えたほうがいいな」「わかりました……」

ま、俺の口からばこんなもんだろ。
もともと俺は指導者じゃないんだし。

さて、今日の仕事を終わらせて明日に備えますかね……

翌日

「どうじていつなつた……」

何このギャラリー……

訓練場の前に運動会とかでよくあるテントとか張つてあるし……

よく見りやバックヤードスタッフまで来てないか？

仕事はどうしたんだ仕事は！

「 もう… はやてつた！」

「 こへらなんでもましやわあだら… 」

ヴィータ三尉なんてアイス食つてゐる…

お祭りじゃないんだが…

あ、なんかシグナムさんがものすりで困る。

よつほど戦いたかったのかな…

「 まあ、いいか… 」

「 うん、とつあえずはやくはあとで私から、お話、しておへから 」

なんか今の、お話、にすこい殺意を感じたぞ…

部隊長… 」 愁傷様。

はしゃぎすぎたあなたが悪いんですよ…

「 じゃあ、始めますか… 」

「 ああ！ フリー・ライトー 」

《了解》

バリアジャケットを展開する。

俺のバリアジャケットは黒を基調としたスーシにロングのマントを羽織った状態だ。

そして左手に持ったフリーアームは刃渡り一メートル、結構長めにできている。

“ うやうやしくタイトさんも準備が整つたよつだ。 ”

「「レディー……」

お互に距離を取る。

そして、

「「「」——！」

模擬戦が、始まつた。

s i d e フロイト

キン！ヒュッ！！

一撃一撃が鋭くて無駄がない。

速さでは確かに私が勝つていて、手数も私のほうが出せているのだけど…

防御もいい。

気を抜けば間違いなく反撃される。

一度距離を取つて…

「バルディッシュユーー！」

カートリッジをロードする。

「ハーケン…セイバー！！

これは…どうする…？

「アイス・シールド」

トールさんは右手を前に出して氷の盾を形成する。

私のハーケンセイバーとぶつかった衝撃でガリガリと削られるが、氷を形成し続けることにより防ぎきったようだつた。

「フローズンダガー」

今度は逆にトールさんが氷で作った刃を私目掛けて投擲する。速度は速いが直線的なので回避するのは難しくない。が、

「これで終わりじゃないぞ」

「！？」

氷の刃が方向を変えて襲つてくる！！

追尾型だつたのか…

「はああ！！」

バルディッシュを一閃し、氷の刃を纏めて払い落す。すると氷はそのまま霧散していった。

sideトール

「…さすがだな…」

さつきのハーケンセイバーも実はかなりヤバかつたのだが…

全力で形成したフローズン・ダガーもあっさり払い落されたし…

もう一回接近戦に持ち込みたいところなんだけど如何せん速すぎて捉

えきれないな…

つたくこういう搦め手はあまり好きじゃないんだが
初めてなんだし華を持たせてもらいましょうかね…

第4話 模擬戦前篇（後書き）

第4話終了！ 次話で決着予定です。

第5話 模擬戦後篇（前書き）

模擬戦終了ーー！

あれ、はやてつてこんなキャラでいいんだっけか…？

第5話 模擬戦後篇

s i d e フ H I T

今度はこっちの番だよ！

「バルディッシュ・ソニックフォーム！！」

『 a l l l i g a n t 』

接近戦では向こうがわずかに上…

ならじつちはそれを上回る速度で攻撃する…！

普段の鎌型から大剣に変え、トップスピードでトールさんに迫り、

一閃！！

そしてすぐに離脱する。

さすがに一回では決まってくれないか。
なら決まるまで何度も…！

うん、速度では私のほうが上だね。
離脱する速度に追いきれてない。

それでも攻撃に対応するのは本当にすごいって思つ。

管理局の魔道師として10年、

欠かさずに戦闘の訓練は積んできたつもりだ。

うぬぼれじゃなく、私の攻撃はそんなに簡単に防げるものじゃない
と思つ。

… いの人はどれほどの訓練をしてきたのだろう…

もともとの才能もあるんだろうけど
決して才能だけではないってわかる。
だからこそ…この人に勝ちたい。

次で決める…！

今までよつとらに早く、そして鋭い一撃。
それはトールさんの体を的確に捉え、そして、

「えつ？」

トールさんが、碎け散つた…

sideトール

フォームが変わって速度が更に上がった…！
人つてのはこんなに速く飛べるんだな…
目で追うのがやつとなんだが。

攻撃？予測でなんとか捌いてるけど速度に比例して重さも増して
るんだ。

そろそろきついな…

もうけよつとで完成するんだが…

よし、出来た…！

あとはこれを…

そ、勝ちにいきますかね

s.i.d.eフHイト

「トールさんが…砕け散つた…？」

おかしい。

斬つた、ではなくいまのは固いものを砕いたような、
そんな感触だつた。
まるで岩のような、

「氷の…よつな…！」

そんな…まさか…

「正解。だがもう少し早く気付けばな」

チャキ

背後から私の首筋に刀を突き付けられる

やられた…今のは…

「幻術…だね」

「そのとおり」

すべて分かった。

トールさんは私の攻撃を捌いている間、もう片手間で氷を形成し、
それに幻術を付与することで
もう一人の自分を作り上げたんだ。

そして完成と同時に自分は別の幻術で雲隠れ。
タイミングはそう、

「私が離脱するわざかな間、だね」

「そうだな。その間はわざかな間とはいえ私が一人存在することになるからな、それを見られてしまえばこの作戦は失敗だった」

そう、トールさんはこの模擬戦の間に今回の私の戦術を把握し、その上で自らの戦術を展開させたのだ。

とくにソニックフォームにチェンジしてから一撃入れ、離脱、のパターンを組んできた。

その際、離脱のために一瞬トールさんから目を離してしまつ。今回はそのわずかな時間を使った戦術だったのだ。

言葉で説明するのは簡単だが、これをすべてなしえるのは的確な状況判断と決断力、

そして防御しながら氷魔法と幻術の同時展開という高度な技術が必要なのだ。

やつぱりトールさんははずいにや…。

「…この場は、私の負け、かな」

「こんな手が何度も通用するとは思わないさ」

「うん。次は負けないからねー」

s.i.d.e トール

ふう…なんとか勝ったか。

単純な実力ならあっちが上つてのは今回の模擬戦でよく分かつた。はつきり言ってこんな手は一度と通用しないだろうし、

俺もまだまだだな…

「それで? なんでこんなにギャラリーがいるのかな? はやで…」

「あ、ああ… フェイトちゃん… なんか怖いで?」

「うわあ… フェイトさん顔は笑つてゐるけど田代がヤバい…
部隊長… 骨は拾つてあげますよ。」

「ちゅ、トールさん! ? 手合わせといひでた、助けてや…」

「うん、それ無理。」

「なんかトールさんが無表情で手を合わせるとお葬式みたいだね
「何バカなこと言つてるのよあんたば」

「いやはは… も、はやてちゃんにはいい薬、かな?」

「申し訳ありません、今のテスター君は私でも止められません」

「ちゅ、何ザンバー構えとるん? ま、まさかこれは伝説の神主打法

…?」

カキーン…!

「いやあああああ… 私はホームランボールじゃない… ! !

れて、今日は疲れたし明日からまた訓練だな。

「ヒ、トールさん、ドライブだね…」

「いや、あれはほんての血業自得だ」

第5話 模擬戦後篇（後書き）

五話終了

次回はたぶんファースト・アーフート？

第6話 ファースト・アラート（前書き）

ファースト・アラートです。

第6話 ファースト・アラート

s.i.d.eはやて

「うーん…」

デスクの上に山のように積まれた書類
その中の一枚の紙を見ながら不思議に思つことがあった。
うん。紙つていうのはトールさんの遍歴や身上につけてまとめて
たやつなんやけどな？

「どうしたんです? はやてちゃん」

デスクの傍らであくせく働いていたリンゴフォース・ツヴァイが聞
いてきた。

「ん、トールさんの家族構成なんやけどな?」

「うん」

「書いてないねん。真っ白つてわけやない。妹一人で書いてあるけ
どそれだけ」

「名前も書いてないんですか?」

「わかつてこいつ書いてるんやろか? それとも書きたくない何かが
あるんやうつか…」

謎が多くさやな。レジアス中将のスペイツてのは考えにくいやうび、
何かとんでもない秘密がありそつや

おつといかん今日は聖王教会にいかなかんかつたつけ

s.i.d.eアーティール

「それじゃ早朝訓練のラスト、シユートイベイションやるねー」

「 「 「 「 はこ……」「 「

今日も今日とて新人達は訓練か
「つしてみると着実にレベルアップしてこるのがわかるな

「一撃…ひつと…！」

「ちょっとスバル先行しそぎだつてば…一回おれちやうわよ…！」

「うわわ、ティア～援護～！」

「わかつてるつて…あれ？」

ボシュウウウウウウ…！

おー、ティアナのデバイスから煙が出たよ。
ま、あんだけ密度の濃い訓練やつてればデバイスの方が悲鳴をあげ
るか

「な、この肝心な時に…！…」

「ボサッとしない！…！」

「うわつと…！」

お～、今のはかなり危なかつたな。

「はあああああ…！」

「くつ…！」

うん、今のタイミングはなかなかだな
もう少しでバリアを破れそんなんだが…

「ううだああああ…！」

エリオ、今のは…タイミングだな。
これで恐らぐ…

「お見事、ミッションコンプコードだよ」

クリアーだな。

そろそろデバイス調整が必要なんじゃないか？

sideスバル

午前中の訓練が終わったのはいいんだけど私のローラーとティアのデバイスがイカレちゃつたので、ちょうどよく私たち専用のデバイスが配布されたこととなつた。ホントなら午後からデバイスについての細かい説明があるんだけど…

「IJの音は…第一級警戒態勢！？」

そはんな時間はないみたいだ。

シャーリーさんは時間がないからぶつつけ本番みたいな形で送り出してくれたけど…

正直ちょっと不安だな…

sideスバル

今回の任務は輸送されているレリックの確保

それからガジェットの破壊

任務分担としてはなのはさんとフロイトさんが空からのガジェットの破壊

フォワード陣がレリックの確保となり、俺はちょうど中間地點にて

ガジュットを破壊しつつフォワード陣を援護する」となった。

「あれはキヤロか?

大分緊張してるな。

無理もないか…初めての実戦だしな

「キヤロ」

「あ…トールさん…」

「怖いか?」

「…はい」

「そうだな。怖いものは怖い。」うこうのはましきつ認めてしまつ

方がいい

「…?」

「だが、怖いから」そなんとかしなければならない。…別に一人でやるわけじゃない。すぐ近くにはずっと一緒に訓練してきた仲間がいる。遠いかもしれんが通信ではもつとたくさんの仲間がいるんだ。もちろん俺だつてな…」

「…はい」

「なんかあつたら助けにいくわ。思いつきりやつて」…

「…はい…」

「…ほんまんかな。自分でも無表情だつて分かつてゐから」うこうのは苦手って思われてるんだらうけど。

世話の焼ける妹を思い出すんだよなあ…

あいつはまだ生きてるけどよ。

side キヤロ

トールさんの励ましのおかげでなんとか立ち上がることができた。

でもまだ正直怖い。

列車の上に立つてスバルさんやティアさん、エリオ君が先に行くのを付いていくことしかできない……。

そんな時だった。

「うあっ！…」

エリオ君がガジェットのアームに掴まれてしまつた。

「フリードー！…ブラストフレア！…」

「きゅくろ～」

フリードのブラストフレアも全く通じない。

そういうしてごらんうちにエリオ君が列車から投げ出されてしまつた。

…助けなきや！…

私は意を決してエリオ君の所へ飛んだ。

s.i.d e - ル

「ああ、まつたく！…」

なんでここだけこんなに数が多いんだ？

まるで俺がここに来るのがわかつてたみたいじゃないか
その割には戦力が中途半端なんだよなあ

…時間稼ぎか？

「エリオ君！…」

ちつー…やつぱり時間稼ぎのための分断か…！…

ここからじゃ間に合わない…！…

…使うか…！…？

『いや、あれでええ』

あれでいいってどういう…？

なんだあの光は…？

s.i.d.e キャロ

「守りたい…」

強すぎる力は災いなだけなんだと思つてた…
でも、今は違う…！！

「守りたい…！」

ここにいる仲間を…皆を守るために使うんだ…！！
「ごめんねフリード…今まで不自由な思いをさせて…必ず制御して
みせるから…！お願い…力を貸して…！竜魂召喚…！」

やつた…！！成功した！！

なんとかエリオ君を助けることに成功したわけだけど…まだ私たち
の前にはガジェットがたくさんいる。

こんな数…どうすれば…

「よくやつたな、キャロ」

上空から氷の槍がガジェットを襲い、何体かのガジェットが破壊さ
れた。

「トールさん…！」

sideトール

さて、キャロが勇気を振り絞ってるんだ
ここはちょっと本気でやらないとな

「いぐゼ、フリーズライト」

《了解、最速で終わらせましょー!》

「フローズンダガー・ガトリングモード」

フェイトさんとの模擬戦で使った魔法の応用だ。
拡散させて擬似的に広域殲滅魔法にするとともに、一点集中で威力を
底上げすることも可能なやつで、

今回は当然…

「一点…集中…！」

《了解！…》

「発射！…」

ふいゝ。終わった。

レリックもスバル達が確保してくれたみたいだしな。
空は二人のエースの独壇場だ。

こんなところでアレを使うわけにもいかないしな。
さて、今日は帰りますかね。

s.i.d.eスカリエッティ

「すばらしい…」

「ドクター、追撃戦力を送りますか?」

「いや、必要ないよ。レリックは向こうの手に渡つたし、必要な手
一タは取れた」

素晴らしいよ機動六課…!!

プロジェクトFの遺産、それも生きた実験体を見ることができるな
んて…!!

そして…!!

「トール・シュライト…!!私は君をずっと待っていたんだ…!!管
理局の闇に飲まれかけ、復讐の心は必ず君に宿っているからね
え…」

もつとも… そう簡単にはいかないだらけど、ね

「ああ…早く会いたいよ…彼女も君に会うのを楽しみにしているん
だ。君ならきっと気に入ってくれるだらうねえ…!!」

第6話 ファースト・アラート（後書き）

第6話終了

トル君にはまだ隠された能力があるんです。
まあ、元の能力を更に強化した結果のものなんですが。

第7話 はた迷惑（前書き）

オリキヤラ登場回

しかもいきなりバトル

第7話 はた迷惑

s.i.d.e.? ??

「いじですか…」

まつたく…異動したなら異動したとおっしゃってくださいねばいいのに…。

どうして避けるのでしょうか…

とりあえず、お話をすわね…

s.i.d.e.トール

「それじゃ今日の訓練なんだけど…」

今日は何をやるのかな…。

何か今日は訓練以外です」とい嫌な予感がするんだが…

「スターズは私と、ライトニングはトールさんと模擬戦ね
ライトニングね…んじゃいつちよもんでやるか。

「はああーー！」

「甘いー！」

スピードは大したもんだな。
トップスピードの俺と同じくらいだ。

だが技術がまだまだな。

槍術は距離との戦いとも言つていいのだが、がむしゃらに突っ込むだけでは槍の特性を殺してしまつぞ？

「くつ」

一寸距離を置いたか…。つてことは…。

「フリードーー・ブラストフレアーー！」

右手で氷を作りだして防ぐ。

「せひ、わざわざ呪を止めてるんだからもう一回いく
「はいーー！」

「きゅー」

「うつ…」

ふう…まだまだだな。技術がまだまだ拙すぎる。
俺がなんとか教えてあげられればいいんだけど…
槍術は門外漢なんだよなあ…。

俺も戦術の幅を広げたいから憶えようかな？

「さて、午前中は」これで終わり。午後は反省を踏まえた訓練にする
からね」

「「「「はい……」「」「」「

ふうふう、午後はどういった訓練にしようかな。

「…ん?」

…！」の魔力反応は…！…

s.i.d.e.?..?

お元気そうですねによりますわ…

ですがまだある方とのことを引きずつておられるのですね…

ですがとりあえずは、お詫びですわね。
「いきますわよ…セバス

『りょ、『解』』

人を心配させた罰ですわ、お兄様

sideトール

「氷装方陣！」

迫りくる30もの魔力弾を氷の壁を形成し防ぐ。
つたく周りの迷惑を考えろつての。

今のは新人達にも当たりそうだったじやないか。

「敵襲！？」

あ～、普通はそう思うよな…。とりあえずあのバカには説教が必要
だ。

「なのはさん、心配はいらない。知り合いだから…」
「ふえ？」

ぽかーんとしてるな。ま、こんなことする奴が知り合いなんて言つ
たら普通はそうだわな。

「とりあえず止めてきますので…」
「あ、ちょっとトール君！？」

まつたく…何考えてるんだか…

s.i.d.e?????

ふふふ…腕が鈍っていなくて安心しました。

さすがはお兄様、的確に私の位置を突き止めましたわね。ですがこんなものでは終わらせませんわよ…。

s.i.d.e-ツール

あいかわらずあいつの遠距離射撃はえげつないな…。
的確かつ超高速、おまけに威力も重いときたもんだ。
俺でなければあつとという間にせりあれてるだろうな…。
…？ちょっと弾数が減った…？

つてことは…

慌てて頭を左に逸らす。

するとそのまま直後に強烈な風が通り過ぎて行つた。

「エアロ・バレットまで使つてしまつた…」

通常の魔力弾と違い、あの風の弾は速度も速く、そして視認できな
い。

まったく…暴走する癖がなきや俺が知っている中で間違いなくアイ
ツと肩を並べるほどの狙撃手だつてのに…。

「ちゅうとやつすぎだな」

そつちがその気なら俺にも考えがあるぞ……

s i d e ? ? ?

エアロ・バレットまで避けられるとは思いませんでしたが、
まだ大分距離もありますしげのまま一気に…

『マスター、トール様の気配が…』

消えた？

一体どこに行つたというのですか？

『マスター！右手です！…』

右を見れば確かに高速で迫つてくるお兄様が見える…。
ですがお兄様は高レベルの幻術の使い手でもある…。

「エアロ・シユーター！…」

試しに風の弾幕をぶつけてみたらやはり幻術でした。
なら本物はどこへ行つたのですか…？
『マスター、今度は上空です！…いや、左にも！…』

セバスの認識を阻害するんですからほんと厄介ですね、

フリーズライト…

の方のデバイスだつただけのことはありますわ…
まったく、の方はいつもいつもお兄様のことを…

「だつたら纏めて相手しておこなげ…」

「終了だ、このバカ…！」

ガツン…！

い、痛い…

いつの間にこいつまでいらしたんですの…？

sideトール

つ、疲れた～、遠隔からフェイクシリエットを使つただけでこんなに疲れるんだな。

「なんでこんなことしたんだよ…」

「だつて…お兄様、私に何も連絡しないんですけど…私がどれだけ心配したと思ってるんですか…」

「つたく…悪かつたよ…」

ホント…世話の焼ける…。

「お～い

「あ、来た来た

「む～

「何拗ねてんだよ

「…」

「トールさん、大丈夫だつたの！？」
「ああ、心配掛けてすまないな」

フォワード陣に、八神部隊長まで来たのかよ…

「あの～、そちらの女性は…誰なんや？」

「ああ、こいつは…」

「はじめまして、私はリムル・シユライト執務官と申します。」

「あ…リムルさん、ね…」

「ねえ…シユライトつてまさか…」

ああ、ほんと面倒な奴が来たよ…。

「ああ、俺の妹だ」

「　　ええええええええええええええ…！…！…？」

今日の午後練、休んでいいかな…？

第7話 はた迷惑（後書き）

7話終了！

また真夜中になってしまった…。

第8話 誰が好き? (前書き)

第8話、前半と後半のギャップが…
どうしてひなつたー(×○×)ー

第8話 誰が好き？

s-p-e-a-t-e-r-l

「…………」

「ばぐばぐばぐばぐ

「もぐもぐもぐもぐ

「まつたぐ……」の空氣の中よく耳鳴りがするわよね……」

「あ、あはは……」

俺が言えたことじやないがホントやつらうわ……

「や、それでリムルさんばびひこひこひこ……」

フュイットセ…場の空氣を変える質問ナイスです。

「それはですね……こせ……いえ、兄が私に異動をしたこと報告してこなかつたので、そのことを問い合わせに来たんですよ

「へええ、それはあかんなあ～」

あの、部隊長? なんで怖い笑顔をしていらっしゃるんだしようか?

「うんうん。家族に報告しないのはよくなないことだよね

「はあ……」

なのはせんも回調しないでくれ。いつ来るといつまは必ず。

「ですよねー? 唯一の家族である私に報告しないのっていけません

よねー?

「うーんやあーーー?」

ガツン！

「あいたー…」
「調子に乗るな」

「だ、大丈夫ですか？」

「ありがとうございます。えっと…」

「フュイト・T・ハラウォン、リムルさんと同じく執務官です」

「あ…………じー…………」

「あの、何か？」

「ぶつぶつ…………まつたく…………お兄様ときたらあることがあったのにこんな美少女ばかりの部隊で鼻の下でも伸ばしていたのかしら…………」

「？」

「それで、トールさんはなんで報告しなかつたん？」

「なんでつてそりや…」

「報告したら私もついていきます……とか書つて今やつてこら仕事を放り出してでも来ようとするので」

「だつて心配なんですもの……」

「俺はお前がちゃんと仕事してるのが心配だよ…」

「まあ、そんなことを言つて、ホントは私がいないと夜も寝られないと癖に…」

「昨日も9時間半爆睡だつたが」

「まーーなんてことを言つんですか…！」

「お前が何言に出してんだよ…！」

「あ～なるほどわかったわ……」

?何がわかつたんですか?部隊長

「リムルさんはブリーフィング、トールさんはシンチー……ヒ

はあ!?

「こきなり何言い出すんですか!…」

「いや～、傍から見ると好き好き～って感じの妹と、素直になれ
ない兄、ああ、ホントは好きなのに!この身に流れる血が恨めしい
……ああ、なんで俺はあいつと同じ血が流れているんだ!…
……てな!」

なんだそりゃ……

「んな」と天地がひっくりかえつてもありませんね!…

「ほ～、んじや誰が好きなんや?」

「は?」

「なのはちゃんか?フロイトちゃんか?シグナムか?シャマルか?
スバルか?ティアナか?はたまたキャロか?ヴィータなんか?は!
!…それとも私なんか!?」

なんなんだよ」のトンショーンは、気がつかず周囲もソワソワしている
し…

んなもん決まつてんじゃねえか…

「俺に好きな人はいませんよ…。今は、ね…」

そう、今は、いない…
言葉になんかしたくないのに…
アイツがいなってことを…
死んだつてことを…

きっとこれからもさうなんだから…

俺にとってアイツとの想い出が全てなんだから…そして今も…

「…すこません…午後練までには戻つて来ますので、席、外をせて
貰います…」

「あ、ちよつと一ール君?」

s.i.d eリムル

やつぱりあの方のことをまだ忘れられませんのね…
わかつてはいるのです…。

実の妹である私ではあの方の代わりにはなれない…
ですがそれがどうしたのですか…!
たとえ振り向いてもらえなくともいい…
私は、兄としてではなく…

トール・ショライアとして、お兄様が好きなのですから…

「急にどうしたんやう?」

「つ~ん

「よく見えなかつたけど、ちょっと…辛い顔してたよね…」

「リムルさんはなんか心当たりないか?」

心当たりはある。

といつかそれしかない…。
でも…。

「確かに心当たりといつものさあります。…ですがそれは私の口から話すことはできません…」

「それは、なんでや?」

「すみません…。理由も言えません…」

そう…言つわけにはいかない…

言つたらこの人たちはお兄様を助けようと必死になるだらつ…
それは確かにお兄様にとつていいことなんですけれど…

今はまだお兄様が望んでいない…

まだ、お兄様の戦いは続いているのだから…

巻き込む事をよしとするわけがない。

何せ敵は…

「管理局の闇ともいえる部分ですものね…」

s.i.d.e.ホール

「あれ、旦那奇遇つすね」

「ヴァイスか」

そうだった…

屋上は二つのサボリスペースだったな。

「お前がまさかここでヘリパイロットやつてるとは思わなかつたな」

「おかげさまでね…ところで旦那

「なんだ？」

「ティアナは…どうなんですか？」

「ああ…やっぱりアイツの妹なんだなって」というが何箇所か

射撃の腕は十分だな。あとは実績が付けばなんとくなるだろ。
まあそこが一番のネックなんだが…

「別にそのことを聞きに来たってだけじゃないだろ？」

「まあそのとおりなんですが…」

随分と勿体ぶるな…

「こつになつたら前に進めるんでしょうね、俺達…」

「お前は進めるだろ…妹さん、健在なんだし」

「片方失明しますがね」

「そうだったな…だが生きてさえいれば良いこともあるや。そひ、生きてさえいればの話だが…」

(ほりまたそりやつてすぐ拗ねる~)

(別にこんなもの出来なくとも戦闘に支障なんかないね)

(ダメだよ~。これも手先が器用になる訓練なんだから)

(だからってなんであやとりなんだよ…お前が遊びたいだけだろう
(が)

(ソ、ソンナコトナイヨ~…)

(なら何故田を逸らす…)

(ほり、いじからトールの番だつてば~…)

(あはは、田那もレイミさんには逆らえないっすね。」いや将来尻に敷かれますな)

(黙れヴァイス…)

(……／＼／＼)

(どうした…)

(／＼あ、あはは…何でも…ないよ…／＼)

(将来は姉さん女房つてか! いよつカカア殿ト…・・・つてうおつ…! フリーザランサー展開させるのやめてくださいよ…洒落になつてないっすから!…)

(洒落にする気などない。散れヴァイス…!…)

(あははははは…)

「 もひ、あの田にまだ戻れないんだよ……」

もひ、こんな時間か…
午後練、行かなきやな…

「……あの田から、変わっちゃったよ…。ヘイ!! さんが望んだいじめ、
今あんたじゃなー..。やうでしょ!! へ… 田那…」

第8話 誰が好き？（後書き）

8話終了。

次話はアグスタかなあ……？

第9話 ホテル・アグスタ 前篇（前書き）

アグスタだよ

第9話 ホテル・アグスタ 前篇

sideティアナ

「改めて考えてみるとすこいメンツよね…」

隊長陣はオーバーアランク、副隊長でもニアアランクが勢ぞろい…
フォワード陣は将来性抜群なスバルに10歳にしてBランクを取得
したエリオ、召喚師のキヤロ。

そして…謎は多いが隊長達に劣らずアランクでフェイトさんにも勝
つことのできるトールさん…

「この中で凡人は私だけか…」

でもそんなの関係ない。

私はランスターの射撃が本物なんだって証明しなければならないん
だから…

兄さんのためにも…

sideトール

「それでは皆さん、お兄様がまたご迷惑をお掛けになるかもしだま
せんが、その時はぜひ私を呼んでください」

「ああ、わかったわ」

「…」

勝手に言つてる…

「よかつたん? そのまま帰して」

「別に会おうと思えばいつでも会えますしね」

「それより明日は出動と聞きましたが」

「ああ、ホテル・アグスターでな。大規模なオークションがあるんよ。その中に実はロストロギアが混ざってるんやないかということだな。私は会場警備とロストロギアの搜索、同時にやることとなつてん」

「そうですか…俺はどちらを担当するんです?」

「トールさんには会場の外回りを頼みたいんよ。一日は中で集合やけどな」

「わかりました…」

ロストロギアね…。

それさえあればアーツは助けられたのか…?

ま、そんなもんで助けたら間違いなく怒られるな。

「あ、トール君」

ん? シヤマルさんが医務室以外にいるのは珍しいな。
俺はあまりお世話にならないから特に接点はないんだが…

「あれ、その箱は何ですか?」

「ああ、これは明日のお楽しみよ それよつ…じ…」

? なんで見つめられてるんだ?

「トール君、大分疲れが溜まってるわね?」

「え?」

「うん?」

いつもどおりだと思つんだが…

「トール君、この後まだ仕事ある?」

「いや、今日はもう終わりましたよ…」

実は午後はあまり戦いではなく指導だけだったからあまり動いてないはずなんだけどな…。

「そつか。じゃあこのまま医務室に来てもらおうかな」

「はい?」

ちょ…意外に引っ張る力が強い…
ま、たまには行ってみるか…

side シャマル

ふうん、トール君つて手、大きいんだな～

とつあえず医務室に連行連行～

「～」

「楽しそうですね…」

「はい、到着ですよ～
さて、まずは…」

「じゃ、上着脱いでうつ伏せになつてください～ね～」

「え、脱ぐんですか?」

「ええ、このシャマル先生直々にマッサージしちゃうますよ～

「はあ…」

「じゃあ始めるわね

やつぱり全身の筋肉が固まつてゐるわね…
あれだけの動きを生身でやれば当然なのだけど…
さて、ほぐしますか!

「えいーーー！」

グキ

「んがつーーー痛たたーーー！」

「やあーーー！」

ベキ

「ちよつ！？今なんかすゞい音したんですけど？」

「大丈夫 マッサージマッサージ」

「これだけ無茶する人にはお仕置きですよ
もうなのはちゃんとみたいなことは起したくないから…」

「たあ…！」

「バキー！」

「あたたたた…！絶対今のはまづい音ですって…！」

「…」

sideトール

いきなり上脱げって言われてもな…
いや、なんか緊張するんだが…

べ、別にシャマルさんに對してそういう感情を持つてるわけじゃないんだけど
なんていうかやっぱり大人の女性つて感じだからかな…

「じゃあ始めるわね」

「うわ…なんかひやつとするな…

柔らかい手が背中と右肘に触れて…て

グキ

「んが！痛たた！」

い、今確實にヤバい方に曲がった気がするんだけど大丈夫か？

ベキ

こ、これは…

バキ

す、すげえ痛い…

でもなんか楽になつてきた感じも…

「は～い、おしまい」

「不思議だ…」

最初は痛みしかなかつたはずなのに…

「トール君は体を酷使しそぎなのよ。それで全身がガチガチだったのをほぐしたわけ」

「は、はあ…」

そうだつたのか…

「だからこれからも定期的に医務室に来ること…」

「へ？」

「ここですね？」

「あ、あの……」

「い・い・で・す・ね?」

「は、はい……」

なんだか……シャマルさんからすこい殺氣が……

「……それで、トール君の衣装の準備もしなことなーつと……」

「どうかしました?」

「ううん、なんでもないよ」

翌日

「じゅじゅーん……どうやら私たちのドレス姿はー。」

「なんかヒラヒラしてて動きにくいく……」

「あ、あはは……」

なるほど、シャマルさんが用意していたのはそれだったのか
それで……

「なぜ俺はこの服装なんだ?」

「ふふーん、なんたつてオーケシヨンやからね」

まあ確かにタキシードの方がそれっぽいけどな。

《馬子にも衣装、ですね》

「……」

「あ、そりゃもうたぶんそう言つだらうな。」

「さて、俺はもう外に出ますね。新人達のことも心配ですが、これだけ広いと自分の範囲だけで手いつぱいだ」

「ん、そうやな。しつかり頼むで」

「ええ」

「さて、まずは南からだな……」

s i d e ? ? ?

「何故私がこのような所に来なければならぬのだ……」

スカリエッティの頼みごとは私は断つたが、

お嬢は引き受けた。

「なので仕方なく来たのだが……」

「やはり浮いてしまうな……」

「この恰好で潜入は無理か。」

ならば混乱に乗じて押し入るしかないか……。

準備も整つたようだし、少し近づいて待つとしよう……

sideツール

「まつ……」

もうガジェットが来ているのか。

スバル達は大丈夫か？

それにも…

「こいつら、自動じゃないな…」

そう、明確に回避の意思を見せている。
機械の自動操縦ではありえない軌道。

それは…

「術師がどこにいるのか…」

ならば捜すしかないな…

「シグナムさん」

「どうした？」

「少し、外しますがここをお願いしても大丈夫ですか？」

「ああ、だがどうするのだ？」

「元を断つてきます」

そう、ここが一番戦闘が激しい。

ならばここに延長線上に術師はいるはず…

s i d e ? ? ?

「もう少しか…」

入口付近の部隊が思いのほか警備が厳重のようだ。
突破は難しいな。

「…む」

何者かがお嬢に近づいているな
しかも雑魚ではない。

ガジュットでは足止めにもならんだろうな

ならば…

「止まつてもらおうか」

s.i.d.e.トール

「止まつてもらおうか」

ガジュットの数が減つたと思つたらやけにガタイのこおつさんが
出てきた。

「局の人間じゃなさそつだな」

「…」

だんまり、か

その槍を見る限りやる氣十分つて感じだが…

「あんたが何者だか知らないが、邪魔をするなら力ずくで押し通る

ぞ」

「…」

まずいな、こいつ…オーバーSランク級だ

本気でいかないと…死ぬ！！

「いくぞ！！」

第9話 ホテル・アグスタ 前篇（後書き）

第9話終了

ヒロインどうしようかな

第10話 ホテル・アグスタ 後篇（前書き）

アグスタ後篇！！

え、ちゃんと原作キャラからヒロイン出すよ？
ほ、ホントだよ？

第10話 ホテル・アグスタ 後篇

sideティアナ

あ、あああ……

私は今……何をしていたの？

新しいシフトなのに……どうして今……

「何やつてんだおめえら……！」

「あ、あの……今のは新しいシフトの」

スバルの声が震える……

無理もない……今のは間違いなく……

「直撃コースだよ、このバカ共！……」

スバルに間違いなく直撃してた……。

ヴィータ副隊長が防いでくれたおかげで大事には至ってない。
けど……

「もういい……あとはあたしがやるからひつこんでろ……！」

……何も言い返せない……。

……私は……どうして……。

sideトルル

「……」

チツ――！

「ランク制限のせいとは言いたくないが、いや、ランクなんか関係ないか。間違いなく格上だよ……」

「一回切り結ぶ」と俺の傷は増えていき、相手は申し訳程度にしかついていない……

シャマルさんのマッサージのおかげで随分体が軽くなつたんだが……

キン！

「こいつの槍術……間違いなく正規の訓練を受けてきた奴のものだ……こんな奴が……どうして……」

「悲しいな……お前の剣は……」

「何？」

「俺の剣が……悲しい？」

「少なくとも……管理局の者がこんな剣を振るひなど……私は悲しい……」

「……！」

「……どんな事情によるもののかは知らん。だが……」

「知った風な口を……！」

「聞いてんじゃねえー！」

「確かにお前の剣には重みがある。間違いなく一流のソレだろつ

「……」

避けられた……？

後ろか……！

「だが、曇りのあるうちは私には届かん……！」
「くつ……！」

さらに重くなってきた……！！

「……今のを避けるか……大したものだ……」
「……はあ……はあ……」

かなり危なかつた……

今まで首を切り落とされてもおかしくなかつたぞ……
ここまで実力差があるなんて……でも……

「……！」んなとこで負けられない……！」

俺にはまだ、やることがあるから……！
あんたの言つ曇りが何なのかなんて自分が一番わかってる……

アイツの性格なら……そんなことを望んでない……ってのもな
……俺の生き方はそれしかなかつたんだよ……
戦うことしかな……

でも……戦う以外の生き方もあるんだって……

それを気付かせてくれたのは……

(トール…)

(…終わつたよ…)

(また…仕事、だつたの…?)

(……ああ…)

(ねえトール…辛いならこいつでも呑ひし?)

(大丈夫、大丈夫だから…)

(嘘よ!…だつたらギリして泣きそうなのよ…)

(……レイミ…)

(辛いんなら辛いつて言ひしよ…もつじんなこと…!!殺しなんかしたくないつて言ひしよ…)

(それは…)

(トールにはそんな悲しい顔…してほしくないよ…。ね?もうやめよつへティーダさんのことがあつてから…トール…無茶しそぎなんだよ…)

(……わかつたよ…)

(よかつた…)

(…なんでレイミには時折泣くなくなるのかな…)

(ふふふ…だつて年上なんだもん たまにはお姉さんをかいてほしいよ…)

(こつもはゞこか頼りないのにな…)

(なにお~…)

(はははは…)

(ふふふふ…好きよ、トール…)

「戦死したはずの英雄が、何故ここに……!?」
「私もまた、やることがある、ということだ……もしかしたら、目的

レイミなんだ……

それを……あいつらは……！
だから、止めるわけにはいかないんだよ……！

「ぐ……！」

血を流しすぎた……！

「……もう間に合わん、か……」

「……？」

攻撃を、止めた……？

今なら俺を倒すチャンスなのに？

「……何、もうこれ以上ここで戦う意味がない、といふことだ」

確かに、ホテルから戦闘の音がしなくなつた……。

「……名を、聞いておこうか……」

「……トール・シュライトだ……あんたは？」

「ゼスト・グランガイツ」

な……ゼスト・グランガイツだと……！？

は同じかもしれんぞ……」

「まさか……」

「そりばだ、次は疊りない貴様と戦つてみたいものだ……」

見逃された……？

『マスター……今すぐ止血を……』

「ああ……すまないな……」

sideフHイト

「トールさんがまだ戻っていない？」

「うん、一応ティアナのことはなのはちやんに任せであるし、オークションの方は私がなんとかしくから、ちょっと探しにきてくれんか？」

「うん、わかった……」

確かトールさんはホテルの周辺警戒だったよね。
外はもっと激しい戦闘があつたはずだし、通信も繋がらない……。

「あら、フHイトちやん？」

「シャマルさん、トールさんを見てませんか?」
「今私も探ししているのよ。シグナムに南側を任せてどこかに行つた
らしいんだけど……」

なら、もつと遠くに……?

ん……?あれは……!!

「ただいま、戻りました……」

「トールさん!??

「IJの怪我はいつたいどうしたんですか!??」

トールさんがこれほど傷つけられるなんて……

「大丈夫、これくらい……」

「そんなわけないでしょー? シャマルさん治療を……」

「ええ、わかつているわ、最優先で運ぶわよ……!!」

トールさん、あなたは一体、誰と戦ったの?
それに、どうしてそんな悲しい顔をしているの?

「ふふふ…もう少しだよ…」

ああ、早くこれを彼に見せてあげたいなあ…
彼はきっと喜んでくれるんだろうなあ…

「あ～らドクター。随分彼に『執心なんですねえ』

「それはもちろんだよクアットロ。何せ彼は…」

「冷装の断罪人…でしたっけ？大層な二つ名ですよねえ…」

「まあ、こんなのは上層部しか呼んでいないのだがね。奴らが、仕

事、を依頼するときはその二つ名でしか呼んでいないからね…」

「ま、その冷装の断罪人も、仕事、はここ5年くらいしていないよ
うですけど…」

「これを見れば彼も私たちに協力してくれるはずさ、まあ、最悪、
彼女、に力づくでなんとかしてもらうが、ね。さしづめ私は引き裂
かれた二人を再び繋げるキューピッド、といったところかな…」

「ふふふ…ドクター、鬼畜なキューピッドもいたものですねえ…」

「なに、君にはその鬼畜の細胞が入っているんだ、君も立派な鬼畜
だよ」

「ふふふ…」

「はははは…」

ああ、ほんとうに楽しみだなあ…

第10話 ホテル・アグスタ 後篇（後書き）

10話終了！！

誰この鬼畜

第1-1話 思い（前書き）

「お話、です」

第11話 思い

sideトール

「...」は...

「医務室よ」

ああ、そういうや戦つて負けたんだつけ

あの、ゼスト・グランガイツに

公式では死んだとされている人が何故あの人生きているのか?
そして何故管理局に敵対しているのかはわからない
けれど...

「俺はどうくらい寝てたんですか?シャマルさん」

「ん~、ざつと3時間くらいかな。もう夜中よ」

「そうですか...撤収作業とか手伝えなくてすみません」

「まあ、私たちも撤収作業どころじゃなかつたけどね...」

?何かあつたんだろうか

「あの、何かあつたんですか?」

「ええ、実は...」

なるほど。

「ティアナの失敗、ですか...」

スバルに対する誤射。

これが後を引かなきやいいんだが…

sideティアナ

今回は本当に危なかつた…
もしもあのまま命中していたら

私は…また大切なものを失うところだった…。
もう、こんなことが一度とあってはいけない。
だからこそ、凡人な私は時間を使っていかなくては…

「はあ…はあ…」

まだまだもう一本!!

sideトール

とりあえず怪我の方はシャマルさんが治療してくれたのと、
比較的後を引かないような傷であったので、
3日間安静にしていればすぐに訓練は再開できそうだ。

俺はシャマルさんにお礼を言つて
寮の自室に戻ることにしたんだが…

「…」んなとこで何やつてるんだヴァイス?」

「あ、旦那…実は…」

「…あれば…ティアナか?…」こんな時間まで何を…」

任務直後に訓練なんて詰め込んでいるとしか思えないんだが…
実際俺も一時期無茶やつてレイミに散々泣きつかれたもんだ。
… アイツの泣き顔はホントにこたえるんだよ…。

「さつきもスバルが止めに来たようなんだが聞く耳もたなくて…どうすりやいいんでしょう?」
「…俺個人からすれば今すぐにでも止めたいんだが…。このまま止めてもまた再開するだらうな」

俺もそりだつたし。

まあ俺の場合は訓練内容に問題があつた氣もするが。

「今のところは様子見するしかないな…ホントにまずいと思つたら実力で止めるが」「そうするしかないっすかね…」「何、心配症のヴァイス君が見ててくれるから安心だな」「旦那、無表情だから感情籠つてゐるよつに見えませんよ」

… そうだな…。

「のままではいけないのは俺も同じ、か…。」

数日後

結局あの後もティアナの訓練は続き、更にスバルも加わっていると
いふんだけど

俺の方は怪我も治り、今日から訓練再開といったところなんだが…

「どうしてこうなった…」

何故俺の前にはやる気MAXのシグナムさんがいるんでしょう?
俺、怪我から回復したばかりなのに医務室に逆戻りですか?

「ふふふ…」の時をずっと楽しみにしていたのだ!」

あの…だから俺初日からこんな無茶したくないんだって
いや、もう言うだけ無駄か…。

「言つておきますけど病み上がりなんですからあまり期待しないで
くださいよ？」

「というか無茶させるな」

「ふふふ…分かつていろた…」

あの、確実に分かつてませんね。
フェイントかへん、助けてください。

「あ、あはは…楽しみすぎてもう私の話も聞く気ないよ…トールさ
ん、頑張つて…」

「…まあ…」

無理ですかそうですか。

シャマルさん、またあなたの仕事場へ行きそつです…。

「ああ、いくぞ…！」

「つてこんな冗談考えてる場合じゃないか！フリーブライト…！」

無詠唱でフローズン・ダガーを展開し、シグナムさんに向けて発射
する。

「なー？」

シグナムさんは炎を纏ったレヴァンティンで斬り払う。
不意打ちにはちょうどいいかと思つたんだが…

「今のは驚いたぞ…。まさか詠唱なしでこれほどの魔法を使うとは」

「まあ、師がよかつたですから」

もともと無詠唱スキルはレイミから教わつたものだ。
しかもあいつは連発可能だつたしな。

今の俺では一発使つたら若干時間を置かなきゃならない。

「はつ！…」
「ふつ！…」

シグナムさんの炎に対抗するため、俺は氷を纏つたフリーズライト
で攻撃する。

力キ力キ力キ！…

つばぜり合いになるが接近戦のプロフェッショナルであるシグナム
さんにはどうしても勝てない。

ゆえに

「フリーズ・ランサー…ゼロ…」

ゼロ距離でフリーアランサーを発射し、距離をとる。

追尾型にしてあるのでそりゃ簡単には…

ガシャアアアアアアーー！

「…マジですか」

「ふふふ、なかなかやるが、この勝負、勝たせて貰ひついで…」

ツチーーーーの距離からアレ、間に合ひつか…？

sideティアナ

今日はスバルと二人でなのはさんとの模擬戦だ。
深夜に練習したスバルとの新しいシフト…。
果たしてなのはさんに通用するかどうか…。

「ウイング・ロード…！」

スバルがウイングロードを展開し、レーン上を滑りながらなのはさん
に接近する。

そう、ここまでは通常通り…。

大事なのはここから…。

side フェイト

トルさんとシグナムの模擬戦も気になるところだけれど、私はティアナとスバルのことがどうしても気にかかった。それは…

「ティアナの奴、いつもに比べて射撃のキレが悪いな…」

最近、ティアナがおかしい。なのはから訓練のことを聞かされるが、あまり向上していない、とのことで相談を受けたのだ。

「…あれは…」

ウイングロード上を走るティアナの姿。

通常であればあれは凶で本物はどこかに隠れて射撃、なんだけど…

「……!？」

影に隠れていた方が幻影？
じゃああれは…。

「幻影じゃない…本物！？」「

無茶だ！！

こんな危険なこと、なのはは絶対教えない。
ならこれはティアナが考えたことになる。

それは…

「てやあああああああ…！」

「…レイジングハート、モード…リワース…」

ティアナのダガーとスバルのナックルを同時に受け止める…
なのはの手から血が…

「…おかしいな…二人とも…どうしちゃったのかな…」

「あ…、う…」

「練習のときだけ聞いてるフリで本番でこんな無茶してたら…、練
習の意味…ないよね…」

…私は…動けない…。

あの時のはのことを、思い出していたから…。
なのはの思いを、知っているから…。

間違いなくなのはさん怒つてゐる。

でも…私は…私は…!!

「私は…！…もひ…失いたくないから…！…だから…！…強くなりたいんです…！」

なのはさんにクロスマリージュを構える。

その瞬間…

「…ひょつと…頭冷やしつか…」

なのはさんの無機質な声が…聞こえた…。

「うわあああああー…ファンタムブレ…！」

そこから何をしたのか、どうなったのかは憶えていない…。

「…シユート…」

私は……間違っていたのだろうか……。

sideトール

「……ここまでだな」

「……仕方あるまい」

隣があんな状況じゃ、これ以上は続けられないと判断したので、今日の模擬戦は中断となつた。

だがあの時、恐らく俺の魔法は間に合つてはいなかつたと思つ……。
それについても……あそこまでするべきはあつたのか?
周りが止めなかつたのは何故なのか……?

「……」で考えててもしょうがないな。

「……」が教導官としての正念場、つとつたところかな……

……アッシュも俺の指導はこんな感じだったっけな……?

(も～、ちゃんと聞いてよ～)

(はいはい聞いてますよ～レイ＝せんせ～)

(まったくバカにして…！…)

(そんなことないですよ～… 何もないところでも転げるスキルとか見

習いたいです)

(…ふ～んだ。そんなこと聞くメールは今日の晩御飯は抜きです！…)

(え、ちょ… それは勘弁してくれって…！…)

(知りませんよ～だ)

(いや、ホント「めんなさい…」許してくださ～…)

(…じゃあレイ＝お姉さま好きです愛します、つて10回言つたら
許してあげる)

(え…、ちょ…)

(ゆうひい…！…ホールのばか～～…！…)

(おじ待てよ…！…)

そななことなかつたな。うん。

ま、指導は人それぞれ、その人の思つてやつがあるし。

なのはせんにはどうこう思つてあるんだろうな…

第1-1話 思い（後書き）

1-1話終了！

レイミサドジヒトおねえさん

第12話 大切なこと（前書き）

第12話

トル君意外と…な回

第1-2話 大切な「J」と

s.i.d.eティアナ

「ん…」

「J」は…医務室か…
確か私は模擬戦をしててなのはさんに…

「もう夜か…」

私は…どうして負けてしまったのか…
なのはさんはいつもあんなに怒っていたのか…

わからない

強くなることがいけないことなの?

ジリリリリリリリリリリ…！

「J」Jは…警戒態勢?」

ともかく…行かないと…。

「こんな夜中に出動とはな
まあ、隊長陣がいればなんとかなるだろ

「ティアナは待機メンバーから外れておいつか」

「だな。この状況で出動をせむわけにはいかない。

「…命令に従えないやつはいらなくつことですか…！」

「…自分で言つて氣付かない？当たり前のことだよ？それ

…やつじやないだろ。あなたが言つたりとは…

正論ではあるんだけぢや…。

これじゃあすます…

「強くなれる」とが…そんなにこなすことなんですかー…？」

「…」

反感を買つだけだ。

「…なのせわと…つべー。」

ま、殴られるのはしょうがないが、悪役を置つて出すべきなんじやないか？シグナムさん…。

「シグナム…何もそこまでしなくても…」

「…いつたガキは放つておくからつけあがる」

…たく、そろいも揃つて不器用だな。

…人のこと言えないが。

「…行くぞ」

「…うん」

とつあえずティアナのことは後回しだ。

乗り込む前、スバルがシグナムさんに何か言ってたようだが、ヘリの音でまったく聞き取れなかつた。

sideなのは

…どうしてうまくいかないのかな
…私がみんなの為を思つて教導していること。
どうしてティアナは分かつてくれないんだら…

…今回のことに関してはフロイトおやんや皆は私のやねんことをひとつ

かつとわかつてこぬと黙り。

…アハニエゼ…トールセニサ?

…トールセニエリの」とに聞してヒツガセヒコルんだハ!

私は思ひ切つてトールさんの横に座り、聞いてある」と云つた。

s-te-toe-TOOL

「.....」

…く空氣が重い…

そりやせうだよな。

あんなことがあつてただでやんばが立つてゐるのに…

(だ、誰か助けてくれ…)

((((アメン、無理))))

一蹴ー? フハイドせんすう! 駄答かよ?

…頼むから」の間に眩まぶしくそのまま戦闘になるのだけは勘弁してほし…

「…トールさん…」

「…どうした?」

…まあ、俺の横に座るヒーリングは俺の意見を聞いてみたいヒーリングだひつな…

「私は…間違っていたのかな…?」

「フォワード陣の教導を、か?」

…おこおこなのはやんよ…

「指導者たるもの…一度上手くいかなかつたからとこつてすぐに間違いかどうかを考えるのはどうかと思つた」

「でも…」

「それに…俺自身もなのはやんの教導は間違つてない」と思つた…

「それなら…どうしてティアナは…」

「そうだな…」

あ～あ、自分と周りがエース級だから、そう感じてしまつるのはわかるけどよ…

「自分がわかつていろからとこつて、相手もわかつては限らないな」

「…」

「なのはなせとは出来る。けど周りはやつじやなこやつもタニ」

「確かにティアナは次世代のヒースとしての資質は十分だ。だから部隊長は機動六課のフォワード陣にスカウトしたのだ」

「だが、奴はまだまだ自分の足では立てん。その為の教導なんじやないか、と思うがな」

「それは…」

「何、自分がどういふ思いで教導をしているか…話しえてみるとじだ。眞の師弟関係はそこからではないかな」

ま、俺とレイミみたいに特殊な師弟関係は例外として…な。

「…そだね…よくよく考えればティアナとちやんと向かい合つてこなかつたのもしれない。…戻つた らちやんとお話をしてみると」

「…根は素直なんだ。言えばちやんとわかつてくれるはずだ」

…ふつ、どうにか重い空氣はなくなつた…かな…。

…あの…何ですか皆わざ、その暖かい田中…

s.i.d.eなのは

「そうだね…トールさんの『いつ』とおりだよ。自分の気持ちがどうなのか、相手に『いやん』と伝えなきや、だね。

それについてもトールさんに相談してよかつた…

普段あまり表情に変化がないから何を考えているのかわからぬけれど…

「トールさん…私たちの『い』と、ちゃんと答えてくれてるんだね」

「あ～……まあ、な……」

あれ? もしかして照れてる?

年上の男の人に対すること考えるのは失礼かもしれないけど…。

「トールさんって…意外とかわい~とあるんだね」

「やうだね…」

「やっぱり『トイちゃん』も『いつ』と『い』…?」

「…お、お前らなあ…」

「「アハハハハ!」」

あ~笑つたらなんかすつきりした
さ、全力でいこうー!!

sideトール

「うわあ…」

ガジェットさん」愁傷さまです。

俺の出番なし。

だってなのはさんによるバスター無双なんだもの。

フュイトさも俺の横で口開けてボカ～ンとしてるよ。…

「あ、あはは…とにかくなのはの機嫌が治って良かつたよ…」

「俺等…不要だつたな」

「ソ、ソンナコトナイトオモウ……!!?」

「うん、無理しなくていいから」

れ、撤収撤収

sideティアナ

「や、そんな……」

なのはさんが撃墜？

見せられたのは8年前の映像。

そこに映っていたのはまだ10歳前後でカートリッジシステムやエクセリオンモードなどを駆使して戦っていたなのはさんだった。

しかし他者の為に自らの身を省みずに戦い続けた結果……。

「ああ……なのはは突如現れたアンノウンにより撃墜。周りにいた魔道師にも多数の死傷者が出た」

「あたしが……気付いてやればこんなことにはならなかつたんだ……」

「医者にも言われたんだ。もう一度と飛べないかもしれないって」

「あいつは私たちの前では笑っていたけど……誰もいないところでずっと泣いてた」

そんな……それじゃあなたのなのはさんは……

「……確かに戦いである以上、無茶といつものも存在する。……だが、あの時、あの状況で……お前は無茶をする必要があったのか？」

……あ……あああ

……バカだ……私……勝手に決め付けて……

なのはやんの気持ちを考えないで…

…本当に…バカだ…

side-Aール

「「あんなさい…」「あんなさい…」」

「うん…ティアナの気持ち…聞けてよかつたよ。ま、私は単に無茶すると危ないんだよ、ってことなんだけどさ」

うーん、万事解決…でいいのかな。

「うんうん、よかつたよかつた」

「ホンマやな。これが美しい師弟恋、つてヤシッや」

…なんで俺までこんなことやらせられてるんだろうな…
そりとしどこへやらつて呪つたの…」

「部隊…とりあえず俺は戻りますね…」

俺のやるべや！」とほめ終わつたしな。

「あ、ちよつと待つかー」

「……なんでショウカ?」

「ありがとうな。おかげでなのはけやんもティアナも救われたわ」

「……まつたく……」の人は…

「……もうですね…」

そんな眩しい笑顔で言われたら…まつすぐ見れないじゃないか…

「あれ~? もしかして照れてるんか? 意外にかわいい感じあるんやな~」

「でしょでしょ?」

「あ~! …もう無視だ無視!!」

…動作…異常ナシ…

正常一起動開始シタコトヲ確認…

…ツール？…

不可思議ナ単語が…残つテイる…
コレは…？

A・I・に異常…アリ…

ワタシハ…
ナンバーズ…
コードネーム…レイン…

第1・2話 大切なこと（後書き）

1・2話終了ーー！

もうじうじう展開がバレバレな気がしてきた…が、あえてやるーー。

第1-3話 出張 前篇（前書き）

地球編

第1-3話 出張 前篇

sideトール

「出張任務？」

「やつや」

出張か…久しぶりだな…

「メンバーは誰が行くんです？」

「そうやなあ…スター・ズとライトーンング全員と、私とシャマルや」

「あの…それって…前線部隊全員じゃないですか」

「やつやな」

そりやな…つてそんなあつけらかんと…

「…大丈夫なんですか？」

「留守はグリフィス君に任せてあるから大丈夫や」

「あの…私だけでも残つた方が…」

「ダ・メ・や」

「…何で？」

「何でも。とにかく一緒に来る」と一ノ瀬は部隊長命令や
「はあ…」

しうがないな…なんか有無を言わさない感じだし…

s.i.d.eはやて

「ふう…つましくったわ」

トール君の過去の勤務見てみたけど私たちに負けず劣らずの働きっぷりやねん。

おかげで有給溜まりまくりでな。

そろそろ監査に引っ掛かりそうなんよ。
ぐだりん」とレジアス中将に付け入る隙をとらえてくないんや。

「ま、それも建前やねんけどな 」

この出張でトール君のプライベートを丸裸や
それにしても…久しぶりの里帰りやなあ…

s.i.d.eトール

「え？ 何がうなつた…」

俺の目の前には何故か任務とは程遠い恰好をしたフォワード陣。そして俺も普段の制服とは違い、ラフな格好をしている。

それといつのも…

昨日

「トールさん…」

「おひ、どうしたエリオ」

エリオが俺の部屋を尋ねに来るのはそう珍しいことではない。

以前模擬戦を実施して以来、時折夜に俺の部屋を訪ねてきては槍術について質問しに来たりしている。

まあ俺もそれほど詳しくはないので回答出来ることと出来ないことがあるわけだが…

「あの…明日の任務のことなんですが…」

「ん…?」

明日の任務？

「明日は有給扱いだそうなので服装はラフな格好でいいそうですっ

てはやでせんが

「…」

有給扱い？

任務だろ？

「どうこう」とだ…？」

「僕もなんとかはわからなーいんですけど、その時のはやでせん…ちよ
つと意地悪な顔してました」

「…」

何企んでるんだか…

…といったわけで指示通りに私服で来たわけだが…

「よーし、これで全員集まつたな」

「はーい」

「あの…今日の出張場所は…？」

「ああ…まだゆうてへんかつたな。今日の出張場所は…第97管理
外世界『地球』や」

「地球？」

「さう…文化レベルB、魔法文化なし…基本情報はそんな感じや
な」

地球つてたしか…部隊長やなのはさんが住んでたところじゅなかつたか?

…なるほど…だから有給扱いなのね…

…にしても魔法文化なしの世界からオーバーSランカーが3人も…ね。

どんな世界だよ。

「なるほど…なのはさん達の有給消化が目的か」

「ま、それも半分あるけど…トール君も有給消化してもらわなあかんのよ」

「…あれ?」

「…あれ?」

…そういえば…ここ数年…有給使つてなかつたか。
ま、使う理由がなかつたんだが…。

「さ、とりあえず出発や!」

管理外世界の割に…ゲートとも繋がってるんだな…。

地球

「…」

「こ」が地球か…

「と」「るで…これからどうするんですか？」
「まずは現地の協力者と接触してからやな」

現地協力者…ねえ…大方昔の友人ってところかな。

「あれ？ 車だ…」

「一応文化レベルBだから車も飛行機もあるで」

車からは金髪と蒼い髪の女性が降りてきた。

…だいたいなのはさん達と同い年くらいかな

「なのは…！」

「アリサちゃん…！ すずかちゃんも久しぶり…！」

「まったく、忙しいからってたまには戻つてきなさいよねー…」

久しぶりの再会ってやつか。
邪魔しないようにしようかな…

「それで今日は」の海鳴に飛び回つてこるロストロゴニアを探すため、

サーチャーを町中に仕掛けてほしinよ」

「「「「「了解」」」

さて、任務開始だな。

s.i.d.eなのは

「と「るでなのは… わつもその男の人は?」

「ん?トール君の」と?..

「ひつしたんだらアリサちゃん?

「いやあ…なのはにもつに春が来たのかなあってねー!」
「なーーーーー?」

い、いきなり何言い出すの!?
た、確かにティアナとのことで感謝はしているけど…

「ち、違つてしまーー！」

「ありや～違つの～じやあフロイトへ。」

「ふーー。」

え、 そうなのフロイトちゃん？

「な、 なんでそんな話になるのーー。」

「えーだつて私たちもう一ヶ月の恋愛の一つくらいあつたつておかしくないでしょ？」

うー、 仕事ばかりだつたからなんだと考へた」となかつたよーでも…トール君…かあ…

あまり表情が変わらないことじゅうがちよつとつましくいかな?と思つたんだけど…。

確かに顔も悪いつむわけじゃないし…私たちのこと…真剣に考えてくれてるし…

あ、あれ?…否定する要素がないよーと、とりあえず忘れよーーうふーー！

「じ、とにかく、先に翠屋に行つてゐるかいーー。」

「あー逃げたーー！」

…あー！変な汗かいちゃつたよ…

とつあえずもう行こーー…お父さんたちに会つのも久しぶりだなーお兄ちゃんは海外に行つてゐるから会えないけど…残念だな…

sideトール

「う〜〜お腹減ったよ〜〜！」

「うつさいバカスバル！！」

腹減るの早すぎだろ…？

「す、すいませんトールさん！このバカが…」
「いや、大体設置し終わつたしどこかで休むか？」

とりあえずあの…喫茶店でいいか？

『翠屋』ね…

カラソカラーン

「いらっしゃいませ〜！」

バタン

「あ、あの〜トールさん？」

ん~、あれ、気のせいかな…?

なんかなのはさんっぽい人がウェイトレスやってたんだが…

「も、もートール君…! 恥ずかしいから入つてよ…」

あ、やっぱり本人でしたか

「「「「え、ええええええええ…?」」」

お前らひねれー。

sideなのは

あ、あはは…懐かしくって久々に着てみたんだけど…
トール君に見られると何か恥ずかしくなつてきちゃつた…
まったく…アリサちゃんが変なこと言つから…!

「それじゃあお一人がなのはさんの『両親なんですか?』
「ええ」

「嘘…？若…？」

「うーん、確かに」一〇年位前からあまり変化がなこといつな気がするよ…

「ヒカル君…トール君…だったね…」…？

「は、はあ…」

あの…お父さん?
なんか怖いよ…?

「うひのなのはせとせびひこつた関係なのかな…！」…？

「なつ…！」…？

お父さん…？いきなり何言って出すの…？

「…職場の同僚ですが…」

「…それは本当か…？」

「え、ええ…」

「「ひのなのはせとせびひを出したりせひつかなむか…わかってるね…？」
「は、はあ…」

…な、ななな何言つてゐるお父さん…！
だからそつこつた関係じゃないんだつて…！

「あ～ら土郎さん。そろそろ親バカも卒業したぢ？」
「む、大事な娘を知らない男なんかにやれるか！…！」

も～、お父さんのバカ…！

「…どうあえず俺たちはもう行くから…また後でな…」
「うん…」めんねトール君

「…ふり…行つたか…」
「お父さん？どうこいつもりなの？」
「ん？まあ僕なりのテストつてやつかな？」

だ、だからトール君とはもうこつた関係じやないつて…

「とひりでなのは
「何？お父さん…」

體に近づいたのへやつては変わって真剣だけだ

「彼は…本当に管理局の魔道師なのか…？」
「え？」

「うう…」

「いや…彼からぬ血の匂いがしたからね…」
「血…戦つんれば血ぐらこ着くんじゃ…」

お父さんがそうこう血の匂いに敏感なのは知ってるけど…

「やうこひじじやないんだ…いふなれば…僕や恭也に近づくと
ころかな…」
「え…！」

それって…お父さんやお兄ちやんと回じよひな」とをしてるってこと…?
それってつまり…

「うそ…彼は恐い…」

嘘でしょ？

そんな…トール君が…

「人を殺したことが…あるんじゃないかな…？」

…そんな…事…

第1-3話 出張 前篇（後書き）

第1-3話終了！

後篇はまた明日の予定

第1-4話 出張 後篇（前書き）

祝！！お気に入り50件突破！！

第14話 出張 後篇

side-トル

「…なあ…」

「なんですか？」

「なんでお前がここにいる？」

「それはもちろん、お呼ばれしたからに決まってるじゃありませんかお兄様」

…誰だよりムル呼んだの…って考えるまでもないか…

「部隊長…何考えてるんですか？」

「ん~?面白そやつたから呼んだ。反省はしない

「…」

もうこ…考えるのやめ。

「それで…サーチャー仕掛け終わりましたがこの後はどうあることですか？」

「ん?この後は…と来た来た」

もう一台車が…

「お姉ちゃん、参上！」

「あ、これからはバーべキュータイムや！」

…ここまでくるとただの旅行だな

「あ、シャマルは料理禁止な」

「ちょっとそれはどういう意味ですか？」

「言葉どおりだ」

「せつかくのバーべキューを毒物にされたくねーんだよ」

「ちょ、ヴィータもシグナムもひどい！ちょっと材料切るだけじゃないの…」

あ、シャマルさん料理出来ないんだ…

意外…ってわけでもないか…

レイミもそうだったしな…

つていうかアレは料理という名の殺人兵器だな。

「…なのは?」

「…あ、どうしたのフロイトちゃん」

わつきから元気がないな…。

「どうしたの…？料理、美味しいくない？」

「う、ううん！そんなことないよ…。これ…トールさんが作ったんだよね？」

「うん…」

私もびっくりした…。

トールさんがこんなに料理上手だつたなんて…。

トールさんに聞いたら「必要に駆られて作れるようになつただけ…」
なんて言つてたけど…

「まつたく…どうしてお兄様は女のプライドをズタズタにしてくれるんですの？」

「リムルさんはどうなんですか？」

「…まあ私も一人暮らしですから、最低限の物は作れます…これほどの物は作れませんわ…」

…まあまあ謎だよ…

「…リムルさん…」

「…何でしょうか…?」

…なのは?

「…トールさんは…一体何者なんですか?」

「…何者…とは?」

…どうしたんだら?…そんなことをリムルさんに聞くなんて…

「…トールさんは…私たちを見ていて…時折悲しい顔をするんですね…。はじめは気のせいかな?とは思つたんですが…。私と、ティアナが仕事のことや訓練のことで上手くいかなくなつたとき…あまり表面には出なかつたんですが…トールさん…間違いなく…悲しい顔を、したんです…」

「…」

…たしかに…一番悲しそうな顔をしていたのは…なのはがティアナを、撃墜、したときだ…。

「…初めは…怖い人かな?とも思つたんですけど…私たちのことを真剣に考えてくれて…。結果的にティアナと仲直りすることができたんです。それからはティアナの成長も著しくって…。でも…それはトールさんが本当に私たちのことを考えててくれていたからで…」

うん。それは間違いない。

「…でも…父から…聞いたんですね…。あ、私の父は…実はちょっとこの世界では裏稼業のよつなことをやつてるんですが…。トールさんから…血の匂いがするって…」

「……っ…！」

それって…トールさんは…

「だから…教えてください…トールさんは…一体…何者なんですか…?」

…なのは…。

「…大変申し上げにくいのですが…。私から答えるわけにはいきません…」

「…そんな…どうして…?」

「…あなたとティアナさんのことは…お兄様なりに真剣にお考えに

なつた、といつのは間違いではありますか……

「ですから……皆さんは……お兄様を……信じていただきたいのです……」

「……トルさんを……信じる？」

「確かに……お兄様には……人には言いたくない……過去があります……私も……ソレを知っていますから……」

「……」

「……ですが……お兄様は……時が来たら……皆さんに言ひ言つと思つています。……ですが……それは……少し待つていただきたいのです」

「……うん。わかったよ……私……待つてみる……！」

「……はあ……、それにしても……お兄様ったら……エースオブエースを落とすなんて……無表情なくせしてとんだプレイボーイだったのですね」

「……な……？」

「……え！？」

「……そこのの……？なのは……」

「ち、ちちちちちち違うっててば！？！」

「あり？否[定]する割には顔が真っ赤ですわよ

……随分楽しそうですね……リムルさん……！」

「…そ、そうだったんだ…なのほが…」

あれ? なんで胸の奥がチクチクするんだひつ…?

s.i.d.e.テール

…何故かわからんがあの鉄板には近寄らない方がいい気がする…。
…いつちはいつちでスバルとエリオが止まらんのだが…

「ト、トール君…」

あれ? シヤマルさん?

「あ、あのね…これ…作ってみたんだけど…食べてみない…?」

そういうつてシャマルさんが差し出したのは…
…黒？いや紫？…え、今青に変わった！？

「…え、とここれは…」

「あ、焼きそば作ってみたんだけど…」

「あれ？焼きそばってソース入れるから茶色だよな？
って何故かもう俺の手に…？」

「や、やめろトール…食つたらお前…死んじまつぞ…！…」

「そ、そうだシコライト！悪いことは言わん。今なら私が紫電一閃
で抹消してやるから！」

「ちょっと一人とも！？いくらなんでも料理で死ぬわけない…でし
ょ？」

作った本人が疑問符付けんな！

くっ！レインの料理で散々慣らされてきたんだ…

こ…これくらい…

「や、やめろシコライト！…」

「あ、アイツやりやがった…！」

「トール君…あんた…漢や…！」

う…、い、この感覺…懐かしい…

(は～い 今日はカレーだよ～)

(…は?)

(だ・か・ら… カレーだよ～)

(カレーは赤じゃないよな?普通…)

(だから～ そういうカレーなの～)

(へ、へええ…)

(はい あ～～ん)

(…あ～んぐうつ…～?)

(な…何だこの… 辛い… 苦い… いや… 臭い… ～?)

(ぐはつ…～)

(きゅ～～～…トール～～!～?～?)

あ…今…逝きかけてた…

「なん……………だと……………～?」

「た、食べきった……………」

「き…奇跡や……………」

「三人ともひど～い…!…!…トール君、美味しかったよね?」

あ…やべ…もつ無理だ…

パタン

「死神……！」——川原智也

一 うるせえ殺人犯！！

「あー、おまえの本意圖だよ。」

「なんという男だ………！」
「し、シグナム！！！感動は後や！！！急いで吐かせるんや！！！」

ま、まさかレイミと同等の料理を作るなんて…まさに神クラスだ…。懸命に努力で…。

卷之三

不幸だ。」

二三一

Side シヤマル

う、うひ…やつぱり私つて
ダメなのかな…?

「トール君に元気になつてもうおうと思つたのに…」されじや逆効果

だわ……

ロストロギア自体はキャラが大活躍したからなんとかなったけど……
あ、あの後の特になのはひやんとフロイドやんの冷たい目線が痛
い……

……どうもくつかないのかしら……

「……だいぶシヨックみたいやな」

「あ……はやてちやん」

「海鷗にいたときからひまわりもさな~」

「うひ……」

ホントはやてちやんが導いてもらつても上手くいかないし……

「なら今度はトール君に指導してもらつたらいいやせ?」
「えつ?」

トール君に……?

「なあシャマル……、うつてトール君に料理を食べさせたん?」
「あ、それは……」

トール君に…元気になつてもらいたいから…

「今シャマルが考へてることな…、それが人間にとつて自然なことやねん」

「人間に、とつて…」

「…？」

闇の書のプログラムの一部でしかなかつた私が…？
人間としての感情を…？

「あはは…今はそれが何かつてのはすぐには教えられんわ」
「そ、そんな…」

はやてちやんのイジワル…

「けどな…しばらくトール君に料理を教わつてれば…それも見えてくるんぢやうかな？」

「…」

「…」

「…うん…私…やつてみる…」

見てなきよ!! シグナム・ヴィータ!
今においしい料理を作つて見せるんだから…
そして…トール君にも…!

「ふふふ…今のところはなちやんが一歩こいでつたといふやな…
でも私としてはシャマルにも頑張つてもらいたいし…。ホント、プ
レイボーアイやな…トール君…」

s.p.eなのは

…う~ん…

リムルさんやフロイドちゃんの手前ああ言つてしまつたけど
ホントのところがどうなんだろ?

「私は…トール君のこと…どう思つてゐるのかな…」

ユーノ君とは明らかに違つ。

ユーノ君は…なんていうか…幼馴染でもあるし…親友、といった方
がじつくつくる…
けどトール君は違う…

「なら…この気持ちは…」

そつこえば…フロイドちゃんは前からだけシヤマルさんとも最近
仲がいいんだよね…

二人はトール君のこと…どう思つてゐるのかな…?

「え、あれ…? と、とにかく自分のことだよな…うん…」

結局…その日は夜中まで考え込んでしまつた…。

第1~4話 出張 後篇（後書き）

第1~4話終了！！

もうすぐ1万ユニークなので特別編を執筆中です！
お楽しみにしててくれるとうれしいな

番外 思い出 five years ago (一万ユニーク記念)

祝！一万ユニーク！

番外 思い出 *s i d e r e i s s* (一万コニーク記念)

sideレイス

「いや～今日も疲れたよ～」

まったく…どうして人使いが荒いかね～
今日も帰つてるのが遅くなっちゃつたよ～
トール…怒つてるかな…？

力チャ

「…ただいま～」

う～、真つ暗だよ…

トールもつ寝ちゃつたかな…？

「…お帰り…」
「う…」

あちや～起きてたか…

電気も点けずに待つてたの…？

これじやあ浮氣した夫の帰りを待つ妻だよ…。
いつの間にそんな技術を身につけたの…？

「すいぶん…遅かつたな…」

「あ、あはは…『めんね…遅く…なつちやつた…』」

く、空気が重いよ

そりゃあね？私は頑張ったんだよ？

でも、後輩の男の子がちょっとドジやつちやつたから…そのフォロ

ーをね？

でもそんなこと無いと…

(ほへ、レイニアの男の子の為に、仕方なく、残った、と)

(そ、なんだよ～)

(ふ～ん…男の子、ね)

(な、何？トール…)

(べつひこ～)

つて無表情に拗ねるんだよ…（そこがかわいいんだけど…）機嫌を直すのホントに苦労するんだから…。

なんだかんだってもまだ18歳だもんね。

わがままなのは本人もわかつてるんだろうけど…。
だからしじうがないから…

「あ、あはは…ちよつと（後輩が）ドジひちゃつて…」

ほらーこれなら嘘じやない、でしょ？

「…めったく…しょうがないな…」

…ほつ。なんとかなつたよ~。

「ほら…『飯なら用意してあるから…』

「わ~い。』『飯』『飯…』」

ま、とりあえず『飯だね~

sideトール

…ま、大方後輩のフォローでもしてたんじゃないか?

『イツは…優しいから。

…でもなんか面白くない。

…この…胸の奥がチクチクするのは何なんだろうな…

「…おいしそう…相変わらずトールの料理は絶品だよ~」

「そりゃあレインの料理と比べりや大体は絶品扱いだよ~」

「あ、ひつどい!!これでも少しばかれてるんだよ?」

「…あの黒とも紫とも言えぬ謎の物体がか?」

「…………少し……」

会つた当初アレばかり食わされてたせいで耐性はあるが

普通は気絶ものだそ？

「……うう、私の方が4つお姉さんなのにトールの扱いがひどいよ」

「ガーンシ!!」

九
八
六

しょうがないだろ……？ 事実なんだし……

「うう…いいもん…リムルひやんこまごつけてやるー。」
「んなー。」

ちょ…勘弁してくれ…

同居するのにもアイツの猛反対で超苦労したんだから…
こんなのはあんまり…

(あら?お兄様?レイミちゃんと上手くいってないんですね?)

(い、いやそれは…)

(あら……？ 確か私との約束では喧嘩はしない……ではありますんでしたか？)

(いやこれは宣傳では…)

(へえん！ テールかくじめるよー！！)
(向6つも年下に泣きついてんだよー)

(お・に・い・さ・ま?)

(…ハイスマセン…ワタシガワルウゴザイマシタノテセバスヨゼ
ロキヨリデカマエナイデクダサイ)

(まつたく…)

「やれやれ…」

ポンポン

「ふえ…？」

「いつまで経つても甘えん坊、だな…？」

「…トールに言われたくないよ…だ」

「…そうかもしけないな」

実際…レイミがいなくなつたら大変だろうしな。

「ねえ…」

「…どうした?」

「わたし、トールにはいつまでも元氣でいてほしいな…」

「いきなりなんだよ…?」

「…ううん、なんでもない!」

つたく…

「ほり、リハビリ……」

「あ……」

「俺はレイミをひとつ抱き寄せ……

「……俺が元気でこちらのはレイミが横で笑ってる時、だよ
「…………うん」

どじらからともなく……キスをした……

sideレイン

今のは……私の……記憶……？
いや……私は……戦闘機人……
人としての記憶などないはず……
だったら……今のは一体……？
それにどうして私の目から水が流れている？
……そして……これを他の姉さま方に見られてはいけないと……思つていいの……？

「わからない…」

私は…本当に戦闘機人なのか…？

番外 思い出

five years ago

(一万ユニーク記念)

終了

第15話 過去話 前篇（前書き）

第15話です

第15話 過去話 前篇

s.i.d.e トール

「あの…トール君…ちょっとといい?」

出張任務も終わって4日目が経ったある日。

午後の訓練も終わり、珍しく仕事が進んだので定時に帰らうとしたところなのはさんに声を掛けられた。

「…え? ううした?」

「あの…ね…? 明日の訓練のことなんだけど…」

ビーハンだわ…顔が赤いんだが…

「セカンドモードの為の試験…ね」

「うと…その試験官をトール君にお願いしたいんだけど…」

ふむ…ならやるけど…

「だつたら話は簡単だな」

「ふえ?」

まあ……こんなへりこむせつともうらわんとな。

「俺が相手してやるわ。… 1対4でな」

「…それって……かなりきついんじゃ」

「ま、リミッターもあるし」

まーこれくらいはやつてもらわんと…
それより…

「なのはさん…風邪か?」

「えー?」

「いや…何か顔赤いけど…」

いやー最近流行ってるからなー…
どれどれ…?

「え?あ、あああ…!だ、大丈夫だよー!うんー」

そつまつて慌てて部屋を出て行つてしまつ。

「…大丈夫があ?」

「…というわけで…今日の早朝訓練も終わりー。」

「…「…は、は…」」

お…、死屍累々だな…

ま、こんだけやれば文句ないだろ。

「それで…今日の模擬戦は実はセカンドモードの試験も兼ねてたわ
けだけど…トール君…結果は？」

「…まあ、合格だな」

「それで…今日は午前中の訓練だけで…午後は…お休み…」

その時のフォワード陣の顔の変化つてば…

「…「…「…やつたあ…」」

「ほんとすげえな…」

まさかホントに一撃入れてくるとは思わなかつた…。
大した成長力というか…才能というか…

「あ、トール君も午後は休みでいいからね？」
「…え？」

俺も休み？

急に休みと言わると予定がないな…
久しぶりにアイツのところへ行くかな…

s.i.d.eティアナ

「ほら、はやくしなさい！」
「ちょ、ちょっと待つてよ～」

このタイミングで休みなんて随分気前がいいわね…

「ねえティア？アイス食べようアイス！－！
「はあ？」

もつアイスなの…？
まったくコイツは…

「しょうがないわね…」

「わーい アイスアイス！」

… まだまだ色気より食い気ね…

「ちびっこ一人は揃つてお出かけなんだっけ？」

「…ええ、そうね…」

いつの間にかあんなに仲良くなつてたのね…あの一人…
いや、何か先を越された感があつてちょっと…ね…

「さ~て、アイス アイス」

「またアイスなのね…」

いくらなんでも5段は買はずぎよね…

ま、幸せそだから別にいいんだけどさ…

コイツはコイツなりに辛い過去…いや、今もか…

戦闘機人として…いや、スバルはスバルんだけどね？

その事実はあまり人には知られたくないみたいなところはあるんだ
ろつ…。

「ん~おいしい」

「はあ…」

ま、恼むだけ無駄よね
ん?あれば…

「ちよつと…スバル…」
「ん?ちよつとほしきの?」

「ここつけ」

「違うわよー!」
「あ…トルさん…?」

珍しいところが…ちよつと遠いけど…なんか悲しい顔、してる?

…なんか…気になるな…

「…ねえ」
「…つん」

なりゃえる」とは一緒に歩む。

Sideri

ここに来るのも久しぶりだ……

アイツが死んで…葬儀も終わって…それから1年ぐらいたるが、
もないくらい荒れて…

『約束』も何もかも思い出して……一度ここに来て以来だから……

「4年ぶり…かな…」

レイミ・アーグデイル

享年21歲

…偶然にも…アイツと同じ年で亡くなってるんだよな…

卷二

ティーダ・ランスター

享年21歲

…… こうして見ると、俺の周りには、死、しかないのかな……と改めて
思い知らされるな……。

ま、自分のやつてきたことから逃げるつもりはないけどな……

ああ、今日もいい天気だ

二人が死んだのも…両方とも…こんな天気のいい日だつたかな

s.i.d.eティアナ

「……嘘……でしょ……？」

なんでトールさんが…兄さんの墓に…？

「兄さんと…トールさんは…知り合いだつた…？」
「難しい顔してどうしたの～？」

もしかして…トールさんは…兄さんの死の真相を…
それに隣の墓の人は…？

「…尾けてたのか…」

やばー見つかった…！

「す…すいません…」

「…何か聞きたそつだな…まあ、普通はそつだりうが…」

…」の際だから全て聞いてしまおうか…？

「…じつしてもお聞きしたいことがあるんですね…」

「…」にじやなんだから場所を移すか…」

「…ええ…」

sideテール

…というわけで場所をさつき来たアイス屋からほど近い喫茶店に移したわけだが…

「…スバル…お前帰れ

「え？何ですか？」「

「ならこんなに食い物頼むな…！」

ピリフにカレーにサンドイッチ…

奢るとは言つたがちょっとは自重しろ
といつかシリアルスな話をしようとしてる横でもべせべ食べられると
やりづらいわ！

「…まあいい…とりあえずどこから聞きたい?」

「…あの…トールさんと…兄さんの関係から…」

俺とティーダ…ねえ…

「…まあ…親友というか…悪友というか…」

「そ、そなんですか?」

まあ、大層美化されてると思うがアイツは結構やらかすほうだった
よな。

一応階級的には上司だつたんだけビセ。

7年前

「トール~待つてよ~
やなこつた、と」

やれやれ…今田からまた新しい部署に異動かよ
首都航空隊？

…俺つてこんなに目立つていいんかね?
‘仕事’のこともあるのによ。
…といつかレイミも一緒にのがなんか、なあ…

「やつづりこ…」

「ん?早くしないと遅刻なんじやなかつたつけ?」

う…あと5分かよ…

「ダッショー!」

「あ、また置き去つてしちゃうとしてる~」

ほ~り早くしないと遅刻するぞ…つてバカ危な…!

「あ~いたたた…」
「ドン~!」

「痛う〜…」

おいおい大丈夫か…？まともにぶつかったけど…

「だ、大丈夫ですか？」

「あ、ああ…なんとかな…」

ほつ…よかつた…

「う〜」

「ほら早く立つた立つた」

「最近トールが冷たいんだよ〜」

こんな時までバカ言つてんなよ…

「げ！…まづい遅刻だ…！」

「え？」

あ、この人も今日異動なのか

「あ、走りながらですいません。俺、今日付けで首都航空隊に昇任異動になりました。トール・シュライトー等空尉です…」

「レイミ・アークテイルー等空尉です～」

走りながらで本当に申し訳ないけど……これもなんかの縁だし。
挨拶はちやんとしないとな。

「俺は……ティーダ・ランスター一等空尉だ……よろしくなー。」

これが……俺とティーダの出会い……そして……
騒がしくも充実した日々の始まりだった……

第15話　過去話 前篇（後書き）

15話終了！

過去話の方が楽に書けるの〜

中編です（

sideトール

「3人1組?」

「そ、チームバランスがいいから組めってさ」

「前衛1後衛2つて俺の負担が半端ないんだが…」「まあ、いいじゃねえか。俺と組めるってだけでも感謝しろよ?」「ほー言うねえティーダさん。なら私は楽できそうだな」「つまり俺の負担が増える、と

さぼるな。

仮にも俺の師でしょ。

「ま、トールのことなら心配しなくていいよ。あつという間に私を追い抜いた天才なんだから」「別にそんなんじゃないっての」「あれ? 照れてるの? かわい」「…まつたく…」「お前ら…特殊な付き合いの方だな…」

ま、 そ う だ よ な 。

師であり、恋人であり…パートナーであり…なんというか…。

「まあ……これが俺達……だな」

「うんうん」

「ま、これならアールが妹に手を出す」とはなれりだな」

「へー、テバに夕さん嫉しそうなんだ」
「何歳?」

「」

「ん? どうした?」

いや、10歳の子にさすがに手を出せんわ。

いぢりやう。今朝の10歳の女の子は進んでゐるんだよ。

「なんだと ! ? 嘘だ 嘘だと撒うてくや !

！ティアナあああああ！！

(（あ）、大体どういう性格か把握した）

「行くぞジスロジ」

「システムの何が悪い！？は！？まさか貴様か！？」

「……ええ!? そうなのトール! ?」

- ちけえよー！

か？

「……「うー私とこ「るものがありながらひゞこよトール～」

「……ま～え～は～悪ノリするな！」

「く…貴様に妹は渡さんぞ…」

「つむせえ妹馬鹿…！」

「トールのロリコン…」

「わらうととんでもないこと言つてんな…。」

ああ…これからジッパリの日々が…

.....

「あ、あははは……兄が本当に「迷惑をお掛けしました…」

「事ある」とに妹自慢と来たもんだから苦労したんだよ…。もう一
人のパートナーもボケの部類だしな」

つたぐ…そのボケにレイミが乗つかるから苦労したもんだ…

「でもなんか話してると、トールさん…心なしか楽しそうですよ?」

ホントか……?

あれ以来表情が変わんなくなつちまつたから益々人づきあいがなくなつたんだよな…

「ま、とりあえず続きを話すか…」

……

「 捜索任務?」

ティーダとの任務も慣れたもので早10ヶ月。

そんなときに舞い込んできたのは一件の任務だった。

「ああ…第37管理世界…そこは鉱山とともに古代遺跡が眠つているんだが…」

「どうやら遺跡の調査チームの内数人が行方をくらませたらしいの」「ふむ…」

通常なら落盤事故か何かを疑うが…そのような形跡は見当たらないつと。

「ただ…遺跡の中に解析されてない装置があつて…どいつもこから微弱な魔力反応があるらしくの」

「ほ~。つまりはつかつに触ると危険だから、こぞとこづ時の戦力がほしいこというわけだな」

…異常がそこにしかないのなら確認するしかないだろうな…

「…氣を抜かないでもらいてえのは…その調査チームは万が一の時の為に雇つておいた魔導師だつてことだ…。そんな奴らが何の痕跡もなく姿を消すのは…」

「異常…だな…」

…その異常な事態で俺等しか部隊を派遣しないってのはおかしいだるー

まったく…上、の奴らはホント腐つてゐる…

「と、とにかくもう出発してほしこそうなんだよ~」「必要な増援は現場の判断に基づき要請してほしこれつだ」「なら、とにかくにも現場を確認しなきやな」

早ごとに行つて……救助してやること……

シードレイル

「リリがその遺跡か……」

「うそ……」

「写真でも見たけど改めてみると大きいね
こんななんじや迷っちゃうよ。」

昔トールに遊園地に連れて行つても迷つた時、迷路でトールとはぐれちゃつてものすく困つた時のことを思い出しあがつた……

「その魔力反応は一番奥だつだ」

「ならそこまで案内してもいいのか……」

「わかりました……どうぞ」

……ん~?

「どうしたの~トール~?」

「ん~まあむつとな……」

?あの案内の男の人がどうかしたのかな?

「…おい…トール…」

「ああ…」

「…間違いなくここにいるね~」

遺跡に入つてから魔力反応が強くなつた…。まるで私たちに来い…と言わんばかりに…。

「…ひらりです…」

う~…なんか暗くて怖い…

なんか奥に変な機械が置かれてるし…

「ね~トール…」

あれ?トールは?

「」の匂い

間違いなく…血だ…

それに…水で上手く流しているつもりだらうけど…奥の排水溝のところは若干赤い…

「トール？」

「ああ…なんでもない…、あれ？案内は？」

「あれ？いよいよ？」

「ちょっと一人とも…」「ちち来てくれ…！」

ん？あの機械の方か？

「…なんか…微妙に光出してるな…！」

機械が急に…作動した…！?
え！？この人たちは…？

「い、いつの間に…？」
「ト、トール…この人たち…失踪した魔導師達の特徴と一致するよ
～！」

……どうこうことだ……？

この機械が……連れ去つていた……？

いや……転送の類か……？

「ふう……ちよづよかつた……」

いや……待て……

「なあ……あんたら二……」

ここつりせ……

「聞きたいことが……」

・・・・・・・・・・・・

なんでデバイスを構えている?

「下がれ……ティーダ!」

「へ?」

俺に言われて一步下がるティーダ。

さつきまでティーダのいた位置には剣が突き立っていた。

「な……ー?」

「気をつける……」いつら操られてる……!…

一体何が…?

こう数も多くちゃ『デバイス展開させてる余裕もないな…!…

「ちつ…」

しかも操られてるわりに『デバイスの能力はしっかりと活用してる…

・・・・・・・・

まるで『デバイスの意思に従わんとばかりに…

「よつしゃセーット…」

…その時…

まるでその時を待っていたとばかりに機械が更に光を増したよつて
俺には見えた…

「待て…!…」

「はー? いや...」この数は「デバイス展開させない」ときついたる...」

「違う...! —これは...誘いだ! !」

パチパチパチ

「...わずかこれだけの情報でそこまで理解するなんてさすがですねえ~」

「行動が止まった?」

「さつきの案内人やはり...」

「行動が止まった?」

「なるほど...お前がこの機械の主つてわけか」

「まあ...本当の主は他にいるのですが...この機械は私の物でもありますね」

「...」

「...」

「え~? あ...!」

「う...ここからの『デバイスは...』一様に黒い。」

まるで何かに染められたかのように...」

「つてそれじゃあ俺達デバイス展開できねえじゃねえかよ...!」

「心配いらない。俺のカンが正しければ...ティーダー! ! 端まで飛べ

! !」

「あ～？」

…その瞬間…奴の歪んだ笑顔が驚きに変わった。

「セー」なら機械に操られる心配はない…。レイ//も離れて…。「う、うん…」

部屋の端まで移動したティーダとレイ//を追つ者もいるが…今までと違い…若干動きが鈍い…。

「やせりな…」
「あ…あなた…すでにそこまで…」
「まあ…離れる」とテバイスを染めていた黒色が薄くなっているのも見えたんだな」

さて…俺はこのままレーニングを引きつづつ…

「セー」から一歩前進するな…。レイ//…。
「うそ…。せひまだよ…。」

レイ//の槍が黄金に光ると同時に雷を纏う…。…

「こくよ～…スピアー・オブ・グングニル…」

通常…投擲された物質は距離を伸ばすとともに速度は落ちる。
しかし…レイミのスピアー・オブ・グングニルは…

「な…さらに速度を上げた…?」

そう…投擲された直後より目的地に到達する直前の速度の方が速い。
雷撃を纏つことにより、槍の加速度を上乗せしていくことにつり
しいが。

正直俺にはよくわかつていない。

しかし…あの槍がもたらす結果はわかっている。

「嘘…でしょう…? 破壊防止のためのシールドがこいつもあつた…

ま、全力のあれを上回るのは噂のエースオブエースのスター・ライト
ブレイカ ぐらいなものだ。

さて…こいつでもう一つ俺が気付いたことがある…

それは…

「え…? どうこう」と…トル?

機械が破壊されたと同時に操られていた奴らは全員倒れてしまった。

いや、正確には一人を除いて死んだ、と言つべきか。

「し、死んでる……！？」

「なるほど……そういうことだつたか……」

機械の近くで倒れている杖を携えた女の魔導師。
コイツだけ傷がない。

これも戦っている最中に気付いたことだが……
俺が軽く蹴り飛ばしたりしただけで通常ありえないほどの大出血があ
つた。

まるで初めから傷ついていたと言わんばかりに。

「同士打ち……だな……」

「ふ、ふふふ……その通りだよ……」

「コイツは……！」

仲間の為に手を出せず次々と死んでいった奴らを笑いながら……
しかも死んだ後はデバイスを利用して死体のまま操るだと……？

「だが……ここまで知つてしまつたからには……上層部には邪魔な存
在ですねえ……！」

「な……まさか……俺たちを消すのが目的で……」

ま、俺たちがうつかり近距離でバイクを起動させたら操ろつとしてたんだろうがな。

「では…手始めにあなたから死んでいただきましょつか…！」

「それは…質量兵器…！」

「やはり…」じいつけ…！

ダーン…！

「ト、トール…！」

「ふ、ふふふ…心配いりませんよ…すぐに一緒に場所へ送つて差し上げ…」

「生憎だが…そこへは一人で逝つてくれ

斬…！

「かはつ…！…そうでしたね…あなたは…幻術の達人でもあつた…！…ですが…いいのですかな？私を斬ればあなた方は間違いなく上層部の敵となる…ぶ、無事ではすみませんよ…！」

…最後は三流らしく命乞い…か。

「…生憎俺は上層部を味方と思ってないんでな…」…残念…せめて来世ではもう少しマシな命^命を考えて…」…ヒー…」

そして俺は…容赦なく奴の首を斬り落とした…。

その後は唯一生きていた魔導師を運び出し、気付いたところで状況を説明。

…さすがにショックがでかすぎたようだ。

…任務が終わつた後、彼女もそのまま行方をくらませてしまつた…。

こんな感じで後味の悪い任務になつてしまつたが…
この件で本当に3人揃つて命を狙われるようになつたとは…な

第16話　過去話　中編（後書き）

16話終了！！

この話は実はメイン以外にも伏線があつたりなかつたり…？な回

第17話　過去話 後篇（前書き）

後篇

sideレイ III

「お前たち……これは一体どうこいつことだー。」

派遣された管理世界から帰つてきてそのまま遺跡での出来事を報告書に纏めて提出した（トールが上層部の者を斬つた部分は伏せて）んだけど、

やつぱり内容が内容なだけに次の口上同から呼び出されてしまつたの…。

「どうこいつとも向もそのままですよ…」

「こんな内容に信憑性があると思つてゐるのかー？」

「だつて～実際その通りなんだかじょうがないじゃありませんか

」

「だからと言つて」の報告書はそのまま最高評議会にまで送りれる書類なんだぞ？ もう少し内容をだな…」

「…お言葉ですが、これでも大分内容を厳選した上で報告しているのです。結果として遺跡そのものの調査は終結し、遺跡はそのまま封印処理を行つた上で管理体制を強化するのが妥当と思われますが

…」

「うだよ～。

こんな危険なものを使つて調査続行なんてさせたらこれ以上どんな犠牲が出るか…

「…まあいい。」Jの報告書はそのまま提出するが、おそらく上層部はこの中止要請を良しとはしないだろうな。そのことだけは覚えておけ

「…そんな…？」

…あの遺跡にそんな価値があるとこいつの？
…それとも…？

sideトール

「間違いない。先のあれは上層部指揮によるものだな」

「…それってどういってんだ？」

「いいか。俺もあの戦闘を通してしか把握できていない部分もあるから全ての説明は難しい。あの機械はデバイスを通して人を操るものだつたな」

「うんうん」

「そしてあの機械は生きている人はもちろん、デバイスさえあれば

死体をも操ることが可能だった

まあ……死体の場合は若干動きが悪かつた気もするがな。

「つまりだ。あの機械を利用すれば簡単に自分の意のままの兵士を作ることができるということだ」

「ふむふむ……」

「……だがそれはベースとなる人とのデバイスがあつて初めて成立するものじやないか？」

まあ……あのまま使つんだったら、の話だがな。

「……何もベースとなる人は連れてくる必要もないだろ？？」

「……それって……！」

……これも法律的にはまだタブーのはずだが……。技術的には可能だろう。

「そう……。クローンだ」
「嘘だろ……？」
「そんな……」

まあ……そんな倫理に欠けた行為が当然許されるわけもないが……。水

面下では人間のクローンといつのは恐らく作られているだろつた。

「クローンであればそれほど苦労はいらない。体は完成されているとはいえ、精神は生まれたての子供のようなものだからな…。そしてあの機械さえあれば最強の軍隊の出来上がりつてわけだ。」

「レイミが粉々に粉碎したから復元は不可能だと思つが…」

「…さて。そんな秘密を知つてしまつた俺たちは一体どうなると思う?」

「おいおいおい…。実はかなりヤバいことに足突つ込んでしまつたんじやないか?」

「正確には突つ込まさせられた、だよ」

「まあ、俺たちは体のいい実験相手だと思つたんだろ。あの状況なら死体も残らないだろ? から失踪扱いになりそうだしな」

「…実は状況としては結構笑えない。」

こづしている間にもいつ暗殺の手が伸びるか…。

「(J)で気を付けなければならぬのが搦め手だな」

「…そうだね。私とトールはまだしもティーダさんは妹さんのことが心配かも。今日誕生日なんだしもう帰つたら?」

「はー? そりだつた! …こづしてはおれん… 一待つてのティアナああああ! …」

おー、速い速い。

「トール…今の、わざとよね？」

「まあな…お密さんガ来てるからな」

…人通りが少ないとはいえこんな真昼間から物騒だな。

「…よお、兄ちゃん…！ちょっと死んでくれねえかい！？」

「…おい…よく見りや こっちの姉ちゃんイケるな！…女の方は楽し
んでからでもいいか…？」

「まつたく…お前も好きだな…まあ！俺も好きなんだけどよ…『わや
はははは…』

「…わて…質量兵器所持…それから公務執行妨害」

「あん？俺たちを逮捕しようつてか！…このランクAAの魔導師を
殺したこともあるこの俺たちを？ははは…！…おもしろいじゃねえ
か…！」

…あいこいくと…そつこいつの詞は…嫌いでな

「ぐあつ…！」

「死亡フラグ」へひつせん…それから一言だけ言つとこでやの…」

「レイミーは……そんな汚ねえ田で見るんじゃねえ……！」

「あ～ダメだ……」こうひら斬るわ。うた斬り。よじ斬り。

「…………バカ

……あの後……俺の出番は特にないままレイミーが全て倒してしまった。
俺が本気で切れたのを察したのかな？

sideティーダ

「……まったく……余計な心配せんとなつてんだ……

あの後トールとレイミーが違法魔導師に襲われたって連絡を受けたから心配して来たんだが……

あの様子じゃ何の問題もないな。

そ、早く帰つてプレゼントの準備しないとな……。
ティアナ……びっくりするだろつな。

『ティーダか！？悪いがすぐに来てくれないか？違法魔導師がロストロギアを奪つて逃走中なんだ！！』

「こっちも違法魔導師が！？
すぐに行かないと……！」

「悪いなティアナ……せっかくの誕生日だつてのに帰るの遅くなりそうだ……」

sideトール

ふう。あのバカ共を局の留置場にぶち込むまでに随分時間を食つてしまつたな。

なんで今日に限つて本部の査察とか来るんだよ！
しかもくだらないことを細々と聞いていきやがつて……

「う~。なんでこんなタイミングで運の悪い…」

「案外上層部の指示で俺たちに嫌がらせしてるんじゃないかな?」

「え~? なんで暗殺未遂の後にこんな地味な嫌がらせ…」

「もうティーダは帰っちゃったかな~? せっかくの妹さんの誕生日なんだからね~」

… そういうやティーダはちゃんと妹さんのところに着いたよな…?
その為に俺たちがこのバカ共を引き受けたんだから…

いや…待てよ…?

確かに… アイツは今日、妹の誕生日だからと黙つて俺達よりも早く
帰る…ことは上司に報告している。

… そして今日この状況でそのまま3人でバカ共と遭遇してしまい、
留置場にぶち込むまで立ち会つてしまえば定時あがりは難しい…。
だから俺たちはアイツを早く帰らせるためにこいつらを引き受け、
先に一人で行かせた…。

そう… 一人で…。

そして何故か俺たちがこいつらを留置場に入れようとするタイミングで査察が入り、くだらないことまで長時間根掘り葉掘り聞いてその間俺たちはじつにへき付け…!~

「…まさか…！」

sideティーダ

「…ゴホッ！…くそ…！」

やられたぜ…ここまで汚いとは…

今日のことは全て俺一人を殺すための仕組みだつてことが…！

今日が妹の誕生日で、妹を大事にしている俺が早く帰るために一人行動するつてのは身上調査と行動確認で把握済み。

そしてあいつ等にちよつとした下つ端の暗殺者をけしかけ、留置場に入れるまでの間、俺等を引き離すのも…

そして俺より高ランクの違法魔導師がロストロギアを奪つてしまわざわざ俺がいる方に来るのも…！

全ては…上層部が俺を殺すために仕組んだ罠だつてことかよ…！

「く……」

あはは……！ じりや致命傷だな……

この場で治療できる高ランクの治療術師でもじりや助かったかもしれんが……

「ティイーダー！」

「あ……なんだ……ようやく来たのか……

「ティイーダさん……しつかりして……」

「……そんな泣き声になるんじゃねえよ……
俺まで涙が出そうじゃねえか……

「……すまない……俺がもつと早く戻りこなれば……
「……ばっか。お前が気にする」とじやねえんだよ……！ これはな

まったく……お前の頭の回転の速さをもつてしても回避しきれないほ

“心の瞳なんだ。

「……それより……眞をつかう……今回みたいに敵はお前の想像を超えるほど狡猾だぞ……」

「……もういい……。傷が開くからしゃべるな……」

「……なんだ……お前も……そんな悲しい顔……どうするんじゃねえか……泣けるんじゃねえか……」

「思えば……お前を初めて見たときは……ホント無表情なつまんなそうな奴が来たな……て思つたもんだよ」

「……」「でもよ……長く接してくる内に……お前にも内に熱い感情が眠つてゐるつてわかつたんだよ……」

「だから……лей//をしつかり付けてやれよ……

「それからлей//……トールを……頼むな……」

「……うそ……」

「レイ!!……あんたがいなきやたぶんマイシは本当につまんなこ奴だつたんだと思つたんだから……あんたにやしつかり付けてやつてほしこんだ……

「…それから…最後に一つだけ…」

「…なんだ…」

…………

「…わかつた」

「…ああ…これでひとまず安心だ…」

心残りは…ティアナの花嫁姿を見れない」と、かな?

「…絶対に…心まで折れるんじゃねえぞ…!…」

「…ああ…」

ふう…なんか視界も白くなってきたな…
痛みもなんかなくなってきた…

ホント悪いな…先、行ってるわ…

それから……

「本局の魔導師たるもののが違法魔導師を取り逃がすなど言語道断。死んででも取り押さえるべきだった」

などという心ない上役の発言により、ティーダ・ランスターの名は死して更に地位を落とすこととなつた。

その発言をした上役は……

「ふう……まさかこうもうまくいくとはな」「ああ……まったくだ……殺しの後の酒は旨いな……」「それとこれが今回の報酬だ。後一人、やれるな?」「当然だ……」

裏でティーダを殺した違法魔導師と繋がっていた。
だから……

「か……は……寒い……頼む……助け……て……」「……」

二人纏めて氷漬けにして殺した。

「汚ねえ氷のオブジェだな…」

…こんなもんでお前の無念は晴れないだろ？が…そつちに行くのは
しばらく待つてくれ…

- - - - -

…まあ、こんなところだな…

さすがに殺しの所なんかはここにこいつらには話していないし、
レイミのことも少し……いや、かなづこまかしたが。

「…すまない…俺がもっと早くに気付いていれば、ティーダは死な
ずに済んだ」

「…」

謝つて許されることじゃないのはわかっている…。

それほどティアナにとってティーダは大切な存在なんだ。

「…たしかに…昔のままの私なら、トールさんを恨んだと思います。ですが…」

「…」

「トールさんは…私の為に一生懸命になつてくれました。…一度道を踏み外しかけたこの私に…」

「…それは…」

「…ええ、確かにトールさんは死んだ親友の妹だからということ一生懸命になつたのかもしれません。でも私は本当に感謝しているんです…」

「ティアナ…」

…俺は…そんな立派な人間じゃない…。

「それから…一つ渡したいものがあるんだが…」

「なんでしょうか?」

「これは…ネックレス?」

「…ティーダから預かつたものだ」

「…兄さんから?」

「ああ…」

まあ…アッシュからは「アッシュは…きっと立派な管理局員になるだろうから…。一人前になつた時に渡してくれないか」と言われたんだが…。

「… ありがとう… ジャベコザム…」

…これで…少しば罪滅ぼしになつたかな?

お前を死なせてしまったのは…今でも自分自身が許せない…
でも…この少女を…せめて一人でやつていけるようになるまでは…
守つていかなくては…。

お前の、いや…お前たちのところに行くのは…それからでもいいかな…?

ティーダ…

第17話　過去話 後篇（後書き）

第17話終了

10万PV記念なんか考えようかな～

第18話 戦闘機人…そして… 前篇（前書き）

戦闘機人編とつにゅー

第18話 戦闘機人 そして 前篇

sideティアナ

知らなかつた…。

兄は…こんなにもいい人と仕事をしていたんだつて。周りから否定されてきた兄のことを…肯定してくれる人がいたんだつて。

「トールさん…私は…兄にはまだまだ至らない未熟者です」

「…」

「ですが…いつか兄を超えて行きたいと思つてます」

「ああ…」

「だから…もし…」

『スバルさん！ティアナさん！聞こえますか？』

…「…このタイミングで通信？」

なんて間の悪い…

「…ええ、聞こえてるわ…」

『…こちらエリオ君とともに現在サーデアベニューの路地裏にてレリックらしきものを所持した女の子を1名保護しています！至急応援願います…』

「…了解！」

「…お礼を言つなら」のタイミングしかないのに…

「……さて……休暇は十分か？……無駄話に付き合わせてしまつたが」

「いえ、無駄なんかじゃありません」

「……そうか。なら行くが。ここからは仕事再開だ」

「「はい！」

「……それからスバル。口の周り生クリームは拭いていけよ？」
「え……？あ……」

「……ここには……ずっとおやつばかり食べてたっていつの？」

side-トル

「あ、トルルさん！」ちりぢりですー！」

ふむ……この子か……服もボロボロだし、体も擦り傷だらけだな……

命に別条はなせうだが、念のためシャマルさんのところへ急いで連れていくべきか。

「この子…恐らく地下水道をずっと歩いて来たんだと思こます…」

ああ、確かに地下水道特有の臭いがするな…

「部隊長」

通信指令室に着いているであらう部隊長に通信を送る

『なんや。ひょうひじゅうからガジヒットの反応につけて送りつけ思つとつたのに先に気付きましたか』

『ええ…それで方向と編成を送つてください。この場でそれに対応した部隊編成を組みます』

『ああ…地下水道に少数のグループがあつてそれが計20機。海上から迫つているのが計12機や。スタート2も演習からそつちに向かつてゐるから合流してな』

『了解。それでは…』

『あ、それからもう一人…』

『108部隊、ギンガ・ナカジマです。別件捜査中ですが、そちらの事案と関連が深いと思われますので同時に捜査したいのですがないかがでしょうか?』

別件……か

「了解した。そちらの現場は地下水道の中よろしくか？」

『その通りです』

「……ならば地上は俺とフォワードメンバーで、海上はなのはさんと
フロイトさん、ヴィータの3人に任せる。……それでいいか？」

「…………」「了解……！」

「ベリの方はシャマルさんとヴァイス。一人で守護してくれ」

「わかりました。」「

『……う~』

「どうしました？ 部隊長」

『だつて私が指揮しようとした布陣そのままなんやもん……文句も言
えんしつまらんわ～』

「……なら戻った時に部下の出来を褒めてやつてくださいな」

『なんや……言つようになつたな自分』

「ええ……慣れましたから」

ま、扱いやすくなつたとも言つた。

「はあああああーー！」

掛け声と共にトールさんがガジェットを一刀のもとに斬り裂く。
…こりしてみると本当にすごいわね…

私たちはトールさんが撃ち漏らした敵を破壊していくだけ。

「す…す」「…」

あ、スバルも気づいたか。

トールさん…結構撃ち漏らしがあるように見えるけど、
それは全て後ろに控える私たちが撃ちやすい敵のみ通している、と
言った方が正しいわね。

それが証拠に私は今のところ2発以上1体のガジェットには撃つて
いないし。

スバルもヒリオもほぼ足が止まることはない。

『トール等空尉』

「…ギンガか、もう少しで合流できやうだ

『了解。それではこちらで待機します』

通信しながらでも手は休めない。

…それから…ここでは今のところほとんど魔法を使っていない。

これが…兄さんと肩を並べた人…

…しかもこれでまだリミッターが掛かっている…

だから…その背中は…見えている以上にただ、遠い。

自分でもわかる…

六課に来る前は…兄のことばかりを追い続けていた。
でも…今は…兄と肩を並べていたあの人のことも…追いかけていた
い。

s i d e トール

…ここが現場か。…そして彼女が…ギンガ・ナカジマということだ
な。

「第108部隊、ギンガ・ナカジマです」

「…トール・シユライトだ…妹に似ず、聰明そうでよかつた…」

いや、ほんとに

「ちょっとトールさん～それってどうこの意味ですか～」

「言葉通りだ」

「言葉通りよ」

「ティアナ…やはりお前もそういう思つか。

「お久しぶりですギンガさん」

「久しぶりね…ちょっと雰囲気変わった？」

「…そう、見えますか？」

「ギン姉はティアのシユーティングアーツの師匠なんだよ」

「…はう」

あのナックルから察するに彼女も近接系とは思つたが…
まあ…感動の再会はここまでにして…もう一つのケースの反応も近
いな…

「それから…ここには4～5歳くらいの子を入れる生体ポッドのよ
うなものとガジェットの破片らしきものが散乱しています…」

「4～5歳…わしきの子もそのくらいの年齢だつたな…
とするとこれは…人工生命体…クローンということか

…完成させてきた、ということか…

「ケースの反応はこのあたりだな」

破片に埋もれているが…ここに間違いないだろ?。

「ありました!! ケースです」

うん、以前封印処理をしたケースと一緒にだな。
…さて…これから地上まで安全にこれをもってくわけだが…

「ティアナ」

「…? はい」

「ちょっと…いいか…」

「確かに一人ならできますが…トールさん…結構エグイ事を考え

ますね…」

「…嫌いか?」

「いいえ…むしろ気に入りました」

「なら…やるぞ」

「はい！」

その後ケースをエリオに渡して地上に戻らうとしたのだが……

「ケースを……渡して……」

「な………うわっ！－！」

突然飛来してきた黒い物体にケースを奪われてしまった。
そこにいたのは紫の髪の少女
その少女はケースを抱えた召喚獣らしき物を従えていた。
……しかも……

「ちつ……」

牽制で少女に斬りかかったのだが……

炎が遮つて弾かれてしまった。

「……何！？」

「ふつふーん……この烈火の剣精……アギト様が来たからには……お前たちの好きにはさせねえぜ！－！」

「こつ…コインと回遊モードバイスだな…。
やして間の悪こと…」

「ふむ…こつもやせ世話になつたが…」

悪こじといこのせ…続くもんだよな…
まさかまたあんたと戦つことになるとな…

「Iの前よつ…少しうらめそつかな?」

なあ…ゼスト・グランガイツ…—!

第1-8話 戦闘機人…そして… 前篇（後書き）

1-8話しゅうりょー

10万PVのネタがないよ～

第19話 戦闘機人…そして…中編（前書き）

中編です♪

トール君のもう一つの能力、本編初公開！！

第19話 戦闘機人 そして 中編

sideトール

とにかくまずはこいつを引き離すところから始めないとな。リミッターの付いたままじゃ全神経を集中させないとこないだと同じくやられてしまう。

フォワード陣には悪いが、ちょっと…気を回している余裕はない。

「フローズン・ダガー！」

氷の刃を連続で飛ばし、ゼストと他の敵との距離を離す。その上で俺はゼストとの距離を詰め、結果として俺とゼスト、フォワード陣と紫の髪の少女、それからアギトと名乗った融合機との戦い、といった形に持っていくことにした。

正直なところ、リミッター付きの俺では万全の状態でもゼストに勝つのは難しい。

相手は元とはいえランカー。対して俺はS-、しかもリミッター付きでAAまで落としている。

だが、それは俺とゼストとの戦いに限つての話だ。向こうの戦いはどうか。

確かに融合機にしても召喚師の少女にしても高い能力を有している
ようには見える。

しかし数の上ではフォワード陣の方が上。

ギンガさんについては実力は未知数だが、単独で任務に当たれると
ころを見るにスバル以上の実力はあると思つ。
そして…先ほどよりリインが通信でうるさく怒鳴つてあり、内容は
こちらの応援に来る、とのことだ。

要はリインが来るまで時間を持たせる。これを徹底することだ。
いくら今の俺でも時間稼ぎに徹すればゼストにしきりそつ余裕はない
はず。

そしてフォワード陣はティアナの指揮の下融合機の攻撃を捌きつつ
召喚師の少女を捕縛することに全力を注ぐ。
そして融合機は到着したリインと共に抑える。

「…むん…！」

ガキイイイー！

ゼストの重たい一撃をフリー・ライトで受け止める。

…あれ、デバイスじゃないはずだよな…。

生身でこんな重たい一撃を撃てる人間、俺は知らないぞ…

フェイトさんにしろシグナムさんにしろ、どちらかと言えば技巧派
だ。

こり、単に重い一撃、というのは逆に厄介だ。

余計なプレッシャーを掛けられる。

これをくらつたらどうしよう、とかそういう相手を恐怖させるのこの十分な一撃だ、と思う。

恐怖は相手の動きを鈍らせる。

それが生死を分けるのであればなおさらだ。

「はあああああーー！」

キンー！

だが俺は下がらない。

いや、下がれない、と言った方が正しいか。
はるか後ろにはフォワード陣。

…何も言わずに俺の意図を察してくれたようだ。

恐らくゼストの実力を把握したであらうティアナの指揮の下召喚師と融合機を俺たちから離れたところに
引きつけ、互いにかなりの距離が出来た。

だが、相手はランカー、この程度の距離、油断すればあつといつ間に詰められる。
だからこそ、下がらない。

前回は使えなかつた氷魔法も駆使して時間を稼ぐ。

前回使えなかつた理由は簡単。

森の中で障害物が多かつたからだ。

ここでは余計な障害物はないし、しかも下水道だから汚いが水は豊富だ。

はつきり言つて俺の場合、氷を作るより、あらかじめ存在する水を使って氷魔法を使つて使う方が得意だ。

だからこそ、いつもより威力が高いし、早い。

「…それが貴様の本来の戦い方か」

「まあ、ね…前回はちょっと見苦しいところを見せてしまつたが

そう、俺は剣技、魔法、いずれかのスペシャリストになることはきつとない。

フォワード陣からすれば高い技術を持つて、自分で言つのもなんだがそれなりに頭脳を駆使して相手を倒す、と言つたところだ。

…そう、結局才能と言つた部分ではティアナではなく、俺の方が一流、ということだ。

…ここが限界、とは認めたくはないのだが…。
上には上はいくらでもいる。

なら、自分は人とは違う道を、と模索したのが俺の戦闘スタイルだ。

…昔の‘仕事’もその戦闘スタイルが影響してしまつたのだが、そのあたりは今考へてもしようがない。

「かつての英雄としちゃ俺の戦い方は気に入らないかもしねえ。

はつきり言つて俺の戦い方は…汚い」

「…」

「けどよ…あきらめるような真似はしたくない」

「だから…汚くてもいい。卑怯でもいい」

生きることを…あきらめたくない。

それはアイツが -

(どうしていつもトールには敵わないのかな~)

(そりやあ汚い戦い方してるからな。レイミのようにな力で無理やり
じゃねえのよ)

(ちょっと…それ…私のことバカにしてる?~)

(んなことねえよ…単純に実力ならレイミの方が上だつてことだ。
な?オーバースランク)

(む~それは魔法の最大威力の話だけでしょ~?)

(まあ…こんな戦い方しか知らないし、小賢しいと言われてしまえ
ばそれまでだな)

(でも…私はトールの戦い方…好き…かな)

(は?)

(だつて会つた当初はこんな俺なんかどうなつたつていい~、みた
いな感じで突貫するだけだったのに…、必死で生きようと考えてく

れた結果だもんね）

（…まあ…そう…だな…）

（…？）

『まつたく…お前と一緒に長く生きていきたいから、なんて恥ずかしくて言えねえよ…』

肯定してくれた戦い方だもんな！－！

「…何、否定はせんよ」

「…は？」

「むしろ眞に入った…」

そう言って踵を返すゼスト

「あ、おいー？」

この状況で仲間を見捨てるのか？

…遠くから確認したが、リインがどうにか間に合ったみたいだ。
融合機、それから召喚師ともに捕縛出来たみたいだ。

「何、今お前が考えていろ」とは特に心配しておらさん

…何か隠し玉があるのか？

「それには…一つ忠告してやるが…」

ゾクッ

なんだ…」の…

「！」のままだと…」

嫌な予感は…

「お前は…」

これは…ティーダの時と同じ…

「大切なものを守れなくなるぞ？」

「この状況で一番危険なのは……

「ヘリが危ない……」

sideクアットロ

さて、準備万端
あの冷装の断罪人を出し抜いてあ・ん・さ・つ が出来るなんて！
あ～、楽しみだわ～

「さ、ディエチちゃん」「
…わかった」

う～ん、相変わらず、じつにわね～
ディエチちゃんのカノン砲は。

狙いは～、あの海上を飛んでるしょぼつちへりこしましょ～う

ふふ

ちよ～つとばかしドクターが手を回しましたから、ティエチちゃんの力ノン砲を防げるものはおりませんわ～

「…魔力…集束…50パーセント」

「あ～、楽しみ」

早く見たいですわ
ヘリが碎け散ると

sideはやて

「なんやで！？」

『聞こえなかつたか？高町一等空尉のリミッター解除は許可しない』

『そんな！！あの魔力砲を防ぐには限定解除せな…』

『ともかく…！解除は許可しない…！以上だ…』

そつと音で通信を切られてしまった。

「なんでやーー！」

「これじゃ…みすみすへりを…シャマルを…ヴァイス君を見殺しにしてしまつやないか…」

『…大丈夫だよ…はやてちゃん
「なのはちゃん…まさか…』

あかん！…それは…！…
そんなことをしたら…

「無理や…！…いくらなんでもつ!!シター付をじや
『大丈夫…私がなんとか…守るから…ーー』

「なのはちゃん…！…なのはちゃんーー？」

私は…、また…守れないんか？
リインフォースのように…また…目の前で大切な人を…失ってしま

「なんか……？」

「P.T.S.なのは

……うそ。なんとか間に合つた。

……いやせせ……細々……顔と寝ねつになつて……フヒトイトナガスレモ……
はやじわやこにも……怒られねやうね。

ヴィータちゃんは……8年前と回じく怒りやがやうかな？

ティアナには……無茶をすんなんと黙つておこで……自分が一番無茶
しちゃつた。
そして……

「トル君……」

「ハハハだるいへ。

いまだになんでかわかつてないけど…
トール君のことが頭から離れないや…。

あなたは…こんな私をどう思いますか？

愚かだと…思いますか？

…もし…生きていたら…私を叱ってくれますか？

そろそろ…だね…

はるか遠方からでもわかる、強力な魔力。
リミッターがなければたぶん防げると思つけど…

ないものねだりをしてもしじうがない、か

そして、圧倒的な魔力の塊が私の前に迫り、
私は今出せる全力でシールドを張る。

そして激突したと思つた瞬間…

全ての音が、色が、私から失われていくと、そう、思つた…。

sideトール

「この魔力は……！」

ゼストが撤退したため、フォワード陣に捕縛した召喚師達を任せ、一足先に地上に出たところで遠くのビルから圧倒的な魔力がヘリに向けて発射されるのを見た。

そして……ヘリの前にはなのはさんが……

「嘘だろ……？」

上層部と部隊長の通信を聞いていたが、なのはさんのコマッターは解除されていない。

「無茶だ……！」
「ままだと……なのはさんは……死ぬ……！」

そつ思つた時、自分の中で時間がゆっくりと、凍結、それでいくのを感じた。

ゆっくりと目を閉じる。

一呼吸、二呼吸…

そして再び目を開いたとき。世界が灰色に変わっていた。
音もない。

そして…へりに向けられて発射された魔力砲は途中で停止していた。

これが俺の切り札

時間という概念を、凍結、させること。

普段、俺が氷魔法を得意としてるのはこの、凍結、の副産物にすぎない。

もつとも…時間凍結の副作用として

凍結させている間は飛翔以外、魔法が使えない。

さらに、時間凍結中は自分と自分の所有物以外を動かす、または攻撃することができない。

フリー・ライトとか
フレースライトとか

つまり時間凍結を行つたからといってそれで敵を倒すことは出来ない。

しかし、EVEでの目的は敵を倒すことではない。

そう、高町なのはを……田の前の少女を助ける……!!

なのはさんの前に立つたところで時間凍結を解除する。そして…海上から水を抽出し、全力でシールドを張る。

ג עיר עיר עיר עיר -

俺もリミッターが掛かっているが……

海水を利用して、シールドの厚みが増している。

「……はあ……はあ……はあ……」

なんとか…防ぎ…きつたか…

「え…！？ トル君！？」

ああ……なんとかなのはさん……守れた……か

けど…悪い…もう…限界…ぽい…

そのまま俺は意識を失い、海へ落下していった。

第19話 戦闘機人 そして 中編（後書き）

19話終了ー！

感想が増えてきました

読んでいただいて本当にありがとうございます
駄作ですが…これからもお付き合いください。

なるべく返信はしますのでごしごし送ってくださいーーー！

第20話 戦闘機人…そして… 後篇（前書き）

後篇

ようやく、彼女、初登場！！

s.i.d.eなのは

守りきれない。

目の前の魔力砲はリミッター付きで、一人で守れるほど優しいものじゃなかつた。

けれど逃げられない。

逃げればヘリの中のシャマルさんとヴァイス君、それにあの女の子…多くの人が犠牲になつてしまつ。

私はいいからせめて田の前のヘリだけでも、やつ捕つて田をつぶつた。

…それで私は死んだ。

…そう、思つていたのに。

「はあ…はあ…よかつた…」

その声は私のすぐ田の前から聞こえてきた。

そう、最近私が悩む原因となつてゐる、彼の声。

「……え……？」

そんなことはありえない。
だってトール君と私は離れたところで別の任務をこなしていたはず。
しかも魔力砲が発射される直前まで付近にはトール君はおろか魔
力反応一つなかつたはず。
なのにどうして…

「間に……あつた…」

「ト、トール君！？」

そう言い残して海へと落丁していくトール君

あまりに突然ことで私の反応は遅れてしまった。

「た、助けないと…」

このコミッターがもどかしい。

コミッターをえなければすぐにでも助けられたのに。

届かない。

あと海面までもう少しこうといふで…

‘彼女’は現れた。
トール君を抱きかかるかたちで。

s.i.d.eレイン

「...」は...

そり...私はドクターの命令でレリックの回収に行つたはず。
なら...どうして私は海上に...?
それに...どうして私はこの男の人を助けたのか...

「.....」

(君が...トール君?)
(大丈夫　お姉さんに任せなさい　)
(え~、どうしてそういうこと言つの~?
(もうトールひどいよ~)
(好きだよ...トール...)
(トール...)
(ねえ...トール...)

「う……」

今のは……

私の……？

いや、私の……オリジナルの……？

ありえない。

だつて彼女は……

「……そう……彼女は彼女、私は私……」

なら……どうしてこの男を離すことができない？

彼は敵……

なら……」「いや……

「あなたは……？」

……！

ドクターに聞かされた……！

彼女は……高町なのは……

今回の最大の……脅威……

「私は…戦闘機人…番外…コードネームレイン…」

「…………」

驚いてる…。

無理もない…。

だつて…戦闘機人は…そちらのタイプゼロしかいないと思われているんだから…。

…本来なら…ここで彼を人質にとつて高町なのはを撃破するのが…最良。

…でも…なぜ…?

なぜ私は…こんなにも悲しいの…?

「…………」

気が付けば私は彼を高町なのはに投げ渡していた。

私は…一体…なんなの…?

「…………私は…」

そのまま立ち去る私を…高町なのはは茫然と見送っていた…。

sideクアットロ

あら~?

色々と失敗ですわね~?

レリックケースはセインちゃんがうまく奇襲で奪つて…
お嬢様…はトーレ姉さまが抑えてくれたようですがれど…

ヘルモ高町なのはも一気に撃墜させる一撃両得でしたはずなのに…
あ、聖王さまは恐らくあの状況でも無事だと思いますわよ~

でも…冷装の断罪人が一瞬で現れるなんて…
まだまだ隠し玉はあるということですわね~

それはそれとして…最大の失敗は…
レイン…彼女のことですわね~

「彼女と冷装の断罪人とは…直接は関わりはないはず…なのに」

どうして助けたというのかしら
もしかして…彼女の中の遺伝子が?

そんなことってあるのかしら…

いずれにせよ戻つたら更なる改造が必要ですわね…

一度とこんなことがないようだ…ね…

あら~?『ディエチちゃん、どうしてそんなに怯えているのかしら~?

「クア姉…笑顔が怖い…」

…あらあら…これはディエチちゃんにもお仕置きが必要かしら~
安心なさい…痛くしませんから…

クスクスクスクス…

s.i.d.e-ツール

「…………痛…………」

：：：また医務室か……

最近任務のたびに医務室行きな気がするのだが……

「あい？お田覓めかしり……」

「あ、シャマルさん……」

：：：毎度申し訳ない……

「すいません……最近お世話になりっぱなしで……」

「いいのよ……あなたがいなければ私も……なのはぢゃんも死んでいたわ……」

恐らくそうだらう……。

それにしてモリモリッター付きでの魔力砲の前に立ちふさがるなん

て無茶するものだ。

…思えば…あの状況下でもコニッターの解除は許可されなかつたのか…

いや…こゝは手を回された、という方が正しいな…

広域次元犯罪者…スカリエツティ…か
相当用意周到な奴だ…

「あ…」

「どうしました…？」

「起きたらやんとなのはやんにお礼、壇つてしまへるべのよ」

…そういえばお腹の部分がやけに重い…て…

「すう…すう…」

うわ…もしかして…と看病してくれたのか…?
なんか申し訳ないな…

「うふふ…若こいついいわね…」

「…?」

いや……シャマルさんも十分に若い……ていうか見た目なり俺より年下のまなんだが……

……やめよひ……女性の年齢にシッコリをこれたら危険なのはレイミで証明済みだ……

まあアイツは実年齢・10くらこの精神年齢だったが……

「…………」

なんだ……寝返りか……
にしても……こうしてみると普通のかわいい女の子……だよな。
あんな魔砲ガンガン撃つてるのが信じられないな……

「……」「…………」

な……なぜここで俺の寝言が……？
う、なんとか知らんけどす……気になるんだ

「……どう……そんな無茶ばかりするの……無茶しちゃ……めーなんだ
から……」

め～て…め～てそれ…

ヤバい…なんだ…この…無邪気な笑顔は…！…？
とにかくにも…癒される…！…！

はつ…！…いかん…！…！

思考停止思考停止…！…！

「はあ…なんか面白くないんだけど…」

「あ…すこません…」

う…そういうえばシャーマルさんもいたんだった…

「それにしても…」

「はい？」

まだ何があるんだろうか…

「あなたを助けた彼女は一体…何者なのかしら？
「え…？」

あれ? なのはせんが助けてくれたんじゃなかつたのか? ...?

「ええ.....」の女の子なんだけど....」

そう言ひてモーターを開けながらシャマルさん
そこに止ま.....

「え.....」.....! ?

氣絶して海へ落ちていく俺とそれを追つなのはせん。
そして....

「そんな.....バカな.....」

着水寸前に俺を抱きかかえて助ける...彼女....

「どうして...お前がいるんだ.....」...「...」

レイ//・アークディルが尋ねていた。

第20話 戦闘機人…そして…後篇（後書き）

20話終了

節回。いろいろと、ね

第21話 居場所（前書き）

21話)

彼女の存在を知ったトール君はどうするのか……？

第21話 居場所

s.i.d.e トール

な……なんで……あいつが……

だつてアイツは……

「トール君、知っているのね……？ 彼女のことを」

……いや……レイミだなんてことはありえない。
なら……アイツは……誰なんだ……？

「トール君……教えて。 彼女は一体……何者なの……？」

「……」

「……トール君……！」

……言えない。

言えば間違いなくこの人を……いや、この人たちを確実に巻き込むことになる。

それだけは出来ない。

俺のコトに……首を突っ込ませるわけにはいかない。
……どうしてだろうな……こんなに人を巻き込みたくないと思つようになつたのは……。

以前からやうだつたかもしれないが、この人たちほど巻きませたくないと思ったのは初めてだ。

いや……ずっと気がつかないフリをしていただけかもしれない。

……ここが、大切な場所なんだつて。

この人たちが大切な、本当に守りたい人たちなんだつて。

甘えてしまつるのは簡単だ。

レイミのことを話せばいい。

その上で、アイツを……いや、アイツの姿をした何か、を倒す。
でも……そこには必ず誰か犠牲になつてしまつ。

管理局の闇は、何の犠牲もなく払えるほど浅いものではない。

だからこそ……この人たちを巻き込むわけにはいかない。

「……すいません……。言えません……」

「どうして……!?」

「……すいません……」

この場所が好きなんだつて……今更気付くなんて……

この場所を……守るために……

俺は……

俺はわき田も振らず逃げ出した。

後ろで…、必死に止めるシャマルさんの声を聞きながら。

sideはやて

「…つまり…トール君は彼女のことを知っている、とこりわけやな
「ええ…」

シャマルからの報告を聞いて、いろいろと考えさせられたことがあ
つた。

一つはこれからのこと。

あのような極限状態ですらリミッター許可が下りないということは、
なんかしらスカリエツティ側から手を回されている可能性が高い。
クロノ君に頼んでこちらの権限でリミッター解除できんようにしな
ければならない。

…そしてこちらがもつと大きな問題。

トール君のこと。

…彼女が何者かはしらん。

けど…彼女は…トール君に深いかかわりのある人物とこりうことや。

けれどトール君は彼女について話す「」とを拒んでいた。
「…どうすればいいんや…。」

『…はやでか』

「ん、久しぶりやねクロノ船」

…とにかく…解決出来ることを一つづけていかなあかんな。
もう思つてクロノ船にコリッター解除について相談することにした。

「…とにかくとなんやけど」

『…なるせや…。それでは」からいこうとやめられてしまつ。』
ぬれこもるし、その点はなんとかなりそうだ』

310

「…ハハハ…元気がないようだがどうかしたのか?」

『…ヒーヒー…元気がないようだがどうかしたのか?』

…あ…、それほど元気がないよう見えたんかな。

…トール君のこと…私もそんなに気にするよになつたんやね。

「ん~、まあ…部隊のことと、ちよつと…ね」

『…それはもしかしてトールの「」とか?』

……クロノ君がどうしてトール君のことを見つけるんだや……！

「クロノ君は……トール君のこと……知つとるん？」

『ああ……まあ……昔からの友人、と言つたところだな。ちなみにトールを六課に入れるよう手を回したのも僕だ』

「それは……なんとも……」

相変わらずの暗躍ぶりやな。

まあそれはそれとして。

「なら……彼女、のことも知つとるんか？」

『……彼女？』

……問題の映像を写した瞬間……クロノ君の顔が驚きに変わった……

『……バカな……どうして彼女が……』

「クロノ君も知つとるんか……！」

意外なところで繋がってきた……！

これでトール君のこともなんとかなるかも知れない。

「頼む……教えてくれんか？」

『……それは……』

クロノ君は黙たして自分が教えてもらひのか?と悩んでいるようだつた。

「……それほどまでトール君にとつて重要なことだつて」とか。

「お願いや……トール君を救うには……」

『……そうだな……それしかない、よな……』

「……お願い……私たちにも……、教えてほしー」

あれ……なのはちゃんとフロイトちゃん、それにフォワード陣まで……
「トール君が苦しんでるとき……何もできないなんて……悔しいし」
「……トールさんは、兄さんの……親友ですから……」
「トールさんがいなくなるなんて、嫌です……」

あんたら……

『ふう……しうがないな……君もそれでいいな?トール』

……え?

「……まつたく……黙つておひつと黙つたのに……」

振り返れば入口の付近にトール君の姿があった。
右手に封筒のようなものが見えるけど…

…ホントに勝手にいなくなるつもじゅったんか…。
そんなこと…

「勝手に私たちの前からいなくなるなんじ」と…私はゆるむくんが
らな…」

私はトール君から封筒を奪い取り、中身を確認し、そのままビリビ
リと破り捨てた。

『…相変わらず不器用だな？君は』
「…ほつとけ…」

あれ～？なんや照れてる？

「ん～？なんや顔真っ赤やで？」

私はわざとトール君の顔を覗き込む。

大概の男の人は上田づかいの形になる。

ふつふつふ…ハ神はやて必殺の上田づかいやで～？

ほ～ら顔逸らした
なんやかわいいな～

「…だから意地が悪いんですよ…部隊長は…／＼」

グハツ…！

なんや…年上に言つのもホント失礼やけど…」の人…意外にかわい
いとこあるで…？」

「は～や～て～ちゃ～ん?
「な、なんや…」

うわ…なんかのまちやんとフロイトちやんとシャマルとトライア
ナの田が笑つてない…
す〜」怖い…
うひ、消されんよつに引っ込んだ…

sideトール

「…本当に…いいんですか…？」

「…何がや？」

…本当に巻き込んでしまつていいのか…？
この人たちを…

「これから話すことは…美談でもなんでもない…それに…知ればもう後戻りは出来ませんよ…？」

「……」

…本当のことを言えば…俺は話したくない。

…確実に俺の評価は変わる。

俺が‘人殺し’だつてことを…

「いつかティアナとスバルには話したかもしれないが、それだつてティーダに関することだけだ」
「ええ…あの時に私が欲しかったのは…兄さんに関することだけですから」

それだけでもまだ… いろいろと話していくこともある。

「… 覚悟は…あるか…？」

「 「 「 「 「 ……おうおう…」 」 」 」 」

…ふう…しうがない、か…

『……心配いらないよ、トール』

「…ひいせいひのうだ」

…なら…話すとしようか…

…過去に…決着をつけるために…

俺の…、俺たちの…未来のために…

第21話 居場所（後書き）

21話終了

次回、過去話～レイミ編
お楽しみに！！

第22話 彼女との過去（前書き）

誤字修正しました。

第22話 彼女との過去

sideトール

…今日も…、仕事…か…
だが…逆らえればリムルは…

両親が任務中の事故で亡くなつて…、リムルを守ることが出来なくなつてしまつた。

もともと俺の魔力変換資質に注目していた上層部は俺を自分たち直属の暗殺者にしようとしていた。

両親は当然反対した。15かそここの子供にやらせることではない、
と

その両親が事故で死んだ。
いや、殺された、と言つた方が正しいか。

これが奴らのやり方。

俺は怒りを憶える以上に恐怖した。

このまま逆らい続ければ次はリムルだ、と。

これ以上家族を…大切な人を失うわけにはいかない。
だからこそ…俺は膝を屈した。

本当は…殺しなんかしたくない。

でも…殺さなければ…リムルの命はない。

だから…人を殺す時…一切の感情をなくすようになつた。
そうでなければ、人を殺すことには耐えられないから。

そして今日も…殺しの仕事が始まる

sideレイミ

新暦67年

「隊長…これは…！？」

「ああ…我々が独自で入手した冷装の断罪人の情報だ」

隊長から手渡された資料の中には、近年、多発している変死事件の容疑者となつてゐる一人の少年の情報が載せられていた。

事件の内容としては、1時間前まで普通に生活していた者が全て冷たくなつた状態で発見される、このようなことが数回続いたのだ。

当初、捜査は難航し、そのことに上層部は難癖をつけ、担当を変え
るとまで言つてきた。

そのため私たちは不眠不休で捜査を続け、一人の少年が捜査線上に
浮かんできたのだ。

トール・シュライター等空士

内偵調査によると最近、彼は両親を亡くし、妹と一人暮らしとなっ
たようだ。

そして更に事件が起こり始める直前から帰宅が深夜に及ぶことにな
った。

管理局の就業規定では18歳未満の勤務は通常、深夜に及んではな
らないとある。

その彼が深夜にまで勤務をしている内容もまた、上司は未把握であ
るといつ。

そして…彼は氷の魔力変換資質持ちであるといつ。

氷の魔力変換資質持ちは管理局内でも数えるほどしかないとため、彼
が捜査線上に浮かんできたのだ。

「うーん…見た目は普通の少年っぽいんですけどねえ…」

つていうより…この子…幼い…

「Iの少年のIと上層部もまだ報告していない。明日からIの少年の行動確認を行っていくからな。レイミ執務官」「はい

side-table

今夜のターゲットは…

2ヶ月ほど前、脱税や収賄で連日雑誌やテレビを賑せたIの男だ。

上層部の指定するターゲットは大抵、ちょっとした犯罪まがこのIとをやる小悪党や上層部に反感を持つ者が多いくらいで自分たちが正義と言わんばかりに。

陰ではこんなことをやっている…

何が正義だ。

そのへん自分の手は必要と嘘つてここに遊びに来たりはない。

…だが…せひなきやいかなこんだ…せひなきや…

そして……今日も……感情を殺していく……

sideレイミ

「動いた……」

あつてほしくないと思つていた。
でも……彼は動いた。
自宅ではない方へ。

「ホントに……彼が……？」

そう考えている間にも彼はどんどん進んでいく。
そして……一軒の屋敷へとたどり着いた。

「この家って……」

間違いない。

2ヶ月前、脱税や収贿の疑いが掛けられた男の家だ。
連日週刊誌やワイドショーでも映つてたから間違いないよ。

彼は慣れた動作で塀を乗り越えていく。

私もつて…

「うひ…ちょっと高いよ~」

近くまで来たところで思ったよりも高ここと思った。
魔法で飛んでもいいんだけど
魔力を察知されても厄介だな~

「うひ…地味に塀をよじ登るしかないか~」

みつ…まつ…

「とひひひへく

え~っと彼はもう入口近くまで行ってる…。
この屋敷、セキュリティシステムないのかな。

「おじやましまーす…と

「うひ…これって立派な住居侵入だよね…?」

中には何か立派な壺や絵画、騎士の甲冑といかにもな物がいっぱいあるけど。

「彼はもつと上に行つたのかな…？」

「へこいつしてこる場合じゃない！」
早く止めないと…

ガシャアアアアアアアン…！

「今のは…近い！」

side-トル

「なんだ…貴様は…！」

…なんだ…気付いてしまったのか…

そのまま寝ていれば静かに終わらせたのに…

「…別に…名乗るほどの者じやなこそ。ただ…貴様を殺しに来た者だ」

手元の刀を握りなおす。

男も壁に立てかけてあつた銃を手にする。

距離はやせぬない。

この距離ならすぐここでも届くが…

「死ね…！」

男が銃をこちらに向けて発砲する。

撃つ直前、腕が震えているのがはつきりとわかった。
そんな腕ではまっすぐ当てることがなど出来はしない。

ガシャアアアアアアアアン…！

「ちつ…！」

思つた通り、弾は俺に当たらず、俺の左にある壺に当たつて砕けた。
男はさうこいつに銃を向けるが、

「ぐあっ……」

刀で銃をはじき飛ばす。

そしてそのまま斬りつける。

「あ……あああ……」

……思つたよりも浅かつたようだ。

まだ息がある。

だが、もう歩くことができないのだろう。

這いずりながら逃げようとする。

俺はどごめを刺すべく刀を振り上げたところだ……

後方から魔力を感知し後ろへ飛んだ。

「……………！」

さつきまで俺がいたところに通り過ぎた雷撃。
威力だけなら俺より間違いなく上だ。

「はあ…はあ…」
振り返ると広い寝室の入口に黒髪を腰のあたりまで伸ばし、白を基調とした隊員服によく似た上着にショートパンツ姿の女がそこにいた。

この男のボディーガードか?
それとも局の魔導師?
いずれにしろ…邪魔をされるわけにはいかない…。
出来れば…殺したくないが…

s.i.d.eレイミ

「ライトニング・ブلاスト!..!..」

雷を纏つた魔力球を多数展開し、彼に向けて撃つ。
通常の魔力球ならばじき返すなり斬るなりすれば対処できるものなんだけど

「…くつ…！」

彼は大きく飛んで避けた。

私の魔法の意図に気が付いているようだった。

「ん、一発でも防御してくれていれば楽だつたんだけど…」

そう、斬るなり防ぐなりすればそれで決着は着いた。

この、ライトニング・ブラスト、は一発一発に触れれば人を一時強制的に麻痺させる効果を秘めているから。

そこにすぐに気付いた彼はさすがといふべきか才能の高さをうかがわせた。

…そんな彼がなんでこんなことをするのか…

わからない、けど、話し、しなきゃ…

大きく飛んで回避した彼はその勢いのまま私の方に突っ込んできた。私もそれに合わせて後ろに飛びぶ。

私の槍術は接近戦にはあまり向いていない。

いや、やれりと思えば出来るけど、後方からの戦闘が私の真骨頂だから。

それにもともと槍術は超近接戦闘ではどうしてもリーチの長さが逆に邪魔をして剣技に劣る部分がある。

だから、私からは接近しない。

彼はどちらかと云つと恐らく接近戦向きなのだらう。ある程度の距離を保けつ切り結ぶ。

やっぱり…この子…才能あるよ。

今はまだ私にも届かない。

けど…成長すれば間違いなく管理局屈指の実力者になれる。

だから…こんなこと…止めなきや…！

そう思つていたところで…

彼に斬られて這いずるように逃げ回っていた男が、床に転がっていた銃を再び手にし、

彼に向かっているのが見えた。

「ダメ……」

sideトール

その声に反応したのか、男はわずかに体を震わせ、俺から狙いが逸れてしまった。

ガシャアアアアアン！！

男が撃つた弾は酒の瓶に直撃し、中身が飛び出してきた。
そして酒はすぐ下にあつた蠅燭に掛かり…

「なっ……！—！」

あつといつ間に燃え広がった。

もともとこの屋敷は古く、燃えやすい素材でできていたのだらうか。

「ひつ……！」

判断に迷つた。

この男を殺してから脱出するか…それとも…「J」のまま逃げるか。
…しばらく迷つてしまつた。

それがいけなかつた。

「…「J」の魔力反応は…!…」

この男は違法にロストロギアを保管していたのだろう。

火力が更に増してきた。

もう…時間がない。

…そういえばあの女は…

「いた…!…」

どうこうわけかわからないが…氣絶していた。

そして…どうしてかわからないが…「J」のままにしてはおけない、と
そう、思つた。

俺は彼女を抱き抱え、炎で割れた窓から一気に飛び出し、屋敷から
脱出した。

「なんで俺は……」

この女を助けたのか？

わからない……でも……悪い気はしなかつた。

それに……この湧き上がってくる気持ちは……？

適当なところで降り、彼女を近くのベンチに降りす。

しばらく彼女の寝顔を眺めていた。

「……綺麗……だな……」

普段の俺なら絶対言わないことをつぶやいてしまったことに自分で困惑する。

「……帰るか……リムルが心配する……」

そして俺がベンチから離れようとしたところ

「つかまえた」

そんな呑気な声が聞こえてきた。

気付けば俺は彼女に腕を掴まれていた。

「……なつ！－」

「こひひ～もう離さないよ～」

無理やり引きはがそうとしたところで…

「…ぐあつーー」

電撃が流れ込んできた。
耐えきれず崩れ落ちる。

そして氣を失う直前に見た物は…

…いたずらに成功したような嬉しそうな顔をした彼女の姿だった。

ちくしょひ…やられ…た…

-これが俺と彼女、レイニ・アーカーティルとの出会いだった。

第22話 彼女との過去（後書き）

「さ、今日はトーク形式でいいで」
「はあ……」
「なんやトール君、ノリ悪いな～せつかくこんな美少女が目の前に
あるんやから」
「…ソウデスネー」
「…うひ…トール君が冷たい、ってシグナムに泣きついてこよしきか
な…」
「や、やめてください…」
「ん～、やつぱりトークには向いてへんな自分」
「自覚はあります…」
「さ、とにかく特訓やー！まあ今回の話じょーとーる君と彼女との出会い
いやつたけど…こんな性格なん?」
「…ええ、頭のネジが2、3本常に緩んでいますね」
「で、トール君はそんな彼女を好きになつたと」
「／＼／＼ええ…」
「映像見たけど美人やね～」
「実は彼女の方が4つ上なんです」
「ほつ…トール君は年上好や…と、後でシャマルに報告しておいつ。
あつと喜ぶで～」
「…？」
「まあええ、といあえず今回まじまじまで、また次回や」

第23話 彼女との過去 2（前書き）

過去編2話～

sideトール

……これは…病室か？

たしか俺は、‘仕事’をしてて
そうだ、たしかあの女に…！

「…本当に申し訳ありませんでした。お兄様が…」
「…あはは、リムルちゃんが気にすることないって

……あれ？リムル？

「お、よひやく気が付いたようだね～」
「…」

……なんだ、この状況は…
どうしてリムルまでいる？
そして…なんで俺は…

「どうして…俺は逮捕されていないんだ？」
「ん～？それはね～」

「私から説明いたしますわ、お兄様……ですがその前に……」

そういってリムルは俺の前まで近づき、

パン――！

「つて……！」

思いつきり平手打ちされた。

「大体のことは」の方から聞きました。……その上でお聞きします。
……一体……何をなさっているんですの！？」

……全部、知つてしまつたのか……。

でも……もう後戻りは出来ない。

「……」

「お兄様――！」

……どうして「イツを連れて来たんだよ……。
……『イツに話しあつたんだよ……。

俺がしたことは…俺が全て責任を取る。

コイツは関係ないはずだ。

そうじやねえのかよ…?

「…お前には関係…」

「あるよね?妹さんのためだもん」

…「マイシ…ー!

「勝手なことを言つたな!!これは俺が一人で勝手にやつたことだ!!俺は人を殺したんだ!!死刑にするならすればいいだろ!!」

…頼むから…これ以上余計なことを言わないでくれ…。

全部、元はと言えば俺さえいなければよかつた…。

そうすれば…親も死ぬことはなかつたし、妹を危険に晒すことはなかつた。

俺さえいなければ…。

だから…これ以上妹を傷つけないでくれ…。

「…まだ…そんなことを言つていますの…ーどうしてお兄様はわかつてくださいないんですの!?私が…ホントに何も知らなかつたと思っていますの…?」

……なん……だつて……？
リムルが……知つて……いる?
一体何を？

「お兄様が上層部の意向に従わなかつたから、お父様、お母様が事
故に見せかけて殺されたことぐらい、調べればすぐにわかることがで
すわ……それに……私自身も命を狙われたことがあるのですよ……？」

……あいつら……既にリムルまで……！
これだから信用ならないんだ……！

「その時はすぐに気がついて何事もなく助かつた。でも、両親が亡
くなつてすぐのことですから、さすがにおかしいと思いましたの。
‘事故’を起こしあうとしていた連中の内の末端の男を締めあげたら
すぐに教えてくださいましたわ……」

「自分たちは……トール・シュライアトを自分たち直属の暗殺者に仕立
て上げるつて……」

……そつか……全部……知つてしまつたのか……

「……こつかは話して貰ひたかったと思つていたのですが……でも……なかなか

かお話しへなってくださいなかつた…だから…」の方から話を聞いたとき、もうおしまいだ、って思ったのですよ…？」

「…いつ言つと、リムルは急に俺を抱きしめてきた。

「…これからは表情は見えないが、胸元が湿つてきているのを感じるので、間違いなく泣いているんだろう。」

「…俺は…本当に…バカだよな…。」

「…リムルが…何も知らないままのお嬢様なわけ…ないよな。」

「…本当に…本当に心配したんですからね…? もう…」の方へつたことば「一度となさらないでくださいまし…」

「…」

「…わかってるよ…。」

「…でも…これだけは…」

「…俺がしてしまつたことだけは…田を離れるわけにはいかない…。」

俺が後ろで控えていた女に田を向けると、俺の意図に気が付いたのか女が近付いてきた

「…悪かつたな…隨分…待たせちまつた…」
「お兄様…! ? どうして…?」

「…こんなバカな兄で悪いな…」

俺のことは…とつとと忘れてくれ…

「俺を…逮捕するんだろう…? もう…別れの挨拶は十分だからさ…」

そつと手を差し出す。

「え…? 何のこと…? 私は火災に巻き込まれたキミを保護しただけ
だよ…?」

「…は?」

「…ふざけないでくれるか? 僕がしたことは…」

「だから…よくわかんないけど…、冷装の断罪人は…あの火災で死
亡したのよね…」

「…この女は…一体何を…言つて…いるんだ…?」

「…匕首のよつ… もうやつこつ報告書書いて提出しちゃった

……！？

「…匕首二つもりだ…！？」

「まあ… そうでないと困っちゃうのよ… 冷装の断罪人は… 公式ではこの事件で死亡扱い。あなたはただの一等空士になりましたーっとね」

「… そんなのが… 上層部にまかり通るわけないだろ？… リムルのことば匕首あるんだ…」

そうだ… こんな報告は上層部が納得しない。

俺が生きている限り… 冷装の断罪人として奴らは接触していく。

例えリムルを人質にしても… !！

「ん~だから~ 一人纏めて私達が面倒見ちや おつかな~って思ひの」

「…ええ！？」

リムルまでびつくりしている。

当然だ。リムルはまだ訓練校すら行っていないんだぞ… ？

「リムルちゃんのことなら… 大丈夫よ… ね？クロノ君？」

『ああ……心配いらない』

モニターに現れたのは、いかにも自分エリートです、と言わんばかりの優男だった。

「あんたは……？」

「クロノ・ハラウォンだ。アースラで勤務している」

アースラって言つと…あのP・T事件や闇の書事件で活躍した航空艦だよな…

そここの責任者クラスつてことは…相当の実力者つてことかな

「…それで、そのクロノさんが一体…」

『まあ…事情が事情なのでな…少々汚いとは思うが…君たち一人に対して手を回させて貰つた』

…一体どんな手を使つたんだよ…すごい不気味なんだが…

「まー、クロノくんつてば相変わらず汚い！？」

『…狡猾と言つてくれ。まあ簡単に纏めるとトール君、君はただいまより、このレイミ・アークティル執務官の補佐をしてもらつ

…は？

この女の補佐？

一等空士がいきなり執務官補佐？
できるのか…？

「私は問題ないよ」

『それからリムル君は囁託魔導師試験を受けて、その後私の下で一年間助手として勤め、その後執務官試験を受ける。上層部が絡まないよう』…試験官は公平にさせてもらひつぞ…』

「え…私が…執務官に…？」

…なるほど…アースラなら直接上層部との関わりは来ない。
本部ならともかく、あの艦は乗組員個人にあまり干渉するものではないからな。

「…本当に…大丈夫なのか…？」

「心配ないよ」？クロノくんは結婚する予定だからリムルちゃんに手を出す心配もなし

『ばつ……』きなり何を言い出すんだ…！そんなことするわけないだろう……』

『え…？リムルちゃんってかわいくないの…？興味ないの…？』

『てめえ…人の妹捕まえて…興味ないとはどういうつもりだコラ…！…』

『さ…君まで乗つてくるのかい…？』といつかさつきとキャララが変わ
りすぎ……』

うるさい！

つていうかなんか別の意味で信用出来なくなつてきました

「お…お兄様…／＼そのくらいになさつてください…！／＼」

これが黙つていられるか…！

妹の一大事だつていうのによ…！

「わ、私が焚きつけたとはい…トール君…意外にシスコンなんだ
ね…」

「も…もうしわけありません…」

「ブランのリムルちゃんといい兄妹だね」

「ぶつ…！…わ…／＼私は…／＼」

あ～もう訳わからん…！

とりあえず…心配ない…かな？
でも…

「…というわけで～改めてようしきくな？」「
…本当に…いいのか…？」

俺は…何人もの人を…殺したんだぞ…？

確かに奴らにしてみれば罪を犯している人間なのかもしない。

…でも…俺のしてきたことはそれ以上の重罪だ…。

そんな俺が…再び日の下で仕事しても…いいのか…？

「当たり前だよ だつて君みたいな子にあんな汚いところは似合わないもん」

飛びきりの笑顔を見せられる。

：／＼／

なんだろ？…この笑顔を見ると…本当に…大丈夫だつて気にさせられる…。

この人になら…全て任せられるつて…そう思つてしまつ…。

ダメだ…堪えてたのに…もうもたないや…。

いつ以来だつけ…？

人前で涙を流したのつて…。

両親が死んだ時も泣けなかつたのになあ…

「む～…！」

「どうした…？」

「知りませんわ…！」

ブイとそっぽを向かれてしまう。

呼んでも応答してくれない。

「俺…何かしたのか?」

「ん~? やきもちじやない?」

「は…?」

何に対してだよ…。

ホント…訳わからんねえ…。

「で、トール君はしばらへは病院で静養する」と…。

「…なんで?」

…いや、本当は何となくわかってるけどさ。

今までの無茶の分、疲れがたまってるんだよな。

「戦つてこる間にわかつたよ。相当無茶ばかりしてきたって。最近、そうやって撃墜しちゃつた子のこともあるしね

…たしか…噂の囁託魔導師だっけ…?

まだ10歳かそこらでランクAAAを持つてるっていう…。

そんな子が撃墜するんだ。

疲れつてのは本当に厄介だよな…。

「ま、そういうことだから 退院したらみつちり特訓だからね~

」

「その間は私がしっかり看病しておしあげますわ……」

リムルよ……その鬼気迫るオーラはなんだ。
怖いんだが……。

ああ……捕まらない方が……よかつたかも……

第23話 彼女との過去 2(後書き)

「…

「あの…なのはさん?どうしました?後書き始まっていますよ…?」

「ふえ…?あ…!…「メンね、トール君…」

(昔のトール君…ちょっと…かわいい…)

「それで今回はレイミとの過去2話なんだが…」この過去話かなり長くなりそうだな」

「むしろそれで作品作った方が面白いんじゃない?」

「…でもそれってリリカルなのはの世界上のオリジナルって感じになるよな」

「まあその時はその時だよ…作者的には長くなりすぎたら分けるのも検討する必要があるね」

「そしたら番外編纏めて入れる感じだな。今のところ1万ユニーク記念のみだが」

「にやはは…そのうち私達との番外編も作るんじゃない?」

「ヒロイン別…ね。そもそも今の俺を好きになる奴つているのか?」

「そ…そんな否定しなくて…」

(うう~ 鈍感主人公つて罪だよね…)

「まあそんなこんなでもう100人以上お気に入り登録があるぞ」

「すごいよね」作者一次創作は初めて作るつて言つてたけど

「昔ちょっとした小説は投稿したことはあるつて言つてたが

「まあずっと大御所のところを読み続けている内にもう一度書きたくなつたらしいよ」

「だからか、この素人が」

「う…あまり言わないであげて…」

「さて…次回は…レイミとの初任務か」

「うーん、私としてはトール君とレイミさんの恋模様も気になるところだよ」

「…今六課に一人で来るとこらみれば何となく結末はわかるだろ」

「そういうこと言うの禁止…！」

（もうこうじとじやないんだよ…？もつ…）

第24話 彼女との過去③（前書き）

すいません…

更新遅れました。

難産だつたわ～

第24話 彼女との過去③

sideトール

「ただいま……」

ふう……今日もよろしく仕事が終わった……。

新しい職場になつて早くも1年近くが経過した。

最初はやはり今までのことがあったからかレイミ（名前で呼ぶよう言われた）ぶっきらぼうな態度をとってしまったのだが、最近では随分と変わってきたと思つ。ところが……

「あ、おかえり～ トール

……ロビングでくつろいでいるリムルとレイミ。
……ついしてレイミが俺の家にこるのかとこいつと

「「はあー？一緒に暮らすの？……？」

「そ」

「異動の件はわかった。

「俺が、仕事、から足を洗うためのものだつてこいつ」ともな。でもな…

「それでどうしてあなたが家に住むことになるんです！？」
「え、だってリムルちゃんがアースラで一年勤務になつたらなかなか帰つてこれないでしょ？その間トールを一人にさせるわけにはいかないじゃない」

それでビーブーしてあんたが一緒に住むことになるんだよ…！

「却つつ下です！！私がいなくなる代わりにあなたが住むなんて、何か間違いがあつたらどうするんですか！！」
「え、？そんな間違いなんて起こらないよ～？ね？トール？」

そんな答えづらい質問俺に振るなよ…。

「どうなんですかー？お兄様！…」

「なんか怖いよ…リムル…

「い、いや…間違いは起こらないんじゃ…ないかなー?」

「ね、大丈夫だつてば」

そう言つて俺の腕に自分の腕を絡めてくる。
う…な、なんか腕に柔らかい感触が…

ゾクツ…!

「お~に~い~さ~ま~…!…?」

「な、なんだよ…」

なんだ…?」、Jの殺氣は…!…
ちょっと怒りつてレベルじゃない…。
殺られる…!…

「ふん…!…」

「うひ…やつぽ向いてしまつた…。

「僵つておきますが…お兄様に手を出したらホントに承知しません

からね!…?」

「そこは普通僵つ相手が…ちがつんじやないかなー?」

レイ//もひょっと引いてるよ
はあ…どうしてこうなった…?

とまあこいつらのやつだ。

今ではリムルもアースラでの1年の勤務を終えて、
執務官試験に向けて勉強中というわけだな。

俺はこの1年の間に一等空士から空曹長まで階級が上がったわけだ
が…

ま、その間にいろいろ任務とか昇任試験とかあつたけどそこは割愛
する。

「さて 今日の『』飯は何かな？」

「うう…申し訳ありませんお兄様…」

この一人、実は料理が出来ない。

そう、何故か作る過程は同じはずなのに結果として殺人料理が出来
上がってしまう。

それは女性としてどうなんだ。

リムルはまだ子供だからいいとして。
レイミ、あんた言い歳した大人だる。

「はあ…今作るから待つて」

「「わーい」」

ダメだこいつ…

「相変わらずおいしつよ~」

「そうかよ…」

簡単なものばかりなはずなんだが…

まあ、皿をうに食べてくれるのは悪い気はしないな。

「これならどうせ元の嫁に行つても問題なしだね…」

「…まあ」

といつより俺が作るの確定なのか?
誰かと結婚するかどうかはともかくとして俺が料理するのは確定なのか?

「ほつ…？その辺りの話は大分興味深いですね…？どなたかと結婚する予定などお有りなのですか？」

「イツまで食いついて来た…。

結婚…ねえ…？

「別にそんな予定もないし、相手もいなーっての」

「ふうん？」

「なんだ？レイミ… そのちょっと嬉しそうな表情は…。

「… でしたら大丈夫なのですが…だからってこの方だけはやめてくださいね？」

「「ブツ…」」

「い、いきなり何言いく出でしてんだ…！！
レイミも噴出してるじゃないか…。

「うふ…、うふ…え…？」

あれ？レイミの奴ビうしたんだ？

顔真っ赤なんだが……風邪か？

「い、いきなり何言ひの~…?びっくりしちゃうんじゃない…」
「ま、まつたくだ…!」

なんだ…?『氣のせいか…?』

「いえ…何か最近レイ＝さんから不穏な空氣を感じるので…訓練と称してお兄様にいかがわしいことをなさっていいか心配で」
「…は…?」

おま…!いかがわしいってなんだよ…!
別に普通に教わってるだけだっての。

「そんなことしないよ~…!」

「別に普通の戦闘訓練だつ…」

まつたく…どいでそんな知識を仕入れてくるんだよ…。

「はあ～」

いい湯だつたな～。

明日も早いし早く寝ないとな～。

「…………」

あれ？ レイミの奴まだ起きていたのか…

「どうしたんだ？」

「ほえ？」

すゞ～ボ～つとしてただけか…

なんか考えるようなことでもあったのかな…

「う～ん…リムルちゃんとなかなか打ち解けるのが難しいな～って

…」

「ま、アイツも両親を亡くして俺が唯一の家族になってしまったからな…」

その家族を失うまいと必死になるのはわかる…
俺がそうだったしな…。

だからこそリムルにも…、レイミにも迷惑を掛けてしまった。
こんな過ちは…もう犯したくないし、リムルにも間違えてもらいたくない。

「むずかしいな…」

家族つてのは…いつもいろいろ考えなきやいけないのか…
親がいたことは考える」ともなかつたのにな…

「だから…」トールにも協力してもらいたくて
「ああ…」

まあ…せっかく一緒に暮らしてゐんだしな…。

「わかつた。なんとかするよ…」
「ホント…ありがと…」

そつこつて抱きつこへくる。
う…何か柔らかいものが…

「あ～～～まだ起きてこ～～じや…………」

な…………。

このタイミングで……くるか……？

「お…………」

「…まさか盛大な勘違いが…
始ま……」

「お兄様は渡しませんわ――――――」

つた――！

しかも別の方向で。

なんかリムルも別の方向から抱きついてきやがった。
こつちはなんかちょっとつましげ感じが…ちょっと悲しげ感じだ
妹よ…。

「うわ～～。トールは渡さないよ～」

「何を――――！」

「よつと――――！」

「さうして抱きつこないでください――――」

苦しそうに…。

「ふつふつふ~。お姉ちゃんこは勝てないのだよ~」

レイミの奴…めっちゃ楽しんでるな…
まあ…別に…いいかな…。

結局そのまま長時間にわたってこのくだらない遊びを展開し、結果翌日遅刻直前になってしまったのだが…。

第24話 彼女との過去③（後書き）

「さて…今回の後書きですが…」
「おお…今回はティアナか」

「ええ、作者にちょっと…」
「遅れてるからな…」
「仕事と引っ越しを言い訳にするなんて最低よ」
「しようがないんじゃないか？過去話がこんなに長くなるとは思わなかつたっていうのもあるみたいだし」
「その埋め合わせはもうちろん他の話でやつてくれるのよね？」「たとえば？」

「私の…（トールさんとの…）」

「私の？」

「……なんでもありません…（頼むわよ、作者…）」

「肝心の部分はまだ先になりそうな感じだ」

「たしかに…トールさんとレイミさんはまだくつこていない感じですしね」

「後はこないだティアナに話した部分は流し氣味にして最後の肝心な部分、といったところだな」

「そう言えば今回大分間があつたんだけど…」
「ふむ、聞いたところによるとちょっとした小ネタ的な意味でいろ

いろ書いたらしいや

「たとえば？」

「…そげぶ」

「ホントですか！？」

「ああ…クロスオーバーものらしい。小ネタ的に書いたものだから
掲載するかはわからんがな」

「よくそんな余裕がありましたね」

「まあ…気晴らしに書いていたようだし…」

「さて、次回は恐らくレイ＝さんとトールさんが恋人になるとこり
ですね！」

「…なんかちょっと怒つてないか？」

「別に怒つてないですよ…？」

第25話 彼女との過去4（前書き）

超お待たせして申し訳ありません

言い訳は…ありません

第25話 彼女との過去4

s.i.d.e レイ＝

いや～初めはどうなる事かと思つたけど～
なかなかどうしてうまくいくもんだね～
トールにもつとこう…ものすごい反発されるのかと思つたけどそんなことはなかつたんだよ。

こいつしてみるとなかなかかわいい顔してるしね～。
あんまりこいついう恋愛ごとに疎いみたいだし。

実は一回風呂場で着替えてるときにトールが入つて来ちゃつたとき
があつたんだよね～
その時のトールの反応つたら…
こいつ…なんていうの？

ものすごくかわいいの…！

いや～、こんだけかわいい反応されるとなんか…ねえ?
普通こいつちが叫んだりするもんなんだけどね?
あの時はそんな氣も起きなかつたな～

思えばあれからかな～?

なんとなくトールのことがホントに元にならうとなつたのは。

…向こうはどう思つてゐるんだろう?

sideトール

今日は護衛任務か…。
いつもならレイミの方が後に来るんだけど…
今日は何かものすごく早いし…
ちょっと目が赤いな…。
寝てないのか?

「さて、今日はこのイベント会場にて行われるコンサート、この警備をやりつつ歌手達の護衛をしてもらいたい」
「わかりました」
「わかりました」

このコンサートの集客人数はおよそ一万と言われている。

今回、コンサート会場に爆弾を仕掛けるといった予告状が届いていたため俺たちの部隊にも依頼がきたというわけだ。

予告状を出してきたのは最近世間を騒がせている爆弾魔、その犯行前に送られてくる予告状とまったく同じなため、本物であると判断したようだ。

そして今は開始10分前。

既に一通り会場のチェックを終え、客の手荷物、および送られてくる花束などからも爆弾らしきものは見当たらなかつた。

ただ、別の警備班からの連絡によれば会場の客の中に一人、気に入る人物の姿があつた、とのことだ。

その男は爆破事件の際、必ずと言つていいほど現場付近におり、一度管理局の方で任意で調べを行つた男だ。

その時は本人は関与を否定し、更に自宅も本人の許可をとつて調べたが爆弾らしきもの、および事件に関連があるような資料等は発見できなかつた。

しかし、容疑者とはつきりしていないことから会場に入れざるを得ない、と判断したため会場入りを許可。

そしてこの会場の混み具合を利用してか、奴の姿は会場の中に消えてしまつたとのことだ。

気になるのは奴が現段階で爆弾を所持していないのと、警戒員の尾行を撒いたところだ。

「うへ、動きづらいよ~」
「なんでそんな格好なんだよ…」
「えへへ~、かわいい?」
「あー…」

正直に言おう。

綺麗だ…。

今、レイミは何故か「ンサー」に出る多人数のアイドルグループの衣装を着ている。

ところの、先方がレイミを見てこの方法を思いついたらしく。

え、ちょっと待てコイツ…

「お前…昨日寝てなこのつて…」

「うん 曲の練習」

「はあー…?」

バカか!?

どっちが本業だと思つてるんだよーー!

「えへ、せつかく出るんだし、上手い方がいいじゃない
「肝心の警備はどうしたんだよ…」

「大丈夫だつて じゃ、もうすぐ出番だから… つけてわわーー。
「お、おいーー。」

こつちに倒れてきたので慌てて掴んでやる。
ちょっと…意外に重いな…って近い近い…！

Γ Γ
.....
/ /
/ /
/ /
Γ Γ

はつ
！
！

……まだギアギするーーーーー

「ねえ……／＼／＼終わったらひょいと話があるんだナビ……」「ん？」

話？いつたいなんだろ？…

「わかった。終わってからでいいか？」

「うん。もう開始だから行くね！」

「ああ…がんばってこい」

「うん…」

もつてんな時間なのか…

予告じおりならもうすぐなんだが…

…ん……………？

なんだあいつ…？もうすぐ開始だつてのに会場に入りもしないでベンチに座り込んで…

「…くつくつく…」

「…！」

「…くつ…まさか例の爆弾魔か！？

俺はそいつにはれない様、距離をとつとつ様子をうかがう

「もうすぐ…もうすぐだ…もうすぐでの会場が綺麗な血に染まる…

「ふふふ…楽しみだなあ…」

そういうて男は懐から携帯電話を取り出す
どこかに電話を掛けたよつだ。

だが、ものの数秒もしないうちに電話を切ってしまった。

「これで準備は終わった。後は……」

準備の終わり？

まさか……時限式！？

携帯電話が始動の力ギギだったのか！！

くそ……どこだ……？

迷わず俺は会場の中に戻る。

「もしもし、俺だ、今Eの15に入った黒帽子の男から口を離さないよ
いでくれ」

奴が入つていった扉付近の警戒員に連絡をとり、男を逃がさないよ
うにする。
そして俺は爆弾を探す。

気になつたのは奴が言つていた、血に染まる、といつフレーズだ。
爆弾なら炎に包まれるはずだから血、という表現はそぐわない。

なら、何かを落とす、その方が自然だと思つた。
その何か、は恐らく…

「IJの部屋か……」

舞台裏。

ちょうどIJの部屋はステージの真上に位置する。
舞台裏なだけあって小道具なんかを入れた段ボールが多い。
それ以外は、デジタルの時計だけだ。
おやりく奴の考えはこうだ

ステージの真上に位置するこの部屋で爆発を起しきせん。
その爆発の影響で照明を支えていたロープが切れる。
そして証明は支える鉄骨と共にステージへ落下する。
ステージ上は多人数、逃げることは……不可能……

「くそ……見つからない…………」

しかし探し探しを見つからない、
静かなこの部屋に時計の秒針の音が響く

時計の……秒針？

この部屋の時計はデジタルなのに？

「まさか……」

急いで俺はデジタル時計を壁からはがし、中を見る。
するとそこには……

「あつたぞーー！爆弾だーー！」

無線で会場警備全員に流す。

それと共に俺の位置を知らせる。

しかし……

「く……急に退避させるのは無理か」

このコンサートの喧騒に飲まれ、退避命令を出せない。
残り5秒。

もう……時間がない。

爆弾解除の専門官が間に合わないと、

俺は爆弾をそのままに部屋を出た。

爆弾は思ったよりも小規模で、この部屋と周りを爆破する程度の威力しかない、と思った。

だから「いや……下の音を守らないといけない。
でも……間に合わない。」

「レイ//…-.-」

レイ//を……監を……守らないと…-.-

するとその時……俺の周囲から、全ての音が失われていくような感覚に陥った。

「！」……これは？」

音がない？

爆破したのか？

いや、そうじゃない…

「時間が……止まってる？」

とにかく、行かないといけない！

ステージに出ると、全ての人が、止まつていた。

それと共に、急速に周りの音が復活していく。そんな感覚があつた。

「レイミー逃げろ——！」

「え？ 一？ テーブル！ ？」

その時、

卷之三

上からものすごい爆発音が聞こえ、そして……

۷۲

レイミー掛け照明を支える鉄骨が落ちてきた……

第25話 彼女との過去4（後書き）

今回は後書きコーナーはお休みします～

第26話 彼女との過去 5（前書き）

やつと過去話も中盤にて…

sideトール

間に合わない、そう思った。

このステージは意外に広く端から端まで200メートルはある。

爆発の瞬間、俺はようやくステージの端に立つたばかりだ。
対してレイミはステージの中央。

その距離は100メートル、通常ならば魔力による身体強化を使用して10秒とかからない。

だが、鉄骨の落下には5秒とかからないだろう。

そして俺は、ソニックムーブなどの移動系の魔法を所持していない。

また、俺は守れないのか…。

両親を失った時のように、また、大切な人を失ってしまうのか…！
そんなのはもう、ごめんだ！！

その時、また周囲から音が失われていく感覚に陥った。

そして、気が付いた時にはすでに自分を除く全ての時が停止していた。

「これは…？」

まだ…。

先ほどといい、今といい、これは一体何なんだろ。俺以外の全ての人、物が止まっている。本当にこれは俺がやつしたことなのか？

これも俺の魔法…？

しかし、この魔法は、俺にあまり時を取ってはくれないだろう。自分でもどのよつた理屈かわかつていないうつた魔法が、いつまで効果を發揮するとは思えない。だからこそ、急ぐ必要があった。

俺はレイミの下へ駆け寄る。

レイミはすぐ近くにいた一人の女の子を助け出そうとしている。けれど鉄骨はもう3、4メートルほど的位置まで落ちてきていた。

…ここにやるべきことはもうわかつている。

俺が覚悟を決めること、だ。

これだけ巨大な鉄骨だ。まともに受けたなんてバカな真似はできない。

だが、この止まつたままの状態でレイミ達を助けることはどうやらできないようだ。

だからこそ、覚悟。

思えばいつから俺はレイミに惹かれていたのだろうか。

この、自分の身を省みない優しい女に。

…いや、この優しさだからこそ、俺は…。

…もう時間がない。

俺は左腕を上に掲げ、魔力を集中させる。

腕から巨大な氷を形成するためだ。

それと同時に、止まっていた時が動き出す。

「トール！？」

レイミが呼ぶ声が聞こえる。

悪いな…。後始末、頼んだ…。

照明の強烈な光を浴びると共に、俺は意識を失った…。

「嘘……でしょ……？」

ビハビハ？

どうしてトールがここに？

今、トールは落ちてきた鉄骨を氷を盾にして左腕で受け止めている。トールの左腕からはありえないほどの血が流れてい、頭部からも出血があるみたい。

「トール！ しつかりしてトール！ ！」

「…………う」

何かをつぶやいているようだったけど、何を言っているのかはわからない。

もしかしたらそのまま意識がないかもしれない。

このままだと、非常にまずい。

「誰か！ 誰か救急隊を！ ！」

早く処置しないと……

「レイ＝……」

「トールー？』

『どうやら意識のほとんどないまましゃべってこられるみたい。

「無事で……よかつた……」

その言葉を聞いて、私は嬉しさよりも自分のつかさに腹が立つた。トールはあまり表情に出せないけど、本当は誰よりも優しい男の子なんだ。

だからこそ、守りたくなる。
応援してあげたくなる。

そんな子に…こんな無茶をさせてしまった自分に…本当に腹が立つた。

その後すぐに救急隊が到着し、本部の救急病院に搬送された。
緊急手術の結果、一命は取り留めたけど2日たった現在も意識が戻っていない。

件の爆弾魔についてはトールが事前に連絡していたおかげで確保となり、

今回の爆弾事件の件で逮捕され、他の事件についても捜査中となつてている。

私は…本当にトールのそばにいてもいいのかな？
トールの邪魔のなつていかないのかな？

トールの眠るベットの脇で考える。

リムルちゃんは私に気を使ってか手術の後は一度も来ていない。
本当はつきつきりで看病したいんだろう。
けど、私という存在が邪魔をしてしまっているんじゃないかな。
考えれば考えるほどマイナスの思考に陥っていく。
本当に…どうすればいいの…？

「ん……」

「トール……？」

その時、トールの意識がようやく戻った。

「ゴメンね…迷惑かけて…。」

こんな迷惑を掛ける女は、もうすぐいなくなるから…。

「ん……」

長い…夢を見ていた気がする。

夢の中では、レイミはずっと泣いていた。

どうして泣いているのか。

聞いたけれど答えではくれなかつた。

何故かわからないが…それが今のレイミの状態なんじやないかと思つた。

目を開けて最初に映つたのは笑顔を見せるレイミの姿。

でも…、その笑顔はどこか悲しそうだった。

「レイミ…」

「ゴメンね…助けてもらひつけつて…」

やつぱり…そうだ。

レイミは自分を責めているんだ。

左手を伸ばそうとする。

けど、おかしかった。

いや、感覚が、ない、といったほうが正しいか。

覚悟はしていた。

あれだけの衝撃だ。

魔力で保護したとはいって、何の代償もなしに救えるとは思えなかつた。

おわりくレインは、このことを一番責めているんだろう。

だから「いや……その間違いを正せなきゃならない。

「本当に」みんなそこ……やつ、こんな迷惑な女はいなくなるから……」「…………にして」

「…………え？」

「いい加減にしろ……」まだ自分を責めれば気が済むんだ……」

思えば、人に本氣で怒るのは初めてかもしれない。

「何が迷惑だ……俺がどんな気持ちで助けにいったのかお前は本当

にわかつてない……」

「どんな気持ちで……」

もひ、止まらなかつた。

今まで溜まつていた気持ちも、思いも、全てぶつけてしまおう。

「俺は……本当に大切だと思うから……だから……助けたんだ。腕のこ
となんかお前が気にする必要ない」

「だ、だから……トルが無茶するなんてダメよ……絶対ダメな
んだから……」

うん、やつぱりそうだ。

向こうもおんなじ気持ちだつたんだ。

お互いがお互いを無茶する奴だつて、思つていたんだ。

「……なら……約束してくれ……もひ……自分を責めないつて。何でも自分
のせいだなんて思わないでくれ……」

「……トル……」

「俺は……自分が好きな人が辛い思いなんて……してほしくないんだか
ら……」

「……え?」

あれ?

今、俺、何言ったの？

「ちょっと……トール？ 今なんて言ひたの？」
「え……／＼／＼え～つと……／＼／＼」

うわ～！！！

いきなり何言ひてるんだこのバカ！！！
俺のバカ！！

「辛い思いなんて……してほしくないんだから……」
「違う！……その前！……」

「何でも自分のせいだなんて思わないでくれ……」

「だから～、その後だってば～！……」

「つ……／＼／＼」

う～、

ホントに向口走っちゃったんだよ！……？
レイ!! もどさ引……れ……？

「……………」

なんかものすごい笑顔なんですが。

さつきまでの悲しい笑顔とは全然違う。

「トーリー！」

卷之三

と想つたら急に抱かれてきた。

どういう展開なんだよこれ？

卷之三

「えだからその / / / 「

ダメだ。

/ /

がちや

「お兄様、お見舞いにきましたわ」

جایلی

なんで」」こんな最悪のタイミングで現れるんですか？

ドサッ！！

あ、お見舞いのフルーツ盛り合わせが落ちた。
でも、さつきまで俺意識なかつたはずなんだけど…
なんでそれ持つて来たんだ?
もしやエスパーか!?

「お、お……」

「ちょっと…リムル?」

やばー。
ものすいこ震えてる…。

「お兄様から離れなぞ――――――――――」

リムルがものすいこに勢いで俺からレイミを剥がそうとしている。
剥がすは誤字じゃないぞ?

「や～だよ、せつかく両想いになれたんだから～」
「なんですつてえ……!~?」

蛇のじとく睨んでくる。

今の俺は間違いなくカエルだな。

それより…今、両想いつて言つた？

「いいかげんに……なさ～～い！～！」
「えへへへへ～～～～」

まあ…いつか。

第26話 彼女との過去 5（後書き）

「アーティスト！」

「フライテ」

「後書き！！」

「あれ？ どうしてレイラさんがいるんですか？ それにどうして私が

「アーティストの世界」

- 7 -

「あのね？私の声の設定は…某シリーズの中に出でくるの-digit子天使をイメージにしたらしいよ」

「ああ、やる氣十分だね？」

「え……／＼＼？まあ……」

(なんだか、わからぬ」と、となんか面白くなっちゃう。

「？」

卷之三

「ええ… もうちょっとわらつと流れればよかつたんだナビ、やつぱ

りこの作品を作るに当たって一番力を入れたのが過去の設定だから

「その割には更新が遅いですが、

「そこ」は作者の仕事の都合だよ。現実は12月だもの

「まあ、力を入れた分中途半端な感じに出来ない性分ですか？」

「それでこの程度？」

「や」は言わないであげてください」

「さて、原作組が懐かしい今日この頃、『早く原作に戻れ』と思つている方もいらっしゃるかと思つのよ」「だからこの後書きコーナーを作つたんですね？」

「そう、飽きさせなこよにね」

「さて、次回は私とトールのラブトーク！！！」

「だけで終わるわけないでしょ」…ちゃんと物語の核心にも近付いていきますよ」

もしも～ one year after (前書き)

クリスマスイブ特別編！！

なお、本編とは別の物をお考えください。

sideトール

「ふひ、材料はこんなものかな…」

俺は今、翠屋で修業中だ。

元から長く続けるのは難しいとは言っていたが、あのJ・S事件で俺は魔導師を続けることが不可能なほどのダメージを負ってしまい、管理局を去ることとなつた。

あの事件で俺は管理局との闇にも、俺の過去にも決着を着けることができたので、後悔はなかつた。

あのメンバーともう戦えないことが少し残念ではあつたが。

「お疲れ様　トール君も大分慣れてきたよね」

なのはさんもウェイトレスに、キッチンに大忙しだ。
彼女もまた、この翠屋で修業中なのだ。

管理局をやめるに当たつて問題になつたのは俺の再就職先なんだが
…。

そこでのなのはさんがいいアイデアを出してくれた。
共に翠屋で修業しないか、というのだ。

なのはさんもまた、あのJ・S事件で修復不可能なほどのダメージを負い、長くは続けられなくなってしまったことから勢いよくやめてしまおう、と思つたらしい。

辞めることを決断してからのなのはさんはそれはもう凄かった。自分の持てる全ての技術をフォワード陣に渡そうとしていた。

俺もまた、同じだった。

俺は特にティアナに幻術の極意と、近接格闘もできるよつて、色々教えたつもりだ。

…実を言えば管理局を去る日、俺はティアナに告白された。
戦えなくともいい。あなたは私の目標で、大好きな人だからって。
俺はその告白を断つた。

もう、俺の中には大切な人がいたから。
断られた彼女は、それでも笑顔だった。
初めからわかつていたみたいだった。

恐らく彼女自身、俺との思いを一気に断ち切るつもりだったんだろう。

けれど、本当に分かれる前、彼女に言われた。

「なのはさんと幸せにならなかつたら、本当に許しませんからね?
何せこの私を、振つたんですから」

そう言つた彼女は、笑顔だった。
けれど、心の底では、泣いていたんじゃないだろうか。

「」の翠屋で修業を始めて5ヶ月。

季節はもうクリスマス一色となっていた。

地球上に来たころは様々な行事があることを知り、憶えるのも大変だつたのだが……。

「はあ……」

少し……憂鬱だつたりする。

地球上に来て初めてのクリスマス。

実は、俺はまだ、なのはさんに告白していない。

いや、なんだか言つてしまえば今の生活が壊れてしまうんじゃないつか。

再就職も、修業も、滅茶苦茶になつてしまつ。

そしてなにより、なのはさんに拒絶されるのが……怖かつた。

「どうすりやいいんだ……」

「悩んでいるな」

その時、不意に後ろから声を掛けられた。
掛けられるまで付近に気配は一切なかつた。
……つたくこの人は……。

最初、滅茶苦茶怖かつたけど、よく知れば、以外にお茶目な人だつ

た。

高町恭也さん。

なのはさんは兄にして、御神流、という剣術を使うんだとか。

一回リハビリがてら手合させしてもらつたけど、速いってレベルじゃなかつた。

全盛期の俺でも、魔力なしなら勝てる気がしなかつた。

ボコボコにされる直前で、なのはさんに一人纏めて説教された。

曰く、君はもう戦えない体なんでしょう?と

曰く、リハビリ中の人に無茶させるんじゃないやありません!と

高町家のヒエラルキーにおいて男は最下位らしい。

「あの……気配を消して近づくのはやめていただけませんか?思わず手元に武器がないか探してしまつたじゃないですか。」

「なに、ちょっとしたいたずら心だ。君のよつな達人向けのな。」

そんな洒落になつていないいたずらはいりません。

氣を落ち着けるため、台所から持ってきたお茶を注いで飲む。

このお茶、地球に来てからの好物だつたりする。

「といひで……なのはには告白しないのか?」「

ブー――――――――――

口に含んだお茶を全力で噴出した。

「ゲホッ……ゲホッ……」

「汚いな。」

「いきなり何言つてんですか……！」

「なんだ、しなこののか？」

「う……」

この人は……普段は無口で、鋭感（繰り返されたことへの反応）なのに……急に核心を突くことを厭つ。

「はあ……何でしうね……」
「今まで臆病になつたのって初めてなんですよ。」

「まあ、やつこつものだらうな。俺も『ここ』に至るまで臆病だった気がする。」

まあ、この人は好きになつたら単純一図つて感じだしな。

「君も恐らく同じだ。踏み込む匂氣……それをきっかけにしても、いんじやないかな。」

そうこつて恭也さんは室内のモハの木を指差す。
「わへ、明日だもんな……。」

「やうですね……」

「なり、じんなとこりで悩んでこないで、ひとつと行くんだな。」

「へ?」

「プレゼントに決まつたんだから、せり、早く。」

そう言って恭也さんは俺を玄関の方へ連れていぐ。

「あの…どうして協力的なんですか？」

最初来た時に、「お前になのはは渡さん…！」って斬りかかられたのは衝撃的でしたよ？

思わず、テーブルに置いてあつたナイフとフォークで応戦していましたが。

その後のなのはさんの説教も衝撃的でしたし。

「何、ただの気まぐれだ。なのはを渡すつもりはない。せいぜい擊沈してしまえ」

「まったく…」

なんだら…ホント不器用だな。

とりあえず…買ひとしたら…アレかな？

-クリスマス当田 -

「メリークリスマース!!!」

喫茶店の営業も午後6時までにして、高町家ではクリスマスパーティーが始まっていた。

いつも豪勢な料理。

一般民家じゃ絶対に真似出来ませんよ。

これが喫茶店を長年務めたパーティションの実力なのか……！

「どう? テール君、おいしい?」

桃子さんが聞いてくる。

このチキンも纖細に味付けがしてあるし、本当においしい。

「はい。本当にすこい腕前です!」

「あはは、ありがと、でもね……」

ん? 何かあるのだろうか…

「実は」のホキンね、なのはの味付けなのよ。」「え……？」

「も、もひへへへへお母さん、速攻でぱぱりなこぢょーーー。」

これを…なのはさんか?

知らぬ間に、こんなに腕を上げていたのか……。

「でも…／＼／＼ありがと…おこしこうて言つてくれて…／＼／＼

「あ…／＼／＼いや…」

本心なんだけど…びひこトか…

「こやあ…若じつていいわね~」

「へんう…なのは~」

後ろで桃子さんと恭也さんが何か言つてゐるけど聞けないつたら聞こえない。

そして夜も更け、クリスマスパーティーもお開きとなつた。

本当は皆で片づけるはずだつたのだが、恭也さんと土郎さんが何故かやけ酒を初めて早々にダウン。

忍さんは文句なしに強いのだが、恭也さんを放つてはおけないのでこのまま家に送つてこくことに。

妹の美由紀さんは、男一人のやけ酒に無理やり付き合わされてダウ
ン。

そして桃子さんなどといふと…

「後は若い二人で、『いやつら…』」

などと意味不明の言葉を残し、士郎さんと美由紀さんを連れて寝室
へ行ってしまった。

なんか…無理やり一人つきりにしてよいつと画策してたのか…？

「……………／＼／＼」

氣まずい沈黙が空間を支配する。

照明で光り輝くモミの木が余計に何か、痛々しい…。

「止づけ、しようか／＼／」

「う、うん…そうだね…」

その時、急に部屋の明かりが消えた。

「え…？嘘…停電…？」

「おかしいな…」

このタイミングで停電なんてありえないんだけど……。
と、とりあえず暗くて見えない…けどブレーカーを探しに行かな
いと…

ギュッ

その時、服の裾を誰かに掴まれた。

いや、この部屋には俺ともう一人しかいない。

「

「あの……なのほさん／＼／＼？」

なんだらう…月明かりにわずかに映るなのほさんは、その…とても

綺麗だった。

「…一人にしないで…／＼／＼」

「へ／＼／＼？」

ますます強く掴んでくる。

どうしたんだらう。今頃お酒が回ってきたのかな?
確か、あまり飲んでいなかつたはずだけど…。

「あ、あの、だったら一緒に……」

急に立ち上がったのがいけなかつたか…。

「 もち ……」

「 つかひ ……」

かくうど俺がなのはせんて覆いかぶさる形で倒れこんでしまつた。

「 う、うめえ ……」

「 …… へへへ」

ものすぐ近かつた…。

普段はあまり香水などを付けていなかつたよつだけど。

今日は少し、香水の匂いがした…。

でも、何か、無理をしているような感じではなく自然な感じで、それがより、なのはさんを魅力的にしていると思つた。

「 …… / / /
「 …… / / /
「 …… / / /

何故か、近づくことも、離れる」ともできなかつた。まるで本当に時が止まつてしまつたかのようだ。

「……好き……／＼／」

「え……？」

やがて、なのはさんが動いた。
少しづつ、俺に近づく形で。
それより、今しかない……。

「俺も……なのはさんが……好きだ……」

「……／＼／！－！」

目の前に、なのはさんがいる。

もう、離れる必要はない。

今までの俺なら、逃げ出してしまったかも知れない。
けど、もう、逃げることはしたくなかった。
これが、俺の正直な気持ちだから。

俺たちは徐々に近づき、そして

一人の距離は、ゼロになつた……。

「おつめでと――――――――――――――

パン！パン！パン！

そして鳴らされる大量のクラッカー。
復活する照明。

気が付けばそこには何故か機動六課メンバーが。

「は？」

「……／＼／＼

なのはさんは何故か申し訳なさそうしている。
ま、まさか……

「いや～大成功や～」

そしてものすゞくうれしそうなハ神、元、部隊長
その表情で全てを悟った。

仕込みやがつたなこいつら……

いくらなんでも壮大すぎるが、前田の恭也さんの話から、この落ち
るブレーカーまで、
全てはこの人によつて指揮されていたんだ。

「ゴメンねトール君…実は…」
「あ～、大体わかつた…」

そう、元はなのはさんが相談し、そして機動六課メンバーの協力の

もと、今回の作戦を立案したわけだ。

「相変わらずの暗躍ぶりで安心しましたよ…八神部隊長?」

「あれ?ちょっとキレどる?」

「ええ…ところで久々に全力の魔法をぶちかましてやりたくなつたんですか…」

「…」めんなれこ

まったく…人のこんな行動見てて面白いんかね?

「…でも、トールさんがいけないんですよ?いつまでたっても面白しないんだから…」

「ティアナ…」

確かに…言わなかつた俺が悪いよな…。

だからこそ、ちゃんと言わないと…。

告白を断つたティアナにもかつこが付かないしな。

「なのはさん…」

「は、はー…// /」

だから…

「好きです。俺と付き合ってください」
「はい／＼／＼

ずっと一緒にいたい
その為に俺は

「それからこれ
え／＼／＼

渡したのは腕時計。

普段使う物の方がいい、こんなことを誰かが言っていた気がする。

「……うれしい／＼／＼でも
「でも？」

「これからは、なのはつて呼んで欲しいかな／＼／＼

「／＼／＼

「わかつたよ……なのは……／＼／＼

「ヒューーヒューー……」

「見せつけるね～！～！」

「お前らひるさい～！～！」

茶化すスバルとヴィータを軽く叱りつつ、俺は窓の外を見る。

窓の外には雪が降り始めていた。

まるで一人の始まりを祝つかのように……。

(幸せにね　トール…)

「え……？」

「?どうしたの?トール…」

（気のせいかな？）

今、レイラの声が…

「あ、これから一次会や……寝れると困つなよ……。」

「…………」「リジヤー……。」「…………」

「う、これから一次会?
そろそろ寝てんだが…

「あ、行こう。」

「あ、ああ……。」

俺はなのなの手を取り、外へ出る。
これからも、騒がしい毎日になりそうだ -

むしゅ～ one year after (後書き)

「……」

「あ、あの? ティアナ?」

「納得いかない!」

「きや……！」

「なんで私じゃないんですか! ? どうしてですかフュイトさん! ?
「私にもわからないよ! ? ちょっと、ティアナ、それお酒よ? あなたまだ16歳……」

「飲まなきややつてられません……」

「わー……ダメ、法律違反……!」

「むー……」

「えー、むくれてるティアナは放つておいて、楽しめましたか?」

「次は私!」

「いや、ここは私が……」

「いや、ここはむしろ私は……」

「シャマル先生……ここは絶対に譲れません……」

「次回の特別編もお楽しみに。いつになるかわからないけどね
「「「なのは(さん、ちゃん)にきれいにまとめられた! ! .」」

第27話 彼女との過去 6（前書き）

もうすぐ過去話編クライマックス！！

s.i.d.e トール

「はい あ～～～ん」

「いや、自分で食べられるから…」

「イツ… こんな奴だつた… か。

確かに左手は使えない。

医者にも言われたが、治るかどうかはどんなに努力しても五分五分

らしい。

しかも、日常レベルにまで回復なり、と云ふ条件付きだ。

戦闘にまで、となるとほとんど絶望的と言わざるを得ない。

わずかの可能性に賭けてリハビリの真っ最中、なのだが…。

「いいからいいから? はい、あ～～ん」

「はあ…」

「これだよ…。」

まあ… いつやれるのも運がない、かな…。

「……………！」

「うわー……リムル！？なんだその殺氣は！？」

やばい……、リムルの存在忘れてた……。

コイツあれ以来レイミに対抗意識バリバリ出しまくって……。

怖いったらない……。

「どうなさいましたか？お兄様？？」

そのハートがものすごい不気味だ。
絶対キレてる。

「といひでレイミさん？それもうお兄様から離れてくれません？」

「えへへ？なんで～～？」

そしてここに空氣の読めない奴がいたよ……。
こないだのしおりしかねどこへ行つたんだ。

「ま、まあ落ちつけよ……」

「あら？私は落ち着いていますわ。何をおかしなことを言つていらっしゃるんですの？」

嘘つけ……。

なんだその懷に隠し持つたデバイスは……。

いつでも殺る気じゃないか……。

俺、明日死んでもとかないよな?
せっかく助かつた命をこんなところで散らしたくないぞ。

「…………ふつ…………しようがありません、か…………」

「…………?」

殺氣が……消えた……。
助かつた……かな……。

「ちょっと私ジユース買ってまいりますね……」

そう言い残してリムルは病室を出ていく。
その後ろ姿は、なんだかさびしそうに見えた……。

「…………ゴメンね…………」

「え…………?」

今、誰に謝ったんだ?

「ちよつと私もトライしてくるね

「あ、ああ……」

？

s.i.d.eレイ//

わかつていた……。

リムルちゃんが本当にトールのことを好きだってことは、血の繋がつた兄妹だからって関係ない。本当に、トールのことが好きなんだ……。

「リムルにいたんだ」

「……」

リムルちゃんは病院の自販機コーナーの前に佇んでいた。

「レイミさん、……どうして私は……妹なんでしょうね……」

「リムルちゃん……」

「妹でなければ…振り向いてくれたかもしれない。今も優しいですけど…それは妹として…。その優しさが…今は苦しいんです」

「リムルちゃん…」

「正直なところ、今も認めたくありません。…でもそれは、お兄様の思いも否定するわけじゃないとなる」

それほど…思い悩んでるんだなって。

でも、私もトールも、今更後には引けないもんね。

「レイラさん…後、お願いします。」

セツナはココロムルリヤンは病室とは反対の方向へ行くこととする。

「……」

私は黙つてそれを見送ることしかできなかつた…。

s.i.d.eトール

「あれ?リムルは?」

戻ってきたのはレイミだけだった。

てっきりリムルを迎えたのかと思ったのに。

「うん…。ちょっと、時間が必要かな」

「そりが…」

リムルが兄妹としてではなく本当に好きでいてくれるのはわかつていた。
でも、俺はそりがななかった。

妹だから、一番大切に守つていきたかった。
それは今も変わっていない。

でも、なぜだらう。

それよりも

「……ん? どうしたのトール?」

このちよつとドジで、ぬけてて
優しすぎるこの女が、大切なつてしまつた。

守つてこい。

これ以上、大切な人を失いたくない。

だが、そんな俺の思いも、幸せな時間も、長くは続いてくれなかつた。

-新暦69年-

その日、俺はティーダ・ランスターという親友を失った。
その経緯についてはティアナには話してあるので割愛させてもらおう。

葬儀の最中、俺は一人の少女が遺影を抱えているのを見た。
その子が、ティーダの言っていた妹なんだろう。

だが、俺はその子の表情を見れなかつた。

「.....」

アイツを死なせてしまったのは、俺の落ち度だ。

レイミも、俺が何を思っているのかわかつていいひつだ。

ただ、その子に田を向けられなかつた。

ただ、聞こえるはずの泣き声や、嗚咽の声はそのままから聞こえてくることはなかつた。

あれほど面倒なことを言われたのだ。悔しくないはずがない。
奴らは、あんなまだ10歳の子にも泣くことを許さないとでもいうのか。

手を下した奴も、直接糸を引いていた奴も、俺が見つけ出して殺した。

レイミに止められて以来、初めての暗殺だった。

俺が殺したこと、上の奴はすぐに気付いたよつだ。
ある日、奴らはレイミの監視を掻い潜つて俺に接触してきた。

曰く、滞っていた「仕事」を再開してもらいたい。
曰く、断れば、家族と、大切な人の命の保証はない、と。

この場合、大切な人、とは間違いなくレイミを指しているのだろう。
レイミならば、簡単にやられることはない。

そう、まともな戦いならば。
だが、これまでのことを考えれば、汚い手段などいろいろでも考えられる。

俺の思いもよらない手段で殺しに来るかもしれない。

…この時の俺は、正直まじっていたのだ。う。
親友を殺されたこと、そしてその手がレイミとリムルに及ぶという
のだ。

戦うか、従うか。
その一択だった。

そして俺は…

「ぎゃああああああああ…！」
「ひ、ひいいいいいいい…！」

再び、全ての感情を押し殺した。
衣服に着く血も、気にしない。

どうせ、わかつてしまつたのだから。

‘アイツ’には。

もう、終わりにしよう。

こんな俺とは、離れたほうがいい……。

その方が、アイツの為だ。

臆病なのは、わかっている。

でも、何としても、守りたかった。

守りたいからこそ、遠ざけるように、したかった。
でも、‘アイツ’は、それを許してくれなかつたのだ。

「…………ただいま…………」

とつあえず着こなしまった血を洗つて、着替えてから帰つてきた。

「ああ、これで全てを終わりにするんだ。」

他でもない、レイミと、コムルの想い。

「……ホール……」

もう、気付いている。

沈痛な表情のレイミを見て、やつ思つた。

「……………」

まひ、やつぱりせな。

でも、肝心なところはわかつていな。

いや、この場合、その方が助かる。

だって、後は突き放すようにすればいいだけなんだから

それだけ……なんだから……。

そう……それだけ……

「なんでもいいだろ」…もう、全てが昔に戻つただけなんだから
「だから…！それはどうしてかつて聞いてるの…！」

いつにない激しさで問いかめてくる。

ほら、やつぱりな。

優しそうなふとだよ。お前は。

やつぱり突き放そつとしてせいいかい。

「……

正解なはずだろ？

さあ、早く言えよ俺。

もう、別れようつて。

俺のことなんて忘れてしまえって。

なんなら憎々でもうしても構わないって。

なんと言えないんだよ。
簡単なことのはずだらうへ。

動けよ、俺の口。

頼むから……動いて、アイツを突き離してくれよ……！

「…………トール…………！」

なあ？

何なんだよ？

なんで今このタイミングで泣かなきやならないんだよ？
感情、殺したはずだらうへ。

「」、目から止まらない水を止めてくれよ……！
まるで体が拒絶してるみたいじゃねえかよ……！

わかってるだろ？

このままじや、いつレイミが殺されるか分かんないんだよ……！
大切なんだから……泣かせてくれよ……！

……もひ、……嫌だ……！

隠しきれないし、止まらない……！

この、なんとも言えない感情は……、俺をここまで愚かにしてしまつた。

どうして、ライシに救いを求めるよりは、アーヴィングだよ。

アーヴィングを守るのは、俺しかいないんだよ。
その俺が、救いを求めてどうすんだよ……！

「わう……！」

え？

「何も言わなくて、いいから……」

レイミが、近づいてくる。
そして、抱き寄せられた。
体全体を覆つ、優しい匂い。

「思ひつけつ、泣きなさい……」

ダメだ……。

もう、今まで、両親が殺されてから、ずっと張り詰めていたもの。自分が、大切なものを守らなきゃならない、その、使命感。それらが、間違っていたって。

そう、気付いてしまった。

同時に、今までの思いが、溢れて……

「う……、ああああああああああああああああああああああああ……！」

止まらなかつた。

時折、頭の方に水滴が落ちてきた。

レイ//も、今まで何かを耐え続けてきたのかもしれない。

声が涸れるまで、家からは泣き声がした。

第27話 彼女との過去 6（後書き）

「「新年明けまして」「
「おつめでと～さん～～」

「あれ？はやて、イメチョン？」
「そうや、作者が某RPGにハマッててな。私も出とるんよ。その
人の衣装や」
「え？はやてさんが？」

「そうや、こり、リインフォース！…とか全力全開！…つてな
「危ない！…危ないからそれ！」

「なんやつたらフロイトちゃんもティアナもやつたらビないや？」

「え？」

「ジツ子神子＆天然次期皇帝候補」

「え、え～つと…ふみゅ！！転んじやつた 失敗失敗～」

「え？う～んと…フォースフューリード…」

「そう！…その調子や…！」

「もつ駄目！…禁止！…新年早々危なすぎーー！」

「さ、もうすぐ過去編も終わりそうやな」
「トールさん…こんな葛藤があつたんですね」
「うん…とても辛かつたんだね」
「まあ、人殺しは罪や、でもそつせざるを得ない状況にあつた」
「こ」の後、はやてさんはどうするつもりなんですか？」
「ん？まあ…おこおい話するわ

「「「では、また次回！！」」

「あ、次の番外はバレンタインデーで確定や。ヒロインは…」

「「わくわく…」」

「わからん…！もしかして私かもしれんな～」

IFF 初詣と、親友と、友達と、大切な人 前篇（前書き）

ちょっと遅い、新年祝い。

s.i.d.eティアナ

「…／＼／＼

うひ、緊張する…。

この着物つてこいつのはなのはさん達の世界の衣服の一種なんだそうだ。

今日は新暦76年最初の日。

なのはさん達の世界ではこの日は、神社、といつといひて、初詣、

という用事で行くらしい。

更に、お賽銭、なるものを入れる、とのことで、何かを、願う、らしい。

それにしても昨日は大変だった。

年末の年越し、ということで仕事自体はほぼ休みだったんだけど、せっかくだからさそやかなパーティーをしようつていうことになつたのだ。

八神部隊長がどこから酒を持ち込んできた。

部隊長がそんなんで大丈夫なのか?とトールさんは心配していたが、なのはさんやフェイトさん、シグナム副隊長達はもはやあきらめていた。

お祭りモードの八神部隊長を止められる者は誰もいなかつた。

かくして始まつた年越し宴会。

さすがにお子様組はジュースだが、私たちは普通に飲んでいた。

ミッドナルダはお酒は16になつてから。

酒を上手く活用するのも上へ上がる手段の一つだと、トールさんは教えてくれた。

…その割にはトールさんはそういうことを活用できなそうだけど。口下手だし。

トールさんは下戸かな?と思つたりやうでもないビーバーか、となんでもなかつた。

淡々と、変わることがなく、八神部隊長のハイテンションにもいつも通りに対応していた。

なんというか気が付けば色々な人がトールさんによつて潰された気がする。

いや、本人はいたつて普通に対応していただけなんだろうけど。

私とスバルはさすがに遠慮してた部分もあつてかつぶれることはなかつたけど、終わつた後トールさんが普通に後片付けに入つていたのには驚いたわ。

トールさんにビーバーしてお酒が強いのか聞いてみただけど、本人も

強いといつ自覚がないみたいで。

「横ですぐ潰れる奴がいたからな。安心できなくって、なんて言つていた。

間違いなくレイミちゃんの「ことなんだろ?」な。

胸が痛い。

トールさんはまだ、レイミちゃんのことを見つめ、「私たちに過去を話した時も、もつぶつ切つたと言つていたし、それに…あのレインという戦闘機人とのことだつて一時は大変だつたけどすぐ元に立ち直つてくれた。

けど、心の奥底ではまだ、引きずつっているんじゃないだろうか。
このままじゃ、いけない。

トールさんは、幸せにならないと、いけない。
確かにトールさんは過去、幾多の人を殺し、その幸せを奪つてきた。
それが脅迫や、暴力によつてやらせられたことであつても許されるこ
とではない。

でも、それは、トールさんが幸せになつてはならない、といつ意味
ではない。
もう、いいじゃないか。

今までトールさんがどれほど苦しんできたのか。
それはもう私なんかが測れるものではない。
でも、確實にこれだけは言える。

幸せを望んでも、いいころだ。

だから、私がトールさんを幸せにしたい。
アグスターの件で苦しんでいた私を、陰ながら救つてくれたのも、
ゆりかご決戦の際、3体1の絶対的な危機を脱することができるよ
うにしたのも、
全て、トールさんだ。

トールさんは、間違いなく、私に兄のことを重ねてているんだろう。
あるいは、守れなかつたことの、贖罪なのかもしれない。

けど、そんな目で見てもらいたくない。
兄の無念を晴らすために管理局で努力してきた私が、今は、他の男
の人の為に努力しようとしている。
それも、いい変化だと思えるようになつてきた。

唯一気に入らないのは私の横にいる相棒、もといバカスバルのこと
だ。
私がトールさんに指導を仰いでもらいつと、何かとこう……いやあ～な
笑みを浮かべてくるようになった。

「マイシ……絶対に気付いてる……」

そつ思ひて怒鳴るなつ色々と牽制するんだけど、どれも無駄。
それどころかますますマイヤーヤと気持ち悪い笑みへと進化させていく
へへ

わへ、最近では氣にしなこよつこした。

さて、冒頭の晴れ着の件は「」の、宴会の冒頭で、

「明日はあ～機動六課で初詣でや……」
ところハイテンションな指令により、女性陣は揃つて着物を着るこ
とに至ったのだ。

したがつて…

「フヒハイトちゃんかわいい～！…」
「あ、あはは…なのも似合つてゐるよ…」
「ママー

「あ、ヴィヴィオもちゃんと着てきてるね、えらいえらい」

こんな具合に今、六課隊舎は着物だらけなのだ。

ちなみに男性陣はトールさん指揮のもと強制的に隊舎から退去させられている。

曰く、「いつものは行きながら話のタネにするのがいいそつな。

「…なんか緊張してきた…。

今日…言つたっけ? 決意してから何日経つたっけ?

いい加減早くしないと誰か他の人に取られる気がする。

トールさんは見た目上の上といつわけではないと思つ。けれど、トールさんを狙うライバルは、何故が多い。

代表格はなのはさんにフェイトさん。

特になのはさんはヴィヴィオという娘がいるから、パパと慕われているトールさんは抑えなくなってしまつかもしれない。

次にシャマルさん。

トールさんは実は昔の怪我が完治していなくて、それをだましだまし戦っていた時期もあつたそうだ。

それを治療し、再び全力で戦えるようにしたのはシャマルさんだ。でも、八神部隊長曰く、「あれ～？シャマル、そんな治癒力あつたかな～？ひょっとしてこれは愛の力か！？」なんて言つていたし、それに、シャマルさん、トールさんに対するだけ、なんか異常に優しい。

そして他にもギンガさん、バックヤードスタッフや、以前いた部署など、本当にライバルが多い。

でも、負けたくない。

今日こそ…言うんだ！！

sideトール

「はあ……」

今日は新年。

女性陣が着物を着る為に男は外へ出でいくことにした。

とぐに俺の横にいる…。

「旦那～、どうして外で待たなくちゃいけないんですか～？」
この男は信用できません。

隙あらば本当に焼きに行こうとするからな。

こんな男にのぞかれる方も嫌に決まってる。

つかティアナもその中にはいるからなおさらだ。
親友の忘れ形見をこんなのに穢されてたまるか。

…なんてのも建前、なんだよな。

本当、どうしちまつたんだろうな。
許されない、よな…。

俺が、守れなかつた親友の妹を好きになるなんてことは。

…どうしたらいいんだろうな。

実はティアナが俺のこと好きでいることは気付いていた。

とあるおせつかいが報告してきたからだ。
でも、俺はその思いに応えていない。

いや、応えてはいけない。

「アイツは、こんな俺をどう思つだらうか。
愚かな奴、と笑うだらうか。

「あ、ここにいたんだ」

「なんだ、ヨーノか」

「なんだは酷いな。君が呼んだんじゃないか」

そう言えればそうだった気もあるな。

「無限書庫はいいのか？」

「正月くらいは休ませてくれよ。正直クロノにはいい加減にしても
らいたいくらいだ」

まあ、いまだに待遇が改善されないのは問題だよな。
ウチは適度に休みがあるが。

「なのはさんに告白しないのか？」

「ブツ……しきなり何言いく出すんだよ……」

「さうか？お似合いだと思つが」

つてか昔の話から聞いてるといつつかないのがおかしくないか？

なんか原因あるのかな？

「そういう君こそティアナ……だけ？彼女のことはどうするの？」
「……はあ～」

なんでティアナのことを…

「あ、あはは…色々と情報は入ってくるんだよね」
「……」

殺氣を飛ばしているからか、ユーノの顔は青い。
原因はあのバカ提督あたりだな。
今度模擬戦に引っ張りだしてやろうつか。

完治記念に抜刀術の実験台にしてやる。

「つち…」

「トルはね。臆病になりすぎなんだよ」
「臆病ね…」

そうかもしれないな。

振り返れば俺の人生は失うものばかりだ。
特に、大切な人は、いつも失ってきた。

両親も、親友も、恋人も。

ありえない再会だと思ったら、それは戦闘機人で、しかもそいつもまた、失つてしまった。

だから、これ以上、失いたくないんだろうな。
初めからなれば、失うことなどない。

「…それでいいと、本気で思つているのなら、僕も本気で怒るよ」

考へていることがわかつてゐるかのようなセリフだった。
いや、実際今の俺の思考はわかりやすいのかもしれない。

「失いたくないのなら、立ち上がりよ……トールには、立ち上がる力も、守る力も、持つてゐるでしょつ！？」
「…………」

そうだ。

今の俺には、昔のように、全力で戦う力がある。
それに、今度はただ、守るんじゃない。

俺は、ティアナを……！

「…悪いな…また、間違えるところだった」

「いいよ。だって、友達だからね」

「…そうだな」

あのバカ提督にも少しは感謝してやるか。
新技の実験だけで勘弁しておこう。

さて…覚悟は決まったが…どうしたもんかね?

IEF～初詣と、親友と、友達と、大切な人 前篇（後書き）

「……………！」

「あ、あの～ティア？文章じゃ伝わらないけどものすゞい嬉しいのはわかるよ～でもしゃべろう？」

「はつ……そ、そうね…」

「作者的には最近になってティアがお気に入りランクが上昇してきましたから書き始めたんだそうだよ」

「へえ…まあ、トールさんと幸せになれるなら…いいかな」

「絶対原作とキャラが違う…私もだけど」

「まあ、スバルはねえ…」

「私、ヒロイン対象外だからね」

「作者的には私の良き友人ってスタンスらしいわよ」

「前後半にしてるけど、なんか大丈夫なのかな」

「作者は1話1話はそれほど長くしたくないらしいわ」

「なんで？」

「あまり長くしても文才のなさが災いしてしまつやつよ」

「チェックが大変なんだつてさ」

「次は後篇。なるべく急がせるわ～！」

「どのように告白するのか～！果たして結末はどうなるのか～！」

「お楽しみに～！」

IF～初詣と、親友と、友達と、大切な人 後篇（前書き）

なんだこの中途半端さは…

IF～初詣と、親友と、友達と、大切な人 後篇

s.i.d.eティアナ

「はあ…」

覚悟を決めたはいいんだけど、具体的にどうすればいいのかしら…。相談しようにも周りはライバルだらけだしねえ…。

八神部隊長あたりなら…とも思ったんだけど、あの人はちょっと事態を面白くする方向にしかしないし、

うーん…

「ティア…」

「ん? どうかしたの?」

450

ちょうどスバルも着替え終わつたみたい。

スバルの着物は青を基調としていて髪の色とよくマッチしている。

「今日、随分と気合入つてるね」

「え! ? そ、 そ う か な … ?」

私はフェイトさんが勧めてくれたピンクの着物だ。
オレンジの髪とよくマッチするということなんだけど…。

「上手くいくといいね」

「な、なななななーー！」

「レ、レーレーは…

ビハビしてたまに鋭いのかしら…。

「あ、トールさんだ」

「つーーー／＼／＼

ちよつと…！

こ、心の準備がまだ出来てないつていうの…。

sideトール

「あ、旦那。あそこにはティアナとスバルじゃないですか？」
「…そうだな」

遠くに青とピンクの着物が見える。
あの特徴的な髪といい、間違いない。

「う～ん…いいねえ…」

「今更だが、本当に前を締め出しちゃかつたよ」

ホント、妹に報告してやるうか。

「トールさん…」

「…おう、ティアナが…」

「う…掛けた言葉が見つからない…。
に、下手なんだよ」いつこいつの…。

「エハですかトールさん…！ティアの気合の入った…
「よ、余計な」と叫びこんじやないわよ…！」

「うだな…。

でもなんか…。

「似合ひてるぞ…／＼／＼

「え…？／＼／＼あ、ありがとハジセコまー…」

「これでいいのか、な。

「曰那～、遅い青春ですね～」

「ヴァイス……後で久々に模擬戦やるか」「え！？俺ヘリパイロットですか！」

くだらないこと言つてんな。

「ほら、行きますよー！」

「ちよつ、バカ押すなよー！」

張り切りすぎだろスバル…。

「お、おまたせ～」

「コメンねトール君、遅くなっちゃった。」

なのはさんとフェイトさんも来たようだ。

なのはさんは白をメインとした着物を、フェイトさんは黒をメインとした着物を着ている。

うん、二人によく似合つている。

「さて、集まつたみたいだし、行こうか」

「それにしても部隊長は残念だったな」

「まあ、本人もじょうがないって言つていたしね」

部隊長は・S事件の残務処理がどうしても終わらず、年末年始も休まず仕事らしい。

こればかりは部下にやらせるわけにもいかず、なんとかするということだ。

「手伝えればよかつたんだけど……」

「まあ、上に立つ者の試練だな」

冷たいようだが、本人がやるしかないことが多いので、俺たちに手伝わせることが出来ないのだ。

今日行く神社は参拝客が多いことで有名であり、参道には多くの露店が並んでいる。

露店と言えば多くの店は食べ物であり、そうなれば……

「…………」「…………」

このとおり、スバルとヒリオの大食いコンビはものすじくつれしそうだ。

やきそば、お好み焼き、たこ焼き等々、通り過ぎるたびに田んぼを輝かせている。

「ね」

「駄目よ。まずは参拝してから」

「うへ…」

スバルが何度も寄り添うと試みているが、全てティアナによつてガードされている。

そういうしている内によつやく社まで着いた。

それぞれ硬貨を投げ入れ、拝礼し始めた。

「…………」

横目でティアナの方を見ると、熱心に何かを願つていていた。その熱心な姿に少し俺は見入つてしまっていた。

思えば、いつからだつたか…。

一人の女性としてティアナのことが気になりだしたのは。

六課に入った理由は、確かにティアナだつた。

初めは親友の忘れ形見、ただそれだけだつた。

10歳にして感じたあの時の無念さは、俺なんかの比ではなかつただろう。

いや、誰も気持ちを理解できる者などその当時はいなかつたはずだ。

だが、間違いないアイツの無念を晴らすために、管理局にいるのだ
と思った。

俺は陰からそれを支えてやりたかった。

自分のことなど話すつもりはなかつた。

ただ、上司として、強く、そして正しく、導きたかった。

でも、ティアナは俺が想像していたよりも力に固執していた。

それは、六課に入つてより鮮明に浮き出でていた。

それは、間違いない焦りになる。

そして焦りは、隙を生み、気が付けば手遅れになる。

そう思つたから、なのはさんとティアナが衝突したとき、おせっかいをした。

そうでなければ間違えたままになるから。

そして、あの休日。

思えばあの頃から少し、ティアナの見かたが変わったのかもしれない。
だから、アイツとの関わりを話したのかもしれない。

俺の話は、また少し、ティアナの助けになつたみたいだ。

アレ以降、ティアナも才能に固執することなく、実力をさらに伸ばしていくつた。

その甲斐あって、最終決戦の時、1対3の圧倒的に不利な状況を自らの力で覆した。

それは、俺にも簡単にできる」とではない。

そして、やがては執務官になり、俺を抜いていくだろう。

それほど、ティアナには才能がある。

……ああ、だからか。

俺は、見ていたいんだ。

ティアナがここまで成長し、どのような執務官になるのか。

……なら、俺は…それを支えていきたい…。

参拝も終わり、ここからは各自自由行動だ。

スバルとエリオは早くも露店まで走り出していくし、キャロもそれにゅつくりとついていく。

なのはせんとフロイトさんは、ヴィヴィオと一緒にどこかへ行ってしまった。

そして必然と俺とティアナが残されることになる。

「…………」

き、気まずい……。

なんだらつ……、いつもなら周りについてメンツがいる分自然に話せたのに……。

「……とりあえず歩くか

「え、ええ……」

この神社は近くに公園があり、広い池があることで有名だ。池の形は特殊であり、中央が極端に狭く、橋が架けられている。

「……」「……」「……」

歩いている間、二人とも無言だった。

お互い、話したいこと、言わなければならぬことはあるはずなんだが……。

ちょうど橋に差し掛かったとき、急にティアアナが立ち止った。

「……どうした?」

後ろを振り返って問い合わせてみる。

周囲にはあまり人はおらず、静かだった。

「トールさん、あなたにとつて…私はどういう存在ですか？」

…言られてから一瞬考えた。

六課に来た直後なら、教え導く対象でしかなかつただう。親友の妹であつてもそこはかわらなかつた。

でも、今は違つた。

自分の中でもつとも大切な存在になつていた。

「そうだな…親友の妹であることは変わりはない…」

「…そうですか…」

心なしか、少し落ち込んだようだつた。

「だが…」

言つながら、今だつた。

「今では、俺にとつて一番大切な人になつているよ」

「…え…？」

「ああ、言つてしまつた…。心臓が早鐘を打つようにバクバクしている。

「どうも」「う」とは苦手だ。

相手は自分よりもいつも下のはずなのに。
なんだか振り回されている気分になる。

「それって……／＼／

「……何度も言わせるな／＼／

思わず下を向いてしまう。

今、ティアナの顔は見れない。

見てしまったら俺が顔を真っ赤にしているのがバレてしまうから。

でも、間違いなくバレているんだろうな。

ゆっくりとティアナが近づいてくるのがわかる。

「私で……いいんですか…？」

「…ああ」

「私、なのはせんやフュイトさんとかと比べてまだまだ未熟ですよ？」

「…そうだな」

「色氣だつて…足りないし…」

「……そういうことじやないんだよ

他の人など、考えられなかつた。
レイミとも、リムルとも違う。
どうしてかはわからないけれど、恋愛は理屈ではないといつのは本
当だつたんだな。

ゆっくりと差し出されたティアナの手を取り、歩き出す。

自然と横に並び、境内に集合していた仲間たちの下へと戻つていく。

新年からいろいろとあつたが、俺はこれからもこのちよつと氣の強
い教え子を導いていかなければならぬと心に誓つのだつた……。

「FF～初詣と、親友と、友達と、大切な人 後篇（後書き）

「中途半端……」

「いきなり鋭いツツ」「ミだねはやでちゃん」

「なんかもつとこつぶちゅーつとしたり？？？的な…」

「それ18禁だよ！？年齢考えてよ！…」

「いや、でもキスシーンくらいあつてもよかつたやろ？」

「なんかちょっと雰囲気的にやらない方がいいかつてなつたらしいよ？」

「で？ティアナはさつきから何顔真っ赤にじるん？」「…………／＼／＼はつ！！！」

「妄想の世界に浸つてたみたいだね？」

「す、すみません…／＼／＼」

「なんや…砂糖吐きそつやな…」

「いい加減本編進めるように言つてるんだけどね？」
「過去編が長くなりすぎたって後悔してるみたいやな」「でも、終わりも見えてきたみたいですよ」「ということで次回もよろしくお願ひします！…」

「聞いたところによると次の番外編はFFイトヤンヒロイントリ

「いよ？」

「また私の出番はないんかい…」

第28話 彼女との過去 7（前書き）

過去編よりやつとめびつこたああああああ
なお～今回に限りR15ビジュアルがついたて17ぐらいな内容も
ありますので…

sideトール

「どう? 落ち着いた?」

「ああ……」

今まで張り詰めていたものが嘘みたいになくなっている。
なんかいい、楽になった、といつか。

こいつやもつ頭が上がらないな……。

「……で、これからだけ……」

「……そうだ……！」

そう、問題はこれからだ。

俺が断り始めれば間違いなく狙つてくる。

奴らの頭の中は俺を利用することしかない。
いざとなれば邪魔ものとしてレイ://を殺す。

だが、そんなことはさせない。
させるわけにはいかない。

けれど現実問題としてレイミを守りきることは可能なのか。

1年半前の左手の負傷は、医者に言わせれば奇跡的に近いほど回復
しているという。

だが、俺本人からすれば完治にはほど遠かつた。

リハビリの一環として左を主体に刀を握っているのだが、俺は本来
右利きだ。

そして、俺の本当の戦闘スタイルは、右からの抜刀術。

しかし、俺の抜刀術は特殊で、鞘を抑える左手も実は重要になつて
いる。

そして、今現在、左手は抜刀術を使うに耐えられない。

いや、やろうと思えば出来るのだが、かつての俺からすれば出来が
悪すぎる。

だから、この1年間、大幅に戦闘スタイルを変えなければならなか
つた。

ティーダと組んでいた時も、何かと動きのぎこちなさを指摘されて
いたな。

もつと、強くならなければならぬ。
けれど、時間は許してくれそうもない。

抜刀術に戻すのはあきらめた。

これ以上の回復は無理だろう。

いや、医者に言わせれば完治なのだが。
医者も首をひねっていた。

何故出来ないのかと。

どこかでまだ不調を訴えているところがあるんじゃないかな。
そう考へても特に痛みを感じることはなく、
何故か抜刀術の出来は悪いまま。

ならばあきらめるしかないだろう。

今、俺に出来ること。

新しい戦闘スタイルはもう出来ている。

今度こそ絶対に、守つてやる。

「…と言つわけで、明日、デート行くよ？」

「…く？」

いきなり何言い出すんだよ。

まあ、最近していらないからいいかなとは思うが。

「久しぶりにバイク乗りたいな～ってね」
「…まあいいけど。レイミは後ろに乗るだけじゃないか」

ちなみにバイクの免許は16になつた瞬間取らされた。
資格は大事だよ、とのことらしい。

この辺の「スタートスポット」と言えば最近出来たスパリゾートっていうのがあつたな。

しかもそこは遊園地のアトラクションもあるらしいし。

「んじゃあ、新しくできたトコに行つてみるか」

「あ、あのスパリゾートね。じゃあ最近買つた水着、着てみようかな」

…は？

「コイツ、いつの間に買つたんだ？」

俺は昔買つた奴しかないしな。

「大丈夫だよ。トールのも買つてあるから？」

「…用意いいな」

女が男ものの水着買うとか出来るんか？

とこつか周りの田を気にしないのかコイツは…。

翌日

「はあ……」

とこいつわけでやつて来ましたスパリゾート。
休日とこいつにともあつてか人の多いこと多いこと。

スパリゾートだけあつて水着の女性ばかりだからちょっと困るやつ。
場に困るんだよな……。
そしてレイミは今着替え中だ。

ぱっと脱いでやつと履くだけの男と違い、女つてのは色々と面倒な
ことが多いやうな。
細かくは聞かんけど。

「お待たせへ
」

s.i.d.e レイ III

「もう、残り少し…」

私は残された時間。

それはもうあとわずかしかなかった。

実は私には管理局にも報告していないレアスキルがある。

それは簡単に言えば未来予知。

そう、ただ、先の未来が見える、というだけ。

最初にこの能力が発動したのは6歳のころ。
3日後に伯父が亡くなる、というものだった。

最初は信じていなかつた。
でも、半信半疑のまま忠告だけはした。

「伯父さん。水は怖いんだよ？だから気をつけてね」
つて。

その時の伯父はまあ、子供の言つことだけど、とりあえず答えてはくれた。

けど、ダメだった。

三日後に、伯父は洪水のなか溺れていた少女を助け出したものの、力尽きて死んでしまった。

私は、その時はもしかしたら偶然かもしれないって、心のどこかでは思っていた。

次に見たのは両親の死。

町を覆う大火災から私を助け出して死ぬ、といつ内容だった。

信じたくなかった。

でも、あまりにも生々しい状態だったので、本当に起るんだと思った。

だから、私は本気になつて警告した。
町の皆さんも知らせた。

でも、皆は取りあつてくれなかつた。

それどころか私のことを変な目でみるようになつた。

両親も、まったく信じなかつた。
そして、起こつてしまつた。

両親は、火災が起きたことで、私の言つていたことが本当なんだつてようやく信じてくれた。

でも、視たとおり、両親は私を助け出して死んでしまつた。

火災が収まつて、生き残つた町の皆は私の言つたことが本当だつたとわかり、逆に私を責めてきた。
分かつっていたならどうして止められなかつたのか、つて

そんなことは不可能だつた。

たかが7歳程度の少女に何ができるのか。

そんな経験もあつて、私はこの力は管理局にも、誰にも報告しない。

もちろん、トールにも…。

なぜなら、言えば私がやろうとしていることがわかつてしまふからだ。

全ては、最近見た未来の映像。

明日、トールが死ぬ。

視えたのは、突然現れる強力な敵の姿。
そして、トールがその敵の刃に貫かれる姿。

残された私が、敵を倒す…。

ここまで映像だった。

視えた瞬間、私の中を絶望が襲った。

視えたのは、ティーダさんの葬儀が終わつた日の夜のことだった。

なんとかしなければならない。

だから私は、暗殺を再び始めたトールを止めたかった。
続ければ、本当にトールは戻れなくなつてしまふから。
でも、止めれば狙われるのは明らかだった。
そして、とうとうここまで来た。

明日、私がやろうとしていることは、本当に愚かなことだ。
でも、トールを助けるにはそれしか方法がなかつた。

「はあ……」

不安はある。

別に私が死ぬことじゃない。

その後、トールがまた死に直面してしまわないかといつことだ。

この、中途半端なレアスキルが恨めしい。

今まで、誰かの死しか見ていないから。

……だから、こればかりは祈るしかなかつた。

トールには、長く生きていてほしい。

本当の笑顔をしらないまま、死なせたくない。

トールは……今もまだ、本当の意味で笑顔を見せていない。

私のことは、本気で好きでいてくれていると思ひ。

でも……笑顔を取り戻すこと、こればかりは、私でも不可能だつた。

だから……願わくは……トールにこれ以上過酷な運命を背負わせないで
もらいたい……。

sideトール

「お待たせ」

はあ…ようやく来たのか…。

「遅いぞ？」

後ろを振り返ると……セーラー服のジニーを着たレイミの姿があつた。

「じゃじゃーん！－ビリ？ 忘れなおした？」

卷之三

なんかいい…出るとこ出でて…引つ込むとこ引つ込んでる…
コイツ…かなりスタイルいいんだつたな… // /

俺は一体何を…?

「まつせ～ん？ さては… 見とれてたな？」

「うーーー否定できない。」

「あはは、真っ赤になってる～かわい～
…好きに言つてろ／＼／＼」

あ～、不覚だ～。

「ほり！」
「…ん？」

レイミが手を差し出してくる。

俺はその手を取り、立ち上がる。

「せつかく来たんだし、泳げりつよ」

「…そうだな」

せつかく来たんだしな。
時間ももつたといないし。

「んじゅあまはずはあのウォータースライダーから…。」

「……おこおい」

なんだあのバカみたいに高いのは。
しかもほぼ垂直じゃないか。

大丈夫なのか？

「早く、早く」

「はいはい…」

「あつはつは！－！トールつたらおかしく」

「終わった直後になんて来るんだよ！－！」

そう、高さ的には何の問題もなかつたのだ。

問題なのは、レイミが俺がスタートした直後に降りてきたことだ。
監視員に絶対止められてたる…

おかげで後ろから勢いよく抱きつかれる格好になつた。

その後も流れるプールでいきなり潜水を始めて行方をくらませて突然驚かせてみたり、

競泳用のプールで競争したりと、楽しい時間はあつという間に過ぎ

ていった。

「あ～楽しかった！～」

「そうかよ……」

なんか疲れた…

なんかいつにも増して子供じみてなかつたか？

まあ、俺も楽しかったが…。

「さて、帰らうか

「ああ…」

なんだかやけに子供っぽくなつたな…。
なんだか夏休みの最後を無理やり楽しんでいるみたいだ。

…さつきから俺は何を考えているんだ?
これじゃあまるで…アイツが…

…いや、これ以上考えるのはよやう。
俺の考えすぎだ。

そんなんにならなによつ、俺が守るつて誓つたんじやないか。
だから、そんなんには絶対させない。

家に着くとレイミが夕食の用意をすると言つ出した。
俺が冗談交じりに出来んのか?つて聞いたら、

「大丈夫だよ~」

なんて返してきたもんだからお手並み拝見といふことにした。

…予想に反して今日のレイミの料理は頗かつた。
あんまりびっくりしたものだから、逆にレイミが怒りだしてしまつた。

怒つてそのままお風呂へ直行。

うへ、気まぐくなじなきやいいんだけど…。

「はーい、あがつたよー」

はあ…とりあえずあんまり怒つてなかつたみたいだな。
風呂入る…。

風呂からあがると、既にしてやは寝る準備に入つていていた。
俺も準備しなつとすると…

「あの……／＼／＼トール…ちょっと…？」
「…ビラした？」

もつねるんじやなかつたのか？

「今晚なんだけど…」

「...」

「一緒に寝ていーい?」

「んな！！！」

?

一緒に寝る？

備と

卷之三

「んも～察しが悪いぞ！～！」

何故かまた怒られる。.

え、これってちょっと待って？

……そういうの? // /

「ほら、早く枕持つてきてよ！」

「あ、ああ...」

卷之三

な、な、な、と、と、と、と、と、りあえず落ち着け俺。

こういう時は人という字を：10回だけ？書いて水と一緒に飲む

あれ？違つたつけ？

「待ってるからね……／＼／」

「お、おじやましま～す……」
「なんでコソコソしてるの～？」
「い、いや別に……／＼／」

だ、だつてよ……まさかこきなつこんな展開になるなんて誰も想像できないしよ。

う、と、とつあえず入るか…。

レイミは既にベッドの奥の方へ行つてるので、俺が入るスペースは確保されている。
布団を少しだけあげると…

「な…………／＼／

一応寝巻のよくなのは着てるんだけど…
ボタンが結構外れて…その…胸が…／＼／

「トールのえつち」

「ぱつ／＼／誰のせいだよ…！」

「ん～？誰のせいなのかな～？自分のせいじゃないのかな～？」

「い、ここ…」

た、楽しんでる…／＼／

しかも俺が抗えない方に引きずり込んでる…。

「ね、トール…」

「…何だ…」

わざわざまでの雰囲気とは一変して少し真面目な顔になつた。

「私ね…トールと出会つて、ホントによかつたと思つんだ

「いきなり何だ？」

……今日は本当におかしいな。

「初めてあつたのは…あの洋館だつたね」

「ああ…俺がまだ、‘仕事’をしてたころだな」

「初めはね？本当にただ、トルのことが心配なだけだつたんだよ

？」

「……そつなのか」

なんか少しがつくりした。

まあ…最初から好きだった、なんてのはありえん話だよな。

「でも、あの護衛任務でトルに助けられて…」

「ああ、あれな…」

…。
時間止める、なんてスキルがあるなんて、思にもよらなかつたな

「本当、なんて無茶するんだらつて、そのせいで左手、ホントは
まだ、違和感あるんでしょ？」

「……ああ」

「この」とはレイミには言つていなけばずなんだけどな…
なんで知つているんだ？

「だからね…私が支えてあげなきやつて、本気で思つよくなつた

んだ

「… そつか」

そんな風に考えていたのか…。

「そして、本当に好きになつた」

「考えてみれば…俺の方は一田ばれのよつなもんだったのかな」

…あの洋館の爆発の中、助けたのはホントはこれが理由だったのか
な。

「だから、ね…」

「ん…?」

「これが…最初で最後…の…
「…え?」

そのつぶやきは、俺には聞き取れなかつた。
…もし、聞き取れていたなら、未来はまた、変わつていたのかもし
れない…。

そして考える間も戻えられず、レイミの唇が俺のそれを塞いできた。
…リリードされて、俺が臆するなんてことはしたくなかった。

「来て……トル……」

「…ああ…」

一人の思いは、ここで本当に繋がつた。
いや、俺がそう思い込んでいたのかもしれない…。

でも、それぐらい、満たされた夜だつた…。

だから……信じたくなかった……
この物語があんな結末だなんて……。
。

第28話 彼女との過去 7（後書き）

「　　」…………／＼／「　　」

「と、トールさん…大人の階段登つたんやな…／＼／

「あ、え、あ、ああああ／＼／

「ふえ、フロイトちゃんが熱暴走したー！…／＼／

「ふう…ふう…／＼／

「落ち着いた？」

「な、なんとか…ね…」

「何気に私たちの情操教育つてお子ちゃまレベルやし、これは刺激強
いわ～」

「た、確かにね…特定の恋人とかいなかつたし…」

「それはちょっと悲しくなるから言わんといで」

「さて、次回でようやく終わるんか？」

「作者の予定ではそうみたいだよ」

「今回、いつもより多めだつたもんね～」

「しゃあないわ、本編更新が約1カ月ぶりやし」

「バレンタイン特別編やら、ティアナヒロインの急に始めた新年企

画もやってたしね」

「自分のスペックわきまえんとやるからやな、反省しき」

……はい、反省いたします。

「おお！作者がしゃべった！！」

「あ、あはは……後書き初参戦だね」

まあ、作者は影ですから。普段はしゃべりませんよ。
今回は本編更新が遅れたのでこうしていろいろと謝罪に参りました
のドジョーですよ。

「なんかしゃべり方が某シスターになつたるや」

「ひひ……最近のお気に入りキャラなんです……。
一期やつてるし……。

「まあええわ……ほな、次回も頼むで作者……。」

なるべく早く、やつたるのよ

「別のキャラかい！……もつええわ！……」

第29話 彼女との過去 8(前書き)

「めんなさい。後一回だけ……。

s.i.d.eレイミ

「…………ふつ……」

午前5時。

トールはまだ横で眠りについている。

……いよいよ、今日、か…。

細かな状況までは把握できていない。
けど、あの状況から察するに今日間違いない通常では起こらない何
かしらのアクションが起こる。

その時の判断を誤つてしまえば、トールの命はない。
：自分の命を賭けた正念場だった。

本当のことと言えば、不安だった。

これが仮に成功したとして、トールはこの後どうなってしまうのだろう？

リムルちゃんがいるから一人にはならないが、また、トールは自分の目の前で人が死んでしまうのだ。

それは、もしかしたら本人が死ぬよりも残酷なことなのかも知れない。

でも、このまま、トールを死なせたくない。

だから…

ごめんね？

sideツール

「今日はロストロギアの探索任務に当たつてもひつ」

「ロストロギア…ですか？」

俺たちに探索任務なんて珍しいこともあるもんだ。

普段は護衛や調査がほとんどなんだが…。

「そのロストロギアに、何か問題が？」

「ああ…飛行機で護送中に異常な魔力を発してな、飛行機は途中で墜落、操縦士の消息はわかつていいない状態で、さらにロストロギアもどこへ行つたのかわからない状態になつてしまつた」

俺たちは一応、それなりにロストロギアの対処法は心得ている。搜索、かつ異常の解消が今日の任務と言つてもいいだろ？。

「それで搜索場所は…この雪山だ

「うう…雪山ですか？」

そういうればレイミは寒いところが苦手だつたな。

大丈夫だらうか？

普段であれば転送にそれほど時間はかかるないはずなのだが、この日は気圧が異常に低く、相当時間がかかつてしまつた。

「はあ……ようやく着いたよ～」

そう愚痴りたくなるのも無理はない。墜落現場に到着したのは夕方近くになり、ここから捜索するのはなかなか困難になつてしまつた。下山して明日以降にしようとの案もあつたが、ロストロギアの危険性も考えると、可能な限り捜索はしてもらいたいとの要望もあつたので、日没までをめどに捜索を始めたこととした。

「しかしこれは派手に壊れたもんだね～」

そう、この飛行機は墜落にしては内部の損傷の方が激しかった。
特に「ツクピットの辺りはひどく、これでは操縦士の安否は絶望的
だろ?」。

問題のロストロギアについては、実は詳細はわかつてはいない状態
であるとのことだ。

これから調べるつもりであつたようだが、

何でも人体に寄生して影響を与えるタイプのものであるらしい。

「トール!! あそこ!!」

「何かあつたか!?」

レイミの指差す先。

常人では見えないが、レイミは魔力を強化して1キロほど先までよ
く見えるらしいその位置に人が木にもたれかかっていた。

その場に急行すると、既にこと切れている状態であった。

腕には赤色の宝石のようなものが埋め込まれていた。

「これがそのロストロギアか」

「間違いなくね。このケースに入れれば大丈夫ってことらしいけど

…」

ケースに閉じ込め封印処理を行つ。

そこへ遅れてやってきた応援が到着する。

「それが対象ですか？」

「ええ、この魔力反応といい、間違いありません」

「『』苦労様でした。後は我々の方で処理を引き継ぎますので……」

封印処理を終えたケースを手渡す。

これで今日の任務は終了らしい。

終わつてみればどうつてことない任務だった。

……この時まではそう思つていたのに……。

俺たちは雪上車まで引き返さうとする。
しかし……

「な、三尉殿！？一体何を……？」

驚きのよつた声がしたので振り返ると……
一人の尉官らしい男がケースからロストロゴギアの封印を解いてしまつていた！

「ふ、ふふふふふ……ようやく手に入つたぞ……この力……」

男の掌でロストロギアは赤く、妖しく輝いていた。

そして…

「ぐ、ハベハハハハああああああああああああ…！」

男の手に吸収されていったかと思つと、男は突然苦しみだした。

「三尉殿！？ぐああああ…！」

苦しみながら、周囲にいる局員を魔力で吹き飛ばす。
それはまるで男の魔力とロストロギアの魔力が融合したようだつた。

「構わん！撃て…！」

局員たちは男に向けて発砲するが、そんなものは何の意味もなかつた。

「がつ…！」

「ぎゃあああ…！」

男から突如生みだされた剣により、一人、また一人と斬られていく。
そして、気付けば俺とレイミーの二人だけになつていた。

「ふ、ふふふふふ……ようやく貴様を殺すことができるわい、トール・シコライア……」

「…………何?」

「こいつ……どうして俺の名前を……?」

「何……上層部に暗殺者として飼われていたのは、何も貴様だけではないということだ」

「…………」

「ありえないことではないと思っていた。」

確かに俺がいない間、管理局はその手を緩めていただろうか?
答えは恐らくNOだった。

俺以外にも暗殺者となっていた者はいたのだ。

だが、それと俺を殺すことに、何の意味があるのだろうか?

「わからない」という顔をしているな……」

「……そうだな……俺はもう足を洗った方の人間だからな」

「…………」
「そう、俺はもう……上層部の為の殺しはやめたんだ。」

「貴様にとつてはそうだろう…だがな…上層部はそつでもないのだ
「…どうこうことだ?」

「俺は…貴様がいない間の代役でしかなかつた…。貴様が暗殺者として活躍している間は、上層部は俺のことなど見てもくれぬ

「……」

「なんとなく、みえてきた…。

「コイツが俺を狙う理由が…。

「だが、貴様が暗殺者をやめ、俺が表に出ても、結局上層部は俺と貴様を比べるのだ。そして、俺がいるのに上層部は貴様を戾そうとする…!—そこが気に入らん!」
「……」

つまるところ、これは嫉妬に近いものだらう。

「ならば貴様を殺してしまえば俺はもつ貴様におびきることもないのだ!—」「…」

「うあ…」

不意に突きだされた剣を横に弾く。

俺と男との距離はかなりあるはずなのに…。
伸縮式なのか…。

「死ね！！」

「ちつ……レイミー……」

「わかつてゐる……」

レイミーが右手に魔力をこめて槍の投擲体制に入る。
レイミーと男の距離はスピアード・オブ・グングニルの全力を發揮するにはちょうどいい距離だった。

そのはずなのに……。

「嘘……」

男は左手一本でそれを受け止め、握り潰してしまった。

全力ならば間違いなくSランク以上の威力を誇る一撃が、だ。
その事実は俺たちを絶望に突き落とすには十分だった。

スピアード・オブ・グングニルはレイミーの中で最高の威力を誇る魔法だ。
そして俺はレイミー以上の魔法を所持していない。

…つまつゝにから導き出される答えは…俺たちの敗北しかなかつた…。

それほどあのロストロギアの魔力は強力なのか。

「ぬうううううううん…！」

今度は男が槍の投擲体制に入る。

「おい……まさか……」

「嘘でしょ…？」

そして男からレイミと同じ、スピアー・オブ・グングニルが放たれた。

いや、厳密には同じではなかつたが。

「まづい…！」

急いで氷の魔力壁を形成して防御態勢に入る。

レイミのスピアー・オブ・グングニルであれば全力でも削られはするが防御することは可能だつた。
しかし…。

「ぐつ…ああああああああ…！」

このスピアーオブグングニルは別格だつた。
ランクで言えばSSか、それ以上か…。

俺は魔力変換資質もあって防御能力にはそれなりに自信があった。しかし、それをあざ笑うかのような威力だった。

一撃で意識を刈り取られなかつたのは運がよかつたとみるべきか。

「なんだ、つまらん… これほどの力を手にしてまで殺したい相手は

にの程度とはな……」

二〇一〇年五月

男がゆっくりと俺に近づいてくる。

「いや、殺しをやめて貴様は弱くなつたのではないか?」「...なんだと?」

弱くなつただなどと思いたくなかつた。

「アリ」にこる女の為に、弱くなるとは... 愚かなものだな...」

「お前……！？」

立ち上がりたかった……。

しかしあの魔法は本来であれば俺一人など殺すのには十分すぎる威力だった。

立ち上がるどころか腕一本動かすのがやつとだつた。レイミもまだ起き上がれないでいる。

「もう……楽になれ……すぐにあの女も一緒に送つてやるからなあああ……」

そして俺に向けて漆黒の剣が振り下ろされた……。

でも、ならぬとして……

刃が体に食い込む音がする。

どうして俺の体に刃が食い込む感覚が来ないのか。

田を開けるとやうに止ま...

s.i.d.eレイミ

「がふつ……」

ま……間に合つた……。

この時ほど自分の電気の魔力変換資質を持つてよかつたと思つた
ことはない。

間一髪、トールではなく、私を刺せることに成功した。
……これで……あとは……

「ぐつ……なんだ貴様……離さんか……」

男の右腕を掴む。

「残り僅かの私の命……」

あなたに全てぶつけん……

「其は雄大なる空にありてなお、治まる」とを知らず、絶えずその地に災厄をもたらすものなり……」

これは……私が無限書庫で見つけた禁忌の魔法……！

「その罪を講いたくば今ここに異現し、かの者を撃ち滅ぼせ……」

「なんだ……」の魔力は……

「これで最後の……」

- ジャッジメント・ボルト -

あまりの衝撃で私から男の剣が抜ける。
トルが私に駆け寄る音が聞こえる。

「レイ//...」

ああ……やつぱり……トル……もう泣きそうになっちゃう……
だから心配なんだよ……

「今……治してやるから……」

トルが慣れない治療魔法を駆使してなんとか回復させようとしていた。

でもね……？

「ありがとう……トル……でも……もう無理だよ……」
「……どうして……!?」

「だつてさつきの魔法はね……？使用者と対象の命を等しく葬る……等
価交換を忠実に再現した……禁断の魔法なんだよ……」

「どうしてそんなものを使つたんだよ……！」

だつて……使つ理由なんて一つしかないじゃない……

「トールを守るため、だよ……」

「……」の……大馬鹿野郎が……！」

トールから流れる涙が止まらない。

「だからね……？トール……私がいなくなつても……」

「嫌だ……そんなこと言つたな……！」

「聞いて、トール……」

これは本当に大切なことなんだから……

「後を追いつ」とはしないでほしいの……」

「……」

「そして……今は無理でも……いつか本当の笑顔を……誰かに見せてあげ

て？」

「…それは…」

それだけなんだよ…今の私が心配なのは…

「……わかったよ…」

「…え…？」

「…いつか…今は無理でも…いつか…な…」

「…うん…！」

ああ…よかつた…。

これでもう大丈夫…

あ

この感覚

また…

またなの…？

また……トールは死んでしまうの……？

私のしたことは……無駄に終わってしまうの……？

でも、そこに映っていたのは……。

あ……トール……笑ってる……

笑うとあんな顔になるんだ……。

あれ? こいつは……綺麗な女の人と一緒に……これは訓練かな……?

今度は……なんか家族の団欒みたいな……

あ~、トールはこの人と一緒になるのかな?

今……わかつた……

私の本当の能力は……死を見るだけじゃなかつたんだ……。

ああ……トールがあんなに幸せそつで……よかつた……。

でも……本当にただ一つ……

私がそばにいれないのが……なんだかちょっと……悔しいな……。

また……また大切な人を守れなかつた……。

「ハーベンの魔術師の一族……」

- 1 -

嘘だろ？

「ふううう、耐えた…耐えきつたぞ…」の痛み……そして…貴様を殺せば全て終わりだああ…！」

男が全力で俺に向かつてくる。

だが、先ほどと比べればはるかに威圧感がない。

見ればところどころに深い火傷があり、あの魔法は決して無駄ではなかつたんだ。

そして…俺はこんなところで殺されるわけにはいかない。
レイミとの、約束を守るために…。

この時の俺は、本当に無意識だったのだろう。
痛みはとっくに限界を超えていたのだから。

だから……俺が抜刀術を使っていたなんて……思いもよらなかつた。

気付けば、俺は刀を鞘に納めていた。

それと同時に、背後から崩れ落ちる音が聞こえた。

「その力……！それが貴様の……ガフ！－」

男はそれ以上口を開くことはなかつた。

そして、俺も戦闘のダメージでその場に倒れこみ、意識を失つた。
。。

第29話 彼女との過去 8（後書き）

「……トールさん……」

「……こんな……壯絶な別れやつたんやね……」

「……なんというか……辛いね……」

「私もリインフォースとの別れがこんな感じやつたから、ホンマに辛いんよ」

「確かに……」

「だからそれ以降……あまり深い人付き合いをしてこなかつたのかな……」

「私たちで支えてあげないと、だね」

第30話 彼女との過去 9（前書き）

な、長かった……
やっと終わった過去編……。

sideトール

それからることはあまり覚えていなかった。
気が付けば病院のベッドの上で、一ヶ月の強制入院を余儀なくされたからだ。

その間にレイミの葬儀も終わってしまい、俺は最後の別れをすることができなかつた。

そして今日、ようやく退院することができ、家へと戻ってきたところだつた。

「……」

「……お兄様……」

思えばこの一ヶ月は酷いものだつた。

別に戦いのダメージが大きいとかではない。

それ以上に、また、大切な人を守ることができなかつたことが俺をここまで無氣力にさせた。

時間が経てば経つほど、レイミがいないといふことを気付かされる。

もう、涙も出ない。
戦う力も湧かない。

……立ち上がりれない。

リムルが心配してやつてきて、コーノや、クロノがやつても同じだつた。

皆、掛ける言葉が見つからない感じだつた。

……何か言わなければこのまま消えてしまうような、でも、何を言えばいいのか、わからない。

実際、そうだつた。

このままでいたら、生きる気力も失って、死んでしまうだろう。でも、それでもよかつた。

結局俺は、生きる」とで他者を殺してしまつ。

それが自分の手によるものでなくとも、誰かに殺されてしまつ。

やはり自分の存在こそが……一番の罪だったのだつ。

……「んな人生、もうたくさんだ。

リムルが帰つた後、俺は自分の部屋に戻つた。

机の上に置いてある刀を手に取る。
先の戦いで実戦に耐えうるような代物ではなくなるほど損傷しているが、そんなことはもうどうでもよかつた。
なにせ、もう後は一度刺すだけのもの。

「……お前とも長っつて付合ひだつたな……」

こんなびりしきょうもない主で、『めんな……』。

刀を鞘から抜く。

悪いな……レイミ。

もつ、ここひで限界みたいだ……。

そして刃を首筋に持つてじいじとしたといふド……。

「何をなさつてこますのーー!」

リムルに刀を持つた腕を掴まれた。

普段なら、振り払うことは容易なのだが、力が落ちている今ではどうしようもなく、刀を取り上げられてしまつ。

そして床に投げられ、その衝撃で刀は根元から折れてしまった。

「……心配で戻つてきてよかつた……！」

何故だらう…。

どこかで戻つてきてもらいいたかったのか、止めてもらいたかったのか。

この期に及んでもまだ生きたいなんて思つてゐるのか。

「…どうして…」

「どうしてではありますんわ！！こんな形で…レイミさんガ守つた
ものをぬき無しになさるおつもりですか！！」

俺は……！

俺は……！！

どうして……こんなにも弱い……………！

何一つ守る力もない。

両親も……

親友も……

恋人も……！！

そんな俺が……。
どうして生きのびているんだ…。

「……も、見ていいませんわ……」

刀を取りあげたままリムルは部屋を出て行こうとする。
俺は何をするでもなく、その後ろ姿を見送るしかできなかつた。

リムルが出て行つた後、そのまま少しの間うなだれていた。

本当に、全て離れていつてしまつた。

ふとテーブルの脚に見慣れない封筒が挟まつてついていた。

そういうればレイミは一緒に住んでいるにもかかわらず手紙をいろんなところに仕込むことがあつた。

食器棚とか洗面所の鏡とか。

発見するのが遅くなつて時期がずれることがあつたつだけ。
これもその手紙の一種かな?と思いつつ開いてみる。

悪いな、見つけるのが遅くなつて…。

しかしその中には俺の想像をはるかに超える中身だった。

「この手紙を読んでいることは、私の企みは成功つてことかな?
なんせ仕込んだのは私が死ぬ日だからね~」

「……え?」

田を「すつてもう一度見る。
しかし内容は同じだつた。

「私が……死ぬ日?」

それつて…自分が死ぬのがわかつていたつてのか?

・もしかしたら今、後を追おうとなんてしてないでしょうね?
だったら本当に許せないからね

今日、この手紙を書いたのは……、これからトールはどうしたら良いかアドバイスするためなんだな
それから、私があんな行動を取った理由について説明するため、かな。

「…………死んでいたとだ……?」

この手紙はレイミが死ぬ直前に書かれていたもの……ってことだよな。
でも、まるでこれから死ぬことがわかつっていたみたいな……。

まさか、レイミには未来が覗えていた……?
でも、あの時、レイミがかばわなければ……

「死んでいたのは……俺…………?」

賢いトールのことだからここまで読めばわかつていいと思つけど、
私には実は未来が覗えていたりするんだな。

そして、…多分気付いていたと思つたが、そこで見たのは…トール
が死ぬところなの。

しかも、この手紙を残す今日。

だから、ね？そんなことにはさせたくないて、あんな行動取っちゃ
いました。

…本当、ごめんなさい。

ま、本人もういないんだけどね？

「……なんでだよ……」

どうしてだよ。

なんで、こんな男のために……。

優秀な執務官だって、評価も、名声もあった。

噂のエースオブエース達にだって、ひけをとらないほどの中。

まあ、やっぱりね？あの時も言つたかもしれないけど、本当に好
きになつた人だから、幸せになつてもらいたかったのよ。
本当の笑顔を知らないまま、死んでなんて欲しくなかつた。
私に、いろいろな思い出をくれたあなたには、ね。

「思に出……」

初めて出会った時から、いつも俺のそばにはレイリの笑顔があった。気が付けば、もつとその笑顔を見ていたいと思つよくなつていた。

だから、もう、その笑顔を見ることができないなんて、思いたくなかつた。

死ぬのが怖くない、なんて言つたら嘘になるけど、このまま一人が私の目の前で死んでしまうのが、もつと怖かったの。

だから、ずるい言い方かもしれないけどこれから的人生は私のためだと思つて生きてみて。

せっかく助かつた命なんだから、無駄になんてしてほしくないもの。

「…なんだよ…」

こんな遣し方なんて…

「あるじよ……」

「これじゃあ、俺、後追えないじゃないか……
ほんとう、……するい……。」

涙が止まらなかつた。

レイミに泣かされるのは、これで一度田だつけ。

いつか、トールに本当の笑顔が戻るよつて、ちよつと遠ことじる
から見守らせてもらひうね。
それが女の子がらみだつたらやきもち妬いちゃうかもしけないけど
ね。

「…………本当の笑顔」

そうだな。

今は無理でも、こつかはそれが出来るといこんだが。

「…………」

わかつたよ。

俺は……まだ戦える。

レイミと……ティーダの分まで、俺が戦つてやる。

今は力が及ばなくとも、いつか、管理局の闇と、決着をつけてやる。

あ、そうそう、最後に、トールに一つお土産があるんだよ。知り合いのデバイスマイスターに特注のデバイスを一つ作ってもらつたんだ。

ホントは生きてるうちに渡したかったんだけど、多分この手紙を読むころには廻ってるんじゃないかな？

じゃあ…先にあつちで待ってるね、私の…最初で最後に愛した人…トール…。

手紙はここで終わっている。

そういうえば玄関に見慣れない袋があつたような気がする。

「これは…」

玄関に置いてあつた袋には腕輪型のデバイスが入っていた。
そういうえばちょっと今までレイミーが使っていたデバイスに似ていた
気がするんだけど…。

「まさかあいつ…」

「ちょっと前に不調になつたとか言ってたけどまさかこのために…？」
「とりあえず起動してみるか。

「フリー・ライト、セットアップ」

了解

手元にはひと振りの刀。

刀身がしつかりしていて、それでいてあまり重くない。

これなら、今まで使っていたやつよりも動きやすいかかもしれないな。

デバイスを戻し、この後すべき行動を考える。

「…とりあえず…謝りにいかないとな…」

リムルにはものすごい迷惑をかけちまつたし、何より情けない兄の姿を見せてしまつたからな…。

現在

side-トル

「……とまあこいつわけなんだが…」

よくよく考えるともう少しがいつまんで話した方がよかつたかな。
その後の話？まあ色々リムルには怒られちまたし、その辺の話は
もういいだろ。

「……グスツ」

「うう……なんて悲しい話なんや……」

別に泣かせるために話したわけじゃないんだが……。

「で、トール、君はこれからどうするんだ？」

「そうだな……」

ここまで話したからには最後まで決着をつけないといけない。
それにもう、逃げるのはやめにしよう。

あの時に、最後まで戦うって決めたもんな。

「決めたよ、クロノ」

「そうか」

それ以上、クロノは何も聞いてこなかつた。

もう、逃げることはないって、わかつたんだろうな。
逃げれば、ここにいる連中が巻き添えになる。
こんなお人よし連中、放つておけないしな。

「もう一度、コイツに誓つや。最後まで戦うってな

第30話 彼女との過去 9（後書き）

「私はこいつでも見守ってるよーーー！」
「おわーーーいきなりなんやーー？」

「どつも、過去編終了につきゲストとしてやってきましたレイミ・シコウライトですーー！」

「ちよつと待ていーーー何そりげなくメールさんの姓名のつるんじやーー！」

「え？ ハプロンがかわいい新妻？ やだな～もう

「誰がそんな」と言ひたーーー！」

「あ、あはは… レイミさん、こんな人なんだ…」

「えー、いいじゃん現世では結婚出来なかつたんだからせめて天国で名乗らせてくくれても」

「天国つて結婚できるんだ…」

「フュイトちやん… センセッシ 「むといひやうわ…」

「まあとにかく、これからはこいつでゲストとして出るのかな？」

「そつだねー、きっとトールが見てくれてるし」

「そういうえばトールさんはまだ後書きには来てへんな

「そのうち出るんじやない？」

「とにかく、レイン、こつこつでは結局伏せたみたいやな
「ん？ まあ大体想像ついたでしょ？ 私とティーダさんの過去編の中にそれっぽい描写もあるし」
「…………」
「ん？ フュイトちやんどないしたん？」

「え? いや、なんでもないよ……」

「セレ、ソレからまた本編に戻るみたいやけど……」

「作者はもつ一回原作見なおしてくるみたいだよ」

「まあ、原作どおりには……いかないんやわつなあ」

第31話 新たな試みと作戦（前編）

かうせんば……だと……？

第31話 新たな試みと予想

sideトール

翌日

俺のちよつとした逃亡騒ぎも終わり、今日からまた訓練が始まる。そして俺はこれからに戦うことを考え、あることを試すことになった。

「抜刀術？」

「ああ、これからのことを考えるとちよつとな

以前から考えていたことなのだが、俺にはこれという技がない。たとえばなのはさんのスター・ライト・ブレイカー。

もしくはフェイトさんのプラズマランサー・ファランクスシフト。

そうじつた人たちに比べれば、‘何もない’のである。

まあ、氷魔法とか、いろいろと小細工を駆使した戦い方の方が向いていると言わればそれまでだが。

絶対的な強者を前にして、何も対抗手段がないのは悲しすぎる。防御には自信があるが、それはただの時間稼ぎにしかならない。

だから同じく剣士であるシグナムにお願いして抜刀術の練習をしようと思つた。

あれから5年経つた今なら、違和感なく出来ると思つ。

抜刀術使えれば、必殺技といえるものはいくつかある。それはこれから戦いを考えれば間違いなく必要なものだ。

ちなみに訓練時はフリースライトではなく訓練用に支給されたデバイスを使用している。

フリースライトもあれで結構まめに調整しなければいけない。

今はシャーリーさんにお願いして調整中だ。

「えじや、めずら…」

手じろな音を見つけて適度に距離を取る。

刀を納めた状態から腰ではなく、やや高こゝりよつて肋骨の一一番下の位置辺りに持つていく。

そして一気に振りぬく…

「おお…」

シグナムから驚きの声があがる。

距離をおいたにもかかわらず、背には深く傷がついていた。

「うへん……」

足らない。

この、‘絶空刃’は昔ならあんな岩粉碎できたのに。
足腰の安定はともかく、上半身の力が足らない。

昔より間違いなく筋力が落ちているからだ。

無理もない。

六課に来るまでの俺はひどかった。

レイミとの約束があつたから自ら命を絶つようなことはなかつたものの、生きる気力までは取り戻してはいなかつたのだ。
当然、トレーニングなんておざなりなもの。

力が落ちるのは当然だった。

ティアナをきっかけとして六課に来ることになつてからは今までとは違つてそれなりに訓練もあつたが、かつての力を取り戻すまでにはもう少し時間がかかりそうだった。

こつちはもう少し時間がかかるとして、今日試す技はもう一つ。
かつて、レイミを殺した（正確には違うけど）あの男を葬つたあの技だ。

あの時は未完成だったが、今から氷魔法の補助を受けて試してみようと思つ。

「…………これは？」

「今から使えるか試したい技に必要でな」

自分の周りにいくつか氷の刃を展開させた。
そのままの状態で岩に向けて突っ込む。

そして岩に激突する直前で刀を抜く。

それと同時に複数の氷の刃を振り下ろす！！

「……………！」

刀を納めると同時、岩はバラバラに裂かれていた。

「うーむ……」

かすかに痺れるような感覚の残る左腕。

これは自分の中に残る精神的なしこりのようなものが表面に出てきた
ものだらう。

普通に戦う分には問題ないが、これも解決しなければならない問題
だった。

「…………」

そして何故か遠くから視線を感じる。

振つ返ると遠くの木の後ろから金髪が覗いていた。

「…………フハイトさん?」

あんなところで何やつてるんだろう?・

s.i.d.eフハイト

「…………じ~~~~~」

トールさんの調子を見るよりはやで頼まれてここまで接近できたのはいいんだけど…

う~~~これ以上近づけなー。

トールをみて気配察知能力とか高やつだし、ここからなんとか…。

「何をやつてる、テスターッサ」

「うわあーー」

え？あれ、シグナムいつの間に？
と、いうかばれてた？

「うなみにショライドもといへ」気付いていた

え……、あ、あははは……。

トールさんを見つからなによつて、つていつのが難しそうな上へ。

あきらめて木の後ろから出てきたところでトールさんと田中が会った。
初めて会った時に感じた迷いが消えていく。
戦うことへの迷いを振り払えたんだ…。

「あ、えつと……」

「？」

なんでだろ？。

トールさんの過去を聞いてから、トールさんのことばかり考へてる。

その変わらない表情の中にじれぼじの悲しみを封じ込めているんだ
る？？
どうすれば、トールさんを救われるんだ？？

レイミさんさえいれば、どうにかなつたのかもしれない。
笑えているのかもしれない。

でも、そのレイミさんは、もういない。

だからといって、このまま放つてはおけない。

だつて…どうか昔の私に似てるから。

母のために、ジュエルカードを集めて、なのはとも敵対していたあのころの私に。

こんなに強くて、こんなに弱いこの人を…やがくなくなげや…。

必要なデータを取り出してござ始めたといひでなのはさんから通信が入った。

『トール君、それにフォワードの壁、ちょっと...いいかな?』

「...? どうしました?」

なのはさんほどにか困ったような、そんな表情をしていた。

『ちょっと困ったことになつてね...ちょっとトスクワーク中断して今から女子寮に来てくれる?』

「じょ、女子寮?」

おいおい...大丈夫なのか?

『とにかく早く来てね...それじゃあ...』

そう言って一方的に通信を切つてしまはなのはさん。
いつたいなんだろう?

「何かあつたんでしょう?」

「よくわからんが...行つてみるか」

ホントは男が入っちゃいけないとこなんだけどな...。ま、こいつも一緒になら大丈夫だ。

s.i.d.eなのは

「いっちゃんやだ~~~~~！~！」

「う、うーん……」

困ったなあ。

今日は聖王教会に行かなきゃ 行けないのに…。

「どうした？」

そこへトール君達が入つてくる。
なんとかできればいいんだけど…。

「あ、トール君… 実はね…」のナ… ヴィヴィオのことなんだけど…
「…」の子は…あの現場にいた…」

ヴィヴィオの母親が見つかるまでとつあえず私が面倒見よつと思つ

ていたんだけど…。

甘かつた…。

子供の面倒を見るつて…大変だよ…。
お母さんもこんな感じだったのかな…。

「今日は聖王教会に行かなきやいけないんだけビ…」

「うわあああああん……」

「…なるほど…」

トールさんはすぐに察してくれたみたい。
けど、このまま離れられないよね…。

「ふむ……」

テレビトールさんは少し老えるようなしぐさをして、それから…

ヴィヴィオの目の前を透明な、何か、が通り過ぎた。

「……ふえ…？」

それは氷でできた、まるで妖精のような、小さな人形のようだつた。

「トール君……？」

誰がやつたことなのかは、すぐにわかつた。
でも、これってとてもすごいことなんだけど……。
さすが、氷の魔力変換資質持ちだね……。

「……あ……」

その、「人形」はヴィヴィオから少し離れたところで止まり、ヴィ
ヴィオの方を振り返って会釈した。

「わあ……」

それを見て、ヴィヴィオは初めは少し驚きながら、だんだんと楽し
そうに、‘人形’追いかけ始めた。
凄い器用だね……。

「さて、ヴィヴィオ？」

「…………？」

ヴィヴィオは、人形、を追いかけるのをやめ、トール君の方へ振り返る。

トール君は、あまりいつも通り表情が変わらないながらも、どこか優しそうな感じがして…なんだか、私も嬉しくなっちゃった。

「ここにいるのはさんは、これから仕事で出かけなくちゃいけないんだ」

「……う…」

それを聞いて、また少し悲しそうな表情になるヴィヴィオ。これでも無理…かな…？

「その代わりに、少しお兄さんたちが遊んであげよう」「…ほんと…？」

『ごめんね…トール君…』

念話でトール君に謝る。

『大丈夫、後はこっちに任せとけ…』

うん、これなら大丈夫だね。

「ごめんなさい…。なるべく、早く帰るからね…」

本当に早く帰つてこよ。

そう決意して部屋を出て行つた。

sideティアナ

「く…あのときのチヨキが憎い…」

スバルがまだぶつぶつ文句言つてゐる。
いや、気持ちはわかるけどね。

その後デスクワークを引き受けた係とトールさんを手伝つて子守りをする係に分かれることになった。

その結果、デスクワークは私とスバル。

ヴィヴィオの面倒はトールさんとエリオとキャロで見ることになった。

ほんとなら私もあつちに混ざりたかったのよ?
でもね?万が一私とトールさんが子守りになつたら...誰があの量

のデスクワークを捌くのよ…。

スバルは私より成績がいいくせにデスクワークが苦手。エリオとキャロはまだちょっとだけじゃない、というかちょっとあの量は無理。

だから必然と私はデスクワーク組になつたの…。
まあ…トールさんの分もあるからね…。

トールさんはさすがに私たちが手を出してはいけない書類もあるから、当たり障りのない部分だけなんだけど。

実はトールさんの書類作成能力は六課の中でも群を抜いている。私も一度見せてもらつたが、ホントに凄かつた。

まず、誤字がない。

誤字、というのは量が多くれば多いほど、内容が難しければ難しいほど発生しやすい。

けれどトールさんは八神部隊長曰く、「なんやこの完璧な書類は…私への嫌味かー！！」とのことだ。

もつとも本人はそんな自覚もなく、「アイツに叩き込まれた、というか途中からアイツの分もやつてた」と言つていた。

たしかにそれだけやれば上手くなるだろうけど。
これだけいろいろできるんだから執務官とか目指さないのかしら…。

「あーり……？」

トールさんのデスクの上には、一枚の写真が置かれていた。

「ここれは……」

そこに写されていたのは……。

「綺麗な人……」

この人が…レイミさんなんだろうか……。

まだ……好きなのかしら……。
いや、好きなんでしょうね……。

トールさんにとつてレイミさんは…もつ…永遠に忘れられない人だから……。

でも、それがどうした。

私は、私なりに、今苦しんでいるトールさんを助けたい。
この気持ちが一体なんなのか…よくわからないけど…。
いつか…はっきりしてくるはず。

で、それにはまづ…

「ティア～」

この後ののいわゆることをなんとかしないといね……。

もう3月だね

「そうですね～…」

「…ま、毎回この天然コンビの相手せなあかんの…？」

え？ 天然じゃないよ…」

「や、やうだよ」

「自覚のないところが天然や。さて」

ん? 今回はトールが左手の怪我が原因で封印してた抜刀術を使

えぬよ」「訓練してた回だね」

「ん~、本戦で戦う時なんだ。基本は1対1向こうがどうして勝つんだよ。」

対複数の技もあるらしいけど

「まあ言い方悪いかもしけんけど、魔法とか、そっち方面はどうし

「ハヤシの仕事は、おまかせ下さい。」

「努力してレベルアップしたみたいだし」

「洲」の半島が幾つあるか、洲の数を数えよう。

か、
だね」

その前と後の私とティアナの部分にも多少意味はあるんだよね

「おまえがアダルトの野口とあらわからうかうかしておるやうだな

「うそ、それは / / /

「あれ、そこへん語しく置きたないあれ」「

「あん！ なんが怖い？」

「せつ? その心は?」

「そ、そんなの…わかるでしょ…? / / /」

「え~? 言葉にしてくれんとわからんわ~」一ヤ一ヤ

「……/ / /」

「……/ / /」

「くつ…自分でこの展開にしといてなんやけどなんか腹立つてきた

「…」

「で、次回は子守り後篇やな」

「なのはが戻つてきたらどうなつているかが見ものだね」

「なんか嫌な予感がする…主に私にとつて! !」

「はいは~い、レイ!! そこは後書き担当やからもう表に出さよつけにな~」

「は、は~な~し~て~! !」

第32話 親就任と一つの決意（前書き）

スムーズに出来たので投稿しましたよ～

第32話 親就任と一つの決意

sideトール

「俺は3枚交換な」

「えつと…じゃあ私は2枚で」

「僕は3枚」

「ヴィヴィオは2まーい…！」

とこつわけで俺たちはそのままなのはせんの部屋でヴィヴィオの世話をしている。

今はポーカーの真っ最中だ。

ヴィヴィオは飲みこみが早いのか、ルールを教えただけですぐに遊べるようになった。

「じゃあ私から…」

キャロはエースのスリーカード。

この時点で俺の負けは決定していた。

俺の手札はジャックのスリーカード。

3枚交換して1枚ジャックを引いたはいいものの、それ以上の引きはなかった。

「うう…クイーンのワンペア…」

エリオは3枚交換したものの、引きが良くなかったようだ。

「ヴィヴィオはこれーーー！」

そういうて、ヴィヴィオが出した手札は……。

「キングのフォーカード……」

これも驚いたことだが、ヴィヴィオは引きがいい。

今まで10回ほどやつているが、役なしになつたことがない上に、最低でもスリーカード以上の手札になるのである。

トランプをシャッフルするのは順番なので、いかさまなどはありえないのだが……。

「考えすぎかな……」

s.i.d.eなのは

それにしても意外だつたなあ…。
トール君が子供の扱いに慣れているなんて。

なんか…（俺には無理…）とか言つて、僕さんに任せてい
そうな感じだつたんだけどね。
人はみかけによらないといふか…。

思えばトール君に会つた当初は、どう接していけばいいかわからなかつたなあ。

表情の変化が見えなくて、仕事はテキパキこなして。
そして私から見たら自分の戦い方を完成させていくように見える、
すごい人。

でも、実際はそうじやなかつた。
確かに、才能もあるし、努力もしてる。

その裏には私には想像も出来ないくらい、悲しい出来事があつて。
でも、変わらずに戦い続ける。

戦う理由はなんだろう？

フェイントちゃんは、お母さんのために戦つていた時期があつた。
ヴィータちゃん達ヴォルケンリッターは、はやてちゃんのために戦

つていた時期があった。
じゃあ、トール君は？

今のトール君が戦う理由は何？

私が考へていい通りなら、いけない。
このままじや、トール君も、トール君を守つたレイニアさんも救われ
ない。

だから……、明日、私のやるべきことは……。

「ただいま～」

もう少し早く帰つてくるつもりだつたんだけど、以外に時間がかか
つちゃつた……。

大丈夫だつたかな？

「ファ、ファイブカード…」

「結局…一度も勝てなかつた…」

トール君たちはテーブルでトランプを使ってポーカーをしていたみたい。

「あ、おかえりなさ～い！！」

ヴィヴィオが笑顔で出迎えてくれる。
その横では、

「…………」

何かを考え込むトール君と、

「…………」「…………」

軽くショックを受けるエリオとキャロの姿が見えた。
な、何があつたんだるつ…？

「な、何があつたの? トール君……」
「いや、部屋にちょうどビーランプがあつたからポーカーをしていたんだが……」

「……え?

ヴィヴィオ全勝?

「さすがに何かあるんじゃないかと思つてしまつた……」「いややは……」

確かにそれはす”じよね……”といつもありえないよね。

「いっぺい遊んでもらつたんだー!」
「そう……楽しかった?」

ヴィヴィオの頭をなでながら尋ねる。

「うん……」

笑顔で応えるヴィヴィオ。

トール君達にお願いして正解だつたね。

「なんかこうして見ると……」

「ん?」

「なのはなさん、ヴィヴィオの母さんみたいですね」

「…………え?」

「…………ママ?」

「え、ちよつとこきなつ向かって出すのメールかー?」

た、確かに今は保護者代わりだけビーハー子さんと両親がい
るんだよ?」

「ママ?」

「ヴィヴィオも乗つ氣!?」

「う、して、じょうがない」とこつわ子じゅなこだび。

「…………ママ?」

本郷のお母さんが見つかぬまでの間なら……ここよね。

「なのはなママ?」

ヴィヴィオも凄くつれじやん。

と、ここでキャロから更に爆弾が投下された。

「あ、じゃあトールさんがヴィヴィオのパパになるんですね」

ビシイ！！

あ、
ツール君が固まつた。
え、
ちょっと待つて。

私がママで、トル君がパパってことは……。

「え、ええええええええええええええ！」

思わず叫んじゃつたよ。

だ、だだだつて…、そ、そういうことになるんでしょう?

「どうしてそんなの…？」

そして思わずトール君も聞を返しかやつたよ！

表情があまり変わつてないけど明らかにうるたえてる。

「え、だつて僕たちから見てるとまるで親子みたいだな～って…ヴィヴィオのなつき方が」

だ、だからってこきなり突飛すぞない？

「トールパパ？」

「え、えつと……」

「なのはママ？」

「それは……」

でも……トール君がパパ、かあ……。

なら……いいかな／＼

「いこよ……」

「え？」

「なのはが、『トイザらス』になつてあがるよ」

「ほんとうへ……」

「うそー。」

「……なら、俺も……本当の両親が見つかるまでの間なら、な

トール君もア承してくれた。

「えへへ… トールパパ、なのはママ…」

本当にうれしい…。

それにも… パパ、ママ… かあ…

お父やお母の声をこんな感じだったのかなあ…

sideトール

にしても俺が父親、ね…
らしいことなんて大してないと思つんだが。

父さんは、どうだつたかな。

初めて俺に戦い方を教えてくれたのは… 6歳のころだつたつけ。

最初は刀に振り回されているだけだつたな。
んで父さんになかなか勝つことができなくて、悔し泣きしてたもん
なあ。

最初に勝つたのはホント、父さんたちが死ぬちょっと前だつたか…。

で、母さんには魔法を教わつた。

俺の魔力変換資質を考慮して扱いやすい魔法を教えてくれた。
あの氷でできた人形もそのころに練習用として編み出したものだし
な。

その両親も、もういない…。

俺はこの子に何かしてやれるのだろうか…。

いや、そもそも俺が引き受けてしまつてよかつたのだろうか…?

俺は……。

翌日、早朝の訓練も終わり、午前の「スクワード」を始めようとしたところでのはさんには声を掛けられた。

「トール君」

成り行きとはいえたのはさんはヴィヴィオの母親になってしまった、ただでさえ忙しいのが更に忙しくなってしまった。

本当に申し訳なく思う。

けれど、今は、そのことについて声を掛けられたわけではないようだ。
ところのも……。

「…………」

表情は真剣そのもの。

決して昨日のような和やかな雰囲気の中では話すことの出来ない内容なのだろう。

だから、俺もそれに真剣に応えなければならない。

「……どうしました？」

なんとなく、これからのはさんが言ひとはわかっている。
隠さうともしていない、戦の時の日だ。

でも、理由がわからなかつた。

自分の過去を話した時、戦うと言つた、あの覚悟を聞いて来たのだ
ううか？

「…午後、時間ある？」

「…ええ。この書類も午前中に終わらせることが出来そうですので

昨日ティアナに手伝つてもらつた書類は、よく出来ていた。
それは一等陸士という階級なんかの器ではないと思わせるほどで、
将来が本当に楽しみだつた。

おかげで今日の書類はスムーズに進められそうだ。

だから、今日は何の心配もいらない。

実を語つとこに来た時からやつてみたことの一つでもあったか
らだ。

それは……。

「お願い、私と戦つて」

管理局のエースオブエースとの、一騎討ちだ。

第32話 親就任と一つの決意（後書き）

「「J、これは……」

「次回、波乱必至やないか」

「作者曰く、「彼」を救うには、やはり主役の力を借りよつか、といふ」ということらしいことよ」

「お話、なの?ねえ、トールやられちゃうの?」

「どうするつもりなんや……作者」

「戦いだけじゃなく、その後にも注目してほしいみたい」

「「J」の戦いがトールに、そして機動六課にどう変化をもたらすか」「楽しみにな」

第33話 本郷の仲間（前書き）

また半月…

第33話 本当の仲間

sideトール

「ホ、ホントに大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ」

模擬戦は明日、行われることになった。

午後はそれに備えて体力向上の基礎練習と、刀の素振り、型と誘導弾の練習と個人的なものに重点を置いた。
なのはさんと模擬戦をすると聞いたのかフェイドさんが心配そうに様子を見に来たようだ。

「これは、フォワード陣にもいい見本になればと思ってね」

これも本心だった。

後衛と前衛の戦い。

前者はいかに距離をおきつつ戦つか、もしくは接近された時の対処法を学ぶことができるし、

後者はどのように自分の戦い方に持つてくるか。

「まあ、参考になればの話だけど
「その辺は心配ないと思つんだけど……」

問題はなのはさんの真意、かな。

ここで模擬戦を持ちかけてきたのにほしつかりとした理由があると思つんだけど。

試されるのはなんだろう?

戦う覚悟はもう示したはず。

その確認なんてものではないはずだ。

でも、なのはさんの真意が何であるかと関係ない。

例え、命に代えても

「？」

この人たちを、守らなくては…。

そして翌日、フォワード陣の早朝訓練も終わり、約束の時間になつた。

既にフリーザライトを起動させ、準備は万端である。

まあ、今回は‘鞘’の方は思いつきり使うことはないだろう。

そして相対するものが振るうは一振りの杖。

今や管理局の中で知らぬ者はない、屈指の実力者。

高町なのは。

彼女が今、俺の前に立ちはだかろうとしていた。

鞘を握る左手に思わず力が入る。

「『めんごめん、待たせちゃったかな?』

「いや、大丈夫だ」

こんな何でもない会話の中でも、何か、なのはさんから覚悟のよくなものを感じる。

遠くにはフォワード陣や、フェイトさんを始めとする隊長陣、そして部隊長までいる。

何か、ただならぬものを感じたのだろうか。

「それじゃあ……」

鞘を腰に持つてくる。

右手は前に下げるままだ。

「始めようか

なのはさんの声と共に、俺は駆けだしていた。

s i d e なのは

私の最初の思惑は、当たらなかつた。

最初から接近戦に持ち込もうとするかと思っていた。
けど、冷静に考えれば、何度も生死を賭けた戦いを乗り越えてきた
人が、そんな単純な攻めをするわけがなかつた。
近距離でなければ、負けることはないと思う。
それでも、油断は出来なかつた。

隙が出来れば、一瞬で詰めてくる。

そんな絶妙な距離を、トール君は見事に取つていた。

この距離ならば、スターライトブレイカ も、ディバインバスターも撃たせてもうれるか、怪しい。

この距離ならば、トール君の誘導弾も、届く。
だから、距離を置いた戦いならば、ここがトール君にとつて最適な距離。

今のところは、誘導弾の手数も、威力もこちらが勝っている。
でも、速度は向こうが上だ。

打ち消せない誘導弾は、今のところ全て避けられている。

今のところは、これでいい。

このまま続けるのなら、いずれトール君は負ける。

そして、仕掛けてくるなら、その時は私が考えた策に嵌まるとなる。

私の周りを飛んでいるビット。

そしてレイジングハートが秘密裏に空中に仕掛けている罠が、徐々にトール君を追い詰める。

トール君が仕掛けるべき機は、とっくに逸しているから。

トール君の遠距離戦闘の技術は、私が思つていてるより高かった。
きっと、射撃型のデバイスを持たせても、専門家と思わせるほど
力は発揮するだろう。

それでも、私の策を覆せるほどじゃない。

そもそも、仕掛けるところだと思つ。

もう、準備は出来ていた。

sideトール

仕掛ける隙が、まるでなかつた。

どこか、崩せるところはないか。

そう思つて高速移動しながらの射撃を試みるも慣れないせいか、誘導弾を撃ち落とすのが精いっぱい。

かくなる上は…

右手をフリーズライトの柄に添える。

多少のダメージは覚悟の上で、全力で突っ込む。

当然、氷の盾は前方にのみ展開せん。

本来なら、この時に気付くべきであった。

このまま戦い続ければ、間違いなく負けることは俺もわかっている。
そして当然、なのはさんも、だ。

それなら俺が仕掛けることなどわかつてゐるはずだ。

そしてそのタイミングは…一瞬の隙ができた時。

そう、例えそれが、巧妙に張り巡らされた罠の延長だとしても。
それしか、なかつたのだから。

だから俺は、その誘いに、乗つてしまつた。
誘導弾が絶えた、その一瞬。

「ソニック」

だが、その言葉は、続かなかつた。

左足に掛かる、極端な負荷。
いや、これは -

「バインドー？」

思えばなのはさんはこれ待つていたのだろう。

ソニックムーブを行う一瞬、俺はわずかに動きを止めなくてはなら

ない。

そこを狙つた。

構築に必要な魔力は、誘導弾で散つた（と見せかけた）魔力を一か所に集約することで集めた。
これが…

「エースオブ、エース……」

そしてこれから来る魔法も何となく想像がついた。

そして来るべき‘魔法’に備え、今、俺が出来る最高の防御魔法を構築し始めた。

これは… これから戦いに、必要なものだから。
特に、‘アッシュ’との戦いには…。

目の前に広がるのは桜色の極光。
あまりにも巨大な魔力の奔流が、俺を押しつぶそうとしていた。

「トール君と一緒に、本氣で向き合つ必要があると強いて」

部屋に帰つても、なまなましいままだった。

最後まで戦う覚悟を示したトールちゃん。

でも果たして本当にそれだけでいいのだろうか？

その覚悟の先にある未来は、幸せなのだろうか。

きっと、トールさんはまだ、本当の意味で私たちと向き合つてはないのかもしれない。

だから、なまなま本氣で向き合つてしまふ。

それが、トールさんを一度本氣で倒すことにならう。

それが、高町なのはの在り方だから。

「おいおい……いくらなんでもやりすぎなんだじゃねえか……？」
「模擬戦でスターライトブレイカ　だと……？」

確かに、通常であれば間違いなくやりすぎだし、私もそうなる前に止めに入ったと思つ。

でも、これはトールさんにも、なのはにも必要なことだ。

だから、最後までやりせん。

命中を確認しても油断なくレイジングハートを構えるのは。
空中で命中したにも関わらず、トールさんは落ちてこない。

そして煙の晴れた先には……。

バリアジャケットは右肩部分が裂け、そして右腕を下げる状態のトールさんがいた。

「はあ……はあ……」

非殺傷設定にもかかわらず、かなりのダメージを負っているのが遠くから見ている私にもわかる。

それでも、戦う意思は捨てていない。

なんでだらう?

その姿が、悲しそうに見えるのは。

その姿が、昔の私と重なつて見えるからだらうか。
だとしたら、トールさんの覚悟はやはり……。

「…………トール君……」

「…………？」

なのはが、口を開く。

「どうして、周りを頼ってくれないの……？」

「……」

そう、なんだかんだでトールさんは周りを頼るところじとしない。

それは、今まで一人でやつてきたことだからかもしれない。

でも、これから戦いは、そんなに甘いものじゃない。

「トール君、こなじだ…最後まで戦つ…って言ったよね…？」

「ああ……」

そして、なのはは今のトールさんに一番必要な言葉を投げかける。

「それ……足りないといふ…あるよ…」

「…………」

そう……トールちゃんに足りないことは……。

「生きて、誰のところに床の間に…どうして誰もしてくれなかつたの…？」

「それ……は……」

生きよつとする意志。

今、トールさんに欠けているのはそれだけ。

「私たちは、そんなに頼りにならない?」

「そうじゃない…」

慌てたようにトールさんを呼ぶカビ。

「でも、やつはひいてのと回りだよ…」

「……」

「辛いなら、辛いって言つてほしい! 助けて欲しいなら、欲しつて言つてもいいみたい!」

「……！」

その時、確実にトールさんの心の中では何かが動いたのだろう。さつままでとは田代が変わっている。

まるで何かに憑かれていたのが、取れたようだ。

「戦いに勝つこともそうだけど、私は…ここにいる誰ひとりとして、欠けるようなことがないようこしたい…。それは…トール君も入ってこるんだよ?」

「……」

トールさんは、何か言いたそうな、それでいて言葉が見つかっていない

どうすればいいのかわからない、といった表情をしている。

「だから……約束して……。必ず生きて、皆の元に戻るって。皆を悲しませないつて！！」

これが、ここにいる皆の気持ち。

だってトールさんは、機動六課のメンバーなんだから。

……大切な、仲間なんだから。

「…………わかったよ…………」
「…………え…………？」

その時、見えたのは私と、なのはだけだろうか。

本当に、本当にわざかなんだけど。

トールさんの、微笑んだ表情。

「ちって、それじゃあ今日の……」

「約束する。絶対、皆の元に帰つてくれるってな」

この時、本当の意味で、トールさんは私たちの仲間になつたんだと思つた……。

「……まさか一方的に痛めつけて、説教して終わる、だなんて思っちゃいないよな？」

何だろ？

あまり表情に変化がないはずなのに、トールさんの背中から悪魔の翼が見えるんだけど……。

「え……？」

「ちよつといじになら俺の得意な距離だし、そもそもこれはフォワード陣に前衛と後衛の戦いを見せるところ的だつたしな」

「いや……わざわざのスタートライトブレイカで結構魔力消耗しちゃつただけ……」

もうひとつ今日の発覚したこと……。

トールさん……意外と負けず嫌いだ……。

「……こりゃ俺の番だ。フォワード陣に負けない姿は見せるなよ。」

「…………やせん……？」

そんなんのはの情けない叫び声と共に、模擬戦第一ラウンドが開始された。

これについてはなのはの名誉のために言わないでおこう。

第33話 本当の仲間（後書き）

「む～～」

「どうしたんですか？レイ＝さん？」

「なんか納得いかない～～」

「あー、なんだかんだ言つてレイ＝さんつてトール君の笑顔、見たことないんやつたな」

「せうだよ～、一人よつず～～～と長く一緒にいたはずなのに

」

「ま、自分が思つてはいるよりたくさんの人大切にされてるってわかつたんやからうれしかつたんと違う？」

「なるほど……」

「ところで……いい加減ヒロイン決めたのかな？」

「なんだか最後まで引っ張りそうだもんね」

「またしょうもない」と考えてそうやな……」

第34話 新メンバーと、つかの間の日常（前書き）

執筆ペースにむらがありすゞる…。
そんな感じの更新です。

第34話 新メンバーと、つかの間の日常

sideトール

なのはさんとの模擬戦から早数日。

あれから俺の日常は日に見えて変わったようを感じる。

まず最初こそ恐る恐る教えを乞うような形になっていたフォワード陣が、俺に積極的に聞きにくくなつた。

特にティアナはこないだの模擬戦で見せた俺の射撃技術の高さに驚いたらしく、なのはさんだけではなく俺にも聞きに来るなど積極的に関わるよつになつっていた。

それに対して俺は撃つ側ではなく、撃たれる側の目線として教えるようにした。

撃つ側の指導はなのはさんの方が間違いなくつまい。

俺が身に付けた射撃技術は、はっきり言つていつも撃たれる側からの目線で学んだものだからだ。

かつて俺が組んでいたレイミも、ティーダもタイプは違えど射撃のスペシャリストであり、俺は一人から模擬戦で撃たれることから二人に学んできた。

つまり、遠距離からざりづりづりふつに相手を追い詰めるのがいいのか、こうじうぶつにされると相手はやりづらいうのを教えるほうがいい。

それから、今後のことを考え、接近戦の技術を教えるよつにまし

た。

そこでリムルのセバスを借りようと通信をつなげ。

「……というわけだ、ちょっとセバス貸してくれ」

『……別に明日はオフですし構わないのですが、いつこいつとせめり少しこれから言つていただけと……』

まあ、思い立ったの急だったしな。

「あ、明日オフなのか、だつたらちょっと手伝ってくれると……」

『あの……オフの意味わかつてますか?』

「まあいいじゃないか。未来ある若者の指導育成のためだ

『あの……私まだ19なのですが……といつかお兄様もまだ23でしょ

うへ』

「いいんだよ細かい」とは

『……お兄様、少し変わりましたね……』

そうだろうか?

『あの方たちの力なのだとしたら……少し悔しいですわね……』

「ん? 何か言ったか?」

『別に何でもあつませんわ。朝から、でよひじこのですね?..』

「ああ

通信を切る。

…変わった、か。

変わったとすれば間違いなく…

「あの、まっすぐな人たちのせいだらうな…」

あれだけまっすぐな人たち、見たことない。

俺の中で、過去との決着をつけることは、変わらない。
けれど、いつも思つてしまつた。

この人たちと、もつと生きていたいって。

それは俺が昔してきたことを鑑みれば、許されないことかもしれない。

でも、妹を残して志半ばで死んだティーダのためにも、
俺なんかを最後まで守り通してみせたレイミのためにも、

俺は、まだ…死ぬわけにはいかない。

翌日の早朝訓練、いつもの集合場所には一度見たことのある人がいた。
たしかあの人は…スバルの姉、だつたか。

それからもう一人の女性、こちらは初めて見る人だな。

「今日は朝練の前に、一つ連絡事項があります。今日から暫く、陸士108部隊からギンガ・ナカジマ陸曹が出向になります」

「108部隊、ギンガ・ナカジマです。よろしくお願ひします」「――よろしくお願ひします！」

こういうタイミングで来るといふことは、先のレリック絡みか。まあ、合同捜査という過程で見れば、自然な形かな。

「それからもう一人、10年前から私たち隊長陣のデバイスを見てくださっている本局技術部の…」

「マリエル・アテンザです。よろしくね」

こちらの人は技術師か。

俺のデバイスも一度見せたほうがいいかな。

「あら…あなたのデバイス…」

マリエルさんは俺のフリーズライトに何か思ったようだ。

「間違つていいたら」めんなさいね、それ……フリー・ズライトではありますか？」

「え……？」

どうしてこのデバイスを知っている？

「やはりそうなのですか。それはあなたの手に渡つていたのですね。
では……あなたがレイミさん……」

「レイミを、知つているのですか？」

驚いた。

レイミはいろんなところで人脈を築いていたから、フリー・ズライト
もその誰かのものだと思っていたが……

「ええ、彼女が亡くなる半年ほど前に、大好きな彼のために新しい
デバイスを作つてくれ、と頼まれましてね」

「あいつ……なんて恥ずかしい真似を……。
わかつていれば俺が直接行つたつてのに。」

「まあ、積もる話は後にしましょうか、朝練もありますし
……そうですね……じゃあ悪いけどリムル、デバイス貸してくれ
「え？今日はデバイス違つんですか？」

スバルが聞いてくる。

「ああ、セバスのセカンドマスターとしてちゃんと登録してあるし、これでも射撃のスペシャリストと組んでいたんだ。自然と俺も技術が身についてな」

それから、と付け加えるようだ。

「ティアナに接近戦の技術を身につけさせるためには条件を近づけるのが一番いいと思つたんだよ」

「なるほど~」

とりあえず納得したようだ。

「じゃあ、まずは…スバル、ギンガと模擬戦ね」

「うええ！？」

「私がお願いしたのよ。どれだけ強くなつたか知るために、ね」

そう言つてギンガは不敵な笑みを浮かべる。

姉妹仲良さうだなーと言つた形で見送る。

わい、いつおせじつめやる」とをやるとあるか。

「じゃあティアナ、始めるか
え、は、はい！！」

うむ、いい返事だ。

まだ何をするか言つてないがな。

「では、私は外からティアナさんに指摘すればよろしいですか？」
「ああ、まあ、やつてる間に自分で気付くと思うが」

何せ優秀だしな。

そういつとティアナは「…い、いえ…私はまだまだ…／／／」と俯いてしまった。

「はあ…やれやれ…」

「何溜息ついてるんだ？」

なんなんだ…？

「いいえ、何でもありませんわ…」
「？」

まあいいか。

これから始めるのは一定の円を決めて。その中で模擬戦をすること。
範囲はそうだな… 初めは30メートルにしよう。
慣れてくればそれを段々縮めるようにする。

最終的には10メートルの範囲で、判断能力を身につけさせる。
射撃がいいか、接近戦がいいか。

開けた場所ならまだいい。
得意な射撃に専念できるから。
でも、ティアナが目指すのは単独で捜査に当たる執務官だ。
いずれ、単独で屋内での乱戦にも対応できるようにならないといけない。

だからこそ、この訓練。

モノにするのにまだ時間はかかると思うがな。

sideティアナ

この訓練、思つた以上に難しい。

範囲内でしか動けないことがどれほど厳しいことか。
トールさんはその範囲を苦も無く攻撃してくる。
はつきり言つてそれをしのぐのが精いつぱいだ。

これが…トールさん。

本業ではない射撃ですらこの腕前。

その実力に普通なら嫉妬したくなるものだ。

でも、これほどの実力を身につけるには…
私には想像も出来ないほどの悲しみがあつて。

そして…トールさんの心を一度碎くまでの人の死があつて。

だから…私には、決して追いつけない、そんな人。

でも、本人は、間違ひなく、自分の後など追つて欲しくはないんだ
るう。

自分の悲しみは、自分で終わらせたい。

少し前までのトールさんなら、そう思つていたんじゃないだろうか。
でも、今のトールさんは違うと思つ。

悲しみを乗り越えて、前に進もうとしている。

そう見えるようになったのは、あのなのはさんとの模擬戦からだ。

なのはさんもつすぐな思いが、トールさんを動かした。

それは間違いなく六課にとってもいい方向へ導いている。

なんだか…少し悔しい。

なんでこんなことを思つのが、私にはよくわからない。

とにかく今は、トールさんから一つでも多く技術を習得しようと頑張つた。

「ほり、動きが単調になつてこますわよ」

「はいー！」

リムルさんから指摘を受け、気付く。

余計な考え方は、禁物だった。

sideトール

「うう…負けた…」

「ふふ、まだまだ負けないわ」

スバルとギンガの模擬戦はギンガの勝利に終わったようだ。
聞けばギンガのランクは陸戦A。
確かにまだまだAには届かないだろ?な。

そしてティアナの方はといふて、思つたより早くこの訓練に慣れた
ようだ。

これなら、いざれティーダをも超える口が来るかもしれない。

そつ言つと、ティアナは嬉しそうだった。

そんな感じで、午前の訓練も終わった。

ちゅうどかの時、遠くから金髪を揺らしながらヴィヴィオがやつてくる。

「あ、パパ、ママー!」

「ヴィヴィオ！危ないから走つたら…」

ל' ינואר

あ、
転んだ。

「ヴィヴィオ、大丈…？」

フェイトさんが近づこうとするが、なのはさんがそれを止めた。

「大丈夫、草の上だから怪我はしていなけばず。ほら、ヴィヴィオ」

なのはさんはその場に膝をつく。

卷之三

「ちよつとなの……」

「...」

「ヴィヴィ！ おまえ泣きやつくなっている。」

そんな様子を見かねてフェイトさんがヴィヴィオに近寄り、ヴィヴィオをあやす。

「せ、ヴィヴィオ、痛くないからね～」

そんなフロイトさん、なのせれんせ少し不満をつだ。

「わ、フロイトちやんはカイヴィオにかかるよ」

「何言ひめるの。なのせママが厳しくなるんだよ」

教育方針で食い違う母親か…。

大変だな～、なんて思つてこるとい、これなりともしない発言が飛
んできた。

「じやあにいはパパに決めてもらおう」

「…そうだね」

……え? パパ? ?

パパって…この場だと俺のことだよな…。

「「「どこわざで、びつがいこのーへ」」

「…これは難しいだ…。

「…」

二人の指導がどちらも間違つてないんだから…。
し、しかもとてつもないプレッシャーを感じるんだが…。

ここはなんとかするしかない…。

フェイトさん?
なのはさん?

悪い、俺には決められない…。

「そ、そ、うだ、もうお昼だよな~、ヴィヴィオ、ご飯一緒に食べようか~」

「うん、パパ。早く行こ~」

そう言ってヴィヴィオを抱き上げながらなんとかその場を脱すると成功した。
でも、結局それは一時しのぎでしかなかつたつてことを後日思い知ることになる。

s.i.d.e.なのは

うへん……どうしていじつくなっちゃったかなあ……。

ちゅうじゆの間の時間になつたので、ヴィヴィオも一緒に食堂へ行くことになった。

「おばあちゃん、こつものーー！」

「僕もーー。」

ところで、食堂には最近、専用メニューが組まれたようだ。
スバルとエリオの。

まあ、ただの山盛り定食なんだけど、その量がものすごい。
トル君も男性にしては食べる方で、2人前、といったところなん

だらうけど。

この一人は柄が違う。

「あ、相変わらず凄い量だね…」

思わずそう呟いてしまつほどだ。

そして今日からギンガも加わる。
妹がこりなのだ。もしかしたら、と思ったが

「す、すいません…」

やはりだつた。

スバルと同じくらいの量だつた。

その横にいるティアナとキャロが小食なんじゃないかと思つてしまふほどだ。

「いただきま～す！～」

「元気のいいスバルの声と共に、食事となつた。

「もぐもぐもぐもぐもぐもぐ……」

「がつがつがつがつがつがつがつ……」

「どんだけがつこてるのよあんた達…」

本当、どこに入るんだろつか。

「ん? ヴィヴィオ、どんじたんだ……?」

「う~……」

トール君はヴィヴィオの横で様子を見ながら食事を進めている。ヴィヴィオは苦手な食べ物があるようだ。

「にんじんか?」

「うん…にんじんきら~い…」

どうやらにんじんが嫌いみたいだ。

「でもねヴィヴィオ、野菜には栄養がいっぱい入っているんだよ?」

「う~……」

私がなんとか勧めてみるも、戻惑つていてる様子。

「うふ……それなら……」

やつぱりトール君はヴィヴィオの鼻をつまむ。

「う……？」

突然のことじびっくするヴィヴィオ。

「食べてみな？苦くないかい？」

そう言つて、ヴィヴィオが開けた口の中にこんじんを放り込む。

「……あれ……苦くない……」

「だろ？でもね……本当は……うひしないでも食べてくれると、パパも、ママ達もうれしいんだけどな……」

やつぱり私はヒュイトちゃんを見る。

「やつだよ……みんな……ヴィヴィオのために作った料理なんだからね

……」

「うふ……わかった」

それからなんとかがんばつてにんじんを食べきつたヴィヴィオを、
トール君は優しく撫でる。

「なあ、せつかく作ってくれた料理なんだし、食べなきゃもつた
ないよな、キヤロ?」

「え……?」

そのキヤロはとこうと、ちゅうどエリオの目にグリーンペースを移
そうとしていた。
い、いろいろお見通しなんだね……

つかの間、食堂は笑いに包まれた……。

本当、こんな日がいつまでも続けばいいって思つていいの?...
でも……現実は……そんなに甘くなかった。

トル君にも、私達にも、厳しい現実を突きつけられる日が、すぐ近くまで来ていた。」

第34話 新メンバーと、つかの間の日常（後書き）

「お、珍しく早いやん」「次から波乱の展開らしいし」「と、いつことは…アレやな」「彼女、の出番だね」「さて、彼女、の正体は一体！…」「こや、レイミーさん…絶対知つとるやん」「ひざむ

第35話　日常の終わり、新たな戦いへ…（前書き）

本編に久々にあの人が…！？

第35話 日常の終わり、新たな戦いへ…

sideトール

騒がしい昼休みも終わり、午後からまた訓練が始まる。

「そういうえば機動六課ってなんで設立されたんですかね？」

準備運動の最中、エリオがそんなことを聞いてきた。

「え、えーっと…」

それに対してティアナがいろいろと考えているようだが、思いつかないようだ。

表向きは、遺失物、この場合は多くがロストロギアの捜索、管理等ということなのだが。

俺も疑問に思うことがある。

設立の時期と、今回の事件の発生。

あまりにもタイミングが良すぎはしないか、と。

今までの戦いも、従来の腰の思い部隊が対応していたのでは後手後

手に回つていただろう。

隊長陣それぞれがエース級であるこの部隊があるからこそ、対応できたのだ。

まるで全てを知る者、いや、この場合は未来を見通すことのできる者がいるかのような。

そう、レイミのようだ。

「そう…だね…そもそも、皆にも六課を設立した理由、言わなきやいけないね」

やはり何かあるのか…。

「プロフューティン・シユリフテンに、未曾有の大事件ね…」

やはり未来予知だったのか…。

聖王教会は特殊な力を持つものが多いと聞くが…

言えばレイミはあまり聖王教会を好きではなかつたんだよな。縛られるのは嫌いだとか言って。

ま、もしもレイミのスキルが表に出ていたら強引に閉じ込められて

いたのかもしないし。

それ以外にもいろいろとあつたからな…。

もしかしたら俺の知らないところで誘いがあつたのかもな。

それはともかく。

繰り返し未曾有の大事件を予言しているから、それに備えて設立したということか。

そしてそれには…アイツそつくりの戦闘機人も関わっている。

だとすれば…アイツと戦うのは…俺だ。

アイツはレイミとは違う。

だが、そうだとするなら…何故俺を助けたのか。
それを知りたい。

それに、アイツの戦い方まで再現されているというなら、俺以外の奴らでは危険だ。

例えなのはさん達でも、苦戦は免れないだろう。

「…ルさん、トールさん…！」

「…ん？」

ああ、すっかり考え方をしてしまっていたようだな。

さて、どうしたものかな…

午後の訓練も終わり、今日の残りの書類を片付け終えたと一矢で部隊長に呼び出された。

一、公開意見陳述會？」

「いや、レジアス中将と最高評議会が企画しているアインヘリヤル、これが主題となつとつてな。今後、ジェイル・スカリエッティが襲つてくるのはこの会議のタイミングが一番可能性が高いんや」「最高評議会に、レジアス中将…」

その名は、忘れたくても忘れられない。
そいつらこそ、俺が長年、したくもない殺しをさせてきた、張本人
達だから。

「どうしたん? 顔、こわいで?」

か
?
』

「…モモ、エーリさんには応範囲で活躍してもらいたい予定や」

「アーヴィングは、必ず来る……！」

止めるなり。その時しかな。

「あ、仕事の要件は」こんなもんやな

「仕事の要件?」

まだ何があるんだりつか?

「で?」

「で?... とは?..」

「いやいや、メールやんは結局誰が一番氣になるんかな~ってな
「...な!~?」

いきなり句を壇上出すんだ!?

べ、別にそんなの...

「こ、ここじゃなこですか別にそんなの...」

「何言つてさねん。盛氣になつて夜も寝られんとかから代表して
私が聞いつとこいつとこなつたんや」

「はー?」

なんだそれは...!

とこうか部隊長... 楽しみでる...
絶つ対楽しんでる...。

これは俺を弄る時のレイヨの笑顔と重なっていた。

「で、誰なん?ほり、今なら誰にもわからんじゃ?」

「い、いや……それは……」

「ん~?」Jの反応……もしやいるんか!…?そりなんか!…?」

「テ、トランシット高いですね……」

正直ついていけません……。

「せりせり、早く並べて並んでしまいますやーー。」

そ、それは……。

「す、スマセンー!用事を思に出しましたー!失礼しますーー!」

自分で声が上ずつてこるのがわかる。
が、そんなことお構いなしだ。

「「「「ややあーー」「」」

ドアを開けたところで何故かなのせせん達とぶつかった。
あ、危ない……聞かれていたのか……。

とこりかなんで俺は焦つているんだ…？

sideフライ

「ちつ！逃げられたか…」

「や、やつぱり駄目だよこんなの…」

た、確かに私も気になるけど…。
でもこんなやり方なによ〜。

「けど、これでさつさつしたで…」

「な、何が？」

なのにも気になつてゐみたいだね…。

「トールさんが好きな相手は……」の声こゑ…。

「「「「な、なんだつてーーー。」」」

た、確かにこの前こんな感じの話をしたときはリアクションが大分違つたけど…。

ほ、ホントにいるのかな……？

。いわゆる「アーティスト」ではないが、彼の才能は誰もが認めている。

「五五五五」

「楽しそうだねはやてちゃん…」

「当たり前や！… やりやへ… … やりやへ テーラさんを弄るチャンスが出来たんやで…」

そ、そんなこと…？

これからが大変なのかも知れないのに…何やつてるんだろうね…？

いや、だから……かな……。

これから私たちに待ち受けているのは、間違いなく困難。

だから…こんなバカ騒ぎをして、少しばらをうそつこっているのかもしない。

あの予言に出来る限りの備えはした。

それでも、不安はぬぐえない。

今回の敵は……それほどまでに、大きいのだから……。

sideトール

明晰夢、という言葉がある。

これは眠りについている人間が、これは夢だ、と直覚しながら見て
いる夢のことを指している。

今、俺が見ているのがまさにそれだ。

そう、今の俺の目の前には

「本当に……久しぶりだね……」

レイミがいる。

だから、これは夢だとさつきつわかる。

「最近は、あまりお前のことを夢見る」ともなくなっていたな」

それは、じじ最近のことだった。

それまでは、毎日のように見ていた。

初めての出会いの夢。

レイミを意識し始めるきっかけになつた事件の夢。
ティーダも含めて3人で駆けまわる夢など。

楽しい夢も、辛い夢も見ていたけれど、一番多かったのは…。

レイミが死ぬ、あの事件の夢だ。

それほどまでに、後悔が大きかつた。
何故、守れなかつたのか。

「だから、こんな形の夢は初めてだ」

「やつなんだ……」

そう、自分が「これは夢だなんて形で見るのは、初めてだ。

「今日はね……トールにお話をしに来たの」「あの、戦闘機人のことか……？」

レイミが首肯する。

それにして……この夢……本当にリアルだな……。まるでレイミに夢を見させられてこるような……。

まさか……な。

「あの子は……私であって……私でないもの」

「プロジェクトF……」

「わ……それをさらに応用させて、戦闘機人化させたものなの

……だとしたら……彼女は……。

「『メン…』トール……」

「なんでお前が謝るんだよ……」

「これからまた、迷惑を掛けようがまか……」
「…………」

……まつたく。

死んでもまだ優しいままかよ。

だから好きになつたんだが。

「お願い……彼女を……ジエイル・スカリエッティから……救つてあげて……？」

「……ああ」

ほへりゅうと思つた。

元から俺はそのつもりだ。

「……」こんな形、でお願いしなくても俺は初めからそのつもりだよ

「……気付いてたの？」

「……まあ。こんなことじゅうないかと想つてた」

ホントにおせつかいがすきなん。

「よかつた……」

「……」いちの心配はもうしなくていいんだ

「……うん……」

レイ://がつれしづつヒツナザベ。

「……もう……私のおせつかいは……こらなーかな……」

「……吗？」

「つづる、なんでもない……」

何のことだ？

あ……もう朝になるのか……？

なんか周りが明るくなってきた……。

「それから

レイリが何かしゃべっていれる。
でも……もつ起きの時間だ……。

そり……。

戦つために……。

「……早ことじる、新しい彼女でも作りなさい……つてもうこない——！」

うん、聞こえないったら聞こえないと。

第35話 口常の終わり、新たな戦いへ…（後書き）

「ただいまーー！」

「おえり、どうやつた？ 感想は？」

「うん…久しぶりで楽し…いわけない!! なんで夢なの〜!!?」

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

「フエイーちゃんに諭された！？」

「それどういう意味！？」

「それから…ほほっ…？トールさんに心の変化が…」

相手はたゞ誰なのかな……？」エエエ

『新編 本居宣長全集』第1巻

「一九四九年八月一日、新中國成立」

「がん！！！」

第36話 その日、機動六課 前篇（前書き）

「ゴールデンウイーク休みねえー…………。」

第36話 その日、機動六課 前篇

s.i.d.e.???

「フフフフフ…これで準備は整つた…」

私の望みが…もうすぐそこまで来ている…！
そう、‘彼女’を使って冷装の断罪人を…。

そして…プロジェクトFの遺産である彼女達…。
全てを手に入れて…。

今までの管理局至上主義を破壊する…！
思いあがつた連中にひと泡吹かせてやるのさ…！！

「さあ……レイン……」

「…………」

しかし彼女からの応答がない。

「……ふむ」

一度冷装の断罪人に接触させてからこつだ…。
いくら彼女の細胞から作り上げた存在とはいえ、冷装の断罪人との

直接の繋がりはないはずなのに……。

まあ、戦闘時はBCCで強制的に戦わせるから問題ないのだが……。

「……まあ、‘彼’は手に入らずとも最悪レインを使って戦闘不能にさえ持ち込めれば……私の最大の脅威は取り除かれる……」

後の連中は私と、クアットロが改造してさらに強化したトーレ達がなんとかするだろうや……。

何せ……彼女達は内側の圧力のせいで全力を出すことが出来ない。

全力でない彼女達など、強化したトーレ達には遠く及ばないや。

「フフフフフ……楽しみだ……」

sideトール

それから3日後、いよいよ公開意見陳述会の前日となつた。
俺たちは前日から警備に当たるため、朝から現地に向かうこととなる。

「……か…

規模が規模なだけに会場も大きい。
そして警備に当たる人数も多い。

これだけの人数ならば、何事もなく会議を終えることが出来るだろう。

そう、普通ならば。

だが、これから相手になるのは広域次元犯罪者ジェイル・スカリエツティ。

それから、ソイツが作りだした戦闘機人達。
そして…。

レイミセツクリの戦闘機人。

俺がここにいるのは…、彼女を救うため。
言葉を交わしたことない相手を救うというのは、難しいかも知れない。

だが、それがアイツとの約束だから。
例え夢でも……俺は……。

トールさん、それからどうですか？

この通信は……フェイトさんだな。

「ああ、今まさに今のところ異常なしだ
……でも今のところ異常はありません
「せうか。こうこうところは些細な違和感が命取りだ。十分に気をつけろよ」

はい。トールさんもお気をつけて……

何故かそのまま通信を切らないフェイトさん。

「……まだ何かあるか？」
「……え……気のせいだつたらいいのですけど……」
「どうした……？」
トールさん……私たちに隠し事をしてませんか？

!!

隠し事とこつわけではないんだが……。

「実は……」

まあ、今更止められてもやるしかないし、言つてしまつたほうがいいな。

……それじゃあなたはが会つた戦闘機人は…

「そり、レイミのクローンを使って作られたそうだ」

だからあの時、トールさんはプロジェクトFの名前を…

「まあ、そういうことだ」

もつとも、あの映像だけでは確信はもてなかつたがな。
あまりにも似ているというだけで…な。

「レイミは、自分の分身がアイツに良いように使われているのが辛いみたいだ。俺を苦しめる目的でな」

「どんな形であれ、生きてさえいるのなら、道具として扱われていわけないんだから……」

そう、いいわけがない。

人を道具としてしか見ていない上層部も、作ったクローンを道具のように扱うジエイル・スカリエッティも。
このまま、放つてはおけない……。

…………… そうだね…。セリフになきや…私は…なのはと友達になんか…
なれなかつたんだから…

「 フェイトさん? 」

「 うしたんだるうか? 」

トールさん

「 ? 」

私も…トールさんと同じ…人には言えない…秘密があります…

「 …… 」

それは…かつてなのはさんとフェイトさんが敵同士だつたあのP.T.事件のことだらうか。

いや、それよりも深い、彼女の存在に関わる…秘密。

そして…プロジェクトE。

そこから導き出される答えは、俺の頭の中にすぐ浮かんでくるものだつた。

でも、それは敢えて口に出すことではなかつた。

なぜなら、その、答え、は、もつ先ほど言つたのだから。

フェイトさんは、フェイトさんだ。

人よりも優しくて、しっかりしていいるのかと思ふきや、ほんの少し

おひひこひひよいで……。

そんな彼女を、俺は……。

「そこから先は…今は聞かない」

……え?

「まだ…俺にも秘密はあるからな」

そう、今はこれでいい。

全てを今、知る必要もない。

そして、もしこの「秘密」を言うのであれば、
それはこの戦い…「アイツ」を救いだしてからだ。

「だから…お互に…この戦い…」

…ええ。必ず生きのびましょっ…

この「秘密」は…自分で整理をつけて、必ず……！

そこで。フハイトさんとの通信を切った。

間もなく夜が来る…。

そして……運命の日が近づいてくる……。

s.i.d.e.???

「……本当に……私は……」

どうしてしまったのか……。

あの人に会ってから……何か私の心の奥で暖かい気持ちが広がっていく……。

でも……あの人は今は敵だとドクターに教えられた。

なら……どうすればいいのだろうか。

これもドクターに聞いてみた。

そうしたら……倒して無理やり君のものにするばいって。

けれど……それでいいのだろうか。

だつて…

心の奥では…あの人と戦いたくない自分がいる。

本当に…なんでこな気持ちになつてしまつただらつ…。

「あら～？ レインちゃん…」 こんな感じで何をしてるのかしら～?
？」

「あ… クアッショウお姉さま…」

実は…この方は一番苦手だ…。
心の底が…一番暗い気がする…。

そう…人のことを見下している感じやないかと思つてゐる…。

「明日は、作戦、なんだからあ～、早く休まないとねえ～
「…………わかりました」

とにかく、明日だ。

明日、あの人には会えはまつたりする。

明日に備えて早く休むため、足早にその場を去ることにした。

だから……私は気付かなかつた。

「ふう……所詮は実験体だというのに……感情だなんて……馬鹿馬鹿しい……」

その……あまりにも冷酷なつぶやき……。

sideホール

翌朝

1日以上の警備と言つても丸々休憩なしでやるわけではない。
突発事案に備え、特に仮眠時間は適度に取れるようにシフトを組ま
れている。

「よいよ今日が本番ですが…体調の方は大丈夫ですか？」

「まあ…問題ない」

朝一番にフロイトさんから通信がきた。

「ついで何気ない気遣いが少し嬉しかったりする。」

睡眠時間は十分ではないが、戦つのに何の問題はない。

「何か起こるとすれば、早朝と開始直前が一番多い。もちろん他の時間も油断はできんが」

ええ…

そう…必ず来る。

その予言が本当ならば。

周辺の検索に行ってきます

「ああ…よろしく頼む」

事前に潰せるものは…潰しておくべきだ。

…そう…例えば…規格外からの長距離砲…の可能性とか…。

あのなのはさんクラスの砲撃ならば、事前に予測することは不可能だが、対策を練ることは可能だ。

だが……レイミの方は……威力に加え、速度もあり得ないほどもので……予測出来ない上に防ぐことは難しい。

だから……俺は事前に砲撃が来るであろうポイントに立つことに立つた。

正門のど真ん中。

そのかなり前方に立つ。

これも、あること、を想定してのことだった。

アイツの砲撃を事前に予測して防ぐことができるのは……俺しかいな

い。

これは自賛ではなく……冷静に判断してだ。

ただ……そのままでは受け止める事はできない。
だから……「マイシ」を使う。

フリーズライトの鞘を手に取る。

そして来る時に備えて精神を集中させ始めた。

そして……その時は突然にやつてくれる気になる。

s i d e はやて

部隊長！！かなり遠方ですが、巨大な魔力反応を感じ！！

シャーリーが通信で報告してくる。
通信にかなりノイズが入っている。

その魔力は、今になつて私の肌でも感じることが出来るほど巨大なものだった。

そう、あの魔力は、単純に放出されれば私のラグナロクと同等か、それ以上の威力。

どうして事前に感知出来なかつた？
まるで感知を邪魔されたみたいだ。

長 指揮を ！

「シャーリー？どうしたんや？」

ノイズがさらに大きくなる。
これは……まさか……！

「通信妨害か……」

不味い。」このタイミングでの通信妨害は……。
なのはちゃんもフェイトちゃんも、この魔力の着弾ポイントからは
あまりにも離れすぎている。

「なのはちゃん！－フェイトちゃん！－

慌てて通信をつなごうとするが、やはり一人には繋がらない。

他のメンバーもやはり同一だった。

そもそも他のメンバーではあの魔力は処理しきれない。

後この魔力を止められそうな人は……トールさんだけだ。
でも、今から連絡出来たとしても間に合わない……！

部隊長……聞こえていますか？

「トールさん！－？

何故か、トールさんの通信はクリアだった。

一方的な送信だけになってしまいますが……、あの魔力は私が処理
します

「それは……」

それは、現状で出来る最善の策。

けれど、トールさんはあの魔力を防ぐことができるのだろうか。

そこで感じる、もう一つの魔力の上昇。

その位置は…正門の前方だった。

「この魔力は……まさかトールさんの……？」

詳しい説明は省きますが…ある裏技を使ってあの魔力を防ぎます。
部隊長には一つだけお願ひがあります…

トールさんがこれからやろうとしていることは、すぐに想像がついた。

あの魔力砲の持ち主と対峙する。

けれど、この魔力砲の持ち主の魔力ランクは、少なく見積もっても
S+。

下手をすればUランカーなのだ。

今、トールさんがどのようにして魔力を上げているのかはわからない。

でも、その方法には限界があるはず。
ならば私に対するお願いは…ただ一つ。

「リミッターの解除やな…！」

繋がっていることを信じて…お願いします

そこで、トールさんとの通信は終わった。

これ以上の通信は、自分にとつて精神統一の邪魔になると判断したのだろう。

なにせ相手は…自分を上回る力量の持ち主だ。

そこから私の取るべき行動はただ一つだった。

事前の策を誤ったのは私のミス。

ならばそのミスでトールさんを死なせることがないよつこ、やれる

ことは全てやるべきだ。

「部隊長の名において命ずる。魔力制限解除…トール・シュライト

…！」

また、正門の前の魔力が上昇していく…。
さて、後は…。

「災厄が…現実のものにならんよつこせんとな…」

sideトール

よかつた…ちゃんと繋がっていたようだ。

フリー・ズライトには通信に対する妨害対策も強化されている。
本来ならばフリー・ズライトを基地局として周囲数キロ範囲において
やり取りも可能なはずなのだが…それはこの妨害によつて出来なく
なつていた。

唯一…こちらから相手方に送信することだけは可能だったようだ。

自分の中でもさらに魔力が上昇していくのを感じる。
前方に感じる魔力は…SSSってところか。

‘アイツ’をベースとして改造を加えたのなら、ありえない魔力量
ではない。

そして…俺の魔力量は…最大でS-
通常ならば…防げる威力ではない。

そり、通常ならば。

けれど、俺には一つ、‘裏技’がある。

フリー・ズライトの鞄。

これには実は魔力がつまっている。

それは…、ある程度時間を掛けて貯蔵した、俺自身の魔力。それを一時的に自分の中に戻すことで一時的な魔力ブースターとなる。

この魔力ブースターによつて俺の魔力はS+くらいまでには上昇している。

これならば、あの魔法にもなんとか対処出来る。

魔力量的にはそろそろ射出されるはずだ。

そして、「あの魔法」は、ありえない速度で到達する。

だから…もう防御魔法を展開させなければならない。

通常、防御魔法は平面で展開せることが多いが、この魔法はそれでは受けられない。

だから…この防御魔法は…ちょうど円錐になるように展開させる。そして、円錐の頂点を魔力の先に向ける。

まもなく…魔法というにはあまりにも巨大な雷撃が射出された。

それは…先日なのはさんから受けたスター・ライト・ブレイカー以上。けれど、今の俺なら……。

迫る魔法は、やはりスピア・オブ・グングニル。

アレは距離があればある程速度を増し、それに伴つて威力も増す魔法。

その魔法を、俺は…。

「…………」

槍の先端と、防御魔法の先端を合わせる。
それだけで、槍の先端は…

左右に割れた。

そして、割れた槍は、軌道がそれ、それぞれ人気のない林に激突する。

「よし……」

狙いは成功。

第二波が来る前に特定したポイントに向かう。

そこに、アイツはいる……。

だが、その前に感じていた妙な違和感を払拭する必要がある。

そう、これは幻術の気配。

そして、迫りくるガジェット。

全てが、俺をアイツに近づけさせまいとしている。

でも、そんなの関係なかった。

「……邪魔だ……」

迫りくるガジェットには遠距離からの氷魔法で打ち払う。

そして、幻術は若干乱暴に解除していく。

この幻術は魔法とは違うようだが、原理はほぼ一緒のようだ。
先ほどの通信妨害といい、攬乱が得意な戦闘機人がいるのださう。

自分に付きまとつ障害をすべて取り払い、その先には……。

一人の、戦闘機人がいた。

その戦闘機人こそ、俺が救わなければならぬ存在。
そして……レイミの面影を残す女……。

相手も、まっすぐに俺を見据えてくる。

でも、その目はあまりにもアイツとは違っていた。

アイツと同じで、アイツとはあまりにも違う存在。
思わず、俺は彼女を拒絶してしまいたい衝動に駆られた。

でも、それは違うと思いなおした。

アーツは…俺が救うんだ。

それが、レイミとの約束だからな。

だから、お前を救うために…。

さあ、始めよう、レイン。

氷魔法と、雷撃が交差する。
ここが、俺の正念場だ。

第36話 その日、機動六課 前篇（後書き）

「ついにレイインとの戦いが始まったね」「ここが物語の最大の見せ場らしいで」「え、まだ最後の戦いがあるはずなんだけど……」「ん？まあトールさん的には、という」とらじこで「それって……どういうこと？」
「まあ、それはいずれわかるんじゃない？」

「それよつ……フロイドちやん？まさか……」

「え？え？」

「この話の流れから……そつこつ」とええんやな？そつなんやな？「そ、そんなのかな……／＼／＼

「む～～～……」

「あの……レイミさんへびりしたんですか？」

「面白くない……」

「そ、そんな」と言わんで……なんか作者的には色々救済策考てる
らしいで？」

「ホント～～～？」

「そ、そうみたいだよ？レイミさん、すいに人気だし」

「そ、そとかな……／＼／＼

「そりいえば、いつの間にかお気に入りが200件超えてたな

「こんな作品にそんなお気に入りがつくなんて……」

「みんなに感謝！――やな」

「これからもベジビシ作者をじいじって書かせるから、待つてね！」

第37話 その日、機動六課 中篇（前書き）

やべえ…なんで連続更新なんてしてるんだ俺…？

第37話 その日、機動六課 中篇

s.i.d.eレイン

「防……がれた……」

どうして……？

私の全力の一撃を防げるのは、管理局の中でも数人しかいなって言っていたのに。

その人たちが、今、他の人たちが抑えに行っているし、何よりクラットロ姉さまがあのシルバー・カーテンを使って妨害している。

だから、防げる人はいないって、そう聞かされていたのに。

いや、違う……あの人だ。

あの人なら、出来てしまつ気がする。

直接話をしたことがないし、どういう人かもわからない。でも、あの人なら出来てしまつて、何となく、わかる。

どうしてだろ？…クラットロ姉さまに、頭の後ろに何かを埋め込まれてから…
あの人を…

壊したい。

「どうしようもないくらいに」。

壊して、壊して、壊しつくして。
それから……私が治すの。

そうしたら……あの人は私のモノになる。
私の思うままに、あの人を……作り変えるの。

そうすれば……あの人は、離れていかない。
ずっと……私のモノ……。

ああ……早く来てくれないかなあ……。

でも、頭と心臓だけは残しておかないと……。

早く、早く……早く早く早く早く……／＼＼＼

ああ……本当に……楽しみ……。

「……来た……」

思ったより早く来てくれた。

クアットロ姉さまの幻術や、ガジェットなんかもあったのに。

いや……それが……あの……なんだ……。
まっすぐに私を見てくれる。

そんなに見つめてくれなくとも……

もう、私から逃げられないようにしてあげる……。

だから……ね……？

とりあえず……一人の時間を邪魔するモノは……

全て壊す。

「私の邪魔を……しないで……」

雷撃を見舞う。

ただし、それはあの人にはない。

彼の後ろを追つてきた、ガジェットや、確かトーレ姉まとセシ
テ姉さま……だけ……に。

「なーー！」
「ーー？」

ガジェットは全て破壊できたが、トーレ姉さまとセツテ姉さまには避けられたようだ。

「どういづもりだ……裏切るのか……レイン……」

トーレ姉さまが怒鳴りつけてくる。

でも……そんなの関係ない。

だつて……一人の時間を邪魔するなんて……それだけで許しがたい行為
だから……

「この人は……私が壊すの……。私の邪魔をするなら……姉さま方も
……一緒に壊してあげる……」

どれ……もう一発……。

「くっ……」

それを本気と受け取ったのが、トーレ姉さまのライドインパルスを使つて二人とも緊急脱出したみたい。

まあ……これ以上邪魔をするなら……本当に壊すつもりだつたけど……。

「……」

その様子を、あの人は驚愕しながら見ていた。

その驚愕は、一体何？

それは……私のオリジナルとまったく違うから？

ああ……そういうこと……。

アナタは……私を通してオリジナルを見ている、というの……？

だったら……一度全部壊して……私が作り変える。

そして……私しか見られないようにしてあげる……／＼／

sideトール

一回、氷魔法を見舞つたはずなのに、簡単に防がれた。
そして… アイツは何故か… 後ろから追つてきたガジェットや、戦闘機人に向けて魔法を放つた。

でも… アイツの田に宿つてているのは… 一言でいえば、狂氣。

何があつたのだろう…。

俺を助けたときの映像のヤツとは… 何もかもが違う。

そんな時、フリーズライトを介して強制的に何者かが通信を繋いできた。

はああ～い… 冷装の断罪人…。お話するのは初めてだったかしら
～？

「貴様は…」

茶色の髪をお下げにして二つに分けた髪型。
そして大きめの眼鏡。

あのボディースーツは…

「… 戦闘機人か」

ええ… 4番目、を冠するクアッタロよ～

「……何の用だ。」こんなところで呑気に通信を繋ぐとは、自分の位置を教えていいようなもんじゃないのか？」

あら~、幻術も、通信妨害も仕掛けた私がそんな間抜けなことあるわけないでしょお~？」

ちひ、やはりか…。

「だが、その全てを破つた俺なら、貴様の位置を把握するのは不可能ではないが」

そう。俺ならば、「」の通信を介して奴の位置を把握することは可能だ。
やっている余裕があるのなれば、話だが。

でも~…そんな余裕はないんじゃなあ~い?

「…………！」

迫りくる雷撃をなんとか身をよじって避ける。

その目線の先には…狂気に満ちた目をしたアイツがいた。

「私の時間なのに…他の女と…話しあいで…」

「ごめんなさいね~レインちゃん。でも、もつすべ終わりだからね

」

これは駄目かもしね。

アイツは…レイミとは何もかもが違うすぎる。

最後に、レインちゃんには頭の後ろに強力なBCCがついてるわ。それを外せばあるいは元の優しくレインちゃんに戻るかもね

「……何故それを俺に書い？」

コイツは何を考えている…？

フフフフフ、たゞ絶望に苦しみながら最後まであがく姿を見たいからよ

「……ちつ」

この外道が……。

その為に……コイツを弄んだってのか…。

クアットロ…その名前…忘れない…。

では…「リゼグんよう まあ…生きていたらの話ですが

そこで、通信は終わった。

「…だが、一つ、活路は見えたな」

やつ、レインの後頭部には強力なBCCがついている、というのも本当のことだらう。

長年、相手の心理を読み取ることを修練してきたが、そのカンが言

つている。

「そのためには……お前を一度…倒さなければならないか」「……やつてみなさい…。その前に、あなたは私が壊してあげる…」

一度中断したフリーズライトからの魔力抽出を再開する。全力で行かなければ…一瞬でカタがついてしまう。

それほど、レインとは実力差があつた。

だから、長期戦には持ち込みたくなかつた。

速度を上げてレインに接近する。対してレインはその場を動かず、雷撃の手数を増やして命中優先で迎撃してくる。

「…………やつ……」

命中優先とはいえ、今まで戦ってきた奴とは威力が桁違いだ。致命傷となる部分は避け、なるべく弾数の少ないところから接近するが…。

「はああああああーー！」
「ふつーー！」

渾身の斬撃はレインの防御壁の前にたやすく防がれる。それに反撃するよつに…今までよりも厚い雷撃の弾幕が迫る。

「……ぐつ……」

全力で張つた防御壁がいとも簡単に破られる。幸い、まだ深刻なダメージは負つていない。

けれど、別の方向で深刻な問題が迫つとしていた。

フリーザライトを手にしてから時間を掛けて貯蔵した魔力は…かなりのものだ。

だが…今、俺がフリーザライトから引き出している魔力は…俺の予想をはるかに超えていた。

マスター、魔力の貯蔵量が半分を切りました

「嘘だろ…?」

短時間でこれだけ引き出しているにも関わらず、五分に届かない。改めてレイミの才能の高さと…ジエイル・スカリエッティの改造技術に恐怖を抱いた。

これは…不味い。

焦るな、と自分に言い聞かせても、焦つてしまつ。

だから……あんな誘いに……乗つてしまつた。

「どうしたのかしら……？私を救つてくれるのはないの……？」

「……言われないでも……！」

フリーズライトから今まで以上に魔力を引き出す。
そして……

「はああああああああ……」

今まで以上の氷の刃を発生させ、レインに突撃する。
前方には巨大な氷の障壁を発生させてだ。

「はつ……」

対してレインはそれを打ち破り、と雷撃を一矢集中せん。

氷の障壁が削られているのがわかる。
でも、これなら間に合ひつ……

「これで……どうだ……！」

鞘から一気に刀を抜き、レインに向けて振るう。

それと同時に、周囲の氷の刃もレインに向けて降り注ぐ。

パキイイイイイイイイン…。

障壁が割れる音がする。

けれど、その刃は…

「ぐあああああーー！」

その先にある雷撃の壁を浅く裂き、レインに少しだダメージを与えることどまり、ついに壁から射出される雷撃の餌食となるだけだった。

「一重の...障壁...?」

そこまで……力の差があつたのか……。

卷之三

レインの狂気が、さらに増したようだ。まるで、勝利を確信したかのように。

そして……

マスター……残り……4分の1です……
「……そつか……」

今の一撃が失敗したのは痛い。
そして……あのクアットロが言つとおり、後は絶望へ歩を進めるしかないのか。

もう、アイツの雷撃を防ぐ障壁を作るための魔力しか引き出せない。
アイツの一重の壁を破る術はない。

先の一撃で俺のダメージは……かなりのものになつていて。
対して、レインの方は、ほとんどダメージを負っていない。
先の一撃が……かすかに届いた程度だ。

「さあ……もう何も心配はいらないの……安心して……一度壊れて……？」
「…………」
「田が覚めたら……全て終わっているから……そして……私だけを見て……」

違う……。
アイツは……。
こんなことを望んでいるんじゃない……。

「あいつは……レイミは……。
レイミは……。」

「これで終わり……」

レインの右手に……スピア・オブ・グングニルよりもさらに巨大な
槍が出現した

あれは……？

「カタストロフィ」……神の怒りの名の「」とく、全てを破壊する
物

神の怒り……。

確かに……それにふさわしい威力だ……。

ランクでいうのなら……SS、いや、SSSクラスか……。
そんなモノ放たれたら……今の俺なんかフリー・ライトの全魔力を引
き出して防御したところで……
破壊されつくしておつりがくる。

「ああ……もう……おやすみなさい……」

レインの右手から槍というには巨大すぎるモノが放たれる。
何故か…その台詞に…今までの狂気に満ちたものではない…優しい
目が垣間見えた気がした。

第37話 その日、機動六課 中篇（後書き）

「なんてところで終わらせるんや——————」

「大、大、大ピンチ——————」

「トールさ——————ん——————」

「どうかレイン強すぎやる——————」

「わ、私たちじゃ相手にならないよ——————」

「も、元が私なのに……あんなになるなんて——————」

「ヤンデレや——————ヤンデレが来たで——————」

「だ、大丈夫なんだよね？救えるんだよね？」

はい。だから心配しないで。

「作者——————頼むで——————」

「さて、どうやってレインを救うのか？」

「そして、トールはどうなつてしまつのか？」

「——————お楽しみに——————」

第38話 その日、機動六課 後篇（前書き）

最近、時間が取れるので執筆が進みますなあ…

第38話 その日、機動六課 後篇

s.i.d.e トール

目の前に極大の雷が迫る。

こんなもの、まともに受けてしまつたらまず助からない。

そう、まともに受けてしまつたら、の話であるが。

それは…勝機がほぼゼロに近づいていた俺にとって、最後のチャンスだった。

成功する確率などゼロに近い、しかも成功したとしてそれが果たしてアーツを救えるのかわからない。

でも、もうそれしか道は残されていなかつた。

だから…雷が直撃する直前、俺は全ての時間を止めた。
直前で停止する雷。

時間がなかつた。

万全の状態なら、あと30秒くらいはもつだろうが、今のこの状態では10秒もない。

そして、ここからさらに今までの限界を超えてはならないのだ。

あれだけの力を使っている今の状態であれば鉄壁に見えるレインの防御にも隙はできる。

隙とは言つてもほんのわずかだ。

今の俺が全力でいつても破れるかどうか。
やるしかない。

止まっている雷の横を高速ですり抜け、走りながらフリーザライト
に残っている全魔力を解放。

そして、カートリッジも5発フルロードをせる。

「……ぐつー！」

あまりの反動に思わず立ち止りそうになる。

だが、止まれない。

もう止まつてはならない。

間もなく、時間が再び動き出す。
隙は、ほんの一瞬。

「……」

突然俺が田の前に出てきたことに動搖したようだ。
アイツは今、どうこう状況なのか理解できていらないだろ？

だから、IJの硬直は絶好の好機。

「IJの一撃に……」

レインの懷に飛び込む。
体の内側が破れていく感覚。
これを放った後、どうなつてしまつのか、おおよその見当はつこ
い。

まだ、レインは雷を放った硬直から抜け出せない。

「全てを賭ける……」

納刀状態から一気に振りぬく。

全ての力をフリー・ズライトに託したこの一撃。

それは、確かにレインの一重の防御を貫き、レインにまで確実に届いた感触があった。

だが、レインがどうなったのか、俺は確認することが出来なかつた。

「…………あ…………つぐ…………」

そのままレインを通り過ぎ、振りかえる」とすら出来ない。

「…………ゲホッ！…ゴホッ！…」

この、暖かいものは……。
まあ、そうだよな……。

それだけの……無茶をしたんだ。

それを確認することが出来ないほど、全ての感覚すらなくなつていく。

ああ……俺、倒れているのか。

目の前が暗い。

音も聞こえない。

地面に倒れている感覚すら、ない。

痛みも、いつの間にかなくなつていて……。

ああ……これが……

今まで多くの人に救えてきた、死なのか……。

悪いな……些……

……じつやう……俺は……ソリホでみたいだ。

レイ!!……

確認出来てないけど……俺……多分ちゃんとアーツを救つたぞ……。
だから……もういいだろ……?

長いこと……お前と……ティーダを待たせちゃまつてるもんなん……。

でも……なんでだ?

何か……とてつもない心残りがある……よう……な……。

フュイトさん……?

……そつか……そつだよな……。

本当……救えないバカだな……俺って……。

今頃気付くかよ……。

「メン……約束……守れそう……な……い……。

sideレイン

「…………！」

気が付けば、目の前には彼の姿があった。
一体、どうやって……！？

そして、振りぬかれる刀。

その瞬間、私の頭から何かが外れるのを感じた。

その一撃は、確かに私に届いているはずだ。
でも、何故……、私にそれほどのダメージがないのか。
そして……さつきまで私を取り巻いていた禍々しいものがなくなっている。

「……………彼は……………？」

後ろを振り返る。

そこに…………確かに彼はいた。

「……………！」

地面に倒れ伏し、服も、体もボロボロで、付近には吐きだしたのだと
りつ血だまりもある。

まさか……こんなになるまで私のことを…………？

慌てて彼のもとに駆け寄る。

彼の表情は…………穏やかそうな…………でも、何か心残りのありそうな表情をしていた。

「まさか…………！？」

彼から呼吸の音が聞こえない。
心臓から鼓動が聞こえない。

これが意味するものは……！

「……ダメ……！」

まだ……死んではダメ……！
今……はつきりわかった……。

初めて会った時から感じていたもの……。
私は……彼が……。

……！」今までひどいことをした私が、許される」とはないと思つ。
でも……それでも……。
彼には……生きててほしい……！

心肺蘇生の要領で電気ショックを与え、人工呼吸を行っていく。
彼が倒れてから、まだ一分と経っていないはずだ。

まだ、助けられる……！

その時、彼の右手が、少し動いた。
これなら……！

そこで、ふと思つ。

この後は、どこへ連れて行けばいいのかと。

ドクターのところへは、連れていけない。

だって…ドクターは、彼を手に入れることしか考えていなかつたら。

だから、治したとしても、それでは…、彼、は戻ってきてはくれない。

私の好きな、彼が。

だから…私はもう一つの方法を取ることにした。

「…………」

管理局の崩壊。

この状態は、まさしくそれだ。

まず、通信を妨害された。
敵に、ここまで広範囲に通信妨害が出来るなんて思いもよらなかつた。

唯一その対策が出来ていたトールさんは、例の戦闘機人、レインと戦闘に入つてから今まで、まったく連絡がない。

確かに、遠方から幾度となく強大な魔力を感じてはいた。

しかし、応援に向かおうとした私たちを戦闘機人達が邪魔をした。

強大な魔力ももう発生していない。

だから、決着はついているはず。

でも、こちらから何度も通信を繋いでも、トールさんからの応答がない。

そこから連想されるものは、最悪のものだった。

考えたくない。

だつて……約束があるから。

トールさんは、約束を破らないって信じているから。

次に、ギンガが攫われた。

相手は、初めからギンガを狙っていた、ということだ。

戦闘機人。

彼女もその一人だからなのだろう。

主力であろう戦闘機人に破れ、連れ去られる直前、
スバルが乱入し、その戦闘機人を追い詰めたみたいだけど、別の戦
闘機人の邪魔が入り、そのまま連れ去られてしまった。

スバルも決して軽くはない傷を負っている。
でも、それ以上に、姉を連れ去られたことに深いショックを受けて
しまった。

そして、六課が強襲された。

六課には、シャマルさんも、ザファイーラもいたのだが、防ぎきれな
かった。

そして、ヴィヴィオが攫われた。

ヴィヴィオは、間違いなく何かに利用される。
それも、私たちにとって最悪な方向で。

「これが……災厄だといつの……？」

これが……カリムの予言した、‘災厄’。
全てが、最悪の方向で動きつつある。
このままでは、防げない。

この絶望的な状況をなんとかするには……。
私たちだけじゃ、足りない。

だから……トールさんに、無事に帰ってきてほしかった。
今も、シャーリーが必死でフリーザライトに無理やり通信を繋いでいる。

そして、‘それ’は私の目の前に突然やつてきた。

戦闘機人。

思わず、戦闘態勢を取つてしまつ。
でも、すぐに、違和感に気付く。

‘彼女’は、何かを背負っている。
そして、それは人のようだ。

「…………トールさん！？」

あれは……間違いない、トールさんだ。

だとしたら、彼女が、戦闘機人、レイン、といふとか。

「…………あなたは…………」

そういうて、彼女はトールさんを背中から降ろす。
そして、ゆっくりと私の方へ近づいてきた。

近くにいたなのはが慌ててトールさんを支えようとするが、トール
さんは意識をなくしているようだ。

いや、もしかしたら…………。

「…………お願い…………！…………彼を…………助けて…………！」

その叫びは、本当に彼女の心の声のようだった。

二人の間に、何があつたのかはわからない。

でも、今はそんなことを確認している場合じゃない。

「なのは、すぐに医務室へ……」

「うん！トール君、大分弱ってる……早くしないこと……！」

トールさんを、なのはと、通信で呼んだシグナムに運んでもらいつ。そして、私は彼女に向き直る。

「あなたも、一緒に来て……！」

「……私は……」

「いいから、早く……！」

強引に彼女の腕を掴み、医務室まで連れて行く。

彼女は、抵抗しなかった。

s.i.d.eなのは

トール君は、帰つてきてくれた。
でも、それは思いもよらない形だった。

それは、‘彼女’。

前、会つた時は空の上だった。

そして、その時は、どこか、機械的だった。

でも、今の彼女は、言葉は機械的なままだけど、どこか人間らしく、
優しさを感じた。

彼女が、トール君を連れてきてくれた。

だから、トール君は彼女を救うことに成功したんだろう。

それは… まぎれもない奇跡だった。

そして、その軌跡を起こした本人は… 酷い重症だった。
彼女が言つには…、一度は心臓も止まつていたらしい。

‘どうあえず、もう命の心配はいらないわ。もう少ししたら意識は
戻ると思う’

「…………よかつた…………！」

いつも彼女は、本当にうれしそうだ。

今はシャマルさんが治療にあたってくれている。
だから、もう大丈夫。

「でも……」

「どうかしたんですか？」

そこから、シャマルさんは深刻そうな表情になる。

「当分の間は、治療に専念させないとダメね……」

「そうですか……」

それは、仕方のないことだと思つ。

だって、相手は自分を大きく上回る実力の持ち主。

生きて帰つてこられただけでも奇跡的なのだから。

「…………」「めんなさい…………」

その時、彼女が急に泣き崩れた。

「私……………彼に……………なんて酷いことを……………！」

そう、確かに、あなたはトール君に酷いことをした。
それは、許されることではないのかもしれない。

でも、それを私たち責めることは出来ない。
だって、そんなことをしたら、命を賭けてあなたを救つたトールさんの立場がないから。

「……今は……待とう？それで……トール君が起きたら……ちゃんと
彼に謝つて……それからだよ……」

「……………はい……………はい……………」

フュイトちゃんが優しく声を掛けた。
ひとしきり、彼女は泣き続けた。

ここが問題になるのは、彼女の処遇だった。
はやてちゃんに相談しても、すぐには結論が出なかつた。

「ん~、Jのとおり、保護室も滅茶苦茶やしな~」

彼女の巨大な力を抑えられる施設は、すぐには用意できない状態だつた。

ありえないとは思うが、彼女が再び暴走した時の対策は必要だつた。

「とりあえず、なのはちゃんとフロイトちゃんと、トール君が目覚めるまでの間、面倒見といてくれる?」

「それしかない、かな」

「あ、とりあえずその武装はこっちで預かるで~」

「……わかりました……」

彼女は、具現化した‘槍’をはやってちゃんと渡す。

そうすれば、私達二人でなんとか抑えることは不可能ではないと思ふ。

トール君……待ってるからね……!!

sideトール

夢を見ている。

あるいは、ここは天国か、地獄か。

すぐには判断がつかなかつた。

感覚のない、あの状態を継続しているようだつた。

「ああ……そついや死んだんだけ俺」

と、すれば普通は地獄だろうな。

これだけの極悪人、天国には連れてけないからな。

「なうに言つてるの？ここはトールの夢だよ？」

「…は？」

振り返ればそこにレイミがいた。

「いやいや、さすがに嘘だろ？」

いや、だって俺、あの状態じゃ助からないだろ？

「とつあえず……トール……」

「？」

「ありがとう、彼女を救ってくれて」

「ああ……ちゃんと救えたのか、俺。
なら、よかつた。」

「でね？その彼女が、今必死になつてトールを助けようとしてるん
だ〜起きたらびっくりすると想ひよ〜？」

「そうか…レインが……」

「やつぱり、お前に似て元は優しいんだろうな。
ま、だとすりゃ俺が命を賭けた甲斐^{いへい}があったもんだな。

「さて、今日戻ってきた理由はそれだけじゃないんだろう？」「
まあ、ちょっと確認したいことがあるってね……」

確認したいこと？

それは……こないだの夢の続きとこいつとか？

「ね? トール もういいんじゃないかな?」

「……何が」

コイツは底抜けのお人よしだから、多分いつ言つてへるんぢやないかな。

「私以外の人を好きになつても」

「……」

ほらな。

「……そうしたら、お前は毎回行つちまつだよ……お前の……氣

持ちは……」

「……うつと、私はどこにも行かない

なんで? ?

なんでそう言い切れるんだよ? ?

「だつて……トールは、優しいから……。ずっと私のことを憶えてくれている」

「当たり前だろ? ?」

「そして……リムルちゃんも……そして……今……トールが好きになりかけている人も、その、仲間もね

「もういいんじゃないかな?」

「…………気付いてたのか…………。」

「だから……私は……ビルにも行かないの。ずっと……トール達の……心
の中で……生き続ける」「…………そうかな…………」「うん、そうだよ……」

心の中で、か…………。

「もうへ、十分だよ…………」

「…………」

「…………長い間、トールは私だけを思つてくれた。そして、私の分身
であるレインを救つてくれた」

そして、彼女は、とびっきりの笑顔で

「これ以上を望んだら、私、地獄行きになっちゃうよ…………」

そんなことを言った。

「……………わかつたよ……………」

「そつそつ だから早いとこが、戻んなさい」

「なんで押すんだよ……………」

「ん~? だから今、その好きになりかけてる人が、お見舞いに来てるよ? だからその時に田覚めたほうがロマンチックじゃない」

「……………フェイトさんが?」

「あ、やつぱりそつなんだ~」

「あ……………」

……なんで墓穴掘つたし。

やつぱりコイツには一生涯こいつもないな。

「さ~早く戻つた戻つた

「だから押すなよーー!」

あ……なんかそろそろ田覚めそつだな……………。

それじゃあまあ……行つてきますか。

「頑張つてね
トール
.....」

第38話 その日、機動六課 後篇（後書き）

「なるほど～」うつぶつに落ち着いたんか～」

「ふふふ…トールもやるわね…」

「あうひひひ…／＼／＼」

「おやあ～？ フロイトちゃん…どないしたんかあ～？」

「さつとこの次の展開で大変なことになるのを想像しているのよ～」

「／＼／＼」

「……む～」

「あれ？ 久しぶりに後書きにきたのはひやんやないか」

「だつて最近ちつとも呼んでくれないの～」

「ま、ヒロイン確定やしな」

「これはあくまで、このお話、「限つてのことだナビね？」

「ほ～？ まだ何かあるんか？」

「そう…なら今度は私がヒロインのアナザーシリーズとか…？」

「た～て？ それはわからないな～」

「…………／＼／＼」

「結局フロイトちゃん、あうひひか言つてないし」

「だつてこれからいっぽこに出番あるからいいんじやない？」

「フォワード陣空氣にならんよつ今から作者に釘刺しここ」

「それいいー！ 今から行こう！」

第39話 報われる想い、守るための刃（前書き）

だ、駄目すぎる……
なんだこの恋愛は～～～！－！

第39話 報われる思い、守るために刃

s.i.d.e フロイト

あれから… 2日経つた。

けれど、トールさんはまだ目覚めない。

あの後、「レイン」という戦闘機人は、おとなしくしている。あの戦いで、どのよろんなやりとりがあったのかはわからない。

でも、トールさんは確かにレインを救ったのだ。

だから、トールさんのしたことは無駄なんかじゃない。

でも、肝心のトールさんは、こんなにもボロボロになってしまった。近いうちに来るだろう最終決戦には、間に合ひそうもない。

この短い間に、トールさんにほいろこうと無茶をさせすぎた。それは、かつてのなのはを思い出させた。

なのはは、あの怪我から奇跡的に復帰する」ことが出来た。でも、トールさんはこれ以上何かあれば…。

奇跡は、そう何度も起るものではない。

だから、この戦いは、私達だけで終わらせんしかない。

もつ、無茶はさせたくない。

こんな気持ちになるのは、初めてだつた。
なのにはにも、クロノにも感じたことはない、そんな気持ち。

なのはに聞いたら、これが恋なんじゃないかつて。
…やつぱり、そうなのかな。

自分でも…顔が赤くなっているのがわかる。

「……はつー」

気が付けば、トールさんの手を握つている。
でも、何故かその手を離したくない。

その時、少しひと、トールさんの手が動いた気がする。

「トールさん？」

「……ん……」

ゆっくりと、トールさんの目が開く。
体の節々が痛いのか、顔を顰めている。

「あ……フロイトさん……」

「…………まだダメだよ……」

そのまま体を起しあうとするが、私がそれを抑える。

「酷い怪我だつたんだから、まだ、起きてもダメです……」

「…………そつだな」

私がから有無を言わせぬ迫力を感じたのか、トールさんは素直に従つてくれた。

「…………アイツは…………？」

「レインのことですか？今は仮で作った保護室で休んでいますよ……」

「…………そつか……」

彼女が応急処置を施さなかつたら、トールさんは生きていなかつただろう。

それは、間違いない。

でも、ここまでトールさんが傷ついてしまつたことにして、微妙な気持ちこなしがざるをえなかつた。

「…………心配、したんですよ？」

「…………ああ」

「…………もう帰つてこないんじやないかつて、約束、守つてくれな

いんじやないかつて

「…………すまない……」

やつぱり、言葉は少ない。

でも、本当に申し訳なさそうなのがよくわかった。

「…………一時は、心臓も止まってたって…………死んでたかもしけないつ
て聞いて…………私は…………一…………」
「フヒイトさん…………」

sideトール

本当に、申し訳なかつた。
あの時、本当に死んでもおかしくはなかつた。

あの時、全ての感覚がなくなつていった時、本当に死んだものだと
思つていた。

でも、今は「うじて生きてこな。

夢の中でレイミーが言つてこたとおり、レインが助けてくれた。
それがわかつただけでも俺がしたことは無駄ではなかつたのだ。

「…………」

そう思つていても、田の前で泣きだくなつてこるフローレスを
見ると何も言えなくなる。

「……それでも、俺は帰つてくるか?」

「…………え?」

だから、俺は……。

「何があつても…俺は…あなたのところに、生きて帰つてきます。」

「…………／＼／＼」

ホント、「」の時に気が付いてれば良かったんだけど…どうもカンが鈍
つていたようだ。

「だから……そんな悲しい顔ばかり、見せないでください……」

「……それは……トールさんがそうさせなければ……／＼／＼」

「うぐっ……失敗した……」

「……俺も、そうさせないよう努めますから……」

「……ホントに？」

「ホ、ホントだって……」

「こ、この人は狙つてやつてるのか？
それとも天然なのか？」

「この場面で手握つてくるなんて……！」

「…………／＼／＼」

て、照れる……。

こ、こんなところ誰かに見られたら……と思つていたら、運命の神様というのは本当に残酷らしい。

「フェイトちゃん、交代に来た……よ……」

な、なのせさん～～～！！

なんてタイミングで入ってきたんだ～～。

「な、のは……／＼／＼

「なのはさん……／＼／＼

「あ、えつと……／＼＼＼その…」

まだ起きてないと思っていたのだらうが…
いや、俺が悪かつた気がする。

「「「「めんなんさ～～～～～～～～」」」

慌てて病室を後にするなのはさん。

走れるなら走って追いかけたかったが、そんなことは出来るはずもなかつた。

だから、いの場合はおむじが…

「は、ははは……」
「あ、あははは……／＼／＼

一人揃つて渴いた笑い声をあげるだけだった。

s.i.d.eクラットロ

「まさか冷装の断罪人がここまでやるとは思いませんでしたわ～…」

「そうだね、確かにレインを失ったのは想定外だ」

あそこまで強化を重ねた彼女の防御を突破するなんて…。
やはり…一番警戒して正解だった、ということね…。

「でも、これで冷装の断罪人は戦場に出ることなどできなければ…」
「…それはどうだらうか…、彼ならば、あるいは出てくるかもしねない」

あれほどどのダメージを負つて倒されると思ってませんが…。
用心に越したことはないでしょ」。

「それより、タイプゼロの方はどうだいクアックロ～。
「順調ですか～ もう少しで完成します～」

彼女にはレインに施したもの以上の改造をしなければいけませんわ
」。

その後のことなど知ったことではありますんし…ね。

フフフフフ…。

彼女と再び相まみえたとき、どんな絶望的な表情をするのかしり…。

「あと、皆にももう一段階改良を加えたほうが良さそうだ
「それも進めておりますわ～、後1週間ほど時間をいただければ～
「ふむ、それに關してはこちらも進めてることがある。何より…
」

ポッドの中には、子供、がいた。
でも、それはただの子供じゃない。
聖王の器ともこう子供が…

「パパ～！～ママ～！～」

愚かですわ…あなたの親など存在しないといつこのひ…。
フフフ…本当に、おバカさん…。

でも、これでもこの‘ゆりかご’には必要な存在。
せいぜい利用させていただきましょうか…

「戦略の一部として、彼女にも戦つてもらつ必要があるからね」
「Hースオブエースの、心を碎くために…」

機動六課の中で一番にやつかいな存在は、やはり彼女ですから～。
その彼女の今や弱点ともなりつつあるもの…。

「親は子供と戦えないものぞ…」

「ええ…彼女さえ消すことが出来れば…」

機動六課は自然と崩壊する。

残りの三人は…時間をかけてゆっくりと、ね…。

sideツール

あれからもう一日経り、なんとか走り回れるくらいには回復した。
まあ、走ろうとも思わないが。

そして、今俺たちは……

「どや……」それが次元航行艦、アースラや……
「「「「あ」」」い！」「」「

こないだの六課襲撃で、六課の隊舎は完膚なきまでに崩壊してしまつた。

そこで体制を立て直すため、新しく隊舎を新調…なんて出来るわけもなく、そこで部隊長が考えたのは、次元航行艦を丸ごと六課の新本拠地にしようということだった。

ちなみに俺は、本局の医務室の住人となることを条件に、退院を許可された。

今はもうぱらりハビリに専念しつつ、フォワード陣に指導を行うこ

とてじょりうと思つ。

もちろん、嘘なのだが。

俺が無理を言って退院した理由など、一つしかない。
スカリエットティとクアットロと名乗った戦闘機人に「借り」を返す
ためだ。

「ど、言つてもまだ整備中だから乗り込んだり出来ないんだけどね
?元々は廃艦予定だつたし」

フェイドさんがそう付け加える。

聞いた話では、この次元航行艦は、かつてなのはさん達と共に事件
を解決してきたそうだ。

つまりこのアースラは10年近く稼働していったことになる。

次元航行は艦の損傷が激しく、あまり長く持たないと聞いているが

⋮。

「あれ? それじゃあ私たちほど」で寝泊まりするんですか?」

「はやてが本局に寝泊まりするところを確保してくれたみたいだよ

今更ながら、部隊長の行動力には驚嘆させられるな…。

さすが、19歳で一佐にまでなつただけはあると思つ。

佐官といつのはなかなかなるものではない。

尉官までは実力さえあれば言い方は悪いが馬鹿でもなれる。でも、佐官から上といつのは実力よりも頭脳やある程度の繋がりが必要な部分もある。

事実、俺の知つてゐる佐官や将官は良くも悪くもそういう人物が多い。

ひとえに人々のことを見つてゐる人もいれば、自分のことしか考えないものもいる。

そんな世界に、部隊長は飛びこもうとしている。

「残念やつたな? フヨイトちゃん... トールさん

「へ?」

「...何がですか?」

そこで部隊長は何故か意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「せつかくの一人部屋やけど、トール君は医務室におらなあかんから...一緒になれんで?」

「「ブツ! -! -! / / /」」

な、ななな... 何で... ?

そりだなのはせんが申し訳なれんな田線を送つてへる。

「な、な～の～は～や～～ん？」
「い、いめん…隠しきれなくて…」

よりにもよつて部隊長に知られてしまつた。
絶対に後が大変だなこれは…。

「ええんよええんよ そんな無理に隠そうとせんでも…」
「出来ることなら部隊長には永久に内緒にしておきたかったですが
…」
「なんや、別にそんな邪険にせんでもええのに…ほんのちょっと弄
るだけやないか」
「だから嫌なんだよ…」
「おお、思ひつたりやな」

訂正。もう大変だった。

「本当にいめん、二人とも…」
「も、もう一いつて…しようがな～よ」
「いひなる運命だったと思つて諦めるわ」
「そつそつ 人間諦めが肝心やで」
「諸悪の根源が言わないで！…」

「あ……こんなんで」これから大丈夫なのか？

そんな時、後ろから懐かしい声が聞こえてきた。

「やれやれ……随分明るくなつたよつですわね？」

「……あれ？ リムルがなんでここにいる……？」

「あの、私は本局の執務官なのですけれど……」

そう言えばそうだった氣もするが、リムルの仕事内容には謎といつか、本人があまり言わないで良く分かっていない。

「あれ？ リムルちゃん、今日はびないしたんや？」
「ええ、そこのお兄様に用があつたのですが……」

俺に？

「IJの様子では無用な心配だつたよつですわ」

「……何が」「……何でもありませんわ……」

何なんだ一体？

sideリムル

兄が酷い重症を負つたというのは聞いていた。
けれど本局もその余波の影響で寝る間も惜しんで復旧作業や、捜査
に追われていた。

私もそう、ろくに休めないまま働き続けていた。
そして、兄が目覚めたと聞き、ひとまず安心した。

でも、また、あの時、のように無茶を繰り返すのではないか、
そして、今度こそ取り返しのつかないことにならないか心配だった。

だから、六課が本局に来ると聞き、兄に釘を刺そうとした。
でも、それは必要なさそうだった。

兄の横で笑う、金髪の女性。

私と同じ、執務官。

久しぶりに兄を見た時、すぐに分かつた。
雰囲気が明らかに変わっていると。

そして、それはこの女性によるものだと。

でも、すぐには認めたくなかった。

レイミさんが亡くなつて以降、私がどれほど時間を掛けても溶けなかつた兄の心の氷が

あの人…簡単に溶かされただなんて…。

「私の要件はもう済みましたし、失礼いたしますわ」

「お、おい待てよ…ちょっとくらいゆっくりしていつても…」

本来ならその申し出も受けたいところなのですが…。

「お断りしますわ」

「む…」

「私はこれでも忙しいんですの。余計な時間は取れないんですよ」

そう、今進めている捜査も大詰めなのだ。

そしてこの捜査は、兄のためもある。
時間が少しでも惜しかつた。

スカリエッティと、最高評議会。

この繋がりを完璧に追求できれば……。

もう、兄は苦しむこともない。

いわば、この捜査は私にとって兄を助けるためのものでしかない。
しかしこれは……この事件を本当の解決に導くために必要なものなの
だ。

「それでは、失礼いたしますわ……」

ごめんなさい、お兄様……。

私は……一度だけ、兄を守る刃となります……。

第39話 報われる思い、守るための刃（後書き）

「ほ〜〜〜〜? フェイトちゃん… 大胆やねえ…」

「ふ〜〜〜ん? ツールの手を握つて、ねえ……?」

「ふ、二人ともなんか怖いよ…?」

「なのはちゃんはなのはちゃんで何故か空氣読めないヘタレになつとるし?」

「うぐつ…!」

「まあ、この一人は甘甘にはならんやろな…?」

「今のところは… 大丈夫なんじやない?」

「…………あ'う'う'／＼」

「ところで、最後にもう一つ気になる伏線が出てきたね?」

「何気に久しぶりの登場の彼女がこの後大活躍するんか? そりなんか?」

「う〜ん… とすればあの場面なのかなあ…」

「ところで、作者がなんか色々裏でやつしているらしくなんやけど……」

「私にとつてはホントに嬉しいことらしいよ～」

「まつ…レイラさんにとって…ね…?」

第40話 対策と、宣戦布告（前書き）

まつりよひと...まつりよひとで...

第40話 対策と、宣戦布告

s.i.d.e フロイト

よかつた…あの様子なら大丈夫だ。
なのははヴィヴィオが攫われた直後は冷静に見分などをしていたん
だけど…。

部屋に戻ると今までの緊張が崩れたのか、泣き始めてしまった。
あの時はなのはのことも、トールさんのことも、心配だった。
でも、なのはは、一晩したら、いつものなのはに戻っていた。
いや、いつもとは少し違うか。

絶対にヴィヴィオを取り返す、そんな覚悟が見えたから。
なのはの目は、決意に燃えていた。

かつて私を助けてくれた、あの時と同じ目。
だから、なのははもう、大丈夫。

そして、トールさんも同じだった。

いや、トールさんの場合はもう、彼女を、救つた、んだ。

その影響で、この後の戦いには参加できないけれど、でも、トール

さんがいてくれるだけで……私は……心が暖かくなる。
だから私も、なのはと同じく、再び立ち上がる。

絶対に、この人のところに帰つてくれる。
そう、心の中で誓えるから。

一つ気になつたのは、先ほど本局で会つたりムルさんのことだ。
彼女は、兄のトールさんにも言えない何かを隠しているのではないか。
それは、拙いながらも執務官を続けてきたカンだった。

ちょっととしたやり取りの中での、冷たい態度。
兄を思うが故に、何かとてつもないことをしようとしてはいけないか。

「…………アイツ…………」

トールさんも、その辺りが気にはなつてゐるようだ。
でも、聞けないようだ。

今、トールさんがどれほど聞いても恐らしく口を翻る「ことはないだろ
うから。

無駄だとわかつてゐるから」しかも、聞かない。

なら、私が聞いても同じだった。

トールさんと同じような無茶だけはしないでほしい。
そう願うばかりだった。

「ところでフェイトさん…」

「はい?」

「戦闘機人の対策はどう?」

そう、これから戦いに必要なのは戦闘機人への対策だ。

私が戦つたのは2人。

1人は私と同じく高速移動が得意だった。

そしてもう一人のピンクの髪の子は遠距離からブーメランのようなもので支援していた。

こちらも向こうも全力で当たることはなく、どちらかと言えば引きつけられただけのような気がする。

しかし、今度あの2人とまた戦つようなことがあれば、今度こそ死力を尽くさなければいけない。

「なるほど…同じ高機動タイプと、支援射撃タイプを相手にするわけか…」

「ええ、この場合の対処は支援型を倒してからなんんですけど…」

「そのような余裕を与えてくれるような相手じゃないと」

「ええ。ソニックフォームにすらついていきそうなほどでした」

「最速のフュイトさんについていくほどの速度…か。俺には追いつけそうもないな」

それでも、トールさんなら。

トールさんなら、なんとか対応してしまつ気がする。

トールさんの戦歴は、私よりもはるかにすごい。

死闘といえる戦いを、手で数えることが出来ないくらい。

それほど、激しい戦いを繰り広げてきたと思つ。

だから、自分より実力が上の者、自分より圧倒的に早い者との戦い
だってあつたはずだ。

「トールさんなら、この場合どうします？」

だから聞いてみたかった。

それが私に実践できるかどうかはともかくとして。

「俺なら幻術での攪乱が一つだな。その隙をついて支援型の方を倒

す」

「ふむふむ」

それは私には実現不可能だろ？

今から付け焼刃程度の幻影魔法を習得出来たとしてもあの二人を相手に出来るものじゃない。

「他には、あるのですか？」

「こちらからは無駄に動かず、相手の拳動を逃さず、隙を突く」と、

かな」

ふむふむ。

これも一つの戦法だつた。

でも、あの手数を相手に最小限の動きだけで対処し続けるのは意外に難しいと思う。

ただ、このまま正攻法で言つても勝てるかどうかはわからない。

「俺が動けるのなら、訓練の相手が出来たんだが…」

「それはダメです！」

「だよな…」

ただでさえホントは医務室にずっとこもらいたい状態なのに、訓練なんてもつてのほか！

「それなら…良い方法がある

「……良い方法？」

一体なんだらうか？

sideトール

「えっと……トールさん、これは……」

「何つて、高速戦闘と支援型の同時相手なら、これが一番効率がいいだろ？？」

今、訓練室には俺とフェイトさん、それからエリオがいる。エリオを呼んだのは今現在、速さと敏捷性においてフェイトさんに対抗できるのがエリオだけだからだ。

「そうではなく……」

「？」

「なんでトールさんがデバイスを構えてるんですかーー！」

「いや、俺の方はフリーザライトではなく、ブーメラン型のデバイスを手にしている。

フリーザライトは先の戦いでかなり損傷したので修理に出しているところだ。

そしてこのブーメラン型のデバイスは……。

「いや、本局の倉庫に眠っていたそれっぽいアームドデバイスを借りてただけ」

「で・す・か・らー！なんでそれをトールさん構える必要があるんですか！？」

やばい……。

なんかフェイトさんが笑顔なのに目が笑ってない……！

「即興でこいつのが出来そなのが見当たらなかつたんでな……！」

そう言いながら思いつきり放り投げてみる。

ブーメランは若干不規則な軌道を描き、そして戻ってきた。

それをほとんど見ることなく左手で掴む。

「おお……意外にいいなこれ……」

「人の話を……聞いてるんですか……？」

「だから、無茶はしないって……俺はここからコイツでエリオの援護

をするだけ

「それでも……！」

フェイトさんが心配してくれているのは嬉しい。

でも、まともに戦うことができなくなつた俺が、ただ終わるまで待つてゐなんてことは出来なかつた。

いや、本当なら無理してでも一緒に行きたい。

でも、それを言えば絶対にフェイトさんは怒るだろ？

だから、いひこつたこと少しでも足しになれば、と思ひ。

「……俺なら、大丈夫だから。少しでもフェイトさんの役に立った
いんだ……」

「トルさん……／／／

「あ、あのう……訓練の方は……？」

「あ、す、すまんなエリオ……／／／

いかんいかん。

今はフェイトさんが無事に帰つてこれるよう、訓練の方に集中しないと……。

「まあそりこいつわけだから……始めるぞ……！」

ブームランを右手に持ち替え、俺が投げると同時に、エリオが駆けだした……。

フェイトさんはまず、姿勢はエリオに向かたまま、俺が投げたブー

メランの方を注視しているようだ。

軌道を読み取るうとしているのだらう。

でも、それは相手がエリオだから出来ることである。
だから、もう一つ、ある工夫をしてみた。

sideファイト

トールさんが投げたブーメランは少し不規則な軌道ではあるが避けられないほどのものではなかつた。

と言つてもエリオと高速戦闘に付け加えられるソレはかなりきつい
ものがあつたが。

でも、見ながらなんとかブーメランを避けることが出来、ブーメランはそのままトールさんのところへ戻っていく。

そこまではよかつた。

でも、背中にすうじに嫌な予感がして思わずエリオと距離をとつてしまつた。

そこを通り過ぎるかの一つのブーメラン。

それは、氷でできてこるようだつた。

……まさかとは思ひナビ……。

「トールさん……？」

「ん？ 次行つたよ？」

もう一つのブーメランについて問い合わせようとするが、最初に投げた方のブーメランが再度投げられる。

それを慌てて避ける。

気が付けばエリオの方も茫然としているようだ。

「何やつてんのエリオ？」

「いや……それ……僕も危ないんですけど……」

それはそうだろう。

とか死角から襲いかかるブーメラン一つなんて危険すぎやしない。

「何言つてゐるんだ……一人とも……？」

「「え……？」

「「？」

え……？

一体何を言つてゐるトールさん？

「「ひのこののはね……田で避けるんぢやない。肌で感じて避けるんだよ？」

「いや、それ当たつてますよねー？そりですむねー？」

「ふう……しょうがないなあ……」

そう言つて氷で作った方のブーメランを掴むトールさん。
そのままブーメランは消えてしまつた。

「「ひのこののをあまり見ないで避けられるようになればその二人相手にも遅れは取らないと思うんだけどなあ……」

「や、それは……」

それは確かにあるんだけど……いくらなんでも急すぎや。と云ふか……トールさんが普通にそれを武器として扱える」と云ふに驚いた。

「それにしても…トールさんはホントにす”い”ですねーほんのちよ
つと扱つただけでもう口を掴んじゃつなんて」

「まあ…親父に色々教わつてたからな」

「へえ……そなんですか…」

「ま、いろいろ出来たから」手田をつけられたわけだが

「あ、”い”じめんなさい！」

「いや、別に謝らんでも」

そう、それだけの才能があつたから、トールさんは狙われた。
でも、そうでなければ、レイミさんとは出会わなかつた。
そして、レイミことの思い出も…別れも、なかつた。

もし、その前に私たちと会つていたら、どうだつただろうか。
その手を血で染める彼を…止められただろうか。

そして…今みたいな…関係になれただらうか。
それは、今考へても無駄なことだつた。

大事なのは、これからのことだ。

…こうして、恋人同士になつた彼を、どう支えていくか。

そして、この戦いをどう乗り切るか。

その為に、今できる」とをやつてこいつ。

何一つ、恋人らしいことをしていないのが、ビックリ
引っ掛かるけど。

sideトール

その翌日。

アースラの整備がようやく終わり、今後の方針を伝達するため、一同がブリーフィングルームに集まつた。
ホントなら俺は医務室なんだが、とりあえず話だけなら問題ないと
思い、無理言って俺も入りこんだ。
ま、その時フェイトさんがまた少し心配そうな表情をしていたが、
別に訓練じゃないし問題ないだろう。

「さて、今後の方針なんやけど……」

はやてせんがグリフィス準陸尉に手渡します。

「地上本部は今回の襲撃事件を自分たちでやることを強硬に主張しています。本局には捜査情報を流れず、ですので、機動六課にも情報は下りてきていません。」

昔からそつだナビ、このくだらない意地の張り合いで仕事に支障が出たのは一度やないものかな。

レイミと組んでやつてた時は本局だの地上本部だの関係なく飛び回つたからそういう派閥みたいなのとは無縁だつたんだけどな。

それでもこの意地の張り合いで仕事に支障が出たのは一度や一度ではない。

この危機に至つてしまでこねじゅあ…ホントに予想どおりになりかねないな。

「けどな、私たちが追うのは襲撃事件でも、スカリエッティでもないレリックや。そして、その先にたまたまスカリエッティがいる。ただ、それだけのことやな」

「……」

「さう言えば遺失物捜索が頭に打ち出されるんだつたな。

あー、つまりはレリックを追うから…スカリエッティを追うのと結果的に同じになつてるだけだと。

屁理屈に近いけど、いつことにしてこうした気など使つていられないとしな。

「せんべ、その過程でなのは隊長とフロイト隊長、それからトールさんとの保護児童であるヴィヴィオを救出する。そういう方向でいくで。一人とも、何か意見ある?」

「いや、特にないんだけど……はやてちゃん、また無茶してない?」「いんや?」かの本来医務室におらなあかん一等空尉に比べれば全然ましゃだ?」

「…………」

すこません、自覚はありますが……じつとしごはいられなくて……。

「ほんなら、捜査出動は本日中や。各自、万全の体制で出動命令を待つてな?」かの一等空尉以外はな
「うひ…………」

会議室に階の笑い声が響く。

でも、その空氣はすぐに破壊されねじになつた。

『それは困るね。頃たちには少なくとも後一週間はじつとしごいて

もらわないと』

「…………」

「…………」

先ほどまでレリックを『』していたモニター。

そこから聞こえるのは、今まで聞いたことのない声だった。

『おっと私としたことが失礼をしたようだね…。

はじめまして、機動六課の諸君?私の名はジエイル・スカリエッティ…。

まあ、君たちには既に知られていることだがね?』

通信妨害といい、ハッキングといい…。

さすがと言つべきか。

いや、この場合は少しおかしい。

このアースラは本日整備を終えたばかりの老朽化が著しい艦とはいえ、設備自体は一級品のものを使つてゐるはず。そう簡単に割り込めるとは思えないが…。

「どうやつてこの通信に割り込んだんや?」「

『なに、この程度、私からしてみれば簡単なことだよ

愉快そうに笑みを浮かべるスカリエッティ。

先ほどから横で厳しい表情をしているフェイトさんが気になる。

「犯罪者が…何の用だ?」

「……」

いつもの優しいフェイトさんとは違つ、厳しい声。

これが…執務官としてのフェイトさんなのか？

いや、これはどちらかといふと個人的な部分の怒りが見えてくる。

『おや？用件なら先ほど言つたはずだが』

「……このーー！」

そんなフェイトさんをどこか馬鹿にしたような表情で応えるスカリエッティ。

そんなスカリエッティに対し、今にもモニターに攻撃しそうな形で立ちあがるフェイトさん。

そして、その横でなのはさんがそれを制した。

「フェイトちゃん、今は抑えて」

「なのは……でも……ーー！」

そう、ここで熱くなつてはならない。

これは、一つのターニング・ポイント。

こうやって危険を承知でハッキングしてくるのは、こちらを意氣消沈させるためのものか、自分の目的をはつきり伝えるためである。だから、ここでは少し落ち着く必要があるのだ。

『ふむ…さすがはエースオブエース、といったところか。実の娘の

よつこ可愛がついていた娘を攫われたのに冷静なことだ』

「……一週間、おとなしくしていると言われて、私たちがおとなし

くしていふとでも?』

挑発的な発言には乗らず、冷静に聞き返すのはさん。

そんななのはさんには、スカリエッティは少し不満そうだった。

『ふつ……つまらないな……。少しあ取り乱してくれればよいのに』

『もう一度聞きます。その要求に私たちが従うとも?』

そんなんのはさんはんの間に、スカリエッティは愉快そうに笑みを浮かべる。

『もちろん、ただで応じるなんて思わないさ。だから、少しだけ卑怯な手を使わせてもらつた』

モニターに映し出されたのは、一つの箱。
それが何なのかは、今はわからなかつた。

「…………これは?」

『この箱には、私が開発した、人を数秒で死に至らしめるウイルスが培養されている。効果範囲は半径十キロ四方。致死率100パーセント、感染すれば助かる術はない。この箱をミッドチルダ市街のある施設、場所に仕掛けさせてもらつた。』

『なつ…………!』

「そんな…………」

『…………』

はつたりとは、考えにくつた。

広域次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティ。

その得意分野は、生物兵器。

レイミのクローンすら戦闘機人化させるほどの力があるのなら、確かにそのようなウイルスを作るのも不可能ではない。

「すぐに撤去しないと！！」

『無理に撤去しようとすることは思わないことだ。この箱は私以外の者が無理に解体しようとすれば、即座にウイルスをばら撒くように出来ている』

それに、とスカリエッティは付け加える。

『市民を避難させることも不可能だ。ミッドチルダの市民は数千万を数える。

たつた一週間で全市民を避難させるなど、不可能だ。しかも、それが生物兵器によるものだと知れば、パニックに陥るだろうね』

それもそうだ。

見えない恐怖心というのは人を一番恐怖に陥れる。

テロで一番恐ろしいのは爆破よりも、ウイルスによるものだ。

「一週間後、何をする気や？」

今まで聞くだけだった部隊長が、口を開く。

『祭りや。管理局といつ史上類を見ない巨大な組織を相手にした、ね……』

「祭り、やで？」

祭り、とは事実上の宣戦布告。

それがすぐにわかつたから『いや、監、口を噤む。

「あんたの……目的は……？」

その中で、部隊長は氣丈に振る舞い口を開く。

『目的……目的ねえ…………。そうだな、極論してしまつなら、私が樂しむため、なのだらうね』

「ふざけるな……！そんな理由で……！」

それに耐えきれず、フュイトさんが叫ぶ。

『別にふざけてなどいないや。ただ、これで管理局が滅びることになれば今停止している戦争や内戦、その他犯罪なども飛躍的に増加する』

「…………」

それも、道理だった。

管理局は一種の調停役も担い、そのおかげで停戦や休戦状態の世界や国などが多くある。

そして、犯罪の抑止、検挙といった部分の多くは管理局がもたらしていたのだ。

それが崩壊するということは……。

『全てが……私の手で、全てが壊れていいくのが……こんなにも楽しみなのさ……そつは思わんかね！？冷装の断罪人！！』

こともありうて、俺に話を振ってきた。

周りの者は皆、スカリヒッティの狂気に呑まれている。

「…………生憎だが、お前の思ひ通りにはならん」

『ほつ……？それは何故かね？』

これは、前哨戦だ。

このまま、皆を戦わせるのは危険だ。

だから……俺は、この舌戦に勝利し、皆の士気を取り戻す。

「決まっている。……ここにいる皆が、お前達を止めるからだ。」

『ふふふ……。先ほど私たちに完膚なきまでにやられた者たちの台詞とは思えないね』

「だから貴様は馬鹿だと言うんだ。あの時は状況から何から違つ。いつまでも俺達が後手に回つたままだと思うなよ」

『……そういう肝心の君は戦うのも難しいほどの大怪我のようだけどね?』

「…ふつ」

この時、自分でも少し笑っているのがわかつた。

「逆に礼を言いたい気分だ。一週間も時間をくれるなんてな。俺なら一週間で全快してやるよ」

『強がりも大概にしておいた方がいいんじゃないかい? レインとの戦闘は、そんなに優しいものではなかつたはずだよ? 何なら今からでも遅くはない。レインと一緒に、私たちのところへ来ないかい?』

……「れだから馬鹿は困る。

「悪いが。沈むとわかっている船に乗る趣味はない

『なるほど、船か。言ひえて妙だね!! 君たちに本当にそんなことができるのか、楽しみだよ!!』

それから、もう一人こちらから宣告しなければいけない奴がいたな。

「おい、近くにクアットロとかいう戦闘機人がいるだろ?』

『あら～？私に何か用かしら～？も・し・か・し・て、愛の告白～

？』

「……こちらから願い下げだ」

『あ～ら残念』

』

そういう割に、表情は絶えず笑顔だった。
その偽物の笑顔、今、剥がしてやるよ……。

「俺から言つ」とは一言だけだ……」

『……何かしら……？』

こういう表情は、皆にはあまり見せたくないが、今言わなければ
意味がない。

「貴様には死にも勝る本当の地獄を見せてしまふ……！——覚悟してお
くんだな……」

『……』

その、ほんの一瞬だけ、クアットロの笑顔が崩れた。
でも、次の瞬間には元に戻り、

『あら～ それは楽しみにしていますわ～。あなたに出来れば……

ね
『

最後に、凶悪な笑みを残して、通信を切つた。

第40話 対策と、宣戦布告（後書き）

「あれ？ 気になるところで終わつたね」
「本来戦えないはずのトールさんが一週間でどう治すのか？」
「ど、というか治るの？」
「わからん！！」

「50万PVと5万ユニーク記念は？」
「作れるかわからんて作者が言つてた」
「相変わらずヘタレやね」
「え！？ だつて私主役つて言つてたのに！！」
「これは… 作るしかないやろ！… だつてレイミさん凄い人気やしね」
「そうだよ～」
「え～… 私も作つてほしい… // /」
「フエイトちゃんは物語のヒロインなんだからいいじゃない」

第41話 大切なもの（前書き）

誤字修正しました

第41話 大切なものの

side フライト

あの、スカリエットによる宣戦布告から、一回経った。

当然というか当たり前というか、トールさんの出撃許可は下りなかつた。

あんな状態で出撃をせるわけにはいかない。

それでも、トールさんは止まりそうもない。

それがわかるからこそ、私たちにはどうする」とも出来ないのか。

トールさんを訓練にも参加させるわけにはいきず、はやてが部隊長権限を行使し、ある‘命令’を下した。

今、私とトールさんは本局の保護室に来ている。

そこには、トールさんが保護した、彼女、がいるのだ。

トールさんには、その彼女を更正プログラムに従つて相手してもらう。

それがはやてが下した命令だ。

彼女は、今は落ち着いているが、ふとした拍子に暴走してしまうかもわからない。

もともと、彼女はトールさんを助けるためにここに保護されただけ

なのであって、白い保護を求めているわけではない。

だから、彼女が一番心を開いているトールさんのサポートが必要不可欠なのだ。

「レイン～？ 入る？？」

「…………うん……」

トールさんが部屋の外から声を掛けると、中からかすかに返事が聞こえてきた。

私たちが中に入ると、セリヒミ、白いベッドと、数冊の本だけが入っている本棚、そして…部屋の中心に、彼女は座り込んでいた。

戦闘機人、レイン、

レイミさんやつくりだという彼女を、トールさんはびっくりするなりなのか。

「… よひ…」

「…………怪我は…………平氣…………？」

「ああ、おかげさんでな。もう何とかすれば普通に戦えるよつこなるだろ」

嘘だった。

どう考えたって治るはずがない。

でも、この子の手前、そういつとは言わない方がいいのだろう。

「……今日は……？」

「うーん……そうだなあ……レインは何がしたい？」

「……あの……後ろの人は……？」

「私？」

いつもはトールさん一人だったのだが、今日は私が付いてきているので気になったのだろう。

「うーん……そだなあ、レインとお話をしたい、かな」

「私と……？」

「うん。もつと……あなたのことを、知りたい！」

「……私は……」

そこから、色々な話をした。

生まれた時の話、スカリエットとの会話、そして、姉とも言える戦闘機人達との話。

レイン自体は生まれてからそれほど時間が経ってはいないようだが、短い間でもいろいろな経験があつたようだ。

そこに、私は複雑な思いを抱かずにはいられなかつた。
私のことを‘お嬢様’と呼んだ彼女達。

彼女達は私のことを知つてゐる。

それもそうだろう。

スカリエッティはプロジェクトFの基礎理論を構築した人物で……

そして、私は…その、成功例なのだから。

sideトール

フェイットさんの様子が少しおかしい。

保護室に入るまでは特におかしなことはなかつたのだが。

レインと話をしてからだった。

レインの話を聞いて、やはり、スカリエッティのところにいる戦闘機人にも心がある、というのが良く分かった。

まあ、スバルやギンガのことも聞いていたし、生まれた時から本当にどうしようもない奴、というのがいいのかかもしれない。

そう、だからスカリエッティのところにいる戦闘機人達も、ほとんどは素直な子たちなのだろう。ほんの一部を除いて……な。

その話と、戦闘機人達の話と、フェイトさん、そこに繋がるのは、やはりアレだろ？

プロジェクトF。

これは、本人から確認を取ったわけではない。でも、間違いなくそうだと確信している。

彼女自身が、「誰か」のクローンなのではないか。

そしてそれは…彼女に云ひか、暗い影を落としているのではないだらうか。

こないだの地上本部襲撃の前に交した会話。

あの時に言おつとした、秘密、はやはりそつなのだらう。

「それで、この後はどうしようか?」

「……実ははやてには『午後はオフでえーからトールセントピートートでも行つてき』って言われてまして…」

それでいいのか部隊長…。

まあ、一週間先まで奴らが何もしてこない保証はないが、向こうから宣言してきた以上、多分今すぐ仕掛けに来るとはいはずだ。

「……なら少し出かけよつか?訓練も出来ないんじゃ特にすすむの?」

「もないし」

「は、はい……//」

先ほどとは違つて少し緊張しているようだ。
俺も結構緊張しているんだけど…。

「なり、俺の行きつけの喫茶店があるからそこでいいかな?」
「ええ…」

そのお店はクラナガンの西側に位置するところで、周囲は住宅街のため、昼下がりには主婦達の溜まり場になる。まあ、中には俺のようなコーヒーだけ飲みに来る男もいるので、入りづらくはないのだが。

ここにはレイミが亡くなつてから、たまたま見つけた店なので、当然デートで使つたことはない。

ここのマスターとは4年近く顔を合わせているので、俺の好みを十分に知り尽くしていた。
基本的には静かな人なので、あまり会話はないが。

カラソカラーン

「……いらっしゃい」

俺がフェイトさんを連れて店に入ると、マスターは一瞬驚いた顔をしたが、すぐに元の表情に戻つた。
まあ、他の人を連れてきたことなんてなかつたし、特に女人の人を連れてくればさすがに驚くか。

「ホットでいいかな？」

「うん」

「ホット一ひとつ。俺のはブラックで
私もブラックで」

この店は注文を受けてから用意するのだから時間がかかる。
しかしその分深い味を楽しむことが出来るのだ。

「……良いお店ですね」

「そうだろ？外回りしているときにたまたま見つけたんだが、コ一

ヒーはここが一番、かな」

「褒めても安くしないよ、ほら、ホット一ひとつ」

「わかつてゐるつて……」

マスターはたまに口を開くとこんな感じだ。

だが、それがいいといふのが主婦達の評価である。

「……」「……」

フェイトさんの秘密。

大体予想は出来ているが、でも、これは本人から聞く必要があるのだ。

言葉にしたいが、何から口に出せばいいのか分からない、そんな表

情だった。

「…あの、レインから聞いた話は…私にとつて少し、複雑な部分があるんです」

「…それは？」

「彼女たちもまた、心があるんだって」

「…それは、スバルやギンガも同じじゃないか？」

「…ええ。でも、スカリエッティの下で育った彼女たちも、人の心があつて…それで…」

たしかにな。

本当のアイツを知らないだけかもしれないが、アイツが犯してきた罪は、許されるものじゃない。

……いや、俺も同じか。

表に出ないだけで、俺の罪も、本当は許されるものじゃない。

でも、俺は、法では裁かれない。

冷装の断罪人は、既に死亡したことになつている。

だから、時折本当にこれでいいのか、悩む。

俺の罪そのものが、許されたわけではないのだから。

それはともかく

スカリエッティといへ、許されざる犯罪者の下に作られた彼女たち
が、どうして、やう、なのが。

それは、スカリエッティの氣まぐれか？
それとも、奴に残つてゐる良心のよつなものか…。

「私も、似たよつなものですから…」

「…………」

「…………私は…………プロジェクトFの成功例なんです…」

人造魔導師。

その言葉が、いかに今までフュイトさんを苦しめてきたのだらうか。

長い年月を経て、なのはさんや部隊長などの、友達、のおかげで、
それを意識することなく生きてきたのだらう。
けれど、心のどこかでは、やはり引きずる部分があつたのではないか
だらうか。

「今まで……秘密にしていて」「めんなさい……」

「……だから、レインの話を聞いて複雑になつたわけだな」

「……はい」

「なら、答えは揃つていいんじゃないかな」

「え？」

そり、生まれはどうあれ、皆、心がある。

「スバルも、ギンガも、レインも、他の戦闘機人も、そして、フェイットさんも……」

「……」

「それぞれ、生まれ方が違つても、心は同じだ。人と何ら変わることはない」

本当に大事なのは、生まれなんかじゃない。
その人が、どう生きるか。

かつて、操り人形のように人を殺してきた俺とは違う。
フェイットさんは……光に生きるべき人だから。

「フェイットさんは皆より優しいから、こうこうことにも悩む。どうしようもない奴なら、悩むことなどない」

「……トールさん……」

「皆、そんなフロイトさんだからこそ、好きなんだ」

「…………」

「俺だって……そうだ。……そんな優しいフロイトさんだからこそ、好きになつた

人と違うことで悩むのは、もう、終わりにしてしまう。

今を生きる人が、生まれだけに縛られるのは、悲しすぎるから。

俺と同じような過ちを犯すことになりかねないから。
だから……俺があなたを守る。

今度こそ……。

「俺が言つのもなんだが……無理せず、周りを頼ってくれ」「トールさんも？」

「もちろんだ。フロイトさんがどこかで助けを求めたら……必ず助けにこべから

そう、何があつても、ね……。

「ヒーに口をつけろ。

結構な時間が経っているのだが、まだ十分暖かかった。

「…………つまい」

「…………ほんとうですね…………。…………本当に…………おこしご…………」

フロイトさんの田から涙がじぽれ落ちる。

あの異常な犯罪者に向かうことは、フロイトさんは優しすぎた。だから、心が壊れてしまわないように…支えてあげたい。

部隊長に通信を繋ぐ。

「すみません部隊長… 戻るのせ、かなり遅くなつてます…」

『……そつか…』

この状況を見て、何かを察してくれたようだ。

ただ、その後の一言がとんでもなく余計だったが。

『あ、別に朝帰りでもええねんで?』

『い……こきなつ何言こ出すんですかー?』

この雰囲気を明るくするためのお茶目なのかもしれないが、俺にとっては迷惑この上なかつた。

『えへへ~テール君、フロイトちゃんといひあひるー、したくないん?

「そ、そういう問題じやありません!…」

『なんや、つまらんない…』「…」
『どう思つへ…じやないでしょ』「…」

『…』

「……………」

「あなたも否認しないか―――」

駄目だこの人たち…卑くなんとかしないと…。
でも、わざとらしくこうこう霧囲気を作るのも悪くないか。

『すつかりツシ ロリ役定着やな』

「……ええ、」には基本ボケしかいませんよね。ツシ ロリ役は俺
とティアナぐらいでですか」

「えつと……私は？」

『「天然ボケ、あとおつむじよこ」』

「つむじよこ」

『ま、なのはちゃんもどつちかとつむじよこボケやしな

「隊長陣全部ボケじゃないですか」

『そやな。ま、私どヴィータはどうも出来るからツシ ロリに回り
てたんやけど』

『……いや、そもそもお笑いグループじゃないんですから』

まあ、なんとなくツシ ロリをえないといつ状況はある気がする。
レイミなんかよくボケて俺のツシ ロリを待ってる時もあったしな。
あれはどうちらかと言えば天然モノだが

「………… もう、はやてつたひ」

「………… セツヤつてわざとボケるのも、部隊を盛り上げるためのものだとこいつこと…か」

『…………まあそんなところやね。冷静に分析されるのはひとアレやけど』

そりだなれば乗り切れそうもないほどだからな。
あの狂氣は、並大抵のものじゃない。

「セツ、夕方には戻りますから」

『うふ、ゆっくつしてきてや～』

そりだ言つて、部隊長は通信を切つた。
やはり、仲間と語つのはいいものだな。

「…………ふふつ、あつたく…はやてつば…………」

「…………」

せつを今までの深刻な雰囲気が、かなり和らいだ。

気付ければ1時間もここにいたのか。

「せつかぐだし、お言葉に甘えてゆっくりしていくか
「うそ。だったらもうとトールさんの話、聞きたいな」

?

俺の話?

「良いけど、話すことなんてあまりないような気がするが」

「そんなことないよ。例えば、クロノとの話とか」

「アイツとの? 別にアイツは前にも話した通り、レイミに捕まつた時に会つたのが初めてなんだが」

たまに顔を合わせている内に、仲良くなつていつただけで、特に面白いHピソードとかないぞ。

「じばりぐしてから、アイツにコーノを紹介されてな

どちらかと言えばコーノの方が会つてる回数が多いな。

無限書庫にはレイミと一緒に何度も行つたし。

そのたびにじばりぐして場所じゃないつて怒られていたが。

「思えばいろいろな無駄知識も、レイミが俺を救つたあの魔法も、それから俺の魔法のいくつかも、あの無限書庫から引っ張り出してきたんだよな」

「 わうなんだ……」

「 ああ、無限書庫とこねば……」

「 うそうそ……」

そんな感じで、やべくつとした時間は過ぎてこつた。

明日が、フュイトセミナーやうくりなどして、られない
俺も、いつかうとこな準備しないといけないしな。

だから、今はこの時間を楽しむ。

田の前に立てる、彼女と……。

ありきたりな企画。.

「ふつふつふつふつふ……」

部隊長室に響き渡るのは怪しい笑い声。

‘災厄’を退けた彼女達は

暇だった。

故に思いついてしまった、くだらない余興。

今宵お送りするのはそんな、余興の一つ。

side-トル

「……お茶が無い……」

最近、ハマっている飲み物がある。

それは、10年ほど前から管理局に入り込んできた異質な飲み物、

緑茶、

なのははさんや部隊長の故郷である第97管理外世界、地球、のどある地域で生産されるそれは、一部の者に衝撃を与えた。

俺も六課に来てから試しに飲んでみたところ、とても喜かったのである。

最初は缶やボトルで買っていたのだが、今では急須や湯飲みを用意し、自分で淹れるほどである。

そんな俺の姿を見て、部隊長をはじめ数人は、おっさん、と揶揄するが、聞かないようにしてこる。

「トールさん」

後ろから声を掛けられる。

「この声は… フェイトさんだ。」

「休憩中ですか？」

「ああ、今日の書類は8割終わってるんでな。少し… 休もつかと思つてな」

‘災厄’は終わった。そして、‘決着’も着けた。

後は皆、それぞれの未来へ向かって進んでいく準備をするだけだ。

俺は、なのはさんから戦技教導官の誘いが来ている。

かのエースオブエースの推薦状付きで来たとあらば、人事も無下には出来ないため、ほぼ決まつたようなものだ。

あの時以来、何度か模擬戦を挑むもなのはさんには一度も勝つていな。

俺の時間を止めるあの力は、‘災厄’の終焉と共に失われてしまつ

た。

それは、これ以上の無理を続ければ、本当に命がないと体が本能的に察知して眠らせてしまったのか。

はたまた、それは神からの借り物で、もう必要なくなつたから無意識で返してしまつたのか。

今となつては、知る由もない。

重要なのは、俺の力の一つが、失われてしまつたことだ。

それでも、なのはさんは俺を誘つてくれた。

「トール君の空戦技術は私にないものばっかりだから……来てくれると嬉しいな」とあの笑顔で誘われれば、断るなんていう馬鹿な選択肢は浮かんでこなかつた。

でも、それをフェイトさんに打ち明けたところ、微妙な表情をされた。

その際、フェイトさんから「……なのはに限つて……まさか……？」とか変な言葉が聞こえてきたのだが、一体なんなのだろうか。

俺の階級が空曹などであったなら、ティアナと共にフェイトさんの執務官補佐、なんかも考えていたのだが。

でも、俺の階級は一等空尉。

一線においては副隊長級の役職なのである。

その点、教導官は一個人でも曹長からであり、教導隊を束ねる長は大将の位に近い中将が務めるようになつてゐる。

だから、一等空尉、といつ階級も、教導隊の中ではまだ高い位置ではない。

それはともかく。

「で、どうなの？ ハリオ達の様子は？」

「……ええ、大丈夫ですよ」

俺とフロイトさんが正式に付き合つあたり、フロイトさんが保護者をしているエリオとキャラロとの付き合い方もまた、変化が訪れていた。

「まあ、いきなりパパですよ～、って言われても向こうも困るだらうしな」

「そうなんですよ～……」

そう、エリオ達にとって、フロイトさんは言わば母親なのである。で、その交際相手である俺は……、もしかしたら、父親とも言つべきポジションになるかもしねないのである。

故の、心情変化。

急に父親と言われても、すぐに心の整理などできない。だから、受け入れてくれるまで、少し待つことにした。

「ま、まだ少し時間もあるし、お茶でも飲む？」

「あ、はい…いただきます」

そして、二人で他愛もない話をしながら、フュイトさんのロッピを取りに行く。

休憩室に、お茶の入ったままの、俺の湯飲みを残して。

そして、ぐだらない、本当にぐだらない陰謀を秘めた、その日に気付かないまま。

s.i.d.e.?..?

「チャンス到来や！…まさかこんなに早く来るのはな…」
「あ、あの～はやでけやん？ホントにやるんですか？」

計画実行。

彼女達は、本当に暇だった。

こんなところをレジアス中将に見られていたら、確実に潰されてしまう。

でも、嬉しいやら悲しいやら、彼は戦闘機人により、最高評議会の面々ともども殺されていた。

だから…じとん茶田つ氣たつぱりの計画も、実行に移せる。

それが、空気のよくなつた時空管理局の、一つの弊害なのか。

いや、そんなものは認めたくない。

何より、ある意味では事件の黒幕だつたとはいえ、彼らが邪魔以外の何物でもないと言われているようであまりにも不憫だ。

故に、これは彼女の生き様なのだ、といふことじよ。

和気藹々とした課の空氣のためならば、何の努力も惜しまない。それを別の方面でもつと發揮してもらいたい、とは彼女を支える者達の弁である。

……が、そんなものは彼女にとつて何の障害にもならない。
「いつ、なつてしまつた彼女はもう止まらない。」

そしてそのターゲットは…彼だ。

六課に来た当初こそ、正体不明、愛想がない、付き合いが悪いなど接していいかわからない状態であったが、今ではすっかり打ち解けており、フェイトの影響で、笑顔もちらほら見せ始めている。

故に、そろそろ犠牲になつてもらおつ。

今、この場において、彼女の犠牲になつていなのは、彼だけだから。

「わりわいわいわいわいわい～…」

彼女が入れたのは…粉薬。
もう、いかにもである。

無味無臭。

飲んでも絶対気付かない。

そして、明日の朝がお楽しみである。

「ち、戻つてくる前に脱出せ
「ハハハ…トールせん……」

繰り返す。

これは、あまりにもくだらない、余興である。

side-テール

「う～……」

頭が少し重い……

昨日はあれからフュイトさんと少しあ茶を飲みながら話して、それから残りの書類をすぐに終わらせて、そんでティアナとスバルの自主練を監督して……。

それで、夕飯食べたら眠くなつて風呂入つてすぐ寝たんだっけ……。

体を起こす。

気のせいいか、目の前に設置されたテーブルの位置が高い。

それに……布団が何故か大きい。

目の前の枕もだ。

そして、俺の手……………小さい。

「な、なんだ」「いや――――――」

その、俺の叫び声は……男子寮のみならず、少し離れた女子寮にまで、響いた。

50万PV＆5万ユーチューバー記念 s m a l l p a r t i c 前篇（後書き）

「」の小説もつこに「50万PV」「5万ユーチューバー」…」

「田」の感謝をこめての企画だね」

「犯人は一体誰なんや！？」

「そういう企画じゃないから…」っていうかバレバレじゃない！」

「まあ、ほんなくだらぬ話ですが……これからも、この小説を…」

「「「よろしくお願ひします…」」

あれ、おかしいな…コメティ路線のはずが…

sideトール

「どうしてこうなった……」

今、俺は誰にも見つからない様に、抜け出す策を考えている。

今の俺のこの姿を見て、トール・シュライトだとは誰も思わないだろ。

いつもより低い視線。

いつもより大きく見えるモノ。

そして、鏡を見ればそこには

「10歳位の子供になつてゐる……」

以前映像で見せてもらつた、P・T事件や闇の書事件の時のフェイ
トさん達くらいの感じから、大体そうだろと推察した。

さて、ここで問題になるのは、服がない、ということだ。

まさかこうなるなんて思いもよらないものだから、10歳くらいの
子供の服などもつてゐるはずがない。

「10歳くらいの男の子……。」

「つ、考^ハえが浮かんだ。

「トールさん……びつかしたんですか！？……つて誰ー？」

思つた通り、エリオが部屋に飛び込んできた。
そして、すぐには俺だと気付かない。
まあ、それは当然か。

俺は瞬時にエリオの背後に回り、入口を施錠する。
そして…エリオの左肩に手を掛ける。

「……さて、この姿を見られてしまった以上は生かしてはおけんな

……………といふのはさすがに「冗談だが」

「……え？ もしかして…トールさんなんですか？」

「…ああ」

「どうしてそんな姿に？」

「それを俺に聞かれても本当に困る。

自分が何かをしでかしたという心当たりはないのだから。

「……とりあえずお前の服一着貸してくれないか?」「訓練服でいいなら余りがありますが……」

「……それでいい」

エリオはすぐに訓練服を届けてくれた。
下着の方は自分のを使うしかなかつたが。

「……悪いな……」

「い、いえ……とにかくどうしてそんな格好になつてしまつたんです
か?」

「……それを説明している余裕はない

「……え?」

そして俺はまたエリオの背後に回り、首筋に手刀を当てる。

「……え? して……?」「……お前の口から広がることを防ぐためだ。全てが終わるまで休んでる……」

エリオをベッドまで運び、布団を掛ける。

さて、ここからが本番だ。
厄介なことになる前に、犯人のところまで辿り着かなければならぬ
い。

実をいえば、犯人の目星はついている。
というか、この人くらいしかこんなくだらないことは考えないはず
だ。

そして、その人物が見たいのは…俺が慌てふためく姿。
だから…広めることは…その願いを叶えてしまつことに他ならない。

つまり、見敵必倒。
この姿を見た者は、全て倒す。
そして、犯人にはお仕置きを……。

そこには至るまでには…いくつかの関門がある。
そこをどうにかして突破しなくては……

さて、隠れながら向かうとしようか……

「…………？」

「あの～せやへわやん～ぬわかつてるからわざわざ隠さへしてある

このよ?」

壊された。

せっかく悪の幹部っぽく霧因飯を出したのに、全て狂無しだある。

「……」これはゲームなんや。トールさんと、私との、な……

「やの為にわざわざ全皿を巻き込んだんですか?」

やう、トールさんが薬で少しくなつた、ところのまことにヒリオを除く誰に知らせてある。

ヒリオに知らせなかつたのは、事前にトールさんに漏れるのを防ぐため。

頭の回転の早いトールさんのことだ。

もつ黒幕が私である」となどとつけてお見通しだらう。

それでいいのだ。

なぜなら、これはゲームなのだから。

トールさんが、私の下へと辿り着けるか、はたまた誰かのおもちゃ
と化すのか。
そして……。

まあ、その真の意図に気が付いてもううのは後でもいいだろ。

「さて、ゲームスタートや」

柱の影に身を隠しながら、先の状況を確認する。あれは確かにロングアーチ部隊の人だったかな。

こんな子供が普通に歩きまわっていたら真っ先に捕まってしまうからな。

とりあえず男子寮を出て裏口から機動六課に入るとするか。

しかし、今日は人が少ないな。
まだ朝早くだからというのもあるかもしねいが、それにしても少なすぎる。

「トールさん！」

そう思つていたら、上空から声を掛けられた。

「フュイトモ……！」

思わず返事をしかけてしまつたが、自分の今の姿を思い出してしまふかそつとする。

といつより、隙を見出しながらなんとか眠つてもうつと寝つ。

「え、エ～？ ダレノコトコスカ～？」

……我ながらものすゞじに下手な演技だった。
やつぱり、フェイトさんを前にするとどうしても下手な嘘がつけなくなってしまう。

「（）まかさなくとも大丈夫ですよ。全部わかつていますから」

「……へ？」

「……実は……トールさんが小さくなっているのは、エリオ以外の皆が知っているんです」

「……は！？」

フェイトさんの話を纏めると、昨日、俺が寮に戻った後、エリオ以外のフォワードメンバーと隊長陣が集められ、そこでこのゲームの企画説明があったそうだ。

ターゲットは当然俺。

そのゲームの勝者は小さくなつた俺を一日好きに使つていいという、なんともはた迷惑な話である。

何人かはその企画に乗り気で、既に姿が捉えられなくなつているそうだ。

そしてフェイトさんはそんな俺を心配して、俺と一緒に行動してくれるといつ。

しかし、LJの時HJの人の本当の意図に気がつかなかつた。

「……なるほど、やはつ部隊長が主犯か」

「……ええ」

「しかしそうすると六課の面々をほとどじ敵に回すことになるのか」「そうなんですよ……」

しかし、LJ的な企画に皆が乗り気なのは意外だつた。

それだけ皆、暇を持て余していたのだろうか。

だからといって俺に迷惑がかかるのは勘弁だが。

「なら、少し協力してもらつてもいいかな？部隊長の仕置きの
「……そうだね。たしかにちょっとやりすぎたところがありますか

ら」

そう思い、六課の方へ足を向けようとした瞬間、
本能的に危険を察知し後ろへ跳躍する。

FHイトさんも俺にならって同じよう後方へ。

先ほどまで俺達がいたところをオレンジの弾丸が通る。

「LJの弾丸……真っ先にお前がやる氣を出すとは思わなかつたな

そして空中に展開される蒼い道筋。
その軌道から高速でやつてくるのは

「ふうん?...スバルも一緒になのか?...」
「…………トールさん……」

フュイトさんが後ろを指差す。

そこには……巨大な竜がいました。

「へ、嘘だろ?...?、ヴォルテールまで……出してくるかよ……」

そう、エリオを除くフォワード陣全員集合だった。

しかも、キャロに至っては本気のヴォルテール召喚付き。

2対2ならまだしも、ヴォルテール付きの2対3は分が悪すぎると。
先にスバルとティアナを倒す必要がありそうだ。

それも、ヴォルテールの一撃を避けながら。

幸い、付近には1キロくらい何もないし、ここならば思いつきり避けても問題はない。

そう思い、まずは動きまわりながらティアナの方へ向かっていった。ティアナの方も、当然自分に向かってくることは予想していたのだろう、幻影魔法を使っていた。

最初のころとは違い、とても精巧に出来ている。

教えた俺でなければ見抜くのは困難を極めるだろう。

だが、教えている内にアッシュの癖も知っているのだ。

だから、本人に一直線に向かうことが出来た。

そして、それこそが誘いだと、俺はすぐには気が付かなかった。

それに気が付いたのは、攻撃をくらう直前。

そう、遠方からウイングロードを使ってやってきているはずのスバルだった。

完全に横からの不意打ちだつたため、なんとかフリーズライトで受けれるも吹き飛ばされてしまう。

ウイングロードを張つてやつてきた時点で、俺はあれを本物と思い、注視していた。

しかし、それこそが心理的な罠だつたのだ。

そしてヴォルテール召喚によって俺はほぼ強制的にティアナを最初のターゲットにしなければならなくなり、3人はそこを狙つた、といつわけだ。

そこで何故スバルをターゲットにしなかつたのかというと、ウイングロード上に乗っているアーヴィングを狙えば、ヴォルテールの格好的になるからである。

それは空を飛んでも同じことで、むしろ地上の方がヴォルテールの攻撃を避けやすかつたのもある。

スバルの一撃は普段であれば受けきることも出来ただろうが、この不慣れな小さい姿ではそれも出来ない。

100メートルは飛ばされただろうか。
素人であれば即死ものである。

だが、ここまで作戦を立案していくことに、そこまで本氣でやることか、という疑問も出てきたが、
この3人がここまで成長していたことに喜びも感じていた。

「大丈夫ですか！？」
「…いてて。やるなアイツら…」

…まあ、このままやられっぱなしとこのまま上臈としてあります画面
い話ではない。

アイシーラにはまだまだ壁があるところを直感してもらわないと
な。

「ハイイトさん……ちよつと協力してもらひます?」

sideティアナ

旨くいった……。

私の作戦が……トールさんに通じた……！

本当に子供になつてこいるトールさんを見たときほびくつしたのだが、同時にいつも想つていた。

かわいい

自分のキャラクターにはない思考で埋め尽くされていくのがわかっていてはいるのだが、歯止めがかかるない。

むしろ、その歯止めすら轟なる拍車になつていた。

このゲーム、私が制して一日中トールさんを愛でてこみたい。
そして……

「うふ、うふふ、ウフフフフフフ……」

「ティア……なんか怖いよ……」

そうだった。

まだ終わっていない。

あのトールさんがあれぐらいで倒れるとは思えない。
それこそ、ヴォルテールの一撃でも喰らわせないと云は勝てないの
ではないだろうか。

「やうね、まだ終わってはいないのだから……」

ならば、今度はヴォルテールの一撃を当てるための策を練ろうとキャロに通信を送ろうとしたところで、違和感に気付いた。

「キャロ？……キャロ…？」

「どうしたの？ティア…」

キャロと通信が繋がらない。

ヴォルテールは健在。

ならばキャロ自身はやられていない、と推察できる。つまり、キャロに何かがあつて通信が繋がらないといつわけではない。

これは…以前公開意見陳述会の口にクアットロが行った…

「通信妨害！？」

「そんな…」

ありえない。

アレはクアットロのIISであるシルバーカーテンを介してでしかできないものではなかつたのか。

そつと言えば、トールさんはその通信妨害の中でも一方的にとはいえ送ることが出来た。
もしかしたらそれはクアットロの通信妨害を完全に解析した上で行っていたのかも知れない。

そして、解析が出来たのなら……。

全てとは言わないが、それなりの模倣ができるのではないか。

「不味い……スバル！！」
「一旦離れて……うわーー！」

そこへ、降ってきたのは雷撃の槍。

ちょうど、私とスバルの間を断ち割るように直撃した。

それをなんとか避けることに成功したのだが、スバルとの距離が離れてしまった。

とにかく、今はスバルと離れてはいけない。

少なくとも、私の策をスバルに伝達するまでの間は……。

そう、私の中ではもう策は出来ている。
後はそれを伝達するだけなのに、それなのに……。

「……」

そこへ、私目掛けて氷の弾丸が襲いかかってきた。
それも、決定的なダメージを与えるつもりのない、足元に。

「くつ……」

私たちのシールドは、どちらかと言えば致命傷を防ぐため、胴体部
分に比重が置かれる。

だから、下の部分は、どちらかと言えば、脆い。

だから、足元に来た弾丸は……避ける。

そして、さりにスバルとの距離が離れる。

そして更なる違和感に気付く。

「…………霧？」

「俺の魔法を応用して使うといつこいつとも可能でな

目の前に、トールさんが現れた。
子供の姿の、トールさん。

それでも、その威圧感は普段と比べ大きい。

そして、いつの間にかスバルの姿が映らなくなる。

「成長著しいお前たちに敬意を表して、本気で相手をしてやります。」

その瞬間、私たちの敗北が決定した

sideトール

「さて、こんなものか」

最後に残ったキャロを不意打ちで氣絶せると、三人揃つてバインドで拘束しておいた。

存外苦戦したが、まだまだ遅れを取るわけにはいかない。

「うふ、ウフフフフ……ト～ルさあ～ん……／＼／＼

「何なんだ一体……」

ティアナはどんな夢を見ているのか。
いや、知らない方が賢明だな。

「さて、この調子だと他の奴らも襲つてきそうだな……」

「うん、特になのはには氣をつけた方がいいかも」

?なのははさんに?

「それははどういう……」

「さすがフュイトちゃん、よくわかつてる」

声がした方向を振り向くと、そこには……

既にバリアジャケット展開済みのスターズ分隊の隊長と副隊長がいました。

「なのははわかるけど……どうして、ヴィータまで？」

「う……それは……その……」

考えるまでもなかつた。

(アイスだな)

(アイスだね)

「だああああああーーとにかく、ぶつ倒されろーー！」

なんだか恥ずかしくなつてきたのか、いきなり鉄球を飛ばすヴィータ。

距離を取つて離れる俺たちに、なのはさんは割つて入つてきた。

「トールさん！ あなたはヴィータを……」「了解！」

もとより、俺となのはさんでは相性が悪かった。

それはいつぞやの模擬戦で証明済み。

だから、リヒはフュイトさんに任せた。

そして俺は……。

「さーて、アイス……じゃない、はやてのために、勝負だーー。」

本音、ダダ漏れなこの人の相手をすることにじよつか。

「はつ笑いのセンスのない作者にギャグなど向かんのや……」

「そ、それはちょっとといいすきじゃないかな……」

「しようがないじゃなし……事実だもの」

「レイ＝さんも何気に毒舌ですね……」

「ま、レイ＝さんせその別プロジェクトまで出番お預け、らしいし
な」

「別プロジェクト？」

「ま、そのうち作者が明かすやろ……」

50万PV＆5万ユニーク記念

small panic

後篇（前書き）

また2週間かかつてしまつた…

sideトール

「うおおおおおおーー！」

「…ふつーーー！」

グラーフアイゼンを斜めに弾く。

単純な破壊力、攻撃力の面では彼女は六課の中では一番だ。

だから、まともには受けない。

数発くらいなら防ぐ自身もあるが、わざわざ自分の身を危険にさらすこともないだろう。

なにより、この体ではいつ不測の事態が起こるかわからない。

「へえ…やるじゃねーか。小さくなつても動きに問題がねえなんてな」

「……まあ、子供のころから剣を振つてたからな…」

そう、今は子供のころの感覚で剣を振つている。
親父に教えてもらっていたあの頃の

思えば最初は全然勝てなくて、それが悔しくて何度も何度も素振りしたりしてたんだった。

その地道な積み重ねが、今の俺だ。
そう簡単には、負けられない。

「……ちつ。このままだと埒があかねーな。いくぞー！ リインー！」

「はいですぅーー！」

「ここにユニークンかー！」

魔導師ランク上、一応俺の方が上ではあるのだが、このハンデでの差もほんないと言つてもいいだろ。そこへきてユニークンである。

一気にこちらが不利に追いこまれた、……かに見える。

そう、まともに戦えば。

「フリー・ライト」

「何でしじう？」

「アレ、試すか」

「了解しました

初めての試みだから上手くいくかどうかはわからないが、やってみる価値はあるだろう。

普通に逃げたところで追いつかれる可能性が大だが、

多量の魔力を消費して作りだしたのは……水滴。ただし、これは……ただの水滴ではない。

「こんなもん……」

ヴィータがグラーフアイゼンを振るつてその水滴を払おうとした。

「な、何だよこれ！？」

グラーフアイゼンが凍りついていく。

そして、払い切れなかつた水滴が、バリアジャケットにも当たり、凍りついていく。

「ちょ、ちょちょ……何なんだこれ！？」

「過冷却水滴……というやつでな……」

通常、零度以下になると水分は基本、氷になるのだが、過冷却水滴は液状のまま零度以下を維持する。

そして、樹木などに付いた瞬間、凍結するわけだ。

樹氷はこれが多量に付くことより、出来あがる。これも同じように衣服やバイクに付くことより、凍結させるわけだ。

「つー、わわわ……！」

水滴はさう動きの止まったヴィータに付き、ますます動きが取れなくなる。

今がチャンスだ。

「さて、それじゃあ失礼するぞ……」

「ちよ、てつめーー逃げるのかよーー？」

「ソレで無駄な力を使つわけにはいかないんでな」

そう、主犯に仕置きをするためにも……な。

さて、フロイトさんはなのはなとまだ戦つてる最中かな？

「トールさん」

「あれ？フロイトさん……もう終わつたんですか？」

「ええ」

なんかすげー良い笑顔でこっちに顔を向けてるんだけど……。

聞かない方が賢明だわつ。

うん、ソニックフォームなどとか、バルティックシユに赤い液体が「じびり付いてるのには突つ込まないほうがいいだろひ。

きつとなのはさんはどうかで寝しているんだ。

今はまだ朝のはずなんだけど。

でも、きつとそなんだ。

だから、海に浮かんでこるシインテールとか、きつと氣のせいだ。

……怖い……。

「それはともかく……あとまほやひと…」

「シグナムだな」

あのシグナムに限つてこんなバカ騒ぎに乗るのは思えないが、部隊長がボディーガードとして用意するには十分に考えられる。

「とつあえず、行くところつか」

「やうですね。…………やうそろゲームも終わりに近づいてきたし」

「……何か言つた?」

「い、いえ……ナン^トモアリマセン^ハ~」

何か隠しているのかな?
とにかく、隊舎まで急いでつかな。

隊舎までの道では、ほとんど人に会つことはなかった。
今日は世間では休日。

しかし、管理局には休みというのではないので普通はこの時間から通勤している者もいるはずなのだが。

「…あれは…」

間違いない。部隊長とシグナムだ。
あまりに遅いから様子を見に来たのだろうか。
だが、これはチャンスだ。

今なら2対2、接近戦に持ち込めば勝てる…

…そう思つてたんだけども、遠くから来るもう一つの魔力に、俺は恐怖を抱かずにはいられなかつた。

かつて一度だけ戦つた、そして、スカリエットティから救つた…大事な仲間。

だが、今まで最強の敵として立ちはだかる。

「あなたは私の私の私の……」

あの時より2倍ほど壊れた状態で。

「よりもよってレインにまで……」

また命を賭けた戦いをしなければならないのか。

「さあ、その力を見せつけるんやレイン！！」

それにしてこの部隊長、ノリノリである。
典型的な駄目大人になりつつある。

けれど、こういう駄目な大人には、天罰、が待っているものだ。
そう、‘神の怒り’、という名の天罰が。

「つるさいの……」

ペシヤ――――――

「つぎやああああああ――」

「な、何故私まで……」

ランカーを一撃で沈めたその一撃は、その余波で隣にいたシグナムをも巻き込んだ。

あの時にアレをまとめてしまっていたらあんな黒コゲになる程度では済まなかつただろう。

さて、どうしたものか。

前とは違ひ、こちにはフロイトさんがない。

だから条件的にほこの前よりも良好ではあるのだが……。

「フロイトさん

「……何です？」

「プラズマランカー、思いつきついぶちかましてくれませんか？」

「……そういうことですか

プラズマランサーを足止めに、そして俺が決める。

本当はもう一手欲しいことこのなのだけれど、ないものねだりは出来ない。

「行つて……」

まさに光速とも言ひべき雷撃の雨が俺達に迫るが、それを大きく迂回することとで2人とも避けることに成功した。

もつとも俺の場合はフェイトさんに抱きかかえられるといつなんとも情けない形ではあつたが。

あの時も、防いではいたのだけど避けるのはすゞしく大変だった。今のはあの時以上の速度で、しかもこの体だ。

フェイトさんに助けてもらい、回避したところでそのまま反転攻勢に出る。

まずは牽制がてらフリーズ・バレットを全力で撃つ。

アイツほどの相手だと俺が全力で撃つても牽制にしかならないのが悲しいところだ。

だが、これはあくまで牽制でしかない。

「プラズマランサー・ファランクスシフト」

そう、ここからが勝負だ。

フェイトさんのプラズマランサー・ファランクスシフトでもあの防御を貫くのは難しいだろう。

でも、少なくとも防御には専念しなくてはならない。

「……」

思った通り、レインは前面に防御を展開させた。
その隙を突いて、背後に回り込む……

「おおおおおおおお……！」

絶妙な距離での抜刀。

我ながらかなり上手く出来た。

しかし、これでもレインの防御は貫けない。
もう一手、本当にあと一手が足りないのだ。

そこへ、桜色の砲撃がレインを直撃する。

「これは……！」

「ふう……、まったく、フェイトちゃんが手加減なしだったから
ちゅつと気絶してたよ~」

なのはせん……、もつ氣絶から立ち直ったのか……。

レインもどうにか倒せたようだし、これでよしやへーのバカ騒ぎも終わりかな。

そう思っていたんだけど。

「どうしてこうなった……」

今、俺はフェイトさんの膝の上にいる。
そして、ものすくべ撫でられ続けている。

「あ～あ、結局フェイトちゃんの一人勝ちか～」
「今更だが、このゲームの勝ちの基準ってなんなんだ…」
「ん？力づくでもなんでもいいから、ゲーム終了までに長くトール

さんと一緒にいた者の勝利つてことにしたんやけど…」

「なんだその適当すぎるルールは……」

ナニテナニテ
。

「それにして…… プッ……」

「...」

「ホントにかわいいね～」

「お前ら… 戻つたら憶えておけよ?」

「 」

とつあくべす齧しておぐ。

「うでもしないと調子に乗り続けるから困る。」

「なんや…つまらんかつたな」

ナデナデナデナデナデ

「あ、あの…ファイトせん? そろそろやめていただけないと助かるの

ですが……

「え……？そ、そうだよね……」

「あ、あの～？」

フロイトさんは何故かショックを受けてしまい、崩れ落ちる。

「あ～…ホールさんがフロイトちゃんを泣かしとる～…」

「「い～けないんだ～！」「けないんだ～！…」」

「小学生かあんたら！？」

「小学生はあんたや！…」

「くつ……、じゃなこ…」れ以上やせやせくへするな…」

駄目だ、としあえず場所を変えよ。

これ以上ここにいたら余計やつかになことにならうぞうだ。

それにしてもビーハイヒーハイになってしまったんだ?
ほとんどびざ部隊長のせいだとこのまわかつてているんだけど……。

「ふえ、フロイトさん……」

「……」

ち、沈黙が重い~~~~~！！
なんで？どうして？

「俺、ホントに何か悪いことしたのかな？」

「……」

「や、そりだとしたらホントに謝るから！だから……」

「……なうんて、ね」

「へ？」

先ほどまでの空気とは違つ、いつものフットワークなんだ。
もしかして遊ばれてた……？

「ふふふ……」ひつた方がいろいろ構ってくれるってはやでが言つ
てたものだから……

「あ、あの人は~~~~~！！」

なんかここにいる限りずっと遊ばれる気がするな……。
まったく…遊びじゃないといつのに……

「でも、少し寂しかったってこののはホントだよ？」

「う……」

確かに最近忙しくてフロイトさんとあまり話してなかつた気がするな……。

明日は休みだし、久しぶりにどこかに行こうかな……。

「や、それじゃあ、明日はどうかへ出かよつか?」

「ホント?」

「ああ、ちよつと一人揃つて休みだしな……」

「嬉しい……」

たまにはこうこうともしないといけないよな。
余計な茶々が入らなければいいんだけど……。

「……」

でも、このフロイトさんの様子だとばれるの時間の問題だな。
わざ、どうしたもんかね~。

そう、咳ながら、でもこの状況をどうか楽しんでいの自分がいる
ことに驚いていた。

れど、こりこりあつあつたけで今日も一冊がんばりますかーー！

……今日一冊の姿のままだがな……。

「どうも～寄り道があさる作者の世界のはやでです！」

「いきなりメタだねはやで！」

「だつてしゃ～ないやん、いい加減第一部始める準備ばつかしどらんと早く進めろって…」

「いきなつぱらさないで！～？」

「まあ、言つてしまつたからしょうがないけど…」

「フフフ…あの人気キャラも交えての再構成やからな…」

「それは第一部を終わらせてからでしょ？？」

「ま、気長に待つてな～」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4018o/>

魔法少女リリカルなのはstrikers～笑顔を失った青年

2011年6月19日22時32分発行